HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ポーランドのアイヌ研究者　ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集 全一冊
Description	以下については、日本語訳と，元の英語発表原稿を掲載しています: 日本語訳(20/10/2013)英語版 (20/12/2013), マイェヴィチ（本文7-14ページ）Appendix 1: Majewicz (pp.1-8), コヴァルスキ（本文 15-29ページ）Appendix 2: Kowalski (pp.9-22)。 この英語版は発表後に増訂されたもので、発表前に準備された日本語訳とは一部異なるところがあります。 Here are published: Japanese translation (20/10/2013)original English-language version (20/12/2013), Majewicz (main text pp.7-14) Appendix 1: Majewicz (pp.1-8), Kowalski (main text pp.15-29)Appendix 2: Kowalski (pp.9-22). Appendices are revised version after the lecture. They are partly different from the earlier Japanese translation.
Relation	ポーランドのアイヌ研究者　ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて. 2013年10月20日. 北海道大学学術交流会館. 札幌市 主催：北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター. 共催：グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」. 協力 : 駐日ポーランド大使館, ポーランド広報文化センター
Issue Date	2013-10-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53543
Type	conference proceedings
File Information	ilsuduski_all_rev2.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ポーランドの
アイヌ研究者

ピウスツキの仕事

―白老における記念碑の除幕に寄せて―



（表紙写真）
Adomas Varnas 作 ブロニスワフ・ピウスツキの肖像画（油彩）
リトワニア芸術博物館（ヴィルニュス）所蔵の写真（白黒）より
Bronisław Piłsudski in an Ainu traditional robe
Portrait drawn by Adomas Varnas, a Lithuanian painter, in 1912 in Cracow
A photograph of the original painting is preserved at the Lithuanian Art Museum, Vilnius.
Special thank is due to Dr. Romualdas Budrys, director of Lithuanian Art Museum in Vilnius, who gave us the permission to use the photograph of B.Piłsudski's portrait for this publication.
（*Pilsudskiana de Sapporo*, ed. by Koichi Inoue, no. 4, 2010）



ブロニスワフ・ピウスツキ像　白老アイヌ民族博物館　2013年10月19日除幕
（安藤厚撮影）

ポーランドのアイヌ研究者

ピウスツキの仕事

～白老における記念碑の除幕に寄せて～

目次

ブロニスワフ・ピウスツキのポーランドと日本
エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ
…… 1

なぜだろうか～白老でブロニスワフ・ピウスツキの記念碑が除幕されるわけ
アルフレト F. マイェヴィチ（井上 紘一 訳）
…… 7

地球人の魁～ブロニスワフ・ピウスツキとは何者だったのか
ヴィトルト・コヴァルスキ（井上 紘一 訳）
…… 15

古蠟管レコード資料からの音声再生　朝倉 利光
…… 31

よみがえったモノとコト、よみがえらせた物と者　山岸 嵩
…… 47

樺太アイヌ語研究における B.ピウスツキ蠟管再生の功績　村崎 恭子
…… 55

【資料編】
ブロニスワフ・ピウスツキ年譜　井上 紘一
…… 63

毛深い人たちの間で　ヴァツワフ・シェロシェフスキ（井上 紘一 訳）
…… 77

樺太のポーランド人たち　アレクサンデル・ヤンタ＝ポウチンスキ
（佐光 伸一 訳／井上 紘一・尾形 芳秀 注釈）
……109

Lectures and Seminar
"The Achievements of Bronisław Piłsudski—a Polish Ainu Researcher: On the Occasion of Unveiling His Monument in Shiraoi, Hokkaido"

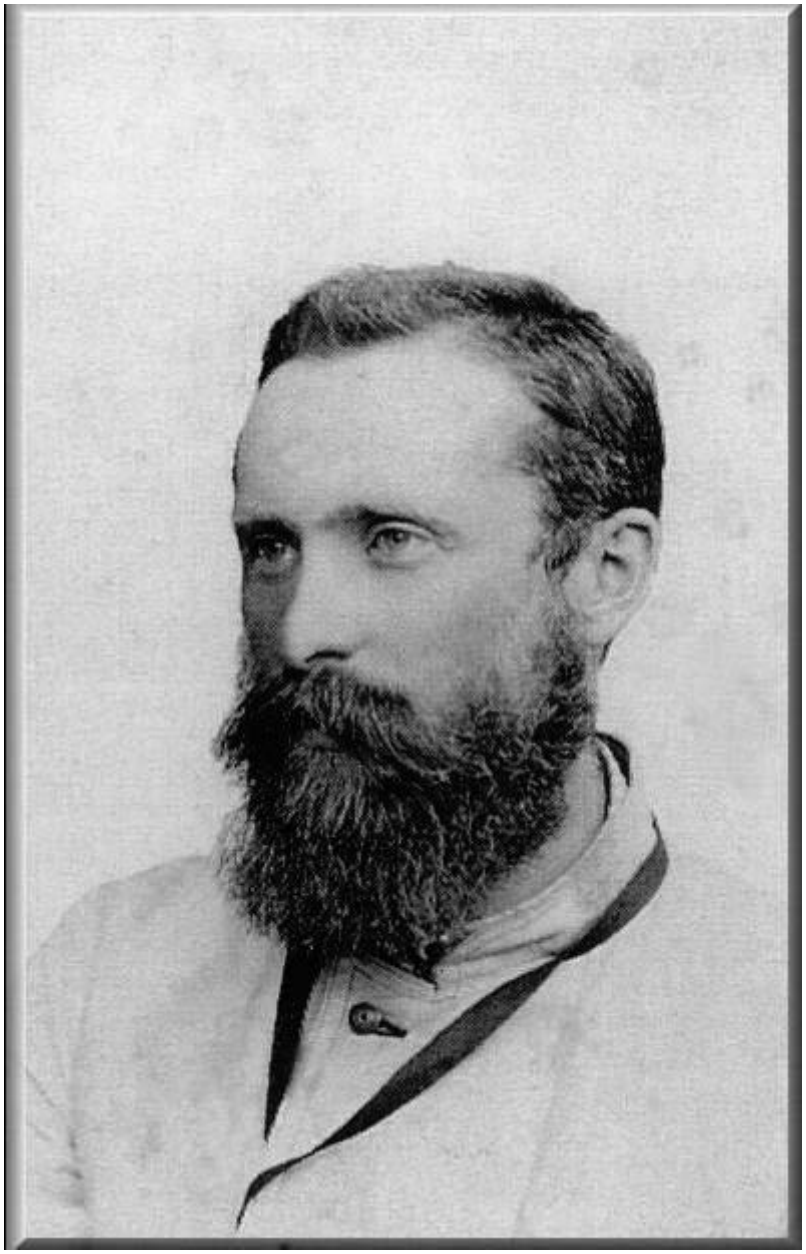
Date: October 20, Sunday, 2013
Time: 9:00~17:00
Place: Hokkaido University Conference Hall

Opening Speeches
Cyryl Kozaczewski, Polish Ambassador to Japan
Krzysztof Jaraczewski, J.Piłsudski's grandson, director of Józef Piłsudski Museum in Sulejówek, Poland
Kazuyasu Kimura, B.Piłsudski's grandson

Part 1, Lectures
Facilitator: Tetsuo Mochizuki, professor, Slavic Research Center, Hokkaido University
Ewa Pałasz-Rutkowska, professor, University of Warsaw
Poland and Japan during the lifetime of B.Piłsudski
Witold A. Kowalski, writer, B.Piłsudski's sister's grandson
The making of global man. Who and what was B.Piłsudski?
Alfred F. Majewicz, professor, Adam Mickiewicz University in Poznań, and Nicolaus Copernicus University in Toruń
Why ? Unveiling a monument to B.Piłsudski in Shiraoi

Part 2, Joint Seminar
Facilitator: Masato Tamura, associate professor, Sapporo University
Koichi Inoue, professor emeritus, Hokkaido University
Extracts from "B.Piłsudski's Chronological Record"
Toshimitsu Asakura, professor emeritus, Hokkaido University, and ex-president, Hokkai-Gakuen University
Sound reproduction from old wax phonograph cylinders
Kyoko Murasaki, former professor, Hokkaido University, and Yokohama National University
Merits of sound reproduction on B.Piłsudski's wax phonograph cylinders for Sakhalin Ainu study
Takashi Yamagishi, former professor, Nippon Institute of Technology, and former NHK's chief director
"Items and Matters" that have been resurrected and "Things and People" that have implemented them

Organizers: Hokkaido-Poland Cultural Association, and Slavic Research Center, Hokkaido University
Co-organizer: Global COE Program "Reshaping Japan's Border Studies"
Sponsors: Embassy of the Republic of Poland, and Instytut Polski in Tokyo



ブロニスワフ・ピウスツキ
1903 年函館、井田写真館にて

はじめに

ポーランド共和国文化・国民遺産省はこのほど、ブロニスワフ・ピウスツキのブロンズ胸像を白老のアイヌ民族博物館へ寄贈する。第一号記念碑は 1991 年 11 月 2 日にユジノ・サハリンスクのサハリン州郷土誌博物館に建立されているから、白老のそれは世界で二番目の壮挙である。白老での贈呈・除幕式は、ポーランドの B.ズドロイェフスキ文化・国民遺産相や C.コザチェフスキ駐日ポーランド大使らが列席して、来る 10 月 19 日にアイヌ民族博物館で挙行され、これにはピウスツキ家からも三名の「孫」[1] が出席する予定である。

翌 20 日には北大の学術交流会館講堂で記念セミナーが開催される。これは市民を対象とするセミナーであるから、関心を共有される皆さまには奮って御参加いただきたい。

ブロニスワフ・ピウスツキ（1866－1918）は、ロシア帝国に併合されていたリトワニアでポーランド貴族の家系に生まれた卓越する文化人類学者である。サンクト・ペテルブルグ帝大法科一年生だった 1887 年、ロシア皇帝暗殺未遂事件に連座してサハリン島へ流刑となり、爾来 19 年間、ロシア領極東で過ごすことを強いられた。その間、北東アジア原住民研究に従事して、この分野では先駆的な研究成果を残したが、1906 年のヨーロッパ帰還後も不遇で、膨大な成果の整理・公刊を果たすことなく、第一次世界大戦下のパリで客死する。年子の実弟ユゼフ・ピウスツキ（後のポーランド共和国初代元帥、国家首席）が亡国ポーランドを再興する半年前のことであった。

ピウスツキ没後ほぼ一世紀が経過したが、なかんずく 1970 年代以降、彼の生涯や仕事の掘起こしがポーランド、ロシア、日本などで進められた結果、ピウスツキは今や北東アジア原住民研究の魁として、揺るぎない地位を占めるに至った。彼の仕事では、1912 年に上梓された著書『アイヌの言語・フォークロア研究資料』（クラクフ：ポーランド学芸アカデミー）が名著として夙に著名であるが、アイヌのほかにニヴフ（ギリヤーク）、ウイルタ（オロッコ）、ウリチ（オルチャ）、ナーナイ（ゴリド）の言語・フォークロア研究にも、当時の最新機器であった蠟管蓄音機やカメラを駆使して携わり、やはり先駆的成果を残している。これら既刊・未刊の研究業績は、1998 年から刊行が始まった A.F.マイェヴィチ編『ブロニスワフ・ピウスツキ著作集』（全 5 巻、ムトン・デ・グロイター社、4 巻までが既刊）に、すべて収録される予定である。

ピウスツキの学術遺産に新たな光が当てられる契機となったのは、1979 年春の札幌におけるピウスツキ業績復元評価委員会(CRAP)の発足である。同委員会（のちに ICRAP）は、ポーランドで発見されたピウスツキ採録の録音蠟管を日本へ借り出し、最先端の科学技術を駆使して音声再生作業を進めるとともに、散逸した研究業績を博捜して然るべく評価し、併せて彼の伝記資料も収集した。

その成果は 1985 年に札幌で行われた第一回ピウスツキ国際シンポジウムで報告された。その後 1991 年には第二回シンポジウムがサハリンのユジノ・サハリンスク、第三回は 1999 年

[1] ブロニスワフ・ピウスツキの孫で、ピウスツキ家嫡嗣の木村和保氏、実弟ユゼフ・ピウスツキの孫で、ユゼフ・ピウスツキ博物館長のクシシュトフ・ヤラチェフスキ氏、および末妹ルドヴィカの孫で、ブロニスワフの伝記研究にも携わる作家のヴィトルト・コヴァルスキ氏。

にポーランドのクラクフ、ザコパネと、いずれもピウスツキに所縁の地で開催されている。2010 年には澤田和彦・井上紘一編『ブロニスワフ・ピウスツキ評伝』（全 2 巻、埼玉大学教養学部刊）が上梓された。

ところで、日本はブロニスワフ・ピウスツキと浅からぬ縁で結ばれている。彼は 1902 年から 1906 年にかけて四度訪日するが、なかんずく 1903 年の第二回来日は北海道に三ヵ月、1906 年の第四回では東京と長崎を中心に七ヵ月半と、かなりな長逗留であった。北海道では、ポーランド人シェロシェフスキの北海道アイヌ調査にアイヌ専門家として参加、函館と白老に各一ヵ月、平取に一週間余り、札幌に数日間滞在したが、とりわけ白老ではアイヌ・コタンに住みついて、コタンの人たちと胸襟を開いて付き合ったことが知られている。ヨーロッパへ戻る途上に立ち寄った第四回来日では、政治家・文学者・アイヌ研究者・社会主義者・女権活動家・女流音楽家など多士済々の日本人のみならず、亡命ロシア人や中国人革命家とも交際を重ねた事実が判明している。なかでも二葉亭四迷との厚い友情は特筆に値する。ピウスツキのアイヌ研究処女作（「樺太アイヌの状態」『世界』26、27 号所収、1906）は、東京の京華日報社が発行する月刊誌に日本語で発表されている。

加えて、ブロニスワフ・ピウスツキは 1903 年 9 月、南樺太東海岸のアイ・コタンでアイヌ女性チュフサンマと結婚し、助造・キヨの二児をもうけたが、妻子は彼のヨーロッパ帰還後も樺太に留まる。遺児は太平洋戦争後に北海道へ移住し、兄は富良野町、妹は大樹町でそれぞれ一家を構えた。今は孫や曾孫の世代になったとはいえ、ブロニスワフの末裔は全員が日本人として日本に在住する。因みに、長男助造の長男である木村和保氏は、当代ピウスツキ家の正統な当主である。氏は 1999 年のポーランド初訪問を機に、ポーランド在住の親族と親戚付合いを始めて、なかんずくユゼフ・ピウスツキの孫娘一家とは家族ぐるみで往来を重ねておられる。

今般のピウスツキ顕彰事業の発端は、ポーランド大使館が着想されたピウスツキ記念碑の寄贈計画であった。2010 年 8 月には大使の発案で記念碑寄贈と学術集会の双方を推進する実行委員会が発足する。大使の交代で実行委員会は「縁の下の力持ち」に甘んじることとなるが、実行委員各位にはこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。顕彰事業の実現に至る 3 年間には、多方面の方々から御支援・御鞭撻を賜った。なかんずく事業資金の提供を賜るポーランドの文化・国民遺産省、ポーランド大使館、ポーランド広報文化センター、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」、そして記念セミナーを主催してくださる北海道ポーランド文化協会と北大スラブ研究センターには、特段の深謝をここに銘記する次第である。

2013 年 9 月 20 日

ブロニスワフ・ピウスツキ顕彰事業
実行委員会
発起人・世話役
井上 紘一

謝辞

私が祖父ブロニスワフ・ピウスツキを知ってから三十年余りになります。没後半世紀以上経ってからが遅いのか、遅くないのかは分かりませんが、私にとっては、父の死後約十年が経過したこともあって、極めて新鮮な出来事だったのは間違いありません。結婚して間もない妻も、さぞ驚いたことでしょう。北海道の一級僻地出身の私は、近代史にかかわるような親族がいるなどとは、夢想だにしておりませんでした。

祖父のブロニスワフが誕生した 1866 年は、日本では坂本竜馬が活躍するまさに幕末期に当たりますが、この時代をめぐっては小説やドラマや映画などが、今なお新解釈を提示して世間をにぎわせております。同時代の世界では西欧の帝国主義列強が、アフリカやアジア等の支配権をめぐって鎬を削り、植民地争奪戦にうつつを抜かしておりました。この激動の時代は日本でも世界でも、その結果が今に至るまで尾を引いています。ブロニスワフの人生を激変させた 1887 年のロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件の頃、日本では伊藤博文が初代内閣総理大臣でありました。学生時代以来、歴史などさほど気にもしていない私でしたが、この時代には改めて思いを馳せずにはおれません。

誰しも青春時代は、純真で正義感にあふれ、血気盛んで、不条理・理不尽なものは受け入れられない時期だと思います。ブロニスワフもその一人であった、と私は考えています。いつの世もそういう事の繰り返しではないでしょうか。暗殺未遂事件にどれほど関与したのかは分かりませんが、とどのつまりは死刑から有期刑に減刑されました。なんと幸運なことでしょう。

私と従姉妹は NHK 取材班に同行して、ソ連時代のサハリンを訪れる機会がありました。そしてブロニスワフの足跡をたどりました。初の監獄の地ルィコフスコエ、アイヌの人たちと初めて出会ったコルサコフ、そして恋に落ちたアイ村などを訪ねたときは、深い感慨に襲われました。

彼の業績は、帝政ロシアの学術機関から原住民研究を要請され、その成果を論文としてまとめ、また色々な民族資料を収集・整理したものと理解しております。

私が今も鮮明に記憶するのは、ポーランドの山奥にある彼の旧居の屋根裏から発見された、蠟管をめぐる報道に接したときの感激です。なにしろあのエジソンの開発した蓄音機が、往時の少数民族の肉声を記録しているわけですから、学問的にも貴重な資料であるに相違ありません。そして音声の再生や解析に日本の最先端技術が駆使されることにもいたく感動しました。

長年にわたるピウスツキ研究の結果として、ブロニスワフは二葉亭四迷、大隈重信、横山源之助などの著名人、また孫文や宋教仁など中国人革命家とも親しく交遊した事実が判明しています。これは、日露戦争に勝利した日本に対する、亡国ポーランドの再興を模索するロビー活動だったのでしょうか、あるいは自らの学問的責任に発する少数民族支援の政治活動だったのでしょうか。その具体的意図は判然としませんが、彼はどうやら一介の民族研究者であるだけでは収まらなかったようです。

ピウスツキが妻子をサハリンに残して、ヨーロッパへ去ったことは紛れもない事実です。それに対して「あなたは、彼を憎んでいませんか」という質問を受けたことがありますが、私はこう答えます。「全然憎んでおりません。なぜなら、私が今こうして生きているのですから……」と。

妻とその子供たち（祖母と父と叔母）であれば、答えは全く違うと思いますが。その時代に生きた人たちは、(いつの世もそうだと思いますが）義理と人情の狭間で生きてゆかざるをえなかったでしょう。

ヨーロッパに戻ってからも、祖父はポーランド建国の父といわれる実弟ユゼフ、その弟の反対勢力、そしてポーランドを取り巻く列強との調整に最後まで腐心したに違いありません。

ブロニスワフ・ピウスツキに関する研究は三十年以上にわたり、国際的に展開されてきました。その間に開催された三回（1985 年札幌、1991 年サハリン、1999 年ポーランド）の国際シンポジウムでは、極めて多彩な研究成果が発表、討論されました。私はそのいずれにも参加させていただきましたが、その都度、祖父の偉大さを発見し、確認するのでした。その際はまた国内外を問わず、色々な方とお会いする機会にも恵まれて、私の人生観もいささか変わったように思います。

この度のピウスツキ顕彰事業がポーランド政府の発議で着手されたことは、長年のピウスツキ研究にとっても、またわれわれ遺族にとっても、画期的な「事件」であります。私個人としても、海外のピウスツキ縁者と一緒にこの事業に参加できることは、この上ない喜びであります。祖父本人も草葉の陰から、この予想外の展開に、さぞかし喜んでいることでありましょう。祖父はまた己の胸像が、1903 年の夏に胸襟を開いて付き合ったアイヌの人たちの土地、ほかならぬ白老に建立されることにも、きっと心からの喜びと同意を表明するものと思っております。

ブロニスワフ・ピウスツキをめぐってこれまでに展開された研究活動、その成果、そしてそれに伴う交流は、今後の学術研究に活用されるばかりでなく、ポーランドと日本の関係促進にも寄与することを願ってやみません。

なお、ブロニスワフ・ピウスツキ顕彰事業や、祖父とその仕事の研究に携わってこられた井上紘一北大名誉教授、村崎恭子前北大教授、山岸嵩・元 NHK チーフディレクター、澤田和彦埼玉大教授、A.F.マイェヴィチ・アダム・ミツキェヴィチ大教授、また親類でもあるヴィトルト・コヴァルスキ氏をはじめとする国内外の研究者、そしてこの顕彰事業にかかわられたポーランド政府関係者、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」、北海道ポーランド文化協会、北大スラブ研究センター、ならびに多方面で御協力いただいた方々や団体には、皆さまから賜った御厚情に対して、ピウスツキ縁者を代表し、この紙面をお借りして感謝申し上げます。

最後に、皆さま方の今後の御健勝と御活躍を祈念いたし、御挨拶とさせていただきます。

2013 年 9 月 24 日

木村 和保

ポーランドのアイヌ研究者

ピウスツキの仕事

白老における記念碑の除幕に寄せて



2013年
10月20日（日）
北海道大学学術交流会館（講堂）
時間：9時～17時

連絡先：北大スラブ研究センター
望月哲男
tetsuo@slav.hokudai.ac.jp

＊皆様のご参加を歓迎します。

開会の挨拶　9:00より

ツィリル・コザチェフスキ（駐日ポーランド大使）
クシシュトフ・ヤラチェフスキ（ユゼフ・ピウスツキ博物館長、ユゼフ・ピウスツキの孫）
木村和保（ピウスツキの孫）

第1部　講演　9:30－13:00　（日本語通訳付き）

司会：望月哲男（北大スラブ研究センター教授）

エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ
（ワルシャワ大学教授）
ブロニスワフ・ピウスツキのポーランドと日本

ヴィトルト・コヴァルスキ
（文筆家、ピウスツキの妹の孫）
地球人の魁　ブロニ スワフ・ピウスツキとは何者だったのか

アルフレト・マイェヴィチ
（A. ミツキェヴィチ大学、コペルニクス大学教授）
なぜだろうか：白老でブロニスワフ・ピウスツキの記念碑が除幕されるわけ

第2部　合同セミナー　14:00－17:00　（日本語）

司会：田村将人（札幌大学特命准教授）

井上紘一（北海道大学名誉教授）
「ブロニスワフ・ピウスツキ年譜」より

朝倉利光（北海道大学名誉教授、前北海学園大学長）
古蠟管レコード資料からの音声再生

村崎恭子（元北海道大学言語文化部教授）
樺太アイヌ語研究における B. ピウスツキ蠟管再生の功績

山岸　嵩（前日本工業大学教授、元 NHK チーフディレクター）
よみがえったモノとコト、よみがえらせた物と者

主催：北海道ポーランド文化協会・北海道大学スラブ研究センター
共催：グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」　協力：駐日ポーランド大使館・ポーランド広報文化センター

SRC　ポーランド広報文化センター INSTYTUT POLSKI TOKIO

ブロニスワフ・ピウスツキのポーランドと日本

エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ

ただいまご紹介にあずかりましたワルシャワ大学日本学科のエヴァ・パワシュ=ルトコフスカでございます。この度、ブロニスワフ・ピウスツキ像の除幕式とその関連のイベントにお招きくださった駐日ポーランド共和国大使ツィリル・コザチェフスキ閣下と、また今日の「ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事」と題する国際セミナーで講演の機会を与えてくださった北海道大学名誉教授の井上紘一先生に心からお礼を申し上げます。

私自身は、本日のイベントの主人公である、アイヌの言語やフォークロアの研究において多大な貢献をなした民族学者のブロニスワフ・ピウスツキの専門家ではないので、彼の一生と活動の背景となったポーランド・日本関係、すなわち表題にありますように「ブロニスワフ・ピウスツキのポーランドと日本」について講演させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

ご存知の通り、ピウスツキはロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件に連座して懲役15年の刑を言い渡され、1887年に樺太(サハリン)へ流されました。当時はまだポーランド・日本間の正式な外交関係が樹立されていませんでした。ポーランドは、1795年のロシア、プロシア(ドイツ)、オーストリアによる第三次分割から 1919 年、第一次世界大戦終了まで独立国家として存在しなかったからです。一方、日本は17世紀後半以降、270年にわたり鎖国状況にあり、国外との関係はほとんどありませんでした。しかし19世紀後半に開国して以来、徐々にポーランド人と日本人の非公式な接触が始まり、限られた範囲でしたが、情報も得られるようになりましたが、おそらく 19 世紀後半まで両国の一般国民は、お互いの国を意識することはなかっただろうと思います。

ポーランド人が初めて「日本」の名を聞き知ったのは、おそらくマルコ・ポーロの『東方見聞録(*Il Millione*)』の15世紀に出たラテン語訳を通じてであろうと思われます(ここでは中国名に由来するジパンゴもしくはジパングと呼ばれていた)。ポーランド語の文献で初めて日本に触れているのは、1579年に初版が出て以来幾度も増補されて版を重ねたピョートル・スカルガ＝パヴェンスキの『聖人伝』です。スカルガはイエズス会士として極東での布教活動に大きな関心をもち、『聖人伝』には、1549 年にカトリック宣教師として初めて日本に渡ったイエズス会士フランシスコ・ザヴィエルの生涯について書いています。続く数十年の間、日本について書き残したのは主にイエズス会士たちでしたが、それはもっぱら自らの修道士としての使命と関連した内容でした。徳川幕府の禁教令によってキリスト教が禁止された結果、信徒の迫害や処刑が始まり、それで 1643 年に殉教したのが、日本にわたった最初のポーランド人であるイエズス会士ヴォイチェフ・メンチンスキでした。この事実は、ポーランドに大きな反響を呼び起こし、数年後クラクフで出版された彼の伝記の中に描かれています。

その後、宗教関係以外でもいくつかポーランド語の記述が現われ、例えば、1797年に出版されたマウリツィ・アウグスト・ベニョフスキは旅行記の中で日本のことに触れています。信頼に足る極東旅行の記録として日本に関する情報がもたらされるのは 19 世紀になってからです。ロシア人船長ヴァシリー・ゴロヴニンの『日本幽囚記』のポーランド語訳が1823年に出版されました。ゴロヴニンは 1811 年に千島列島と北海道(蝦夷地)海域に探検に出た際、当時鎖国

を守り続けていた日本人に捕捉されて、そのときのことを書いたのです。

19 世紀後半になって日本が開国すると、他のヨーロッパ諸国の探検家が書いた旅行記の翻訳とか、ポーランド人研究者、旅行者の日記・回顧録とかが出版されました。それ以来一般のポーランド人が日本という国をより認識するようになりました。特に、私の興味を引くのはカロル・ランツコロンスキとパヴェウ・サピェハの日本についての思い出です。二人とも、別々に極東へ行き、明治憲法が発布された 1889 年頃の日本を印象深く書き記しています。また、主に流刑地であるシベリアを経て日本まで行き着いたポーランド人学者がいました。それは例えばルヴフ大学の動物学教授シモン・スィルスキであり、南洋諸島を研究した民族学者ヤン・クバリでした。

19 世紀末には日本文学の重訳が初めて現われました。1896 年に出版された為永春水の『いろは文庫』がその始めで、それらはおおむね日本芸術に関するもので、ヨーロッパにおけるジャポニズムの流行ともあいまって「若きポーランド(Młoda Polska)」の芸術家たちに大きな影響を与えました。この点では、日本美術の愛好家であり、収集家でもあるフェリクス・ヤシェンスキの数千点に上る木版画を中心としたコレクションが特に有名です。このユニークなコレクションは 20 世紀初めにクラクフの国立博物館に寄贈され、1994 年にアンジェイ・ワイダ監督の主導で建設された「マンガ日本美術・技術博物館」に常設展示の場を得ました。

日本人が「ポーランド」の名を初めて耳にしたのは、おそらくローマへ派遣された４名の少年いわゆる天正遣欧少年使節の時(1582–1590)でしょう。彼らは 1585 年にヴァチカンでローマ教皇グレゴリウス十三世に謁見したとき、ポーランド国王からの派遣者ベルナルド・マチェヨフスキと会ったと思われます。

次にポーランドとその都市についての情報が 1622 年に長崎で発行されたイエズス会士マテオ・リッチの世界地理の本に現われました。宣教師たちのおかげで、日本人がコペルニクスとその学説を知ったようです。1714 年および 1725 年には、儒学者で歴史学者の新井白石がヨーロッパに関する『西洋紀聞』という著作を発表し、投獄されていたイタリア人宣教師ヤン・バプテスト・シドッティから得た情報に基づいてポーランドについても言及しています。

日本では、19 世紀後半初めに開国して以来、欧米諸国の文物研究に始まる急激な近代化が始まりました。その過程のなかで日本人はポーランドという国やその歴史などにも興味をいだきはじめました。一般の日本人がはじめてポーランドの名前に接したのはおそらく福沢諭吉の『西洋事情』を通じてであっただろうと思われます。

その頃、日本人は欧米諸国から得た資料を基に、かれらが犯した間違いを繰りかえさないような政策を採るべく熟慮しました。それを目的に、例えば、東海散士は 1885 年に『佳人之奇遇』を著しましたが、そのなかで初めてポーランド民族の悲劇、すなわち国土分割や独立運動について記しています。著者は長年にわたり抑圧されてきたポーランド民族への連帯感を強調しながらも、日本が世界の国々との付き合いをはじめるに当たって、強大国等の植民地化政策に対する警告を発していたのでした。

同様の主旨で、詩人の落合直文は後年、軍歌としてポピュラーになった『波蘭懐古』の詩を著しました。

落合直文がこの詩を書くについては、ベルリンからウラジオストックまで、ポーランドの地を経てシベリア横断単騎旅行(1892–1893)を実行した福島安正少佐の回顧録と報告書が機縁となっていました。日・ポ関係の上で大事な人物ですから少し細かく紹介させて頂きます。

彼が 1887 年に在ベルリン日本公使館付武官に任命された目的は、ヨーロッパの近代的軍隊とその戦略に関する情報を収集することでした。日本が 200 年あまりの鎖国を終えて急速に近代化へ乗り出した当時の日本政府の主な目的の一つは、西欧型の強力な近代的軍隊を創設することでした。日本政府はそのような軍隊のみが日本の安全と主権を保障すると考えていたからです。国家の全体的な戦略計画を立てるためには、他の国々、とりわけもっとも強大で危険な隣国であるロシアの戦略に関する情報が不可欠だったのです。

福島は、５年間にわたるベルリン滞在中、日本軍の近代化のモデルとなったプロイセン軍についての詳細な知識を得ただけなく、イギリス、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、オランダ、ベルギー、フランス、スペイン、ポルトガル、イタリア、スイス、ロシア(欧州部)、バルカン諸国など、ヨーロッパの大半の国々を訪れました。

ドイツ滞在中には分割支配下にあったポーランドを数度にわたって訪れ、何人ものポーランド人と接触したようです。というのも彼は、いわゆるポーランド志士(愛国者)、すなわち武力闘争によるポーランドの独立を目指す熱烈な反ロシア派のみが、ロシア全体に関するもっとも重要な情報をもたらしてくれると考えていたからです。彼はそうした情報を日本陸軍参謀本部へ伝えるとともに、それをもとに自ら大掛かりな単独旅行に出るという計画を立てました。情報提供者たちから聞いていたことを自分の目で確かめようとしたのです。戦略的観点からもっとも彼の関心を引いたのは、当時建設中だったシベリア横断鉄道でした。ポーランド人の中には流刑を経験し、シベリアに関する情報を提供するだけでなく、今なおそこに留まっているポーランド人と福島との接触を手助けできた者もいたようです。

要するに、福島少佐の単騎旅行の主目的はヨーロッパ諸国の近代的軍備状況の調査、それも特に軍事大国であり日本にとって最も危険な隣国ロシアの探査でした。福島少佐は日本権力当局者の代表として、長く対ロシア抵抗運動に携わったポーランド人たちと初めて接触をもった軍人で、彼らから大国ロシアについての詳しい情報を得ることができました。

福島は、1892 年 2 月 11 日、紀元節の日に、ベルリンを出発し、三日目に以前ポーランド・ドイツの国境の町であったコシュチシンに着きました。2 月 15 日に、当時ロシアとの国境沿いにあったポズナンに至り、ロシア領に入りました。コニン、コウォ、クトノ、ウォーヴィチを通過し、24 日にワルシャワに到着しました。福島によれば、ワルシャワは整然とした、しかし騒々しく活気にあふれたかつての自由ポーランドの都でした。彼にとりわけ深い印象を与えたのは、かつてのポーランド王国の栄華とポーランド文化の水準の高さを物語る王宮でした。そればかりではなく、分割強国に対する幾度にもわたる蜂起に際してこの町が味わった無数の悲劇の痕跡も、彼は目のあたりにしたのです。

ロシア中央部、特にシベリア横断の計画に際し、今度も福島はポーランド人の独立運動家やシベリア流刑の経験者と会っていたようです。実はこれについて証拠も具体的な記述も何もないのですが、「ポーランド志士」たちというメモが残っていることから、おそらく事実とみてよいでしょう。彼は、ポーランド独立を宿願とするポーランド人の秘密政治組織が存在することを知っていました。そうした組織の本部――支部も同様ですが――は資金や武器や装備などを安全に集められるという理由から、大半がポーランド国外のイギリス、フランス、ドイツといった国々に置かれていました。これらの組織の活動家たちは大概その国の諜報機関と協力関係にあり、その関係をポーランド独立の実現に役立てようとしていました。そして、国際舞台における諜報活動を開始したばかりの日本の参謀本部の諜報員が、とりわけロシア情報を豊富に持つこれら組織の人々に助言や助力を求めるということはおおいにありうることでした。ロシアの重要拠点調査とポーランド人との接触は、福島にとりロシア領内の旅行ルートを決定する際にきわめて重要な要素でした。彼はおそらくポーランドの独立運動家たちから指定された場所に赴き、その仲間と接触して東京の参謀本部から要求された探索情報を得たものと思われます。

28 日にワルシャワを出発し、オストロウェンカ、シチュチン、アウグストゥフとスヴァウキを通って 3 月 7 日にカウナス(コヴノ)に着きました。その後、ウラル、シベリア、モンゴル、満州を経由して 1893 年 6 月 12 日にウラジオストックに到着しました。そこから船で日本に帰着すると、彼は英雄にまつり上げられ、東京をはじめ行く先々で熱狂的な歓迎を受けました。参謀本部は福島の情報収集能力とその分野における豊富な知識を高く評価し、1899 年に参謀本部第二部長に任命しました。以後日本陸軍諜

報組織の責任者の一人になったわけです。1904年に日露戦争が勃発すると、大本営参謀に就任、満州軍総司令部参謀としてそれまでの経験と情報を活かして手腕を振るいました。ヨーロッパでの任務期とシベリア横断単騎旅行の際に福島が得た情報は日露戦争中大いに活用されました。

日露戦争が始まる前、ブロニスワフ・ピウスツキはニコライ二世の戴冠に際する大赦で、15年の刑から10年に減刑されたため、1897年には刑期が満了となりました。その後、1899年にウラジオストックへ渡り、博物館につとめました。1902年から1905年にかけて、ロシア帝国科学アカデミーの正式派遣で再びサハリンへ渡航し、アイヌとオロッコの調査を行いました。その時の彼の研究は、いろいろな分野に関する研究の土台になったため特に意味があったといえます。1902年にピウスツキは初めて日本の函館に行きましたが、旅行途中で研究をするつもりはありませんでした。翌年、再び渡日し、ロシア帝室地理協会がポーランド人民族学者ヴァツワフ・シェロシェフスキのために組織した北海道アイヌ調査に同行して、函館、白老、平取、札幌などを巡歴しました。

シェロシェフスキは帰国の途次、東京、京都、神戸、大阪等を訪れ、そこで集めた資料を使って、のちに日本をテーマとする文学作品を書いたり講演を行ったりしました。その中に、アイヌ調査に関する*Wśród kosmatych ludzi*(毛深い人たちの間で)という著書(本書p.77~)もあります。

1904年2月10に日露戦争が勃発したというニュースは、ポーランドでは初め半信半疑に受け止められました。なぜなら、強大なロシアとの戦争とあっては、ようやく国際舞台へ登場したばかりの小国にすぎない日本という国にはとうてい勝機はない、と思われたからです。しかし、それからまもなく、緒戦における日本軍勝利の報が伝わると、この戦争に対するポーランド人の態度が一変しました。昔からポーランドの敵である大国ロシアと戦っている日本への支持が広まり、深い親近感をいだくようになりました。その頃日本を扱ったポーランド文学、日本文学の重訳、日本をテーマとする他の出版物が急増しました。

ポーランドの一部の政治勢力の代表者・民族解放運動の指導者たちは、日露戦争の結果ロシアは弱体化し、それによってポーランドへの態度を変えるのではないかと考えていました。そして、この戦争をポーランド問題、特に1795年の第三次分割によって失った独立の回復のために利用しようと試みていました。そして日本側、特に軍部にとっては、ポーランド人のロシア軍情報、あるいは彼らの武装蜂起やシベリア横断鉄道網の攪乱工作はロシア軍の弱体化につながるという大きなメリットがありました。

特に日露戦争をポーランド問題の解決に利用しようとしたのが、ポーランド社会党(Polska Partia Socjalistyczna)と国民連盟(Liga Narodowa)でした。しかし両党の立場が全く異なっていたので、日本側との接触、折衝は密かに別々に行われました。

ブロニスワフの弟であるユゼフ・ピウスツキを長とするポーランド社会党の活動家たちは、日露戦争をポーランド国家の独立回復に役立たせるべきだと考えていました。また、日本からの資金援助はポーランド王国内における対ロシア武装蜂起組織にとって大きな助けになると考えていました。蜂起により欧州地域におけるロシア軍は増強を強いられ、それが極東地域におけるロシア軍の弱体化につながると考えました。シベリア鉄道職員のなかには多くのポーランド人が働いていたため、ロシア兵の輸送手段となるシベリア鉄道や満州地域前線における設備などへの破壊工作も提案され、また、ポーランド人兵士のなかにひそかに革命文書を頒布し、兵士たちの脱走をうながす工作も考えられました。これらすべての活動は日本の敵ロシアの弱体化を促すはずでした。

国民連盟とその主導者であるロマン・ドモフスキは全く異なる立場をとっていました。かれらは、ポーランド王国内の蜂起は再度ポーランド人に悲劇をもたらし、日本にはなんの利益ももたらさないと主張しました。ロシア当局はポーランド人の武装蜂起をまたたくまに鎮圧し、従来にも増して極東の兵力を増強するにちがいないと訴えました。日本当局にこうした危惧を訴えるためにドモフスキは東京に赴き、1904年5月15日から7月22日まで滞在していまし

た。撹乱工作などを提案するピウスツキは7月10日に渡日し､7月30日に日本を離れました。1918 年のポーランド独立に際して活躍する両雄は、日本の外務省と陸軍参謀本部の代表者と話し合い、両者共々日本との協力提案や現状に関する意見を添えた文書を提出しました。ドモフスキは離日直前の 7 月 20 日、ピウスツキには内密に、ポーランドの地で革命的行動をおこすことに危惧するとの内容の書簡を外務省に提出しました(*To His Excellency the Minister for Foreign Affairs in Tokyo*[在東京外務大臣閣下]、外務省外交史料館、東京)。その書簡にはロシア当局がすばやくポーランドの反乱を鎮圧し、おおくの血が流れると記述してあり、またポーランドにおけるあらゆる騒乱や、極東の地での敗北の代償を求めるであろうロシアの要求は、日本にとって不利になると強調していました。

ピウスツキの日本での任務は不成功に終わりました。日本側は主に軍事情報の収集やシベリア横断鉄道の破壊工作に興味があり、ポーランドの政治的側面には興味を示しませんでした。世界の政治・外交舞台にやっと参入したばかりの日本は欧州問題に巻き込まれることを好まず、更には 1902 年以来同盟を結んでいる英国の目を気にして対外干渉を控えていました。日本当局の決定にドモフスキからの影響があったことは否めません。戦争に関してピウスツキとドモフスキの見解は正反対でしたが、日本軍の捕虜になったポーランド人戦時捕虜の運命については二人とも気遣っていました(『日本におけるポーランド人墓碑の探索』ポーランド文化・民族遺産省、2010 を参照)。

日露戦争時のポーランド・日本共同工作は当初、想定していたほどの成果はあがりませんでしたが、まさにこの時、ポーランド国民の中に日本人への深い親近感が誕生したのです。

ユゼフ・ピウスツキは後年、日本軍の功績をたたえて、51 名の司令官に戦時功労勲章(Order Virtuti Militari)を授与しまた。ドモフスキは自らの著作のなかで、日本民族の資質に触れ、日本人の道徳的価値観や集団主義社会を積極的に評価しました。

1905年9月5日に調印されたポーツマス講和条約によって日露戦争が終了しました。この条約により南樺太が日本へ割譲されました。そしてブロニスワフ・ピウスツキは南樺太のアイという村に住む家族と対面しましたが、ポーランドへ連れて帰ることは不可能なことを知りました。同年 10 月にブロニスワフは神戸も訪れました。同年 12 月から翌年の 8 月にかけて再び来日して、社会的な影響力を持つ政治家や下層民の権利のために闘った人物(横山源之助)、代表的な婦人解放運動家、多くの左翼活動家たちと知り合ったのです。なかでももっとも親交を深めたのは、ロシア文学者であり翻訳家としても知られ、のちにポーランド文学の翻訳にも携わった二葉亭四迷でした。ブロニスワフ・ピウスツキは 1906 年 8 月 3 日に日本を去り、アメリカ、イギリス、フランスを経由して、その年の秋帰国しました。1914 年 8 月に第一次世界大戦が勃発すると間もなくブロニスワフ・ピウスツキはウィーンへ脱出して、そのあとスイスへ行き、1917 年 11 月にパリに到着しました。そして弟のユゼフの政敵だったドモフスキが組織した「ポーランド国民委員会」のパリ事務所に勤務しました。翌年の 5 月にこの優秀な民族学者は急死しました。

1918年11月11日に第一次世界大戦が終了しました。同月 16 日、その当時ポーランド軍総司令官だったユゼフ・ピウスツキ将軍は連合諸国政府に、独立ポーランド国家の成立を通知しました。翌日、ポーランド共和国政府は、イギリス、フランス、日本、イタリア、アメリカの各政府に国交締結を求める覚書を送りました。日本政府がようやくポーランド独立の承認に踏み切ったのは、1919 年 3 月 6 日のことで、ポーランド側に正式に知らせたのは 3 月 22 日付となっています。そのためポーランド側の史料では、ポーランド独立の日本による法的承認は 3 月 22 日付となっています。

日本とポーランドが正式な関係を樹立するための次なるステップは、外交使節の交換でした。1919 年 3 月に、日本外務省は中東欧新興諸国への外交代表の派遣に関する文書を作成しました。この文書は、ソ連情勢に関する有用な情報を得るために、ヘルシンキ、キエフ、オデッサに総領事館をおく必要があることを勧告していました。さらに、五大国の一員としては

ぜひ中東欧諸国にも外交使節をおくべきであるとの見地から、ポーランドとチェコスロヴァキアの名も挙げられています。しかし、適当な人材がいなかったため、この案は実現しませんでした。

日本においては文民当局より軍当局の方がポーランドに強い関心をしめしていました。この事実は、在ポーランド日本公使館が開設される以前、1919 年からワルシャワにおいて活動していた後の大将、山脇正隆大尉の業績といえるでしょう。参謀本部が山脇大尉をヨーロッパに派遣する際に、ロシアより西の国への赴任を自由に選ばせましたが、大尉はポーランドを選び、その理由として三つあげました。

> 第一に、ポーランドは当時日本社会のなかでまことに人気のある国でした。第二に、[…] ポーランド人は「背骨のまっすぐな」、つまりまっ正直な人間でした。最後に、長期にわたる抑圧や分割国による民族性撲滅政策にもかかわらず、自己の言語や文化を護りぬいたが、これは教育や家族の有り方が規準にかなっているが故です。こどもたちは日本と同じように、両親を敬い傾聴します。
>
> 出発前、私はそれ以前の日本とポーランドの関係については全然知りませんでしたが、最初にパリに行き、そこで初めて出会った人物の一人が、ポーランド代表を率いてパリ講和会議に来ていたイグナツィ・パデレフスキだったのです。パリでは、ドモフスキとも知り合いになりました […]。私はポーランド行きの招待状と許可証をもらい、[…] ポーランドに着いたのは 1919 年 6 月のことでした。当時、ピウスツキは国家元首でした。私はほどなく彼と会う機会に恵まれ、私たちは最初の出会いから親密な打ち解けた間柄になりました。[…]
>
> この時期の日本はポーランドに対して非常に好意的でした。日本人の親ポーランド感情のきっかけの一つは、滅ぼされたポーランドの悲しい運命をうたったある軍歌でした。19 世紀末の福島少佐の単独騎馬旅行の印象をもとに書かれたものです。
>
> 当時のポーランドにとって、日本の友好的な態度は非常に重要だったのではないでしょうか。日本は五大国の一つで、パリでは日本の発言が大きな影響力をもっていたからです。

日本が最初の正式な外交使節をポーランドへ派遣することを最終的に決定したのは、1921 年 5 月のことでした。初代の駐ポーランド公使に就任したのは、1904 年にドモフスキとユゼフ・ピウスツキが東京で日本当局と会談した際に通訳を務めた川上俊彦でした。同時に山脇は正式な駐ポーランド日本公使館付き武官に就任しました。これ以降、彼は戦間期を通してポ・日関係に重要な役割をはたしました。

ポーランド側は日本よりはるかに、外交関係の早期締結と正式の外交使節の派遣に熱心でした。それは最初の駐日代理公使にユゼフ・タルゴフスキが 1920 年 4 月 7 日に任命され、8 月 10 日に東京に着任したことからもわかります。

第一次世界大戦後、ポーランドは国の独立を回復し、1920 年代は新興国家として安定した国境線確立とヨーロッパ大陸内での地位強化に専念していました。ポーランドにとって日本との友好関係を維持することは、東側隣国との難しい関係上、適正なバランスをとることになりました。一方、日本は 1920 年代に世界の諸問題を決定する国際連盟の主要国の一つとして大国の道を歩みはじめました。国際協調ということを学びはじめ、極東地域での国益維持に気を配る日本は、自国に直接関連しない事項には介入せず、他の大国との対決姿勢を避けるようにつとめました。しかしながら、ポーランドに関してはおおむね友好的な中立的姿勢をしめしました。

日本では 19 世紀末に、ポーランドではその十数年後に生まれた、相互の親近感は戦間期のポ・日関係を支配し、こうした感情は公的関係にも影響をあたえ、今日まで続いていると思います。今回のイベントはその証拠の一つだろうと考えます。

＊ Author & title: E.Pałasz-Rutkowska, “Poland and Japan during the Lifetime of B.Piłsudski.”

なぜだろうか～
白老でブロニスワフ・ピウスツキの記念碑が除幕されるわけ

アルフレト F.マイェヴィチ
井上 紘一 訳

文明は人類の所産である。実際のところ、各個人は――短い生しか持てずに夭折するか、巷との付合いを一切拒否する人たちでさえ――、ほとんど例外なくそこへ参与・貢献する。われらの頗る微妙な感情や極めて深甚な経験の小品を形作り、またこれらを研ぎ澄ませてもくれるのは、彼らにほかならぬからだ。個々の貢献は、天賦の才能や技量、能力や潜在能力、性格の特徴、状況などに左右されてはいるが……。

それら個人の間には、幸運にも上述した諸要因のすべてに恵まれて、より多くの寄与をなすか、あるいはそうすべく運命づけられた人たちもいて、社会は彼らの功績を、人々の集合表象の中に不滅の記憶として刻み込んで、社会遺産となすことを決断するか、顕彰することを選択する。彼らの貢献は生き続け、大切に記憶され、これら貢献者の物理的不在にもかかわらず社会に奉仕し、彼らの名前が歴史の年代記に刻印され、彼らの伝記や肖像は、各種の便覧や百科事典などの該当頁にも登場する。貢献者の幾人かは、彼らに関する集団的記憶が常に更新され、生き続けるべく、格別な記念碑を建てるに値する人物として認められる。

力づくで押し付けられた偽の記念碑は――偽の「偉大さ」をめぐる真実が、平和裏ないし暴力的な形で勝利する瞬間に、幸いにも破壊されるまでは――、間違いなく増殖することができる。サハリンを代表する彫刻家ヴラヂーミル・チェボタリョフが重い斑糲閃緑(はんれいせんりょく)岩でこしらえたブロニスワフ・ピウスツキの石像は、サハリン州の人口 20 万を擁する州都ユジノ・サハリンスクの中心部に立てられた。それはまさに、レーニン、スヴェルドロフ、ジェルジンスキーなど、コミュニストの「偉人中の偉人」たる偶像の記念碑が、いまだ存命中のソ連邦や、不本意ながらもそれと「兄弟的」盟約を結んだ国々――モスクワやワルシャワも含む――の領土内では、軒並みに打倒されていた頃のことである。この関連では、「ピウスツキ」という名前それ自体が、1920 年のポーランド・ソ連戦争においてブロニスワフの弟ユゼフ・ピウスツキがもたらした赤軍に対する勝利のせいで、「ソ連圏」では最高度の慎重を要する案件だった事実が想起されてしかるべきだろう。

では上記の出来事がどうして可能となり、またブロニスワフ・ピウスツキの記念碑は、なぜサハリンで建立されたのだろうか。

この件では、次のような展開が決定的な誘因だったと思われる。まず、それは疑いもなく、ゴルバチョフの「グラスノスチ」、「ペレストロイカ」政策が先導したソ連の外交から内政にわたる思い切った転換であって、それがサハリン島に対するアクセスを可能とした。次に、これもまた疑いのないところだが、大阪の国立民族学博物館の傘下で、北海道大学が中心となって推進した ICRAP―International Committee for the Restoration and Assessment of Bronisław Piłsudski's Work の頭文字を連ねた略語ながら公称―と銘打つ国際的研究プロジェクトである。ICRAP の主要な目的は、エディソン方式の蠟管に保存されたアイヌ語とアイヌ・フォークロアの、初めての――したがってまた最古の――音声記録の内容を復元し救出することにあったが、この採録を 1902–1903 年にサハリンと北海道で――そしてまた白老においても――実行したのは、ブロニスワフ・ピウスツキその人にほかならない。当初は極めて不確かだった企てに、少なく

とも確かな結果を確保すべく、さらに二つの目標がプロジェクトに付加される。即ち、１)散逸したピウスツキの[既刊・未刊行]著作を博捜して、アイヌを論ずるかアイヌに関連する作品を、『著作集』の形でグローバル・アカデミズムへ提供するべく英文で公刊する、２)関心を共有する学者たちと一堂に会して、成果や失敗、またそこから生ずるさまざまな結論をめぐっても討議する機会を設けるため、国際会議を開催する、がそれである。蠟管の収録内容復元の試みが、たとえ不首尾に終わった場合でも、遭遇した諸問題や、失敗の原因をめぐっては、依然として議論ができることを想定したわけだ。

ピウスツキが収録した内容の復元結果は、予想された成功率 2%を上回り、計画された国際会議は 1985 年 9 月 16–20 日、「B.ピウスツキの録音蠟管とアイヌ文化に関する国際シンポジウム」と題して北海道大学で実施された。会議には 10 カ国――カナダ、中国、デンマーク、フィンランド、ドイツ、イタリア、日本、ポーランド、ソ連、米国――から 148 名の学者や研究者が参集して、アイヌやアイヌ文化をテーマとする然るべき規模の「国際会議」としては、事実上初めてのものとなった。

このプロジェクトには、日本のマスメディアから関心が寄せられ、やがてそれは国外へも及んでいった。北海道新聞はその進行状況を日常的に報道し、分岐点やその瞬間を逐一記録し、のちにはプロジェクトに関する一般書も上梓している(先川 1987)。NHK は２本の記録番組を制作する。一つは「NHK 特集」シリーズの「ユーカラ・沈黙の 80 年〜樺太アイヌ蠟管秘話〜」、今一つは教育テレビ「ETV 特集」シリーズの「カラフト・アイヌ望郷の声」で、いずれも山岸嵩の作品である。山岸はまた、国語教科書の「言語と文化」の節に向けて、ピウスツキ蠟管と収録内容復元の試みを伝える 17 頁の読物を執筆して、この話題を日本の生徒たちにも届けている(山岸 1990)。今日では、ブロニスワフ・ピウスツキにかかわるドキュメンタリー・フィルムが 13 本に達する傍らで、彼とその資料に関する出版物の件数は千点を超えており、その多くは ICRAP の研究プロジェクトに淵源する。

ピウスツキの印象的な民族資料コレクションをめぐっては、あまたの図録が上梓されており、これらのコレクション、あるいはむしろその一部を対象として――各コレクションは大半が大き過ぎて、一度には展示できないそうである――、幾度となく展覧会が催され、奇跡的に生き残った録音蠟管の技術的雑音の狭間から聴き取れるアイヌの歌の調べは、札幌の子供たちにミュージカル上演すら鼓舞するに至り、その中で歌われる「ピウスツキ・オジさんの蠟管から聞こえる」すばらしいお話を讃える歌――その歌詞と音符については CWBP 3, 789–90 を参照されたい――は、暫くの間、北海道中の生徒たちが口ずさんでいた。

ICRAP プロジェクトの反響はサハリンにも届いた。そこではブロニスワフ・ピウスツキが学者として、また島の卓越した探検者としてもよく知られ、高く評価されていて、南サハリンの一山は彼の名前すら冠されたから、「ピルスツキー山」は各種の地図に明示されている。つい最近までは事実上サハリン州の全域において先導的な文化・教育・学術機関だったサハリン州郷土誌博物館は、彼のコレクションを同館の蔵する根幹資産として慈しみ、彼とリェフ・シュテルンベルグを同館創設の父と見做してきた。ユジノ・サハリンスクの博物館と、600 キロほど北にある都市型集落ノグリキの分館において、ピウスツキとその遺産をめぐる第二回国際会議を開催するというアイデアが生まれたのは、まさにこの博物館においてであった。そのアイデア自体が当時としては空想科学小説(SF)のように聞こえた。サハリン州の全域はつい先頃まで「閉鎖」されていて、外国人にとってはほとんど完璧な立入禁止区域で、通常のソ連人ですら、米国の上院議員１名を含む乗客と乗員 269 名が搭乗する韓国航空のジャンボジェット機が、1983 年 9 月 1 日に躊躇なく撃墜された事実までも了解の上で、特別な許可を得て渡航することができたからである。しかしながら、「ブロニスラフ・オシポヴィチ・ピルスツキーはサハリン原住諸民族の研究者」と名付けられた国際会議は、当局の承認を取りつけて、1991 年 10 月 30 日–11 月 2 日に実施された。決定的な論拠は、そのような第一回会議が日本で開催されている事実と、「サハリンとその発展

や繁栄に専ら寄与した人々の一人」であるブロニスワフの生誕125周年を祝賀することの必要性だった。

ドイツの思想家カール・マルクスはその1845年の「フォイエルバッハ論：第11テーゼ(*Thesen über Feuerbach*, These 11)」に「哲学者たちは、世界を様々に解釈してきただけである。肝心なのは、それを変革することである」と記していた。同会議はマルクスの件の公理を実践して、不可能なことを可能としたのだ。それは島の歴史で未曾有の、このような規模の初めての国際会議として、とりわけサハリンとロシアの学者たちに、また西欧・米国・日本の学者らに対しても、一堂に会して、相互の学術協力、人やアイデアの交換、そしてあまたの研究プロジェクトを触発させる機会を提供し、ひいてはサハリン州全域の外部世界へ向けての開放や、同州の人々の外部世界へ向けての開放に途轍もなく寄与したわけだ。

ピウスツキ生誕125周年を記念するサハリン会議のハイライトの一つは、サハリン州郷土誌博物館の前庭における彼の記念碑の除幕式であった。この建物はサハリン州の全域を通じて議論の余地なく最も美しい建造物であるが、貝塚良雄(1900–1974)の設計で、1937年に樺太庁博物館として豊原に築造されたものである。ユジノ・サハリンスクは比較的短期間のうちに、ブロニスワフ・ピウスツキ研究のグローバル・センターとなり、博物館にブロニスワフ・ピウスツキ遺産研究所が付置されたあとは、専門家らが全世界から詣でるメッカとなった。同研究所は自前で高水準の『通報』を発行しているが、これは一人の研究者の伝記と遺産の研究に特化した、かなり希有な学術誌である。同誌は目下16号までが既刊であるが、そのほかにあまたの重要著作が、やはり研究所の支援で上梓されている。例えば、未刊行のピウスツキ遺稿を上梓した数冊、ピウスツキとリェフ・シュテルンベルグが取り交わした書簡集成２冊、彼の生涯のサハリン期を扱った浩瀚な伝記(Latyshev 2008)などである。

ここで強調さるべきは、サハリンの同僚たちが自らの郷土の卓越する学者・研究者・探検者を顕彰・記念するばかりでなく、――恐らくはそれ以上に――共感～同情～憐憫といったピウスツキの個人的性格の傑出した諸特徴にも共鳴して、彼の記念碑を建立したという事実である。これらの特徴は、無私の精神で支援し、他者の利益のために行動し、また己の崇高な理想を堅持するためならば、己自身も、またたとえ僅かであれ己の持てる物まで、一切を犠牲にすることも辞さぬという稀有な性向や、その実践に当たっての腰の軽さを常に伴っていたからだ。

彼は、思いがけぬ運命の悪戯によって己が牢獄となり、また悲惨なる浮き世にもなった土地の原住民たちの研究に深く沈潜するわけだが、それは、己の興味の充足や知見の拡張もさることながら、第一義的には、これらの脆弱で、抑圧され、差別され、敗者と宣告された人々への心情的連帯感に発するものであった。彼自身の語りを以下に引用する。

> 十八年以上に及んだ極東における私の滞在は、強いられたものだった。私は故郷へ戻ることを常に希求しながら、己が囚われの身の追放者であること、自らにとって最も大切な人たちのすべてから切り離されていることの苦痛は、なるべく忘れようと努めた。したがって、私はサハリンの原住民たちに自然と惹き付けられていった。彼らだけが、その太古からの居住地であるこの邦(くに)に真の愛情を抱いているからで、そこへ監獄植民地を持ち込んだ人々はこの邦(くに)を忌み嫌っていた。全く異なる形の文明の侵入に当惑していた自然児らとかかわりを持ったとき、私はあらゆる権利を剥奪されて、生涯でも最悪の歳月にあったとはいえ、自分にも何らかの力と効用が具わっていることを知った。加えて、[…]私はいつも、個人と民族の諸権利の憎むべき破壊者らの仲間にだけは加わらぬように生き、かつ行動すべく心がけてきた。私は、民族を異にする人たちと彼らの言葉で語り合うことに深い喜びを覚える[…]。人の精神生活にあっては、その母語が、有機体の生命に対する太陽の関係に匹敵することを、私は自らの心によって承知して

いる[…]。太陽は生命に光を浴びせ、温める傍らで、その秘所を開示し、その深奥に隠された宝物を顕示する必要を感じさせて、そのようにも仕向けるからだ。いや増しに昂じてゆく生活の厳しさの故に苦悩するこれらの素朴な部族民らの心へ、ささやかな喜びや、より良き未来に対する希望をもたらすことは、私の欣快とするところである。戯れる子供らの心底からの笑い、親切な女らが目に浮かべる感涙、病人の顔が示す感謝の微笑み、賛意を告げる叫び声、あるいはまた良き友が喜びの印として肩を軽く叩く仕草、これらは皆、己が定めの辛さを快く軽減してくれる慰藉であった (CWBP 2, 8–9)。

その認識は異なるとはいえ、われらが共有する悲惨、われらのそれぞれの故郷――われらの存在の揺籠――へ向けられた同様に真摯で熱烈な愛、これらすべてがわれらを結び付け、相互愛を育んでいった (CWBP 1, 144)。

ピウスツキ自身の書物のみならず、彼と偶々会って話す機会があった多くの人たちの証言からも、そして彼を知るか、またはその行動を観察した人たちの言説からも、彼がアイヌやニヴフの共同体にしっかりと根を下ろし、揺るぎない信頼を享受して、彼らの単なる一員と見做されたことは明らかである。これほどの厚遇を受けた外来者は、恐らく皆無だったろう。彼らが伝統的に保有し、また使用もしてきた猟場や漁場に対する権利やアクセス権が、ロシア人や日本人の征服者らに奪われて、十分な量の食料がほとんど確保できず、さらには彼らの生存自体の展望さえ危殆に瀕しているのを見出すや、彼は馬鈴薯の栽培や魚の塩漬けや牧畜といった、原住民らにとって全く未知の持続可能な新生業の導入に着手する。彼はまた、アイヌたちがロシア人や日本人らと悶着を起こしたときは、彼らの利害を代表しつつ陳情書を執筆し、原住民の見解を説明して、彼らの弁護人や代弁者としても振る舞った。原住民たちは、新しい支配者によって課された規則や法律で抑圧されているのに、規則や法律は彼らの理解を絶するものだったからだ。ロシアと日本の双方の当局者に向けて執筆された特別な覚書では、原住民の自治、教育、医療、社会・公共福祉をめぐって完璧に推敲を凝らした制度を提示していた。その有効性を例証すべく、彼は自らの時間をかなり割いて、傷や通常の疾病を治療し、彼自身が創設した[識字]学校のために地元の教師たちも自らが養成した。これら学校の設置は、ロシア皇帝が指示した原住民人口調査を自らが請け負う代わりに、サハリン島武官知事から取り付けた資金で賄われた。彼は、当時のサハリンにいたシャマンの全員と個人的面識を有しただけでなく、彼らのほとんどは彼を親しい友、腹心の友と、また敬語的な意味での「兄」とさえ見做した。アイヌらがピウスツキに寄せる信頼は絶大であって、無限のようにも見えたが、彼らは彼をほとんど全知全能と考えていた。アイヌ自らに語らしめよう。

村を目下管理するのは日本人で、今のところアイヌはそれに参加せず、また同意も与えていません。[…]日本人らは、バフンケとモニタフノの持物だった海辺の小屋を押収し、所有していますが、両人には代わりの漁場を全く与えていません。[…]アイヌに教える者は誰もいません。[…]今は村長(スタロスタ)を務めるバフンケは、[…]このような実情を訴えるために上京しました。わしらに慈悲をください。鵜城(ウソロ)の近くには鰊の良い漁場があるそうです。もしあなたがそれをロシアのツァーリから貰って、わしらへ渡してくれるならば嬉しいです。そうすれば、わしらが人々を遣って、そこで魚を獲らせますから。[…]わしらに慈悲をください。わしらが鵜城近くの漁場を手に入れられるよう助けてください。[…]以前にお伝えしたように、もし日本人が漁具を管理するのならば、わしらの村の衆は嘆くことでしょう。彼らはわしらが岸で網漁を行うことを許しません。[…]今は、アイヌが日本式生活を選ぶよう望む日本の役人らのせいで、より難しい状態ですが、全く違う生活様式を直ちに受け入れることにアイヌは抗っています。彼ら

は、わしらがたくさんの魚を獲ることや、岸辺で網漁をすることを禁じています。それはまことによろしくない。[…]わしらに慈悲をください。ロシアのツァーリには、シベリアにわしらの漁場を三つほど下さるように頼んでください。わしらの村には良い漁場がないからです。入江の向こう側には良い漁場が幾つもありますが、そこを取り仕切る日本の有力漁業者がすべてを握っています。[…]わしらに慈悲を垂れて、直ぐに返事をください。[…]わしらに慈悲を垂れて、わしがシベリアで二つの漁場を貰えるよう、どうか助けてください。日本人たちですら、わしらを気の毒に思ってくれますからに。もしあなたが、ロシアの役人たちとロシア語で話してくだされば、彼らはたとえちょっぴりでも、わしらを助けてくれるでしょうから、わしはたくさんお礼を言うし、幸せでしょう。[…]もし漁場が[…]カムチャツカであっても、一向に構いません(CWBP 3, 723–27)[1]。

ブロニスワフは、アイヌ娘との結婚によってアイヌの共同体に仲間入りし、二児の父親となった。彼がアイヌの家族を置き去りにしたという非難は、現存する記録による限り正確でないことが判明する。彼は人身の自由が回復されたとき、己の家族を引き取るという特別な目的でサハリンに戻った――彼の申し出を断ったのはアイヌの側であった――が、のちになっても、自分の家族の許に戻るべくあらゆる努力を重ねていた――その当時の最も偉大な学者の一人だったフランツ・ボアズは、彼がサハリンと北海道へ赴いてアイヌ研究の継続を可能とすべく、資金の調達に尽力した[2]。

ピウスツキの学界全般に対する寄与、そしてアイヌやアイヌ語やアイヌ文化に関するわれわれの知見への寄与は、公刊のほとんど直後に認知されていた。彼の著作は鳥居龍藏、知里眞志保、和田文治郎、和田完などの学者によって日本語へ翻訳されだして、金田一京助や村山七郎によって称賛された。ボアズは 1908 年、彼の資料の価値を「それについて私の承知する限り、この種の資料が今後再び現れることは甚だありそうにないと私はかなり確信している」[3]という表現で特徴づけていた。50 年後、ピエール・ナエール(1958:37)はピウスツキの *Materials…* について「樺太アイヌ語のテキストは採集地が明記され、ルスロ神父[4]の協力を得て考案された表音法にもとづく記述は秀逸であって、実際に[…]樺太方言に関するわれわれの知見にとっては最善の典拠である[…]」と記している――リンドクウィスト(Lindquist 1960: 8)はこれを「私が詳細な書誌として PN(ピエール・ナエール)の著作に言及するように、ここでは敢えてただ一冊の著作、ブロニスワフ・ピウスツキの 1912 年刊 *Materials…* のみを掲げておく」[5]と強調するが、70 年後には、著名な日本学者で、アイヌ語(ユーカラ)、琉球語(おもろさうし)、上代日本語(712 年の古事記)の英訳者でもあるドナルド L.フィリッパイ(Philippi 1979: 18)が「樺太アイヌ語やフォークロアを研究する場

---

[1] これは千徳太郎治がピウスツキに宛てた手紙の一節で、幻の「アイヌ文語」で記されている。これら 3 通の手紙については、アイヌ語テキスト・逐語訳・自由訳が公刊されている(丹菊逸治・荻原眞子「千徳太郎治のピウスツキ宛て書簡 :「ニシパ」へのキリル文字の手紙」『ユーラシア言語文化論集』4: 187–226、2001）が、マイェヴィチ氏の英訳は自前のテキスト解釈にもとづいているから、ここでは敢えて同氏の英文稿から邦訳してある――訳者。

[2] ブロニスワフ・ピウスツキの浩瀚な伝記(Sawada and Inoue 2010)は「プレプリント」として埼玉大学から上梓された。

[3] アメリカ自然史博物館のパトロン、アーサー・カーティス・ジェイムス宛の 1908 年 6 月 6 日付ボアズ書簡。フィラデルフィアのアメリカ哲学協会文書庫蔵。ここでは、Inoue 2003: 159 から引用。

[4] Jean Pierre Rousselot (1846–1924)は実験音声学の開祖の一人。代表的著作は“Phonétique d’un groupe d’Ainos” (*Revue de Phonétique* 2 (Paris 1912), 5–49)。ピウスツキは、著作に使用するアイヌ語テキストの表記法に関して、ロンドンでルスロから直に指導されている。

[5] 表記法の違いによって、Piłsudski 1912 が外国語による唯一の出典であるような書誌は、なかんずく日本語の出版物に頻見される。

合、それは最重要の作品である」という見解を踏襲した。1912 年の *Materials…* は寸毫の疑いもなく、世界的学識の中でそのような意義と重要性を有する諸著作の間に列せられるべきである。それは樺太アイヌの口承文芸やその言語に関する究極の典拠と見做されており、またそのように見做され続けるであろう[6]。

サハリン人たちはブロニスワフ・ピウスツキを、自らの島国へ格別に偉大な奉仕をなした人物として、しかと定まって永続する世界的名声を博する学者として、また有徳・有価の男としても顕彰すべく、彼の記念碑を建立した。しからば、日本人やアイヌの人たちは、そして北海道と白老の人たちは、なぜ同じことをすべきであるのか。彼らは果たして、そうすべきなのだろうか。

大義名分はサハリンの場合とまさに同じである。ピウスツキは確かに、北海道を探検することも、また同じような程度と規模でその発展に寄与することもなかった。だが、彼にはその機会が与えられただろうか。ピウスツキとヴァツワフ・シェロシェフスキを persona non grata（好ましからざる人物）と見做し、調査の開始後ほどなくして、彼らに退去勧告を突き付けて、首尾よく去らせたのは、日本人たちであった。シェロシェフスキはヤクート［現サハ］人に関する著名な専門家で、のちに多作の作家となったが、1903 年の夏には両名が北海道アイヌを調査すべく来道していた。しかるに、そのような状況下にあっても、北海道と日本のことがピウスツキの諸著作に欠落するわけではない。今は日本で暮らす彼の子孫たちはここで生まれている。二人の学者が北海道でフィールド・ワークに着手したのは白老からであるが、その踏査行は、今や世界中で認知されている旅行記[7]をも生み出した。ピウスツキの遺産は、やはりアイヌの、白老と平取の、北海道と日本の遺産である。そしてまたロシアの、リトワニアの、ポーランドの遺産でもある。

---

[6] 当該専門領域における同書の独創性や卓越性は、以下の３要因に求められる。

１）同書が提供する資料は、樺太アイヌがいまだ独自の生活様式・習慣・儀礼・言語・伝統を堅持していた頃に集積されたすべてのフィールド・データの間で、最も豊かであり、最も周到に採集されたものである。上記の伝統文化は、特殊な雅語を介して、特定個人の記憶に保持されたものを若い世代が受け継ぐ形で伝承されてきたから、全員が周知すべきものではなかった。同書の著者はまた、彼らの生活の浮沈のすべて、祭祀や儀礼などにも能動的に参与する傍らで、彼の言語運用能力は熟達・完璧であった。

２）同著者は幸いにも、当時のポーランドで望みうる最良の校訂者二人の下で、編集作業を進めることができた。一人はヤギェウォ大学教授のヤン・ロズヴァドフスキ（1867–1935）、当時の最も優秀な言語学者の一人で、1904 年にライプツィヒで上梓された古典的著作 *Wortbildung und Wortbedeutung* の著者である。今一人はヤギェウォ大学英語教師のミハウ・セヴェリン・ヂェヴィツキ。彼は同書のメタ言語である英語を監修したが、ポーランドのアカデミズムにおける英語学の草分けの一人だった。

３）樺太アイヌが、言語や文化を喪失し、彼らの四周に遍在する情け容赦ない日本人らに融合し、究極的には後者の間に埋没すべく猪突した民として、完全な文化変容を蒙る以前に、その水準や規模の双方で本書に匹敵しうるような試みは皆無だった。

[7] シェロシェフスキは 1926 年、彼らの 1903 年の踏査行をめぐって純文学作品を上梓する。同書はその後数回再刊されたが、英語・チェコ語・ロシア語にも翻訳されており、つい最近では井上紘一による日本語版も登場している。

参考文献

(邦文文献)

先川信一郎『ロウ管の歌：ある樺太流刑者の足跡』札幌: 北海道新聞社(1987)

シェロシェフスキ、W.、井上紘一訳「毛深い人たちの間で」[本書に収録]

知里真志保「樺太アイヌの説話(一)」『樺太庁博物館彙報』3/1、豊原(1944)

知里真志保「樺太アイヌの説話(一)」『説話·神謡編』(知里真志保著作集 1 巻)251–372、東京: 平凡社(1973)

ピウスツキー、B.、北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会[藤村久和、他]訳「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料」『創造の世界』46: 99–119; 47: 112–42; 48: 116–33(1983); 49: 134–47; 50: 118–39; 51: 98–118; 52: 134–64(1984); 53: 124–56; 54: 148–61; 55: 144–61; 56: 84–98(1985); 57: 104–13; 58: 140–59(1986); 61: 104–29; 62: 116–35; 63: 98–115(1987); 64: 96–113; 65: 120–35; 66: 120–27; 67: 98–129(1988); 70: 116–29; 71: 62–70; 72: 132–42(1989); 74: 112–22; 75: 138–50(1990); 77: 138–45; 78: 104–11; 80: 102–11(1991); 82: 108–19; 84: 136–45(1992)、東京: 小学館(1983–1992)

和田文治郎「樺太アイヌに傳はる昔話」『北方日本』15/2: 100–07、豊原: 北方日本社(1943)

山岸嵩「よみがえった《ロウ管》」、木下順二ほか監修『新版中学国語』2: 196–212、東京: 教育出版(1990、1987[1])

(欧文文献)

CWBP 1, *The Aborigines of Sakhalin* (*The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, edited by Alfred F. Majewicz), 819 pp., Berlin–New York: Mouton de Gruyter (1998)

CWBP 2, *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore (Cracow 1912)* (*The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, edited by Alfred F. Majewicz), 886 pp., Berlin–New York: Mouton de Gruyter (1998)

CWBP 3, *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore 2* (*The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 3, reconstructed, translated, and edited by Alfred F. Majewicz, with the assistance of Elżbieta Majewicz), 924 pp., Berlin–New York: Mouton de Gruyter (2004)

CWBP 4, *Materials for the Study of Tungusic Languages and Folklore* (*The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 4, edited by Alfred F. Majewicz, with the assistance of Mikhail Dmitrievich Simonov, Larisa Viktorovna Ozoliņa, Tatyana Bulkhakova, Elżbieta Majewicz, Tomasz Wicherkiewicz and Werner Winter), 1414 pp., Berlin–New York: Mouton de Gruyter (2011)

Inoue, Koichi, "F. Boas and an 'Unfinished Jesup' on Sakhalin Island. Shedding New Light on Bertold Laufer and Bronisław Piłsudski." In: Laurel Kendall and Igor Krupnik (eds.), *Constructing Cultures Then and Now. Celebrating Franz Boas and the Jesup North Pacific Expedition*, pp. 135–63, Washington: Arctic Studies Center, American Museum of Natural History, Smithsonian Institution (2003)

Latyshev, V[ladislav] M[ikhajlovich], *Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского. Пролегомена к биографии* [Sakhalin period in the life of Bronisław Piłsudski – prolegomena to a biography]. Yuzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoye knizhnoye izdatel'stvo (2008)

Lindquist, Ivar., *Indo-European Features in the Ainu Language with Reference to the Thesis of Pierre Naert*, Lund: C.W.K.Gleerup (1960)

Majewicz, Alfred F., *Dzieje i legendy Ajnów* [history and oral traditions of the Ainu], Warszawa: Iskry (1983)

Naert, Pierre, *La situation linguistique de l'aïnou I. Aïnou et indoeuropéen*, Lund: C.W.K.Gleerup (1958)

Philippi, Donald L., *Songs of Gods, Songs of Humans. The Epic Tradition of the Ainu*, Tokyo: University of Tokyo Press (1979)

Piłsudski, Bronisław, *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*, collected and prepared for publication by Bronisław Piłsudski, edited under the supervision of J[an] Rozwadowski, PhD. Cracow: Imperial Academy of Sciences (Spasowicz Fund), "Spółka Wydawnicza Polska," xxviii + 242 pp. (1912). Reprinted several times, also in CWBP 2, 1−272; Russian translation by Valeriy D. Kosariev „Материалы для изучения айнского языка и фольклора" (only the introduction, bibliography, commentaries, and English texts translated) in *Краеведческий бюллетень* 1, 56−89; 2, 80−104; 3, 158−83 (1994); and (complete, with Ainu-language texts) in *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского* 7, 26−205 (2004). Japanese translations: Wada 1943, Chiri 1944, and Piłsudski 1983−92. Polish translations of 15 (out of 27) texts in Majewicz 1983.

Sawada, Kazuhiko and Kōichi Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vols. 1−2, 1024 pp., Saitama: Saitama University (2010)

Sieroszewski, Wacław, „Wśród kosmatych ludzi" (1926) ['among hairy Ainu'; it was printed in instalments simultaneously in three newspapers: *Czas* in Cracow (№№ 228−238), *Świat* in Warsaw (№№ 41−46) and *Wiek Nowy* in Lemberg~Lwów (№№ 7589−7615), subsequently published separately in a book form in 1927, 1934, 1934, 1938, 1959 and in vol. 18 (*Szkice podróżnicze. Wspomnienia*, pp. 219−74, Kraków: Wydawnictwo Literackie, 1961) of a 22-volume edition of Sieroszewski's „Works" *Dzieła*; as early as 1927 a Czech translation was in print (*Mezi chlupatými lidmi*. Praha: Nakladatelství Pokrok). For the English-language edition with commentaries and illustrations entitled „Among Hairy People − a 1926 account on Wacław Sieroszewski and Bronisław Piłsudski's expedition to the Ainu of Hokkaido in the summer of 1903" see CWBP 3, 646−99, 791−801, 819; a Russian translation based on it, entitled „Среди косматых людей," appeared in *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского* 8, 46−88 (2004); recently completed Japanese translation by Koichi Inoue, included in this book.

＊ Author & title: A.F.Majewicz, "Why? Unveiling a monument to B.Piłsudski in Shiraoi."

地球人の魁（さきがけ） ～ブロニスワフ・ピウスツキとは何者だったのか

彼はアイヌの習俗や慣習を強く抱きしめて、
彼らの許に己が子らの母も見出した。

ヴィトルト・コヴァルスキ
井上 紘一 訳

三十九才のブロニスワフ・ピウスツキがシアトル航路の米国船で横浜港を出航する1906年8月3日、彼が己の祖国と見做すポーランド・リトワニア同君連合へ向けられた日本人らの印象的な眼差しに、彼は思いを馳せていた。その祖国は、百年以上も前に近隣諸帝国が暴力的に山分けしてもはや存在せず、123 年の長きにわたり地球の表面から完璧に消失していたのだった。1906 年当時の日本の生徒らはどうやら、外部からの侵略に対して自らを守れぬか、あるいは守ろうとせぬ国家にありうる末路の範例として、ポーランドのことが教えられたようである。

ブロニスワフ・ピウスツキは、一人の若者として家庭ではポーランド語を話し、その想像力はポーランドのかつての輝かしい栄華にとっぷり浸かっていたから、ポーランドの亡国は彼の夢や渇望の基準点であった。だが、己の一生を通して自らをポーランド人と称したい者が、ドイツ（プロイセン帝国やオーストリア帝国）かロシアの市民権を受け入れることを強いられていた。ブロニスワフの両親はいずれも、リトワニアの一地方であるサモギティアの生まれであるが、彼らが生まれたとき、この地方はロシア帝国に併呑されていた。彼ら自身の両親の場合でも、状況は大差なかった。そこでもし、今日のお役所仕事が設定するような基準でピウスツキの国籍を云々するとしたら、ブロニスワフ自身もさることながら、彼の近い先祖たちまでが、少数派民族集団出身との添書きが付されて、ロシア帝国臣民に分類されるであろう。

1918 年、ブロニスワフ・ピウスツキの死の僅か数ヵ月後のことであるが、ポーランド国家は甦った。ポーランドは果たして、ブロニスワフを直ちに自国民の一員と主張し、彼を模範的なポーランド人愛国者と見做したであろうか。否、そのようなことはなかった。ポーランドの国家再興以降、ブロニスワフ・ピウスツキは忘却された傍流人物として扱われている。今日のポーランドは、お役所仕事と「省力原則」が、国営のメモリー・バンクに保存するに値する人物を決定するようなお国柄である。そして彼が今や一世紀以上にわたって世界にあまねく周知・尊敬されてきたのに、国内では国家が空世辞を弄するだけである。また彼の苗字はあまねく知れわたっているのに、彼の洗礼名は、その記憶を忘却から救うべく戦う一握りの熱血漢らが僅かに知るのみである。彼の業績たるや誰も何も知らず、ポーランドの首都ワルシャワの雑踏の中で、ブロニスワフ・ピウスツキについて何かを耳にしたことのある通行人と遭遇するためには、頗る老練で粘り強く――しかも人一倍強運な――研究者が必要となるだろう。

これは悲しい事態であるが、それはさらに悲しむべき追伸すら伴う。人をあれこれの国籍に振り分ける今日の公式便法によると、ブロニスワフ・ピウスツキには――彼の父母や祖父母たちがロシア国籍を有していたことで――ポーランドの市民権が付与されそうにないのだ。しからば、彼はむしろロシアの市民権を要求した方がよかったのかも知れぬが、それとても問題含みであろう。ブロニスワフ・ピウスツキは確かに青年期をロシアで過ごしたとはいえ、成人として公認される年齢に達する前に収監され、

彼は未成年者だったから、これらの権利を主張する――あるいは同事件で死刑が宣告される――には余りにも若過ぎたにも拘らず、死刑宣告を受けて市民権が剥奪された。多年にわたる懲役刑を勤めたあとで、これらの市民権の幾つかはその後に回復され、「農民」の身分が付与されたとはいえ、移動の自由と、居住の許される地域をめぐる厳しい制約は残された。ロシア帝国が彼の市民権の全面回復を決定する前に、ピウスツキは既にロシアを去っていた――1905年12月には帝国領から最終的に脱出している。帝国臣民としてのロシアとの公的かかわりはこれを以て終わり、彼がロシア国境を再び踏み越えることはなかった。

今日、ブロニスワフ・ピウスツキを自国民と主張するロシアの熱烈なラヴコールは既に始まっている。数年前のことだが、ポスト・ソヴィエト期のある著者は彼を「ヴィドヌィ・ルースキー・ウチョヌィ」(「ロシアの著名な学者」)と記している。そのような評価はブロニスワフの眼に愚挙と映るだろうが、今日の世界ではそれが分類的思考の権力であるから、そのような記述がもしウィキペディアないし有象無象の「ペディア」に登場するならば、彼がそれを変更させる手立ては恐らくほとんどなかろう。事態を透視画法で眺めてみよう。筆者の母はヴォルヒニアの古い町ウツクで 1911 年に生まれたが、第二次大戦がヴォルヒニアにソ連支配をもたらす三十年以上も前のことだった。しかしながら、1945年以降のコミュニスト・ポーランドにおけるその生涯を通して、母の身分証には彼女の出生地が“USSR”(「ソ連邦」)と明記してあった。どれほど抗議を重ねたとても、ポーランドの役所にこの目障りな記載を変更させるのはできぬ相談だったから、私の母親は統計から法律上のあらゆる用途にわたって、強力なソ連国家がそのような人々に対してなしうる、滑稽ながらも怖ろしい要求に怯えつつ、元ソ連国民として分類されていたのだ。

筆者の旧稿 “Noblesse Oblige” (K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, Saitama 2010 所収)では、ブロニスワフ・ピウスツキのさまざまな出自系統が議論されているが、そこにはルーシ国の建国者リューリクにまで遡ることが歴史的に検証された家系もあまた見出される。民間信仰ではそのような家系が「ロシア人」と称されるのが通例であるから、ピウスツキは職業(学者世界)でもさることながら、先祖までもロシア人だったという今一つの誤解も生じえた。そうではない!まず第一にリューリクはスカンディナヴィア――Varang/Vareg――渡来の血統であり、キエフにおいてルーシの民を支配したが、この民は十中八九まで、今日のロシア人の先祖ではなかった。第二には、リューリクとブロニスワフの間に介在する二十世代余りを通して、リューリクの子孫らは忽ちリトワニア化され、のちにはポーランド化された。ブロニスワフの先祖たちは後者の二家系に由来する。この脈絡では、全ロシアのツァーリ、ヴァシーリー一世――1425年に死去――に由来するブロニスワフ・ピウスツキの出自は、既に取るに足らぬものとなっている。同帝の血がブロニスワフの血管に到達するまでに、サディズム的傾向が幾分緩和された先祖たちのお蔭で、それは十分に希釈されたからだ。

十代のピウスツキ少年は、強烈な反ロシア派だった。ヴィルノ第一ギムナジヤの生徒としては、ロシア人の生徒らを異なる血筋の人たちと見ていた。このアプローチに露わな敵意はなくて、あるのはただ自分が彼らとは異なるという確信だけだった。当時のヴィルノには地方の総督府が置かれていたが、それは、ブロニスワフのロシア人同級生の大半が、政府官吏らの息子たちであることを意味し、彼らはしばしば、自らがあたかも征服地で暮らすかのように振る舞った――それは遺憾ながら、事態の真実を反映するものでもあった。地方条例は、ブロニスワフのような生徒らに、校内ではお互いの間ですら、彼らの母語で会話することを禁じていた。この条例はその後さらに拡大適用されて、生徒たちは路上を友人や親族と歩くときでさえ、ポーランド語の使用は禁止された。それはつまり、ブロニスワフが屋外では、例えば、自分の従姉妹たちとも話ができぬことを意味した。彼女らは正規の学校に通学せず、そのためロシア語は全く話せなかったからだ。数ヵ月後には、規制のさらなる強化が導入されて、生徒らには友人

や親族の訪問も厳禁となり、彼らの相互訪問も午後 8 時までに制限された。

十七才のブロニスワフは、いまだ未刊行の「日記」の中でロシア人を、遅かれ早かれ不幸な結果を迎える「モンゴリアとモスコヴィアの混成民族」と形容した。彼はまた、ギムナジヤの校長が彼の過失を責めるときに、「貴様らはロシアのパンを食し、ロシアの市民権もすべて享受しておるのに、それでもロシア語を話すのは嫌なのか」と、よく叫んだことも回想している。

件の校長は極めて自明ながら、母語の使用禁止をロシアの過不足ない市民権の代償と見做していたわけだ。それは、件のポスト・ソヴィエト期の著者が先に述べたことと通底する心情だ。とはいえ、地元製のパン――たとえその一切れですら、正真正銘の「ロシア（のパン）」と称することはできなかったが――を食することは、ブロニスワフの著作がロシア語へ翻訳された結果、「ロシアの著名な学者」という肩書の候補に彼が推輓されること以上のロシア市民権を、彼に付与するものではなかった。

それは古典古代の「ロシアの著名な学者」――ペチャ・ゴラス――の事例をまさに想起させる。外部世界との遣り取りの中で、ロシア文化は頗る貪欲でもありえて、他者の業績を好んで己のものと主張する。筆者は極めて見識の高いモスクワの歴史家と付合いがあるが、彼はなんと、サンクト・ペテルブルグに在住するブロニスワフの――ピウスツキ姓の――従兄弟の一人は無線通信機の最初の発明者だった、と大真面目で断言したのだ。ソヴィエト期には次のようなジョークがモスクワの街を闊歩していた。問：最初の「ロシアの著名な学者」は誰だったか。答：もちろんペチャ・ゴラスだとも――この名は、古典古代ギリシャの著名な哲学者ピタゴラスの異名として通用していた。

若きブロニスワフが一度(ひとたび)、普通の人々と、彼らを蜘蛛の巣のように捕捉する帝国の統治機構とは峻別すべきことを学ぶや、ロシア人に対する彼の態度はかなり変化する。彼がサンクト・ペテルブルグ大学に入学する 1886 年までに、彼の想念――ますます革命的になっていったと言わねばならぬが――は既に、例えば、ブロニスワフの当初の夢であったポーランド国家の再興よりも、ロシアの普通の人々の福利により傾斜していた。その後のサハリン期ないしウラヂヴォストク期にはロシア人のあまたな受難者仲間を、彼は分隔てなく支援していた。ヨーロッパに帰還した 1906 年以降でさえも、もしロシアの当路の人たちが然るべき研究職のポストを用意するならば、ブロニスワフはロシアへ戻る余地も残していた。彼の書簡を繙くならば、そのようなポストが実際に用意された事実も知ることができる。彼がオファーを受け入れようとしなかった理由の一つは、公的旅行文書の不所持だったが、彼自身の説明によるならば、ロシアの旅券は、1906 年の米国からヨーロッパまでの旅の途上で紛失したという。

しかしながら、その他の理由もあった。概して言えば、帝政の官僚主義に対する彼の態度は、ポーランドとロシアの生活様式における根源的懸隔を反映するものだった。ロシア人はヴァシーリー一世やイヴァン雷帝のような途方もない暴君であっても統治者として受け入れる用意があったのに、ポーランド人の方は、たとえ僅かな中枢的王権の強化ですら容赦しなかった。この懸隔は、国家論をめぐる解釈でポーランドとロシアが常に対決してきた、最も根源的な論点である。その発祥は恐らく、原ポーランド族[リャフ]からの二部族[ヴャティチとラヂミチ]の自発的離脱に遡るとみられ、両部族はおよそ 1,100 年前に東遷して、モスクワ川の河岸に新しい公国を建設した。この懸隔は今日に至るまであとを引いている。熟年に達したブロニスワフ・ピウスツキが、十代の強硬なポーランド愛国者のままだったことはありえぬが、この素朴なナショナリズムからの離脱は彼をモスコヴィア人、はたまたモスコヴィアの「学者」にさせたと解する余地は全くありえない。

さて、彼はもしポーランド人ともロシア人とも言いえないとすれば、ブロニスワフ・ピウスツキはドイツ人ではなかったろうか。この問いは、見かけほどありえない話ではない。拙稿の“Noblesse Oblige”では、ピウスツキ家の血管へドイツ人の血をもたらした多数の血筋が列挙されている。実際にも己をドイツ人と信じていたブロニスワフの祖先は、この千年間に数百名

はいたに違いない。彼はドイツ人の「血」を帯びていると述べたが、そこでは遺伝子だけに留まらず、慣習や信仰、事物の序列や他の民族――数例を挙げるとすればポーランド人、ロシア人、リトワニア人など――に対する態度までも含意されている。あるドイツ系家族との関係は、ブロニスワフが生きた時代に益々密接となって、彼が受けたゲルマン的習俗の影響はさらに強くなるであろう。

ブロニスワフが――系統を異にする純粋にドイツ系の――少なくとも三家族に由来し、これら三家族は 17，18，19 世紀を通して、彼の先祖に当たるピウスツキ家やビレーヴィチ家と、決まった間隔で通婚を重ねていたことが知られている。その後の 1830 年頃、バトラー家の二人姉妹がピウスツキ一族に嫁入りしたとき、ドイツ人遺伝子の明瞭な氾濫が彼らを襲う。姉妹の一人であるテオドラは、ブロニスワフの父親の生母となるであろう。今一人の姉妹エルジュビェタ(エリザベス)は、スギンティのヴォイチェフ・ミハウォフスキと結婚して、やがてブロニスワフの母方の曾祖母となった。ヴォイチェフとエルジュビェタは一人娘のヘレナをもうけて、ヘレナはアントニ・ビレーヴィチに嫁いだ。ヘレナは 1846 年に夭折するが、死因は定かでない。そのとき、彼女の一人娘のマリア――ブロニスワフの母親――は三才だった。

バトラー一族は、アイルランド・英国・サクソニー(ドイツ)・クルラント、そしてポーランドといった各国に根付いた、さまざまな分枝からなる汎ヨーロッパ的な家系である。ブロニスワフの先祖筋のバトラー家は、リヴォニアを経てリトワニアに到来したが、どうやらその前にサクソニーから渡来した分枝もあったらしい。彼らの記録された歴史による限り、バトラー一族の習俗はドイツ的であり、日常の言語もやはりドイツ語だったことに疑うべき余地はない。19 世紀初頭にヴィンツェンティ・ピウスツキが、伯父の故ベネディクト・バトラーの遺産の相続を求めて訴訟を起こしたとき、故人はクルラントの陸軍中将であり、同国宰相の姉妹と結婚した事実が、裁判記録から端なくも明らかとなった。クルラントの公用語はドイツ語であるから、同国で行われた法律や慣習もやはりドイツのそれだった。彼らがその命運をブロニスワフの家族と重ね合わせるまでには、バトラー一族が近隣の社会に益々統合されてゆき、とどのつまりは、ドイツ語で die Polnische Wirtschaft(ポーランド経済)と称されるものを、己のそれと見做したであろうことは言うを俟たない。

ブロニスワフ少年の「日記」は、彼の家族生活に及ぼしたバトラー家の影響の大きさを如実に物語る。ヴィルノのブロニスワフの家には、ピウスツカ「ばあちゃん」か、ミハウォフスカ「ばあちゃん」――実際はブロニスワフの曾祖母――か、バトラー「じいちゃん」か、ビレーヴィチ「ばあちゃん」が、ほとんど毎日のように訪ねてきた。彼らの区々の姓に騙されてはならない。実際は、上記の四親族はいずれもバトラー家で生まれた兄弟姉妹である――但し些かややこしいことに、彼らの母親はビレーヴィチ家の出身だった。さらに言えば、これらバトラー家の兄弟姉妹――彼らは全部で 16 人もいた――の内の二人は、ヴィルノからほど遠からぬ田舎に住んでいたから、来訪の際はピウスツキ家のアパートに滞在することを常としていた。十代のブロニスワフは、もし毎日でなければ毎週ないし毎月、40 人余りの親族と接触したが、その過半はバトラー・コネクションを介して――父方か母方のいずれかの絆で――互いに結びついてもいた。

ピウスツキ家は最も広いアパートに住んでいたから、親族たちは彼らの客間で顔を合わせることが多かった。それぞれの集まりが散会するとき、ブロニスワフは、いずれかの「ばあちゃん」の帰宅に必ず付き添わねばならず、送り届けた先では招じ入れられて、お茶を啜り、彼女からゴシップや説教を聞きながら、半時間ほど過ごす破目に陥るのだった。彼はこれらの茶会の間、寝不足を取り戻そうと努めるも無駄であった。彼の「日記」には、「ばあちゃん」たちの垂れた「良き助言」を彼なりに整理した文章が、数頁にわたって書き連ねてある。この「助言」は――はるかに年上の人たちが垂れた助言は、世界中のティーンエイジャーが挙って忌み嫌うように――彼がそれをどれほど嫌ったにせよ、これらの頻繁な接触はブロニスワフ少年の生活に深甚な影響を及ぼしたに相違ない。

バトラー・コネクションはブロニスワフの両親の生活にも頗る大きな影響を与えた。ピウスツキ、バトラーの両家が領地を所有する幾つかの行政区では、地方条例が不法に施行され、ポーランド貴族の経済力を削ぐことが目論まれた。この条例は「1865 年 12 月 10 日勅令」として知られ、不動産市場におけるカトリック教徒の取引を事実上禁止した。実際は土地の血統相続を認めるだけで、相続地は公開市場で売ることも、分割売却も一切罷りならぬことを意味した。ブロニスワフの家族に関する限り、同「勅令」はビレーヴィチ家とバトラー家の家系を介して相続した領地の所有を許容するだけだった。1880 年代の初頭にピウスツキ家が家計不如意に陥ると、寡婦となったミハウォフスカ「ばあちゃん」――1894 年に死亡――は、己の所有するスギンティの領地の権利をブロニスワフの母マリアへ譲渡する。領地は 4,000 ﾍｸﾀｰﾙ以上の土地を包摂するも、それがもたらす収入は、鰻上りに高騰するピウスツキ家の経常経費を賄うにも事欠く有様だった。

しかるに、ブロニスワフのドイツ・コネクションはバトラー一族に限られたわけではない。ブロニスワフが 1906 年にヨーロッパに戻ったとき、当時のガリツィア――オーストリア帝国の一地方――の首都であったクラクフに彼は居を定める。その統治者は、ドイツ人国家の神聖ローマ帝国皇帝なる称号を帯びる習わしで、ドイツ人の諸国家はもはやその呼びかけに呼応しないとはいえ、それはやはりドイツ人国家であって、公用語の筆頭はドイツ語、統治機構も各種土地法もドイツのそれであった。ピウスツキは 1906 年以降、ガリツィアの主要な文化中心地――クラクフを別にすると、それはルヴフとザコパネだった――を転々と移動した。彼はまたヨーロッパも手広く巡歴した。1914 年、第一次世界大戦が勃発すると、ブロニスワフはガリツィアを離れてスイスへと向かう。彼はオーストリア旅券を帯びていた。

この旅券は彼をオーストリア・ドイツ人に変えたであろうか。われわれの信ずるところでは、以前に所持したロシア旅券が彼をロシア人にした以上のものではなかった。しかしながら官僚主義は、人々を腑分けする自前の手立てを有するから、ブロニスワフはあらゆる意思や目的に関して、もはやロシア人ではなくてオーストリア人だった。もし誰かが 1914 年から 1917 年にかけてスイスに在住したオーストリア人の氏名を精査するならば、統計資料の中で必ずやブロニスワフ・ピウスツキと遭遇するであろう。

だが、われわれはそのような統計資料を信じるべきだろうか。もし「否」であるならば、もしブロニスワフ・ピウスツキを確実に――但し、統計的確度は担保されるかも知れぬが――ドイツ人、ロシア人、ポーランド人とは認定できぬならば、彼は一体、何者であったのか。ブロニスワフ・ピウスツキは多分、過不足なしのリトワニア人だったのだろうか。とどのつまり、彼が生まれ落ちた地方はリトワニアと呼ばれ、彼が思春期を過ごしたヴィルノは、リトワニア建国以来の首都である。彼の父は、ピウスツキ一族が中世初期のリトワニア統治者の末裔である、と繰り返し語っていた。物事がことほど左様に単純でありさえすればよいのだが……。ピウスツキ一族の伝説はむしろかなり割り引いて受け止めるべきである。1939 年以前のヴィルノには、ごく僅かなリトワニア人しか住んでいなかったが、ブロニスワフの両親は、自らがリトワニア人であることを「承知する」傍らで、己をサモギティア人、即ち、ポーランド共和国の時代には独自の公爵領を形成していた、リトワニアの一地方の出身者と「見て」いた。往時の 15–18 世紀にはリトワニア大公国があって、今日のポーランド・ウクライナ・ラトヴィア・ベラルーシや、コヴノとヴィルノの周辺に建てられた歴史的には新しい国家――これが今のリトワニアである――を包摂していた。「往時」にはすべてが違っていた。まず初めに、国境なるものは皆無で、リトワニア大公国を構成するあまたの領邦――国ではない――があるのみ。その一方で大公国は、ポーランド王国とともに一つの大国を形成していた。この共和国の内部で、サモギティア伯爵領は独自のアイデンティティや、自前の行政機構と慣習を有していた。ブロニスワフの父は多分、国王領出身のポーランド人などの「外人」に対しては、不要な説明を避けるべく「リトワニア人」と自己紹介するであろうが、彼の胸の内では純粋無垢のサモギ

ティア人なのであった。

ブロニスワフは――サモギティアから遠く隔たり、リトワニア人と白ロシア人(ベラルーシ人)を分かつ文化境界に立地する――ズーウフの生まれであるから、己をサモギティア人とは見做さなかった、恐らくピウスツキ家で最初の人物であったろう。だが彼はまた、己をリトワニア人とも考えなかった。リトワニア人とは、自前の言葉――ブロニスワフはそれを「途轍もなく難しい」言語と信じていた――を話し、別の社会層に属する人々のことであった。十七才のブロニスワフは「日記」に、リトワニア語を自分に教えるよう使用人の一人に頼み、この願望を守り通す誓いも立てた、としたためている。

彼は遺憾ながら誓いを守り通せなかった。しかしブロニスワフは、己の祖国の少なくとも大きな部分において現地住民が使用する言語を学ぶ必要を認めて、リトワニア語で書かれた最初の書物の出版に尽力した、16 世紀の曾々…祖父ヴォイチェフ・ビレーヴィチの衣鉢を継いだ。ヴォイチェフは熱烈なプロテスタントで、信者らに対する主要な教義の伝授は現地語、即ちリトワニア語で行わねばならぬ、という信条の持主だった。

16 世紀に、現地語で記された聖書を隣接する東プロシャのつてを頼ってヴィルノへ持ち込んだのは、ヴォイチェフ・ビレーヴィチとその父イェジーである。19 世紀に、まさに同じルートで同様な書籍を国内へもたらす任を担うのは、彼らの末裔であるブロニスワフ・ピウスツキであった。しかしながら、一つの莫大な違いも介在した。彼のビレーヴィチ家の先祖たちは同事業を自由に何の障碍もなく実行したのに、ブロニスワフの方はこれらの書籍をドイツとロシア――ポーランド共和国を貪り喰らった二帝国――の、堅守された国境を越えて密輸せねばならなかったからだ。彼はそうすることで投獄や、恐らくはシベリア流刑の危険さえも冒したわけだが、それは、現地住民の根源的欲求に対処したのちに、社会的威信を享受することは初めて可能となる、という古い家訓への彼の執着でもあった。

密輸者のルートを整備する中で、ブロニスワフ・ピウスツキは青臭いリトワニア民族主義運動に対して産婆役を演じたが、同運動は結局、リトワニア人自前の独立国家を――四十有余年後に――もたらした。ブロニスワフ自身は、ポーランドから切り離されて自立するリトワニアの勃興は望まなかったが、自らの信奉する民族自決権をめぐる信条から、民族主義者たちを支援した。リトワニア民族主義者らに対する彼の協力の価値は、リトワニア語文献の発行が 1887 年頃に突如として衰退し、その供給が回復するまでにはかなりな時間を要した、という事実によって秤量できる。1887 年は、ブロニスワフ・ピウスツキが逮捕され、リトワニアの大地から永久追放された年に当たる。

かなり端折って言えば、近代国家のリトワニアは、ビレーヴィチ家の人たちが上梓した最初の書物が端緒で、その後に東プロシャからビレーヴィチ家の領地――当時はブロニスワフが所有していた――を経由して密輸された書籍から姿を現したのだ。ブロニスワフ・ピウスツキの記憶は現在、たとえ尊崇されていないにせよ、リトワニアの全域で少なくとも認知されている、と考えられるかも知れない。そうだ、その日はいずれ来るよ……、と人々は言う。ブロニスワフ・ピウスツキは尊崇されるどころか、リトワニアでは全く無名の人である。彼の名前に言及されることはほとんどない。少数の友好的なリトワニア人から然るべく支援された筆者が 1990 年、ブロニスワフを顕彰すべく、事実にもとづく記事数篇をヴィルノ紙に寄稿できたとき、忘却された英雄を受け容れるべく、関心の水門が開放されることを期待したものの、そのときに開かれたのは、筆者の両の腕(かいな)だけであった。

第一次大戦中のスイスで、ブロニスワフ・ピウスツキはポーランド・リトワニア委員会の委員を務めた。同委員会は相互理解を深めるべく設置されたが、双方がともに「理解」するポーランド語が媒介語を務めたことは特筆に値する。ブロニスワフは鎮静剤の役回りを務めた。彼は対話の進行役に徹し、双方に感情の暴発を許さなかった。にも拘らず、もしブロニスワフ・ピウスツキが今日、リトワニアの旅券を申請したとしても、到底取得できそうにないし、

ヴィルノの当局者は彼の名前の綴りに変更を迫るが如き、詭弁を弄するであろう。リトワニア人の心性が「ピウスツキ」という姓の響きに今なお神経を尖らせるのはなぜだろうか。われわれはただ理解に苦しむのみ。しかるに、われわれはブロニスワフ・ピウスツキを躊躇なくリトワニア人と断言できるか、という設問であれば、「否、この世では断言できない」という回答を承知している。

かくて、謎はいまだ解かれぬままである。近代国家が人民を腑分けするために使用する、明らかに厳し過ぎる基準で秤量するならば、ブロニスワフ・ピウスツキは、己を分類しようとするあらゆる努力をすり抜ける人物だった。人生の一段階ではオーストリア旅券を携えて旅したにも拘らず、ドイツ人ではなかった。彼はリトワニアに生まれたが、己の祖国の地元言語を喋る人々を己と同一視することはなかった。リトワニア人は、彼が改称せぬ限り拒絶するだろうし、私の感触ではポーランドの当局者も、完璧に別セットの原則にもとづくとはいえ、全く同じ願望を以って対処するように思われる。ではロシア人はどうだろうか。ロシア人らは、もし彼が彼らの帽子を被ってくれ、喪失した旅券の複製を彼に再発給でき、「ポーランドの陰謀」を仕組むことをやめさせて、「ヴィドヌィ・ウチョヌィ」にすることができたならば、まさに御の字であろう。遺憾ながら、ロシアが大昔から承知するように、この「陰謀」はポーランドの民族アイデンティティの核心に鎮座し、ポーランド人はそれを「仕組む」ことを決して諦めないであろう。したがって、彼をロシア人として分類したい人々に対する彼の回答は、「雌鶏は鳥にあらず、ポーランドは国境にあらず」というロシアの古い信仰にも拘らず、明確な「否」でなければならぬ。ロシア人の暴君好みと、ポーランド人の自由への憧憬は、和解させることができないのだ。

「温和な」(遺伝子を受け継いだ)ピウスツキ

1882 年から 1885 年にかけて――実年齢では十五才から十九才まで――、ブロニスワフ・ピウスツキは「日記」を書き続けた。この「日記」は、当該時期の彼の家族生活を伝える掛替えのない情報庫である。「日記」の記載は、成長途上の若者の手になる代物だから、世界を見つめる彼の眼差しはほぼ日毎に変化し、記載内容は長さや話題、また思索の深さにおいても著しく変異する。これらの記載は総体として、彼の内面的思索や、彼の家族生活をめぐる紛糾を生々しく描出している。われわれは、彼がヴィルノであまたの親族と持った格別に頻繁な出会いをめぐって討論する際に、この「日記」を既に活用してきた。

「日記」はまた、若きブロニスワフや、彼の身内の者すべてに関する深い知見の頗る豊かな源泉でもあるから、それがなぜ、いまだに公刊されないのか、驚きを禁じえない。なかんずく、「日記」で使用されるのがポーランド語であるのに、それがポーランドにおいてさえ上梓されていないのは、なぜだろうか。筆者は十年前、ポーランドの古都クラクフにおいて、ブロニスワフ・ピウスツキを顕彰する飾り額を除幕するという栄誉に浴した。除幕式に引き続いて開かれた学術セミナーで、「日記」は遅滞なく上梓すべきことを、筆者は当路の人たちへ向けて訴えた。さて十年が過ぎたが、われわれは依然として当局者からの回答を待ち侘びている。今や、次のような議論を提起すべき機は熟した。ポーランドの現状は、ブロニスワフ・ピウスツキを認める覚悟があるのか、それとも、――リトワニア人のように――彼の周囲を盗み足で歩き続けるだけなのか、と。

幸いにもポーランドは、筆者がブロニスワフ・ピウスツキ「日記」の存在を公表すべく働きかけた唯一の国ではなかった。筆者は 1990 年代に、「日記」の全体を収録したマイクロフィルムを、サハリンのブロニスワフ・ピウスツキ遺産研究所宛に送付した。その結果として、「日記」の第一部(1882 年)が筆者の編注も含めてロシア語で公刊された(*Izvestia Instituta nasledia Bronislava Pilsudskogo*, № 3, Yuzhno-Sakhalinsk 1999)。近年には、「日記」からのさらなる抜粋も、ロシア語に翻訳されて上梓された。ロシアは、ブロニスワフ・ピウスツキを己のものとなすべく、強力で不断の努力を重ねているようである。

われわれが上で知ったように、今日の官僚ら

が偏愛するような、粗雑な分類線の上を撫でる表面的分析は、たとえどんなに量を積み上げたとしても、ブロニスワフ・ピウスツキの現実の国籍・階級身分・公民権・政治信条・職業的地位をめぐって、熟議された判断を下すことはできないだろう。彼は、そのような分類に容易に屈するような、やわな男では全くなかった。したがって、範疇化に向けた無益な試みは断念して、彼の現実の人格により肉薄するような、別の視座から彼を眺めてみようではないか。彼の家族状況に格別な注意を向けて、その遺伝子構成の観点から彼を改めて見てみよう。そしてそのような情報は、日記の記載からわけなく入手する――あるいは、恐らく演繹的に推断する――ことが可能である。

われわれが既に暗示したように、ブロニスワフの両親――ユゼフ・ピウスツキとマリア・ビレーヴィチ――は、互いに極めて近い近親者であった。彼らの主要な関係線は、バトラー家の二人姉妹と、両姉妹の母マウゴジャタ・ビレーヴィチによってもたらされた。だが、ユゼフ・ピウスツキの祖母もビレーヴィチ家出身のアンナであったから、話がそこでは完結しない。世界中の大半の社会では、そのような近親者間の、やや近親婚的な配偶関係を強く非難する。ローマ・カトリック教会も、その大半の歴史では同様に非難したが、19 世紀のリトワニアでは、正教会の帝政政府の差し金で反カトリック的財政・経済措置が実施された結果、近親婚すれすれの配偶関係が頗る多発して、ローマの教会当局も[やむなく]それを容認した。そのような配偶関係はカトリック教徒の貴族層へ、ロシア帝政による土地収用に対して一定の法的保護を供与したからである――この一件をめぐっては、拙著 *Price of Conscience*, Saitama 2009 でやや詳しく論じた。

人類が近親交配に対して示す広範な非難の声は、結果として生ずる子孫が正常態からやや逸脱するという、観察可能な事実から帰納されたものである。この普遍的に受け入れられている真理は、今や科学でも検証されている。遺伝学の用語に直すならば、両親間の近親性は彼らの子孫に、幾つかの頗る重要な意味をもたらす。そのような配偶関係がその子供らへ引き継ぐ遺伝子の遺伝子給源(ジーンプール)は、通常よりもはるかに小さくて、より濃縮されているから、「良い」遺伝子組合せもさることながら、「悪い」遺伝子組合せまでも頗る強度に誇張されるようになり、そのいずれかは優性となって、子孫にまで伝達されるわけだ。そしてまさにこれら優性遺伝子組合せこそ、その担い手の生涯に成功ないし失敗をもたらすものにほかならない。「良い」遺伝子組合せを有するのは結構なことながら、通常はその担い手に積極的な効果をもたらさない。例えば、インドで鼠捕獲業カーストの家に生まれ落ちた者にとっては、親の双方から途轍もない美声を授かってもほとんど意味がない。そのような「良い」組合せが、その担い手を歌手として成功させる機会は極めて乏しい。インドでは鼠捕獲者が歌うのを聞きたいと思う人がほとんどいないからだ。しかるに、「悪い」組合せはあまたの悪さをしでかす。例えば片親が聾の遺伝子を持つ場合、その子供らは聾者であることも、また聾ではないこともある。他方で、もし両親がともにそのような遺伝子を持つならば、その子供らは遺伝子の「厳命」によって聾者となるであろう。

両親が互いに近親者同士である家族では、この関係が子供らに及ぼす波及効果が過度に強調される傍らで、われわれはそのような配偶関係が両親自身に与える逆効果を忘れがちである。遺伝子由来の性的魅力(Genetic Sexual Attraction―GSA と略記)の存在は、――幼少時に別々の養親の許に引き取られたが、あまたの歳月が経過したあとで成人として再会を果たした兄弟姉妹に対する観察を通じて――ここ数十年間に見出されたばかりの現象である。その詳細に立ち入ることは避けて、GSA 原理は、例えば近親者に付与されるような、酷似する遺伝子クラスターを有する人々のかなり大きな部分が、相互に膨大な性的魅力を見出し、彼らのしばしば潜在意識的な欲望を抑止するのは、近親相姦タブーの日常的な圧力だけであることを示唆する、と要約しておきたい。タブーが緩い所では、GSA の配偶関係が顕在化する。だが GSA のコインの裏面は、そのような関係を樹立した人たちが、運命の命ずるありとあらゆる状況に対して、単に類似するだけではなくて全く

同一の反応を示すという傾向である。一組の双生児が同一の服を着て、全く同様に話し歌う限りでは、何らの問題も醸さない。しかるに、同じ一組の双生児が危険や不都合な状況に直面したとき、――選択肢のすり合わせや区々な対応の方がはるかにより適切な反応であるにも拘らず――彼らの咄嗟の反応が依然として完全に一致しているとしたら、それは完璧に由々しき事態である。ブロニスワフの両親はそのような配偶者として GSA 症候群に屈し、危険に対する一致した対応で苦しむなど、この現象の両面を露わにしていた。

そこで再び、ブロニスワフの両親のような至近の近親者を親にもつことには褒賞もあるが、それ以上に、支払うべき遺伝的代償もあることを想起すべきだ。頗る粗雑な「成功」の尺度を適用するなら、12 名の子供たちの内でブロニスワフ、ユゼフ、――1930 年代のポーランドで経済相を務め、のちには中央銀行総裁や上院副議長までも歴任した――ヤンは、成功を約束する遺伝子に恵まれた例外的な人たちだったことが判明する。しかし、その他の兄弟姉妹の何人かはさしたる成功も収めず、姉妹の一人と兄弟の一人は、心理学や社会学的な意味の障害を抱え、結果的には頗る惨めで不如意な生涯を送った。別の弟妹二人――双子の末子テオドラとピョトル――は不可解な状況下で、三才を迎える前に死亡した。一見すると「成功を収めた」ように思われる子供たちでさえも、のっけからほとんど乗り越え難い障碍に妨げられて、苦難と緊張に満ちた人生を送った。われわれがここで論じるのは、あらゆる人の運命につきものである幸運の無作為分布ではなくて、例えばブロニスワフに悲惨な人生を招来したような、遺伝子的に強勢化された性格特徴である。例えば、ブロニスワフの生涯を通して顕著に認められる「他の人たちのために良いこと――「良い」が含意することは目まぐるしく変化した――を行う」という度外れた傾向だが、この性格特徴はブロニスワフが父親から受け継いだもので、ひょっとすると、母親の遺伝子によって「強勢化」されたかも知れない。この性格特徴を付与された人たちは、しばしば「背中にプロペラをつけて生まれた」と評される。しかしながら、役に立つことがしたいという(過)衝動には、行動を起こすことが全く不可能のように見える、完璧な無力期が折に触れて差し挟まれる。そのような無気力期は、この気質の本人にとっても、またブロニスワフのアイヌ配偶者チュフサンマや、彼らの二人の子供たちのように、この「善行者」に生計を預けた人たちにとっても、極めて危険なものとなりうるわけだ。このような行動パターンはしばしば遺伝子主導であるから、彼の両親たちも、またブロニスワフ自身も、この「プロペラ気質」やストレスに対する「起伏のある」対応には苦しんだようである。

突発性錯乱状態を示唆する多数の事例が、ブロニスワフ・ピウスツキの「日記」には記載されている。悲しいかな「日記」には、また GSA 症候群(Genetic Sexual Attraction syndrome)の生々しい記載までも幾つか見出されるから、1930 年代に「日記」が上梓されなかった理由の一つは、まさにそれであった。しかし「日記」が執筆されてから百三十余年が経過した今、この途方もなく重要な歴史文書には、一般読者の手が届くように措置さるべき時が、間違いなく到来している。

さてこれからは、ブロニスワフ・ピウスツキの親族で頗る特別なカップル――彼の両親――に注目してみよう。1883 年の春、ブロニスワフの両親は人生の絶頂期にあって、忍び寄る災難を彼らに予告するには、勇敢な占い師が必要だったろう。母親は四十才、田舎に幾つかの領地――総面積は 1 万 5 千㌶を優に超える――を所有し、12 人の子宝にも恵まれて、末子の双子は生後僅か数ヵ月だった。父親は五十才、機智と魅力に富んだ男で、極めて好評な数々の小品の作曲者、しかも高等教育を修めた郷紳で、妻の領地を差配する管理人でもあった。一見して、落ち着いて持続する家族の繁栄の行く手を遮るものは、何もないように思えた。だがまさにそのとき、災難が襲った。

まず第一に、ブロニスワフは、ヴィルノの学校当局が彼の進級を認めるか否かをめぐって、深刻な疑惑を抱き始める。そのような通過証がないと、彼にはギムナジヤでの学業継続も、大学進学も覚束なくなるであろう。(ブロニスワ

フには知らされていなかったが、地元の学校当局はヴィルノに今一つのギムナジヤを設置することを計画していた。彼らはブロニスワフの学校における生徒数削減を望む傍らで、同時にまた、別の学校の教室を補充するための生徒たちも必要としていた。結果的に彼の進級問題が割を食って、新設校の教室の埋め草として、ロシア人生徒よりもむしろポーランド人生徒に目を付けた、教師たちの背中を押したのは明らかである)。

第二に、1883 年の春には、彼の人生に今一つの進展がみられた。彼の女性に対する関心が突如として芽を吹いたからだ。ブロニスワフは、前日街頭で出会ったあれこれの少女の品定めに没頭しだして、その夜は狡猾な計画を以て、路上で覗き見をすることもできた。彼はしばしば、学業にもっと時間を割く必要は認めながらも、彼のロマンチックな関心の方が、常に勝利を収めていた。

第三には、まさにこの時に、彼の家族の全体状況に向けて、突如、逆風が吹きだした。1865 年の皇帝「勅令」が強制導入した反カトリック措置は、現金資金の確保との恒常的な闘争を意味したが、1883 年は、この闘いでピウスツキ家が敗者となることを印す運命の年であった。銀行は彼らにもはや融資しようとせず、また割賦金の一括返済も求めて、彼らは強いられた破産へと追い込まれた。それに並行して、田舎にある領地も、各種の管理人・醸造工場長・借地人・転借地人が経営していたが、両親と 12 人の子供に加えて、およそ 12 名の家内使用人も抱える大所帯の、家計を支えるのに十分な現金を届けて来なくなった。不誠実な管理人らに対するあまたの訴訟案件――請求総額は数千ルーブリにも上った――は係争中だったから、いまだ鐚一文ももたらさなかった。確かに、大荷馬車隊が肉、野菜やその他の農産物を満載して、至近のズーウフ領地から折に触れて到着してはいた。その際は、ブロニスワフの母親が肉を包んだ大型荷物を、さまざまな親族や知人――主治医の家族はいつも最上等の肉を受領していた――らへ発送せねばならなかった。肉は容易に痛みだすからで、当時は冷蔵庫も冷凍庫もなかったことは改めて言うまでもない。これは偶発事であって、物々交換タイプの経済だった。肉は――いまだ潤沢にある間は――現金ではなかったから、銀行に残された彼らの割賦金をこれで返済することはできなかった。

かてて加えて、事がうまく運ばず、――例えば、支払いを滞らせた田舎の借地人の解雇のような――何らかの思い切った決断を下すべき時が来ると、ブロニスワフの母が望むことと、彼の父が賢明と考えることの間に深刻な食違いが現れる。この口論の只中で、彼らの現金資金が完全に枯渇して、ブロニスワフの今後の教育問題は解決されなかった――事態は明らかに、学校の上席管理者へ向けた高額の賄賂を要求していた。要するに、彼らの家族の幸福に関してかなり根底的な、幾つかの論点が集積しつつあって、決断を迫っていた。

それはあたかも、忍び寄る災難は、ブロニスワフの両親たちの所業ではなかったかのようである――とはいえ、彼の「日記」ではその咎を、断固として父親だけに負わせているが……。前にも述べたように、悪評高い「1865 年 12 月 10 日勅令」は、ローマ・カトリック教徒の貴族層に、彼らの相続領地の賃貸ポテンシャルの全面活用を停止させることを狙ったものと解された――一方ではまた、非相続地の所有も彼らには全く許されなかった。実務面では、カトリック教徒の地主たちが時折、「勅令」が意図したような悪魔的論理を通して、金繰りで少なからぬ難題に遭遇することを意味していた。融資はお好み次第、ヴァーチャル・マネーやデリヴァティヴが至る所で取引され、不要な破産を回避する特別策が考案される今日では、家族経営の企業が、その市場価値は負債額の何倍も上回るにも拘らず、現実の資金繰り問題で右往左往するなどとは、想像することさえ困難だ。しかしながら、ローマ・カトリック教徒らが土地を所有した 1884 年のロシアの小さな部分では、資金繰りの行詰まりが、ピウスツキ家の家族企業に「完済か」「破産か」の二者択一を迫ることを意味していた。

ブロニスワフの両親たちが、自らの身に降りかかったさまざまな破局の織りなす、不吉な蜘蛛の巣に対して見せた反応は極めて衝撃的だった。そこそこ若くて、それまでは元気で健康

だった二人が、不可解で強烈な脚痛を同時に訴えだして、その結果、痛みをこらえて署名を済ませるや、ほぼ一昼夜寝台に籠った。ブロニスワフの「日記」は、痛むのがどちらの脚――左か右――か、そしてまた脚のどの部分か、を明記していないにも拘らず、それは極めて驚愕的で悲しい情景を描写している。彼の父と母は立て続けに数ヵ月も、昼夜を分かたず寝台に籠り、見るからに恒常的な脚痛に耐えながらも、使用人や年長の子供ら、そして別々に高々三名の医師にも付き添わせていた。両親の一人は時々、高々三名の介護者に支えられて「薬」浴を行ったが、その際、介護者らは彼ないし彼女を浴槽まで運び、またそこから運び出した。両親は衛生的理由のためですら、ベッドを離れようとせず、彼らがブロニスワフと話すことを希望したときは、彼が枕元まで呼びつけられた。両親が果たして、互いに話を交わしたか否かは、「日記」の記載からは判断が難しいものの、彼らが互いに叫びあったか、あるいは、彼らのそれぞれの寝室を隔てる廊下を越えてメッセンジャーを送ることは、極めてありえたであろう。

診察に当たった医師たちは彼らの病因の見立てで、ほとほと困惑する。医師らは患者の病状に対して妥当な診断が下せなかったからだ。表向きの診断は「神経性疾患」とされたが、つまり病理的原因は何も発見できなかったことを暗黙に容認したに等しかった。「神経性疾患」は、今日の言葉遣いに直すと「神経症」か「心身症」、即ち、専ら患者の心理状態が惹起する身体の疾病と翻訳されよう。最も簡潔に述べるなら、患者の精神が日常生活に耐えられぬような段階にまで立ち至ると、彼ないし彼女の身体は、伏在する「心」の病の発露として、明示的な病理的徴候を発現するわけだ。

換言すると、ブロニスワフの両親たちは、己の前に立ちはだかる難題には解決策のないことを潜在意識で悟るや、「脚痛」を装って悲鳴を上げたのだ。そこで問題は、その悲鳴を聞いた人たち、彼らを取り巻く人々――相互に結びあうピウスツキ・ビレーヴィチ・バトラー一門のメンバーたち――が、自らの遺伝子構成のせいで、ピウスツキ夫妻のものに酷似する方法で、そのような状況に対処した公算が頗る大であることだ。バトラー家の姉妹たちの一人である祖母のテオドラは――マリアやユゼフと同時に――急性失明症を両眼に発症して、数ヵ月間は何も見ることができなかった。この失明は、彼女の息子、即ちブロニスワフの父親が己の謎の病から恢復したのちに、ようやく消失した。

ピウスツキ家の状況は、身体の病を治すのが本務の人たち――ほかならぬ医師たち――によっては、救われるよしもなかった。医業は、何よりもまず診断の手続きにかかわる。ブロニスワフの両親らの疾病の根源的原因を、自らの職業的知見を以てしては突き止められなかった医師らは、それを治療すべき糸口も全く持ち合わせなかった。一人の医師が、患者は何が何でもベッドに留まるべきだと主張すると、別の医師は散歩と新鮮な空気こそ求められる治療だ、と互いに譲らなかった。しかるに数週間が経過すると、彼らは立場を交代して、母親を寝台に縛り付けることを望んだ医師が、今や外出してなるべく歩くよう勧める傍らで、別の医師は己の信念にもとづいて、患者はベッドを全く離れるべきでない、と今度は言いだす始末だった。

この大混乱に紛れてブロニスワフの教育問題は適切に解決されず、彼は原級に留められただけでなく、転校して前年度のコースを再履修せねばならなかった。公正を期すならば、彼の男としての欲望は充足された。彼は、田舎の領地で使用人の少女たちを相手に「それをする」よう母親から助言されたからだ。これらの領地の経営は悲しいかな放置されて、管理人らの胸先三寸に委ねられた。銀行債務の皆済期限が来ても、ブロニスワフの両親たちからは何の反応もないままに過ぎていった。破産処理が必至と思われたとき、ピウスツキ家の田舎の領地に隣接して所領を有する隣人が、銀行と掛け合って新たな条件を設定すべく、わざわざヴィルノまで駆けつけてくれて、それは辛うじて回避されることとなった。ブロニスワフの両親はいずれも、交渉の全経過を通してベッドに籠り通した。

そして 1883 年 9 月 29 日がやって来た。その日、ヴィルノの町は悲しくも痛ましい光景を目撃する。ピウスツキ家の新しい住まいへの引っ越しが進行していた。午前 10 時、ロシア兵の特別班が母親を軍用野戦担架に載せて、町を縦

断しつつあった。担架を手配したのは、彼女の担当医の内で陸軍医療部隊内にポストを有する医師だったが、一年以内には彼女の義理の息子となるであろう。四時間後には、父親の担架が同じルートで運ばれた。ブロニスワフは「日記」に、「父さんは他の人たちの手前、痛みを訴えて溜息を吐き、普段より頻繁に脚を抱えつづけ、母さんも末期的病状ではないことが判った」と記している。ブロニスワフは「奇怪なる引っ越し」騒動に屈辱感を覚えた。

われわれがここに見るのは、極めて目立つ舞台で演じられた遺伝子の近親交配の否定面である。二人の主役を含む三名が、各自の役を演じることを完璧に不可能とするような、同一愁訴を一斉に発現する。出演者の全体にパニックが走る。だがアメリカ人も言うように、ショウ(人生)は続けなければならない。ブロニスワフの両親たちが罹っていた病が何であれ、それが彼らの意思を完璧に麻痺させ、現実との接触をかなり喪失させたことには、全く疑問の余地がない。この疾病は近親婚の結果であるが、両親の危険に対処する生得的遺伝子メカニズムを災難が襲ったとき、父母の双方にはまさに瓜二つの症状が出来し、一旦暴発するや、それは彼らをして同時にベッドカヴァーの中へ潜り込ませ、「脚痛」も発症せしめたのだ。もし彼らが二つの別々の遺伝子給源に由来していたならば、彼らのそれぞれの反応も互いに異なっていたであろうから、結果として、彼らの内の少なくとも一人は十分な闘争心を具えて、家族の不幸を回避することもできたであろう。

町を縦断する忌まわしい引越しから二ヵ月が過ぎた頃、ブロニスワフの父は、ベッドを離れて外出する勇気を見出した。「彼は五分後に戻って来た」と、ブロニスワフの「日記」は記している。結局、父親は再び歩き出したが、母親の病は長引いて、悪化していった。彼女の脚にできた傷口が、痛みを倍加させる。地元医師三名が然るべく診断できなかったため、――ヴィルノから400キロも離れた――遠方のワルシャワから一人の医師がわざわざ招かれる。この招聘に要した費用は500ルーブリで、その額は、ピウスツキ家が1882年にアパートの年次賃貸料として支払った550ルーブリにほぼ匹敵する――今日のロンドンでは同様のアパートの年間賃貸料がおよそ2万1千ポンドで、ヴィルノではその半額だとすると、件の医者の往診費用は、現行通貨で掛値なしの1万5千ドル!と見積もることができる。1883年11月5日、ピウスツキ家の居間において手術が執行された。ワルシャワの専門医――1分当たり[の謝礼]750ドル――が二人の地元医師――それぞれに1分当たり37.5ドル――の介添で執刀し、ブロニスワフの祖母の一人が四本の蠟燭を掲げて手術場を照らす中で、それは20分を要した。ブロニスワフが「ばあちゃん」と呼ぶ六人の女性の内の、誰が蠟燭を掲げたのかは不詳である。照明担当者は、きっとミハウォフスカ「ばあちゃん」――ブロニスワフの母方の祖母――であったろう。一時的に視力を喪失した彼女の姉妹――ピウスツカ「ばあちゃん」(1886年に死去)――は、台所に座り込んで、手術の間中祈り続けていた。

少なくともさらに五人は、居間にいたか、あるいは戸口から手術を見守っていた。これは患部が足であったことを物語る。その当時、足から上の部分は一切が淫らなものと見做されていたから、[もし患部がそこに所在した場合は]何人と雖も手術の「現場」に立ち会うことは許されなかったであろう。手術はとどのつまり、さほど高くつかず、切開が施され、数本の排液管が挿入されると、それで一件落着だった。著名な専門医は明らかに、患者の身体面にはさしたる異状も発見できなかった。痛みの原因は「神経を圧迫する潰瘍が惹起する事実上の関節炎」であると初めて診断した専門医は、翌日、ワルシャワへ戻った。母親の高熱は、術後に間もなく収まるはずだったが、そうはならなかった。彼女の痛みは増し、傷口も腐敗を亢進させて、さらなる高熱と、より頻繁な発熱が続いた。困惑した医師らは、彼女の痛みを除去すべく、一日に強いヴォトカ一瓶を服用させるという妙案に思い至る。母親は賢明にも、処方量の半分だけの服用を受け容れたが、この相当量のアルコールの日常的摂取にも拘らず、痛みは一向に緩和される気配がなかった。旬日を措かず、医師らは、当時にあって痛みを克服する効果が知られていた唯一の薬剤――モルフィネ――の採用に踏み切る。モルフィネは患者の静脈へ直

接に注射されるのだ。ブロニスワフは、ほとんど毎日のように「医者を迎えに」遣られることを、「日記」に記録している。医者を訪ねる際に告げられる理由は無論毎回同じで、痛みの亢進だった。しかしながら、彼の母が実際に求めていたのは、もう一本の注射であって、医師はさらなる薬剤投与のために呼ばれ続けた。モルフィネの現名は「ヘロイン」であり、これまでに製造されたものでは、習慣性と興奮性の最も強い麻薬の一つとして、世界に周知されている。ヘロインの濫用は、すべての常用者の家族関係を破壊することがほとんど避けられず、とどのつまりは常用者本人の身も破滅させる。

1880 年代の医師らが、モルフィネ投与に際する適正措置の設定に関して然るべき知識を欠いていたことは疑問の余地がなく、公正を期するならば、彼らとても適正量の判断をめぐっては、患者の認識と大差がなかった。ブロニスワフの母――早くも 1883 年 3 月にはモルフィネ注射を開始していたことが知られている――は、間もなく完璧な薬物依存状態に陥ったはずである。これは、精神状態の激烈な起伏、現実との頻繁な乖離、間断なく繰り返される薬物への渇望と連動していたに相違ない。この依存状態が運動の欠如や恒常的な寝台暮らしを伴ったことも想起するならば、彼女の健康が釣瓶落としに衰えていったと聞いても格別な驚きはないであろう。結局、彼女は生ける屍となって、新鮮な空気に触れるべく、折に触れては表に連れ出すだけであった。1884 年 7 月 28 日(土)付のブロニスワフの「日記」は、「早い夕食のあとで、僕らは母を庭園に連れて行った。(医師の)主張にも拘らず、母は益々調子を崩し、神経質にもなって寒気を訴えだしたから、五時過ぎには家へ連れて戻った」と記録していた。

1884 年の 9 月初旬、マリア・ピウスツカは永眠する。享年四十一才であった。究極的な死因は自殺だったとする強力な状況証拠が存在する。キリスト教徒にとって自殺は、赦されることのありえぬ重罪である。何とならば、生命を与えるとともに、生命を唯一奪えるという神の最も根源的な権限をそれは否定するからだ。ヴィルノの地元神父はマリアの臨終の床での立会いも、終油儀式の執行も断った。自殺は、カトリック司祭が死にゆく人間への訪問を拒否できる、ほぼ唯一の事例である。もしマリアが自然死を遂げたのであれば、司祭がその臨終の儀式を断ることは、まずありえなかったであろう。マリアの地元教会はヴィルノ大聖堂だったが、自殺者を聖地――地元墓地――に葬ることはできなかったからこそ、ブロニスワフの母の遺骸は、ヴィルノから、田舎にある一家の領地スギンティまで運ばれねばならなかったわけだ。この当時、それは霊柩馬車で二日ほどの旅を意味した。スギンティではマリア・ピウスツカが、一家の礼拝堂の庇護者も兼ねる、荘園領主の肩書を有していたから、地元の神父はそこでの彼女の埋葬を誰も断ることができず、彼女は実際に、ほぼ同じ頃に死んだ己の最末子二人とともに、礼拝堂のすぐ脇に葬られた。

マリアの自殺は、やはり比較的弱齢で世を去った彼女の母ヘレナ・ミハウォフスカの記憶をも甦らせる。ヘレナの生と死にかかわる文書記録は、当面、その存在が知られていない。しかしながら、少なくとも一人の消息筋は、彼女が「結核」で死んだと述べているが、真偽のほどは定かでない。マリアの父親の彼女に対する態度――彼は彼女を見捨てた――や、マリアが母の主要な荘園――8,000 ﾍｸﾀｰﾙを擁するズーウフの領地――を相続した際の経緯をめぐっては、さらなるミステリーも存在する。第二次大戦以前の歴史家たちが記したところによると、この領地は恐らくミハウォフスキ家から受け継いだものとされていたが、実際は全くそうではなかった。19 世紀にあっては、若い人々の死を「結核」に帰することが「流行(はやり)」であった。キリスト教国では自殺がタブー視されて、公に口にすることもできなかったからだ。少なくとも消息筋の一人が、マリアの自死を「臀部結核」に帰せられると語ったことは、注記に値する。われわれが、1883 年 11 月の彼女の脚部手術の状況から判断する限り、手術中に尻――当時は身体で最も淫らな部分だった――が触られることなど、金輪際ありえなかったが……。

もし結核でなかったとすると、マリア・ピウスツカの死は、彼女の麻薬常習に帰せられうるだろうか。そのような説明は過度の単純化であろう。ヘロイン中毒者は概して、己自身の命を

絶つことよりも、周囲の人たちに危害を加える方にむしろ熱心である。彼らの自殺率は必ずしも高くなく、どんな代償を払っても、むしろ生に執着しようとする。もっと適切な説明は、マリアの遺伝子構成に求められるであろう。そのようなアイデアがたとえどれほど非常識であれ、ある種の人々には自殺の素質が具わっているように見えることが知られている。このアイデアを検証するには、糾合したピウスツキ・ビレーヴィチ・バトラー一門の内部に出現する、近親交配の遺伝子的諸特性の話に立ち返らねばならない。マリアの母の死は「結核」の仕業かも知れぬが、また――「ロマンチックな時期」の若い人々の間で今一つの代表的な死因でもある――自殺の結果だった可能性もありうるわけだ。もしそれが事実だとすると、自殺を志向する性向は、母(ヘレナ)とその娘(マリア)の双方の遺伝子構成の中に潜んでいたであろう。さらに言えば、もしマリアが「自殺」遺伝子のキャリアであったとすると、遺伝子的には彼女に近い親族―― uncle-cum-husband［=オヂにして夫、つまり、ブロニスワフの父ユゼフ・ピウスツキを指している］――も、やはりそれを受け継いでいた公算は極めて大であり、この遺伝子が彼らの子や孫たちの間に――顕著に強化された姿で――出現する確率ははるかに増すであろう。これが、近親交配のもたらす「悪しき」副作用の一面である。

鬱状態や精神不安定は、お決まりのように、自殺としばしば手を繋いで人間社会に登場する。これらの遺伝子特性はひょっとすると、同じ遺伝子クラスターの相異なる組合せとして受け継がれるのかも知れない。図１は、マリア・ビレーヴィチとユゼフ・ピウスツキがもうけた子孫たちの間に見出される、自殺や躁鬱傾向の分布を示している。この図はすべての事例を網羅するものではない。多くの子孫らの情報は現在も入手が叶わず、したがって、図１には反映されていない。その他数名の子孫については、入手された情報が不十分で、専門家による推測さえ至難の業である。同図に収録された諸個人は、なかんずく、これら子孫の名が特定できぬよう配慮してある。それゆえ彼らの性別や、その他の個人を特定しうるような諸特徴は伏せてある。同夫妻の子供たちでは 10 名が成年に達したことが知られるにも拘らず、本図に登場するのは、そのうち僅か 7 名に過ぎぬ事実にも留意されたい。マリア、ユゼフ・ピウスツキ夫妻は、子供・孫・曾孫を合わせると、全部で 43 名を有し、そのうち 40 名が成人に達したことが知られている。

図１からは、マリア・ビレーヴィチとユゼフ・ピウスツキの子孫たちが、異常に高い頻度の鬱状態と自殺傾向を示したことが読み取れる。7 系列の出自のすべてに不穏な諸特性が認められ、分析の対象となった 17 名中 14 名は世渡りで深刻な障碍を抱えた一方で、4 名は生存のための闘いを完璧に諦め自死を遂げたことが知られる。(「曾孫 2a」という子孫は、医学的知見の進歩のお蔭で、二度にわたる自殺の試みを辛うじて生き延びた。百年ほど前であれば、これらの試みも未遂に終わることはなかったであろう。なお、筆者はこの情報の公開に関して、関係する人物より完璧な承諾を得ている)。

ブロニスワフ・ピウスツキの人生遍歴を慎重に追跡する方であれば、二十年前の拙稿を記憶

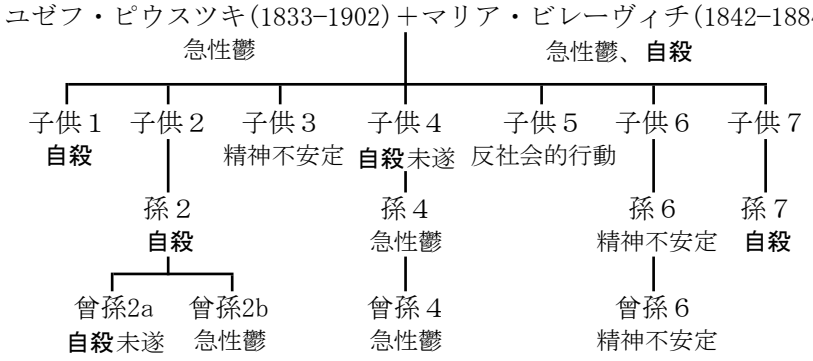


図１　自殺や躁鬱の諸傾向

しておられよう(ヴィトルド・コヴァルスキ「ブロニスワフ・ピウスツキの遍歴――日本出国から自殺まで」『ポロニカ』4：38–53、1993)。そこでは、パリのセーヌ川で 1918 年 5 月に出来したブロニスワフ・ピウスツキの自死の状況を明らかにした。彼をそこまで追い込んだものがまさしく何であったかをめぐっては、あまたの憶測がある。今回、上で試みた家族史の分析は、彼の行動に対して最も正鵠を得た説明を与える。このような死を予めブロニスワフ・ピウスツキのために用意したのは彼の遺伝子構成であって、彼は遺憾ながら、己の定めを遂行したわけだ。ブロニスワフ・ピウスツキの死に様は、およそ三十一年前に彼の母親がたどった道を正確になぞるものだった。彼も「この世と訣別」すべく、医者に注射を依頼し、まさに母親同様に誤診され、また病状も過小評価された。専門家の助けが期待できぬと悟るや、自ら「この世」に別れを告げたのだ。ブロニスワフの遺体がセーヌ川から引き上げられると、彼の友人や賛美者たちはパリの大寺院での盛大な葬儀を企画する。この告別ミサは、彼の死に様をめぐるニュースが教会当局の耳に達するや、取り消された。荘厳な葬儀の代わりに、彼の遺骸はパリ郊外のモンモランシーにあるポーランド人墓地へ運ばれて、かなり簡素な方法で埋葬された。

1991 年、当時の大統領府長官秘書官から筆者に電話が入り、ポーランド国家がブロニスワフ・ピウスツキの遺骸を再埋葬するべく、モンモランシーからワルシャワへ公式に移すことを当方は望むか否かと訊ねられた。私は「その必要は全くない」と答えた。実際に、そのような必要はなかった。ブロニスワフ・ピウスツキはその生涯を通して、己をある特定グループに分類し、他グループはすべて排除するような目論見に一切与することがなかった人物である。彼は自由な精神の持主であり、形式主義には全く囚われずに次々と越境していく小鳥であった。彼はしばしば空きっ腹を抱え、時には旅券も携えぬ永遠の文なしながら、雨が降ろうと雪が降ろうと、着古したスーツと薄めのコートだけの着た切り雀で旅を続け、英国を経てガリツィアに至り、その後はフランスに数ヵ月滞在、さらにベルギーやスイス、そして再びフランスを駆け抜けた。彼はリトワニア人であるとともにポーランド人でもあり、ロシア人であるとともにまたドイツ人でもあり、ヨーロッパ人でも、またアジア人でもあった。ワルシャワはもはや彼にとって、ヴィルノやクラクフやルヴフ、あるいはサハリンのアイ[1]やフランスのパリ以上に、己が夢を託せる国の首都ではなかった。

一言でいえば、ブロニスワフ・ピウスツキは地球人(グローバル・マン)であった。何人であれ、彼の心を乱すがごときことはさせまじ。R.I.P. ――安らかに眠りたまえ。

尽きせぬわが息
墓[2]の子らを充たせ
憂き世の水よ

---

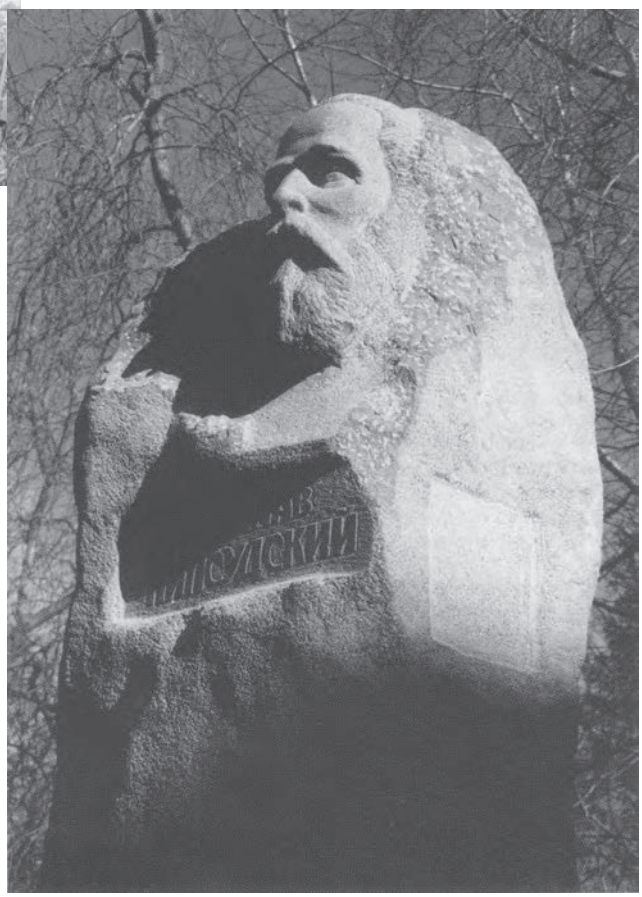
[1] 南樺太東海岸にあるピウスツキ所縁のコタン。

[2] 「墓」はマリア・ピウスツカの実家、ビレーヴィチ家の紋章である。その図柄は、南北方向に設置された墓で、外側の三面に十字架が一個ずつ配されている。

この三行詩を、正則の俳句として邦訳せよとのコヴァルスキ氏の注文ながら、訳者の力不足で字余りとなってしまった。乞、御寛恕――訳者記。

＊ Author & title: W.Kowalski, “The making of a Global Man. Who and what was B.Piłsudski?”





ユジノサハリンスクのブロニスワフ・ピウスツキ記念像

（V.Chebotarev 作、1991 年建立）

写真左上 : K.Sawada and K.Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol.1 (Saitama University, 2010)より、澤田和彦撮影

写真右下：CWBP 1 より、A.F.マイェヴィチ撮影

古蠟管レコード資料からの音声再生*

朝倉 利光

エジソンの発明による蠟管式蓄音機が、前世紀末から今世紀初頭にかけ音声を記録するために使われ、その結果として多くの貴重な録音蠟管レコード資料が残されてきた。現在、この文化遺産としての蠟管レコード資料の保存方法や音声再生技術の確立などが重要課題となっている。ここでは、B.ピウスツキ、北里闌、加計正文が残した録音レコード資料に関係して、録音した3人の人物像、録音蠟管の意義、蠟管レコード、録音蠟管からの音声再生について紹介する。特に、レーザー利用による非接触型の光学式音声再生法について詳細に解説する。

1．まえがき

1991年10月30日から11月2日の4日間、サハリン(旧樺太)のユジノサハリンスク(旧豊原)にあるサハリン州郷土博物館で行われたブロニスワフ・ピウスツキ(Bronisław Piłsudski)生誕125周年国際シンポジウムに出席した。会場となった郷土博物館は、かつての樺太庁博物館で、日本の城を思わせる純日本式建築は日本時代の貴重な名残りであり、日本と関係の深いピウスツキを記念するシンポジウムに最もふさわしい会場であった。シンポジウムの内容は、小生の講演を除いてすべてピウスツキを記念する文化人類学、民族音楽、言語学に関するものであった。小生の講演は、“レーザーを用いたピウスツキ古蠟管からの音声再生”であり、ただ一つの工学的研究の成果であった。シンポジウムの会長V.M.Latyshevが、シンポジウム最後の総括において、小生の講演に対して「シンポジウムにすばらしい花を添えていただいた」と賛辞を述べられた。シンポジウム終了後に、サハリン北部の少数民族への3日間の訪問旅行が計画され、ユジノサハリンスクから北方へ延々15時間の汽車の旅でサハリン鉄道の終着駅ノグリキを訪問した。ノグリキは北緯52度に近いオホーツク沿岸の町で、そこはかつてピウスツキが1時期生活を共にしたニブヒ(ギリヤーク)族が住んでいる所である。そこではニブヒ族から暖かい歓迎を受け、特にピウスツキがかつてニブヒ族に出会い、そこの生活に融け込んでいった過程を演劇にして紹介されたのには非常に感激した。演劇の終了後に、ピウスツキ復活に多大な貢献をしたとして、今回のシンポジゥムを開催した会長であるLatyshevとピウスツキが録音した蠟管からの音声再生を行つたとして小生が表彰を受けた。ポーランドの人類学者ピウスツキは世界でも有数のアイヌ研究者でありながら、その業績と生涯はまだ多くの謎に包まれている。ところが、従来その所在が明らかでなかった彼の樺太流刑時代の録音蠟管がポーランドで発見され、65本が日本での再生・解読を目的に1983年(昭和58年)7月4日にポーランドから北海道大学応用電気研究所に運ばれてきた。

録音蠟管は、約一世紀前の製品であり、かつその保存が悪かったため相当に劣化が進んでおり、情報内容を解析する前に、音声再生に高度の技術的研究が要求された。したがって、工学的音声再生のための研究が続けられ、一応の成果が得られた。音声再生と合わせて、内容の

解析が言語学と民族音楽の立場から行われてきた。一方、この機会を契機にピウスツキの生涯・業績とその周辺の発掘も文化人類学的立場から精力的に行われてきた。このようにして、ピウスツキ録音蠟管に関する研究は、工学、言語学、民族音楽、文化人類学の多方面にわたる学際的協力関係で研究が進行して今日に至った[文献 1-3]。ピウスツキ蠟管の研究が進められていることが報じられたことがきっかけで、録音蠟管約240本が京都の大谷大学図書館で発見された。この蠟管に音声を録音したのは、北里闌(たけし)である。また、広島県山県郡加計町の旧家、加計慎太郎氏の蔵の中に夏目漱石の蠟管のほか4本が見つかった。この蠟管は、加計家の先代にあたる 22 代目の加計正文が録音したものである。

1986年(昭和61年)2月25日に、再生の役割を終えた録音蠟管は、ポーランドに返還されるために北海道大学応用電気研究所を離れ、2 月 28 日に新東京国際空港から航空便で返還された。一方、北里録音蠟管も再生が終了し、2 月 26 日に大谷大学に返還された。しかし、加計録音蠟管に関しては、再生が困難をきわめ、依然として再生作業が続けられている。

以上の録音蠟管3件にまつわる周辺の話題を、特に(1)録音した3人の人物像、(2)録音蠟管の意義、(3)蠟管レコード、(4)録音蠟管からの音声再生の工学的諸問題について、多角的観点から紹介する。

2．録音した3人の人物像

2.1 プロニスワフ・ピウスツキ[文献 1-3]

プロニスワフ・ピウスツキは、ロシア領ヴィリノのポーランド人地主の家に第3子長男として1866年に生まれた。1年後に、後にポーランド独立後、国家元首となった弟ユゼフ・ピウスツキが誕生した。この兄弟はともにペテルブルグ(旧ソ連のレニングラード)大学に進学したが、同じ大学の学生アレクサンドル・ウリヤノフ(レーニンの兄)らのロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺陰謀事件が発覚し、これに連座して 1887 年に逮捕された。元老院で開かれた特別法廷で 15 名全員に絞首刑の判決が下され、アレクサンドル・ウリヤノフら首謀者5名は絞首刑に処せられたが、残るピウスツキ兄弟を含む 10 名は死刑を免れた。そして兄と弟は樺太流刑 15 年と 5 年の刑に処せられた。ピウスツキは、それ以来10年間(刑期は恩赦令で3分の2に減刑)、国事犯として樺太に囚われの身となったが、その環境にもめげずに樺太原住民の社会にわけ入り、とりわけ原住民ニブヒの実地調査を行った。1896年に刑期満了に伴って移住民の資格を取得し、南樺太のコルサコフに開設された測候所に勤務し、それを機会に樺太アイヌに関心をもつようになった。その後ウラジオストークに渡り、そこの博物館に勤務するようになったが、ロシア科学アカデミーの依頼もあってそこから樺太にアイヌ調査研究に出かけた。このとき、アイヌの酋長バフンケの姪と結婚し、1903 年に長男、1905 年に長女をもうけた。問題の蠟管は、この頃にピウスツキが調査費でエジソン式蓄音機と蠟管を購入し、自分の手で録音したものである。

図1は樺太滞在中のピウスツキ、**図2**は樺太原住民と一緒に撮ったピウスツキの写真である。



図1 樺太滞在中のピウスツキ



図2 樺太原住民と一緒に撮ったピウスツキ
(座っている左側の人、右側はロシア人)

日露戦争がおこると、ポーランド社会党の指導者となった弟ユゼフ・ピウスツキは日本の援助を求めて東京にやってきたが、それに成功することなく。去って行った。しかし、このことを兄ピウスツキは知らないままに、1905 年に函館にやってきて、東京、神戸、長崎と駆けめぐり、1906 年に日本を離れてポーランドに帰った。この間、彼は文学者の二葉亭四迷、横山源之助、アイヌ学者の鳥居竜蔵、坪井正五郎、神保小虎、村尾元長、政治家の大隈重信、山縣有朋、島田三郎、そして日本の社会主義者らと多岐にわたる親交を結んだ。ピウスツキは、特にアイヌ救済を熱心に訴えて歩いた。彼はアイヌ原住民とその文化の理解者であり、保護者であり、アイヌ民族への愛情に燃えていた。

1906 年にポーランドに帰ったピウスツキは、学歴不足から研究職にもつけず、学位取得のためフランスとスイスに留学したが、いずれも資金不足で挫折してしまった。しかし、1911 年から 1914 年にかけて博物館や科学アカデミーに就職ができて研究生活が始まりかけたが、第一次大戦の戦雲に追いやられて再び流浪の旅に押しやられた。そしてスイスからフランスと渡り歩き、1917 年末頃にパリに流れついたが、1918 年 5 月 21 日セーヌ河のミラボー橋のふもとで水死体として発見された。死亡については、パリ警察の検視で自殺と断定されているが、その真相はいまなお明らかでない。遺体は、パリ北方のモンモラシーにあるポーランド人墓地に眠っている。

2.2 北里闌

北里闌は、破傷風の血清療法の発見者として世界的に有名な医学者、北里柴三郎のいとこにあたる。北里は、1871 年(明治 3 年)に熊本県に生まれ、東京大学文学部を卒業後、若き日約 5 年間をドイツ留学ですごし、大阪医大(現阪大医学部)で長くドイツ語教授を務めた。ドイツ語教授のかたわら、日本語の起源研究に没頭した在野の言語学者でもある。1929 年(昭和 4 年)から 1931 年にかけて日本語のルーツを求めて、南はボルネオ、フィリピンから北は北海道、樺太まで研究旅行をし、各地の民謡や方言をエジソン式蓄音機を使って蠟管に録音した。北里は、「日本語の起源は、アイヌ語と朝鮮語、それに南洋語の混じったもの」という学説を主張し、それを証明するため各地の言語を収録した。これらをもとに、「日本語源研究の道程」「日本語の根本的研究」「日本古代語音組織考」などを著した。1960 年(昭和 35 年)死去。

2.3 加計正文

夏目漱石の録音による蠟管は、広島県山県郡加計町の旧家、加計慎太郎氏の蔵の中にあった。この蠟管は、加計家の先代にあたる 22 代目の加計正文(1881 年(明治 14 年)～1969 年(昭和 44 年))が、1905 年(明治 38 年)10 月 27 日に漱石に依頼して録音したものである。正文は、東大文学部英文科に進んだが、林業や鉱山で栄えていた加計家を継ぐため、東大を中退し同町に帰っていた。しかし、東大時代の恩師夏目漱石を懐かしみ、彼に依頼して許可を得たのち、上京して録音したものである。蔵から出された蠟管は、特注の桐と紙ケースに丁寧に納められ、蓄音機とともに保存されてあった。漱石の蠟管のほかに 4 本あり、うち 1 本は正文の親友で、かつ漱石門下の児童文学者、鈴木三重吉が録音した「潮来節外」で、残り 3 本は内容が不明である。桐箱には、蠟管のほかに漱石、三重吉の書簡がたくさん残されており、正文が彼らと交友が深かったことをうかがわせた。**図 3** は、蠟管とそのケースである。

正文は加計町に録音蠟管をもち帰ったあと、漱石を懐かしみながら時々聞いていた。しかし、次第に蠟管が針でいたみ、だんだんに聞きにくくなり、1919 年(大正 8 年)に聞いたのを最後に蔵の奥深く納めてしまった。その後、鈴木三重吉や小宮豊隆(漱石門下の文学者)の要請で何回か蔵から出して蓄音機にかけてみたが、すでに漱石の声を聞くことができずに、再び蔵の中

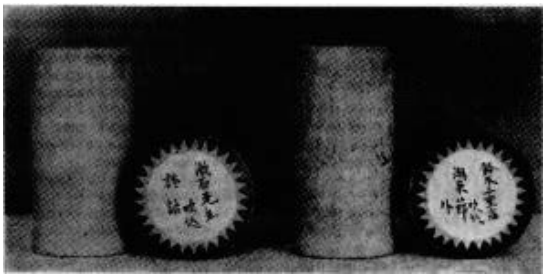


図 3 夏目漱石と鈴木三重吉の録音した蠟管(白色に変質している)とケース

に入れられて現在に至っている。蠟管は加計地方の特有な湿潤な気候と蔵特有の環境により、白いかび状のものでおおわれて劣化が進んでおり、かつ摩耗により音溝がほとんど消えており、音声再生の見通しは非常に暗い。

3．録音蠟管の意義

3.1 ピウスツキ蠟管(文献 2)

ピウスツキは世界でも有数のアイヌ研究者であるが、余りにも波乱に富んだ生涯であったためか、その生涯と業績にはまだ謎に包まれている部分が多い。彼は 1896 年から 1905 年の間、樺太にあって原住民であるアイヌの中で長期間にわたって生活し、アイヌ語に精通できたただ一人の研究者であり、南樺太全域のアイヌ言語の資料を多く残した。さらに口承文学の採集と、それへの具体的、客観的考察を行い、これらはアイヌ語研究史において輝かしい業績となっている。

ピウスツキの仕事でひときわ異彩を放つものに、蠟管蓄音機による樺太アイヌ語の音声収録がある。言葉はいかに詳細に記載されていても、時間とともにそれから音声を再現することは難しくなる。したがって、現代では人類学者の必要な仕事に音声をテープレコーダーに収録することがある。この仕事の先駆的なことを、ピウスツキは当時の新製品である蓄音機と蠟管で行っていたわけである。彼の音声収録は、アイヌロ承文学の諸文学様式を明らかにする上で貴重な資料である。さらに、蠟管には祭り歌、恋慕歌、舟歌、酒謡、神謡など民族音楽が多く含まれておりアイヌ音楽の貴重な資料でもある。また、蠟管にはハウキやオイナといった各種の神話や伝説が多く収録されている。これらはアイヌ文化の具体的要素を豊富に含むもので、文化人類学上から貴重な資料である。

以上のように、ピウスツキ録音蠟管は言語学、民族音楽、文化人類学において極めて貴重な資料であり、その解明はそれらにおいて重要な意義をもっている。しかし、長期にわたって放置されて劣化してきた蠟管からの音声再生には、工学的再生の技術的研究が重要であり、それなくして前記の学術的研究への出発ともなり得ない。本再生研究を通して得られてきた工学的再生法の確立は、世界に放置されている多くの劣化した古蠟管からの再生に利用することができる。すなわち、音声再生方法の確立は、埋もれた貴重な文化遺産である未再生の古蠟管からの情報収集の可能性を開くものである。

3.2 北里蠟管と加計蠟管

北里蠟管には、アイヌ語、八雲方言、秋田方言、熊本方言などの日本語の各方言、台湾の高砂族の言語、フィリピン諸島のサマール、タガログ、ブラカン、バゴボなどの諸方言が生々しい音声で収録されている。日本語の方言の場合は、まだラジオなどで標準語が全国に流れなかった時代の“原方言”の発掘に重要なデータを提供している。アイヌ語や台湾の高砂族の言語、フィリピンの諸言語は、いずれも類例のない貴重な音声資料である。

加計蠟管に含まれる夏目漱石や鈴木三重吉の音声は、もし再生が成功した場合には、日本の偉大な文豪の肉声として文学書以外からの資料となり、社会的に貴重な資料となるであろう。

4．蠟管レコード(文献 4)

1900 年前後に使用されたレコードは円筒と円盤の 2 種類があった。円筒式はエジソンが 1877 年に錫箔蓄音機として発明したのが最初で、蠟管式に改良して実用化された。**図 4** は、エジソン式蓄音機の一つである。



図 4 蠟管式蓄音機(エジソンスタンダード A)

一方の円盤はドイツ人ベルリーナが 1887 年に考察したもので、現在のレコードの原形であ

る。この 2 方式は形状ばかりでなく音声の記録方式も異なっていて、円筒の場合は音溝の垂直方向の変化が、円盤では左右の変位が音声信号に対応している。

標準的な蠟管は直径 55mm、長さ 105mm の円筒に、254μm ピッチで音溝がねじ状に刻まれている。したがって、一本の蠟管には約 400 本の音溝があり、約 2 分の録音ができる。**図 5** は、保存状態のよかったピウスツキ蠟管のケースと蠟管である。**図 6** に、エジソン式蓄音機による蠟管への音声録音の過程を示す。

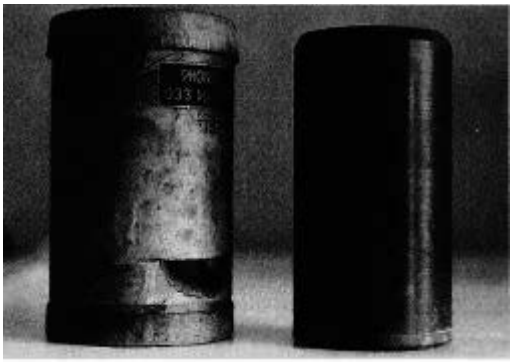


図 5 ピウスツキ録音蠟管のケース(左)と蠟管(右)

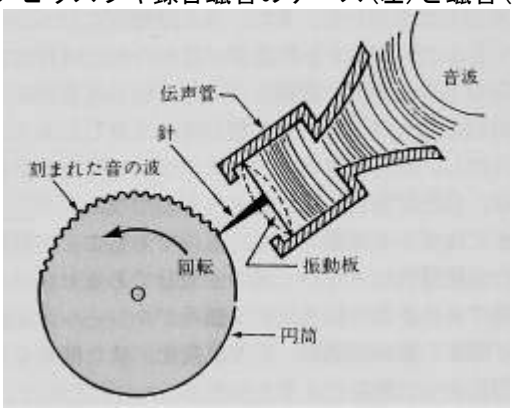


図 6 エジソン式蓄音機による録音過程

当時は音声直接方式の録音時代で、録音時はホーンに顔を近づけて発音させたり、ホーンの代りにチューブを接続して口にあてて発声させた。また、スタイラス(針)の代りにカッターを用いて蠟管の表面を削り取るようにして音溝を刻んでいた。したがって、音圧の強度に対応して溝の深さが変化しているが、音響エネルギーだけで溝を刻むため、その深さは最大で 50μm 程度である。ただし、ピウスツキ録音蠟管は録音技術が未熟であったためか、深くても 10μm 程度である。

4.1 物理化学特性

蠟管レコードは、赤外線スペクトログラムによる分析結果から、ブラジル産のヤシ(Corypha Cerifera)の葉から採取したカルナバ蠟(Carnauba wax)を主成分とするものであることが判明した。カルナバ蠟の原材料は黄緑色や褐色のものであるが、ヤシの種類および精製方法によって幾つかにさらにわかれる。いずれも約 90%が脂肪酸であり、ほかに炭水化物、高級アルコールなどが含まれている。

カルナバ蠟は天然蠟中で最も固く、磨くと光沢があり、83～86℃の高融点を示す。融点に達した蠟が自然凝固(凝固点 72～82℃)した場合、その表面は他の蠟に比べて、均一で細かく削工研磨の効率もよいことから、蠟管レコードの素材として適当であった。しかし、40℃以上で硬度が急激に低下し、各種溶剤に溶けやすくなる。他の蠟と同様に温度変化による膨張収縮率が大きいため、部分的に加熱あるいは冷却した場合には亀裂が生じやすい欠点がある。

ピウスツキの蠟管は、黄茶色、焦茶色、黒焦茶色、黒色の 4 種でエジソンフォノグラフ社とコロンビヤフォノグラフ社のものである。それらはカルナバ蠟だけでできているわけでなく、カルナバ蠟のよい性質を残し不適当な点については増量剤や安定剤を混入して改良している。特に、黒色系のものはモンタン蠟(カッ炭より抽出した鉱物性蠟)を加えていた可能性がある。蠟管レコードの機能を十分に発揮させるため各企業独自の成分、製法を極秘に試みていたと考えられる。

4.2 保存状態と修復

ピウスツキ蠟管や加計蠟管は保存状態が非常に悪く、ほぼすべての蠟管に白色変質物が認められる。**図 7** に示すように、それらが粉化し薄く白っぽくなっているもの、白く濃く大小の斑点のあるものが多く、情報再生時の雑音の最大の原因となっている。また、多くの蠟管にひっかき、擦れ、圧着などに原因する表面傷が認められ、10 数本は大きな亀裂があり、複数に破損している。

白色変質物については、肉眼ではカビなどの微生物によって生じたものにみえる。しかし、赤外線吸収スペクトログラムによる分析結果からは、白色変質物はカビによるものでなく、

カルナバ蠟の成分にわずかな変質が生じたものであることが推測される。白色変質物はカルナバ蠟の主成分であるセロチン酸や混合物である少量の炭水化物、蠟系アルコール、高級脂肪酸など経年の紫外線照射、温湿度変化、また酸化などの分解作用によって生じたと考えられる。

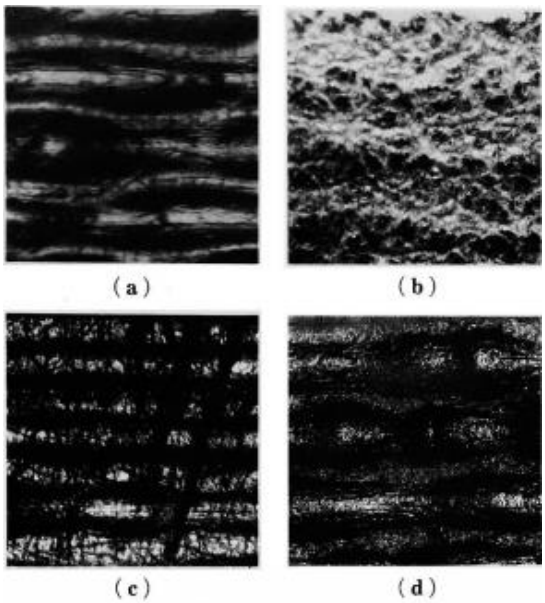


図 7　蠟管の音溝の拡大写真:(a)保存状態のよいもの、(b)白色変質物で覆われているもの、(c)大きな傷のあるもの、(d)レプリカの表面

いずれにしても、再生にあたって修復が必要となった。カルナバ蠟は 40℃以上で各種溶剤に溶け、常温でも反応しやすく化学溶剤で洗浄除去することは蠟管本体に危険であり、またこの白色変質物は水に不溶である。この白色変質物は、変質脂肪酸や経年に耐えにくい蠟管の混合物である炭水化物、樹脂水分などの混合物であるという推測によって、これらの分解除去をごく自然に安全に行うことを目的に消化酵素の使用を考えた。これには大根に含まれるアミラーゼ(ジャスターゼ)の効力を活用することにした。アミラーゼは pH5.2～5.8、60～65℃の時に最も活性が強いが、蠟管のカルナバ蠟は温度変化による膨張収縮率が大きく亀裂のあるものなどに危険であるので常温処理を行った。この処理の効果として、特に表面の黄変した油脂と白色変質物を 30%近く減少させることができた。

複数に破損しているものは、蠟管内型の芯棒の上でシアノアクリレート系の接着剤を用いて接合組み立てた。**図 8** は、ピウスツキ蠟管の複数個に破損した蠟管の修復前後の写真である。これに使用する接着剤の強度は、蠟管の力学的強度と同質であることが望ましい。欠損や幅の広い亀裂をもつものは、触針式による再生の際に、触針先が 250μm と極小であり、内部に落ち込み停止する問題が生じるため充填塑型にすることにした。それには低融点、強接着力の可塑材が理想であるため、充填剤を特に用意した。

さらに半永久的に蠟管を保存するための措置として、つぎに述べるエポキシ樹脂によるレプリカの作成を行った。

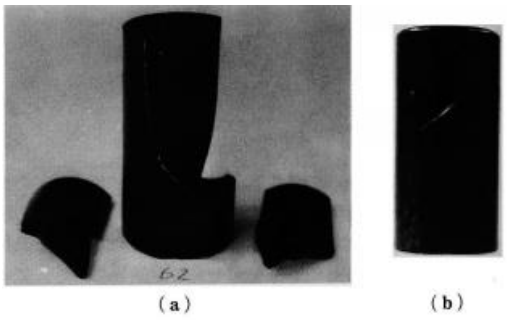


図 8 ピウスツキ蠟管の修復前後の写真:
(a)修復前、(b)修復後

4.3 レプリカの作製

レプリカ(複製)の製作では、歯科治療における義歯作製の技術を応用した。**図 9(a)** に示したように、まず母型を作るためにアクリルパイプ(直径 10cm)で作った型取り外枠の中心に蠟管を固定し、歯科材料で用いられる印象剤を流し込んだ。印象剤としては、収縮が少ない、寸法精度が高い、流動性がよいなどの理由から付加重合型ビニールシリコン(GC 社 EXAFLEX F)を利用し、蠟管の溝に密着させるために、印象剤を塗布してから圧縮空気を吹きつけた。また、印象剤を注入するときは、気泡除去のためバイブレータで振動を加えた。約 6 分で硬化した後、外枠をはずしシリコンを外側に広げながら蠟管を抜き取った。つぎに、電子顕微鏡の試料作製に利用されるエポキシ樹脂包埋剤(Taab 社、Spurr Resin)をスターラで十分撹はんし、真空装置で溶液中の気泡を除去してから、図 9(b) に示すように母型に注入した。恒温槽に入れ 60℃のもとで、36 時間かけて硬化させた。図 7(d)のレプリカの顕微鏡写真からわかるように、1μm

程度の精度が得られており、エジソン式蠟管再生機で再生しても原蠟管音声と変わらない音色が得られていることが確認できた。

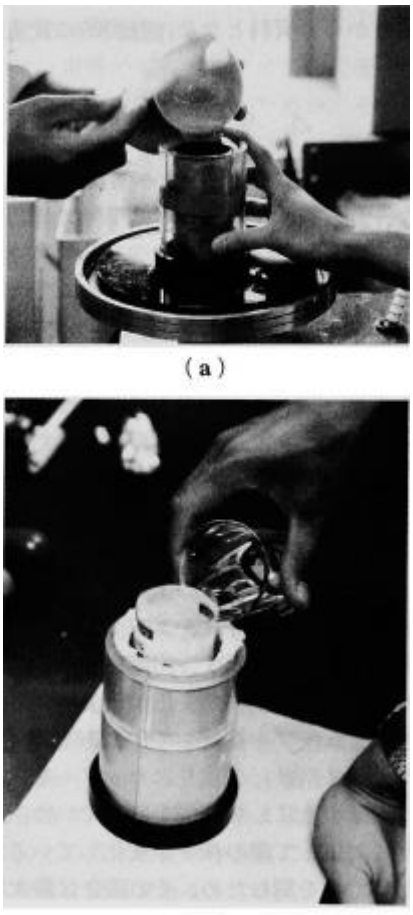


図 9 レプリカの作製順序:(a)シリコンの流し込み、(b)エポキシ樹脂の流し込み

5．録音蠟管からの音声再生

5.1 従来の蠟管蓄音機(文献 5、6)

蠟管蓄音機はエジソンフォノグラフ社(Edison Phonograph)、コロンビヤフォノグラフ社(Columbia Phonograph)などで販売されていたが、その中でも 1900～1905 年にはエジソン社のホームフォノグラフモデル A (Home Phonograph Model A)、スタンダードフォノグラフモデル A (Standard Phonograph Model A)などが普及していた。録音機はいずれも、図 4、6 に示したように、蠟管を一定速度で回転させながら回転に同期してスタイラス(針)を直線移動させるようになっている。動力としてはゼンマイを利用しており、回転速度を一定に保つように機械式のガバナを備えていた。回転速度は、1902 年までは 144rpm で、それ以後は 160rpm である。

スタイラスは、曲率半径 8mil の円形が多く、再生用としてはサファイアが、録音時のカッター用としてダイヤモンドなどが利用されていた。スタイラスは金属棒の先端に固定されているが、先端が比較的自由に上下左右に動くため、蠟管に偏心があったり音溝が蛇行していても十分に追従していける。金属棒の他端は針金でダイヤフラムの中心に接続しており、スタイラスから伝達された機械振動が音響振動に変換される。ダイヤフラムは初期の頃は動物の皮、セルロイドなどで作られていたが、薄いマイカや銅板も多く利用されていた。

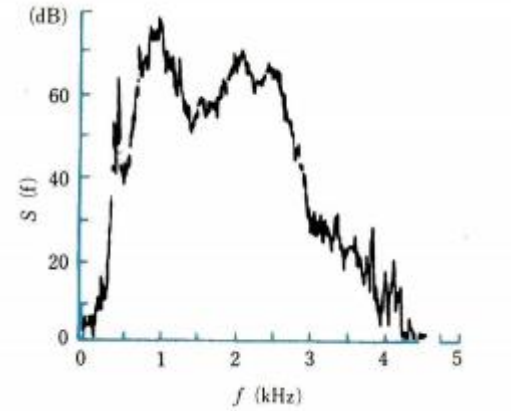


図 10 蠟管蓄音機による再生音の長時間周波数スペクトル

蠟管に段落をつけて再生した衝撃音により再生系の周波数特性を求めた結果、低域は 100Hz 以下で高域は約 3.5kHz であることがわかった。しかし、ピウスツキ録音蠟管をエジソン式再生機スタンダード A(図 4)で再生し、その長時間周波数スペクトルを求めてみると、**図 10** で示すごとくスペクトルの現れている範囲が 500Hz～3.5kHz と狭くなっている。これは録音系やホーンの周波数特性も大きく反映したためと考えられる。

当時の再生機の針圧は約 20g と大きく、その上に回転数が 160rpm と高速のため、回転時に針先端に加わる加速度は数 100m/s^2 前後に達すると考えられる。したがって、亀裂や欠落のある部分では、蠟管をいためてしまう危険性がある。そのため、蠟管を直接利用する場合には、音声信号検出として非接触のものを使用するか、接触式のときでも針圧の非常に小さいものを選択する必要がある。蠟管蓄音機の特徴の一つは手軽に録音できたことである。エジソンの

機械は針の変換だけで録音機として使える点から、単なる音声再生装置としてではなく、現在のテープレコーダーのように使われることも多かったようである。ピウスツキ、北里、加計らの目的には、このことが適当な道具となったと考えられる。

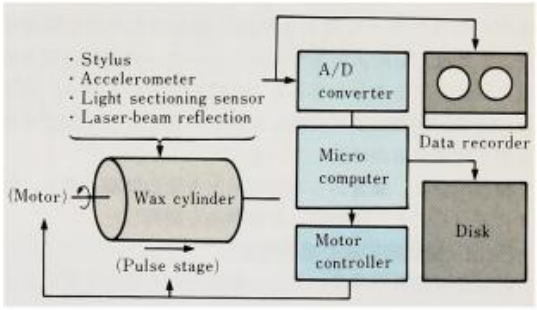


図 11 開発した再生系のブロックダイアグラム

5.2 音声再生システム

私達が開発した蠟管再生システムは、**図 11** に示すように駆動部、検出部、データレコーダーおよびマイクロコンピューターからなっている。検出された信号はアンプ、フィルターを通った後にデータレコーダーに記録されるとともに、A/D コンバーター(12bit、10kHz)を介してフロッピーディスクに格納される。駆動装置は 1 回転につき音溝 1 本分だけ蠟管が移動するようになっており、検出部を固定したまま信号を検出できるようになっている。低速駆動用として、直径 5cm のポリカーボネート棒に 254μm ピッチでネジを切った蠟管固定棒を作り、それをリールとワイヤーを介してステップモーターと結合し、ゆっくり回転させる方式を開発した。また、高速駆動用として蠟管をパルスモーターで回転させながら水平パルスステージにより直接移動させる方式を開発した。これは、駆動用の 2 つのパルスモーターの回転速度を独立に変化させることができるようになっているため、コンピューター制御により音溝にセンサーをトラッキングさせながら計測するのに適している。

検出部では、蠟管からの信号検出を変位計測と考え、以下に述べるごとく接触法と非接触法を開発した。

5.3 接触法による音声再生[文献 7]

接触法は触針を音溝にそって触れながら変位を測定する方法で、検出部分には(i)表面粗さ計測用のセンサーと(ii)音響振動計測用のセンサーを使用した。前者は変位電圧変換部が差動トランスでできており、触針の変位を 0.02μm の感度で測定することができる。また、針圧は最小 0.07g と小さくとることができるので、直径 10μm 程度の触針を用いても、表面を傷付けることなく信号検出ができた。ただし、帯域が DC～50Hz と狭くなっているため、再生時の回転速度を本来の 1/100 以下に抑える必要があり、2 分間の再生に 4～8 時間を要した。後者は周波数帯域が広いため実時間再生が可能であるが、回転速度を速くすると触針部と蠟管との間に摩擦音が生じそれが強大な雑音になる。触圧を大きくすると摩擦音は小さくなるが、こんどは蠟管表面を傷つけるおそれがある。いずれにしても触針法の場合は、触針と蠟管の接触部をどうするかが最も重要な問題となる。

まず表面粗さ計測用センサーを用いた場合の再生音について述べてみよう。エジソン式蠟管録音機で利用されていたスタイラスは、その先端部の直径が約 200μm の球状あるいはだ円形のものであり、音溝の形状はこの針形がそのまま反映したものである。したがって、原音をできるだけ忠実に再生するためには、この形状を考慮する必要がある。一方、音溝の深さを正確に計測するには、針径をできるだけ小さくして溝の谷部の一番深いところに針を設置しなければならない。しかし、あまり針径を小さくすると蠟管表面の細かな傷や析出物を検出してしまい、溝の谷部を正確になぞるための制御機構が必要になってしまう。逆に、針径を大きくすると表面の細かな凹凸に応答しずらくなるのでそれだけ雑音は少なくなることになるが、周波数特性が低下する恐れがある。ここでは、いろいろな針径をもつ触針により再生を試み、針径の差異が再生音の音色にどのように反映するかを調べた。

図 12(a)、(b)、(c)に示したように、針の先端の形状をエジソン式と同様に半球形とし、針径が(a)10μm、(b)250μm、(c)800μm の 3 種類について再生し、その信号波形とスペクトルを比較した。なお、針圧はいずれも 0.07g、回転速度は 1.25rpm とした。

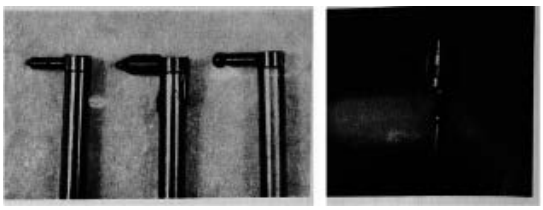


図 12 触針法で用いた種々のスタイラス(針):
(a)10μm, (b)250μm, (c)800μm, (d)300μm
(加速度センサーにボールペンを接着したもの)

その結果、**図 13** に示すように、針径によって波形が大きく変化し、聴取実験からも音色の差が大きいことがわかった。ただし、図 13 は /rekuxkara/と聴取される再生音声について示したものであり、図中の(d)はエジソン式再生機で再生したものである。明瞭性は(b)、(a)、(d)、(c)の順に高く、それぞれ雑音の音色も著しく異なった。また、スペクトルを比較すると、(a)では高域に雑音成分が集中しており、逆に(c)では低域に多い。エジソン式の場合、ちょうどバンドパスフィルターを通過したような特性を示しているが、これはダイヤフラムやホーンの特性が反映したためである。いずれにしても、エジソン式のピックアップに最も近い 250μm の径のものが優れており、しかもエジソン式よりも広帯域の信号を捕らえていることなどがわかる。

つぎに、実時間計測を目的に音響振動センサーを利用する方法で得られる再生音を調べてみよう。

センサーとしては加速度型振動ピックアップ(B&K 社、8307、1Hz～25kHz)を用い、その出力を積分器(B&K 社、ZR0020、10Hz～10kHz)を通して速度になおしてから、インパルス精密騒音計(B&K 社、2209)により増幅した。前述のように、高速にすると触針と蠟管表面の間で摩擦音が生じてしまうので、ここでは図 12(d)に示すように、触針部にボールペンの先を接着する方法を考案した。このボールは直径約 300μm であり、蠟管表面との適合性もよく、しかもボールが回転するために摩擦音が生じにくいという利点がある。

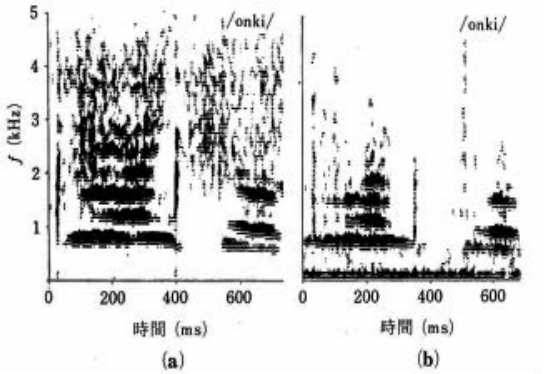


図 14 再生音の時間スペクトルパターン:(a)加速度センサーによる、(b)レーザービーム反射法による再生

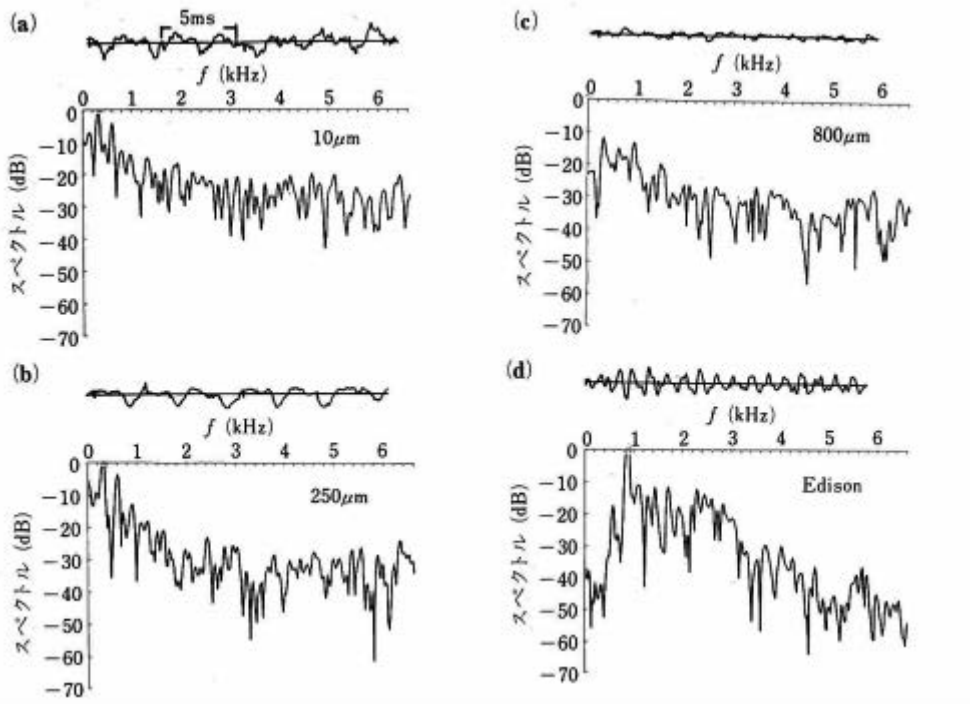


図 13 針径による再生音スペクトルの相違
(a)10μm, (b)250μm, (c)800μm, (d)エジソンスタンダード A による再生音

図 14(a)は、本方式により実時間再生した例であるが、作動トランスによる結果と比べてほとんど変わらないか、あるいはそれ以上の音質が得られることがわかった。ただし、実時間処理なので大きな傷があったり破損している蠟管には使用できない。

5.4 非接触法による音声再生(文献 8)

ひびやや破損のない蠟管に対しては前述の触針法による音声再生が可能であるが、そうでない場合には触針法による再生ができない。しかし、ひびや破損している蠟管や図 8 に示したような修復した蠟管にも貴重な音声が収録されており、それらからの音声再生が期待される。そこで、これらの蠟管から音声を検出する強力な手段として、光を用いる非接触検出法を開発した。

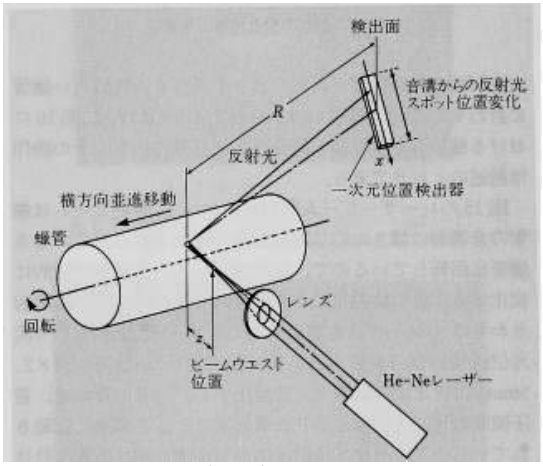


図 15 レーザービーム反射法の原理

まず最初に検討した方法は、表面粗さ計測用の光切断法の応用である。これは光切断用の特殊顕微鏡(ニコン製 Surface Finish Microscope 精度 2μm)を用いて、10μm の幅をもつ白色スリット光を蠟管の面に対して 45° の斜め方向から照射し、スリット光に対して 90° の方向からその反射光をとらえる方法である。音溝の山谷に対応して蠟管面に投影されたスリット光にも山谷が生じるが、この山と谷の差が音溝の深さに比例した値になる。この画像を顕微鏡に取り付けた固体カメラでとらえ、インタフェースを介してコンピューターに取り込んだ。しかし、実際に得られた画像は、蠟管表面の凹凸により乱反射が生じてしまい、得られたスリット反射光もとぎれとぎれになり、山谷を示す明僚な線像にはならなかった。したがって、とぎれとぎれになった線を接続するような画像処理を行った後に、山谷の差を算出する処理を行った。しかし、実際には画像処理に莫大な時間を要したので光切断法の応用は断念し、光切断法のスリット光に代わってレーザービームを蠟管に照射し、その反射光を位置検出センサーで実時間計測する方法を考察した。**図 15** に、レーザービーム反射法による蠟管からの光学式音声再生の原理を示す。



図 16 レーザービーム照射系

図 16 は、図 15 に対応するレーザービーム照射系の実際の装置である。HeNe レーザー光源からの光ビームを顕微鏡用対物レンズを通したのち、回転しながら光軸に垂直な方向に並進移動する蠟管に照射する。レーザービーム照射点におけるスポット直径は、対物レンズを光軸に沿って移動させ照射ビームのウエスト位置と蠟管表面に刻まれた音溝の幅 254μm に対して適当に調節する。

表 1 距離 *z* の変化に対する照射ビーム直径の変化

z (mm)	照射ビーム直径 (μm)	*z* (mm)	照射ビーム直径 (μm)
0	30	8	215
1	40	9	241
2	61	10	267
3	85	11	294
4	110	12	320
5	136	13	347
6	162	14	373
7	188	15	400

表 1 に、距離 *z* を変化させたときの蠟管表面におけるスポット直径の変化を示す。触針法では構造上から針の直径を自由に変えることが困難であるが、レーザービーム反射法では照射ビームのスポット直径を再生したい蠟管に合わせて適切に調節することができる。

図 17 は、図 16 における蠟管の駆動装置の部分の平面写真であり、その動作は前述のとおりである。

図 15 のレーザービーム照射点において、照射ビームは蠟管の音溝面の傾きに応じた反射角で反射される。このとき蠟管は回転している

ので、反射光ビームの方向が時間的に変化する。この反射光ビームの方向をレーザービーム照射点から R=30mm の距離に光軸と垂直に配置された一次元位置検出器(浜松ホトニクス製 PSD S-1352 34x2.5mm)の検出面の位置として検出する。蠟管の音声は、音圧強度の時間変化に対応する溝の深さとして音溝に記録されているので、一次元位置検出器で検出された位置信号は音溝面の傾きの時間的変化であるため音声信号となる。

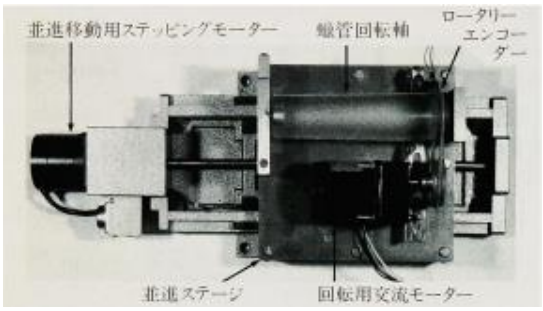


図 17 蠟管の駆動装置の平面図

図 18 は、一次元位置検出器を用いた光スポットの入射位置検出回路の概略図である。反射光スポットが一次元位置検出器の電極 1 から距離 X の点に入射するとき、電極 1 と電極 2 から取り出される電流 I_{x1} と I_{X2} は

$I_{X1}=Ix/L$

$I_{X2}=I(L-x)/L$

で表される。ここで L は一次元位置検出器の抵抗層の長さを表し、I は入射光エネルギーで生成される全光電流を表す。電流 I_{x1} と I_{X2} の差と和の比を求めると

$$I_v=\frac{I_{X1}-I_{X2}}{I_{X1}+I_{X2}}=\frac{2}{L}x-1$$

となり、入射光エネルギーに関係なく、反射光スポットの入射位置 x に比例した電流が得られる。

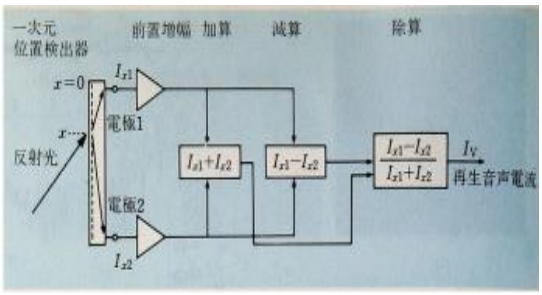


図 18 一次元位置検出器を用いた光スポットの入射位置検出回路

つぎに、上記の光学式音声再生法によって得られた音声情報について検討してみよう。

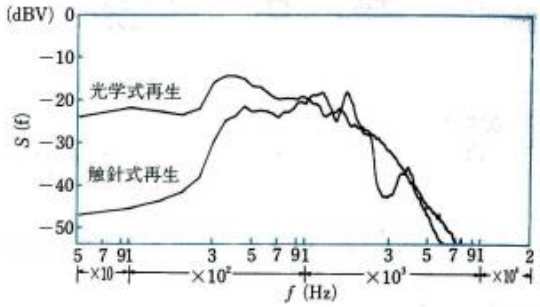


図 19 光学式再生法と触針式再生法による再生音声の長時間周波数スペクトル

(a)再生音声

図 19 には、光学式再生法と触針式再生法による再生音声の長時間周波数スペクトルの比較を示す。この場合の光学式再生法では、レーザービームのウエスト位置から蠟管表面の照射点までの距離を z=3mm に設定した。このとき、照射ビーム直径は 85μm となる。一方、触針式再生法では、直径 300μm のインクを抜いたボールペンの先を針として使用した(図 12(d)を参照)。触針式再生法による蠟管からの再生音声を基準にして考えると、蠟管の音溝には 300～4000Hz の周波数帯域にわたる音声情報が記録されている。

これと比較して、光学式再生法では 300～1500Hz までの音声情報は再生されているものの、1500Hz 以上の音声情報は高周波数帯域までのびている雑音にマスクされて判別できない。この高周波数雑音は聴取の際に大きな障害になるばかりか、再生音声の子音や摩擦音がこの雑音にマスクされて不明瞭になる。また、触針式再生法に比べて、光学式再生法では 300Hz 以下の低周波数雑音が増加している。この雑音は、再生音声の明瞭度を著しく低下させている。

光学式再生法による再生音声を聴取しながら、対物レンズを光軸に沿って移動させ蠟管上の照射ビーム直径を変えていくと、再生音声の明瞭度、音色、雑音特性が変化する。

図 20 に、照射ビームのウエスト位置から入射点までの距離 z を変えたときに得られる光学式再生法による音声信号の長時間周波数スペクトルを示す。表 1 から、距離 z が大きくなると蠟管上の照射ビーム直径も大きくなる。図 20 から、$0 \leqq z \leqq 5$mm の範囲では 300～1500Hz、6

≦z≦10mm の範囲では 300～1000Hz、そして z≧11mm の範囲では 300Hz 付近のみの音声情報が再生されていることがわかる。

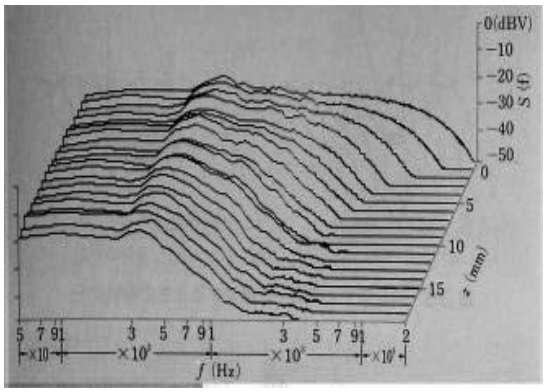


図 20　光学式再生法による再生音声の長時間周波数スペクトル

距離 z が大きくなったときの音声情報の高周波数成分の欠落は、照射ビーム内における反射光の方向に対する平滑化によるものである。音声情報の高周波数成分が欠落すると、子音や摩擦音が再生されなくなるばかりか、再生音声の明瞭度や音色が劣化する。したがって、再生音声の質のみに注目して聴取実験を行うと、0≦z≦5mm の範囲(照射ビーム直径になおすと 30～140μm)で再生したときの音声が最も自然であると考えられる。

(b)雑音特性

図 19 と図 20 に示されるように、レーザービーム反射法で再生される音声信号には、距離 z が増加すると急激に低周波数帯域に向って減少する高周波数雑音と、距離 z の変化に無関係に一定強度で存在する低周波数雑音が含まれている。これらの雑音は、触針式再生法による音声信号には存在せず、レーザービーム反射法を用いた光学式再生法による音声信号に特有のものである。この雑音の原因を調べるために、z=0,2,4mm のときの検出面における反射光スポットの写真を**図 21** に示す。

この図から、検出面には反射光スポットとともに空間的に不規則に分布する粒状性の明暗のパターンが生じていることがわかる。このパターンは、レーザー光のようなコヒーレント光を用いたときに生じる特有な現象で、スペックルパターンと呼ばれる(文献 9)。

図 21 のスペックルパターンは、蠟管表面の照射ビーム内に分布する波長程度のランダムな凹凸から散乱されたレーザー光が検出面で干渉して生じたものである。そこで、直接に蠟管表面を顕微鏡で観測してみた。

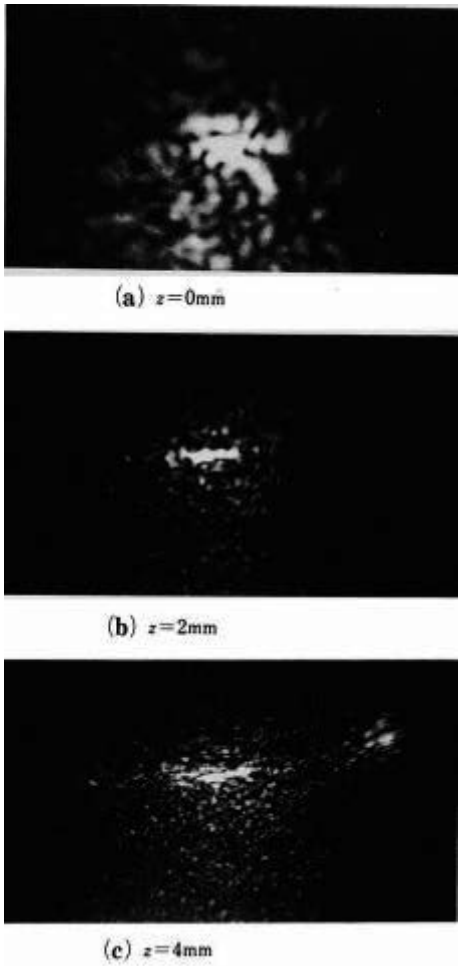


図 21 検出面における反射光スポット:(a) z=0、(b) z=2mm、(c) z=4mm

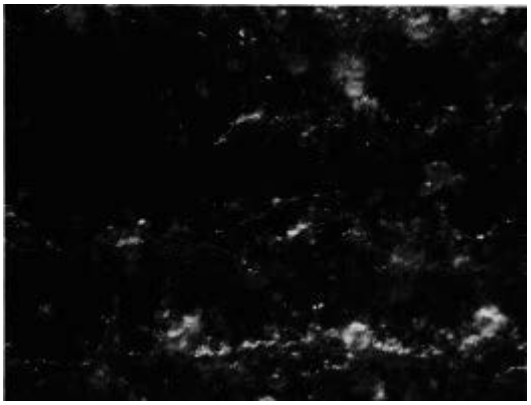


図 22　蠟管表面の顕微鏡写真

その結果が**図 22** の写真で、蠟管表面は音溝のほかに非常に複雑な微細構造からなっていることがわかる。

これは長い年月の間に蠟が再結晶して生じたもので、蠟管全体を覆っている。この再結晶

析出物質による微細構造からスペックルパターンが生じ、これが音声再生時に図 19 と図 20 に示された雑音として検出されている。

白色ペイントを塗布した円筒物体から、図 21 のごときスペックルパターンが生じることがわかっているので、レーザービーム反射法において検出面に生じるスペックルパターンによる雑音特性を、蠟管とは独立に調べることができる(文献 10)。そこで、蠟管と同じ形状のアルミニウム円筒の表面に白色ペイントを塗布し、レーザービーム反射法で音声再生の実行を行ってみた。

図 23 は、レーザービーム反射法でスペックルパターンが生じた信号の長時間周波数スペクトルを距離 z を変えながら測定した結果である。この図からわかるように、一次元位置検出器で検出されたスペックル信号は、距離 z が増加すると低周波数帯域に向かって強度が減少する。これは z が増加すると、検出面のスペックルパターンの明暗粒子の平均的大きさが小さくなり、一次元位置検出器の受光面内に含まれる明暗粒子の数が多くなり、結果として空間的に平均化されるためである(文献 11)。

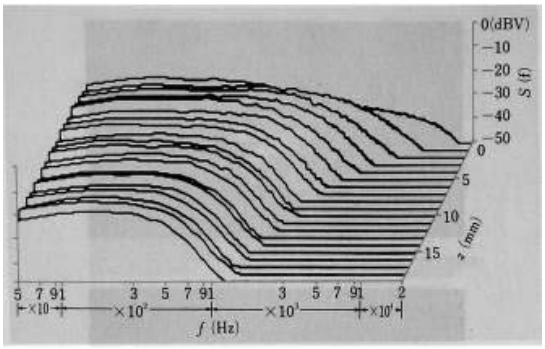


図 23 レーザースペックルの長時間周波数スペクトル

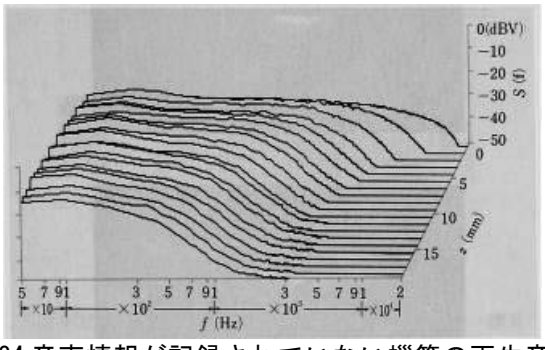


図 24 音声情報が記録されていない蠟管の再生音声の長時間周波数スペクトル

図 23 と比較するため、**図 24** に音声情報が記録されていない蠟管からの再生音声信号の長時間周波数スペクトルを示す。図 23 と図 24 から、白色ペイントを塗布したアルミニウム円筒と蠟管をレーザービーム反射法で音声再生したときに生じる雑音の特性が同質のものであることがわかる。したがって、蠟管再生時に生じる雑音は蠟管表面の微細な凹凸構造から生じるスペックルパターンが原因であることがわかった。ここで距離 z を大きくしたとき再生音声の高周波数成分が欠落するのは、蠟管面の照射ビーム内における音溝面から反射される光ビームの方向の変化が平滑化されるためである。一方、雑音信号の高周波数成分の減少は検出面に配置した一次元位置検出器の受光面内におけるスペックルパターンの明暗粒子が平均されるためである。したがって、両者は全く別の現象である。

図 19 の触針式再生法による結果から、このスペックルパターンから生じる雑音のうち、300Hz 以下の低周波数雑音には音声情報が記録されていないことは明らかなので、この帯域をハイパスフィルターで除去しても再生音声には影響を与えない。一方、高周波数雑音は音声情報と重複しているため、ローパスフィルターで除去することはできない。したがって、距離 z を変えて雑音が少なく、かつ再生音声が自然に聞こえるように照射ビーム直径を調節しなければならない。聴取実験の結果、$z \geqq 3$mm(照射ビーム直径になおすと 85μm 以上)が適当であることがわかった。

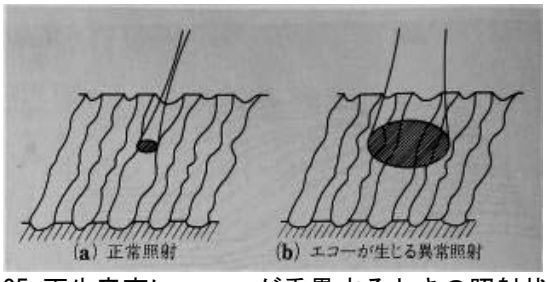


図 25 再生音声にエコーが重畳するときの照射状況

(c)エコー

光学式再生法による再生音声を聴取しながら、対物レンズを光軸に沿って移動させ蠟管上の照射ビーム直径を変えていくと、再生音声とともにエコーが重畳して聴える。これは、**図 25** に示すように照射ビーム直径が大きくなると、再生しようとしている音溝とともにそれに隣

接する音溝も照射してしまうためである。このとき、蠟管の1回転分の前後の音溝に記録されている再生音声がエコーとして聞こえる。

図 26 に、距離 z を変えたときに得られる光学式再生法による音声信号の自己相関関数を示す。図の遅れ時間 τ =0 のピークは、レーザービーム照射点で再生された音声から生じたものである。

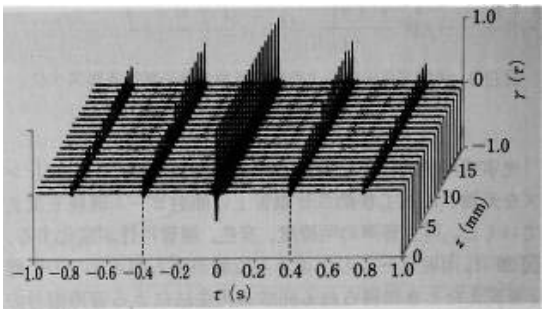


図 26 エコーが再生音声に存在するときの自己相関関数

さらに、遅れ時間 τ =±0.4 秒で生じる2番目のピークはエコー音声信号からのものである。エコー音声の強度は、照射ビーム直径が小さくなるほど減少するため(距離 z が小さい場合)、直径を小さくするとこのエコーは除去できる。図 26 の結果から、z≦4mm であればエコー音声信号の強度は主たる再生音声信号の強度の30%以下となり、聴取実験を行っても問題にならないことがわかった。

以上の蠟管の光学式再生法による音声再生で、再生音声の明瞭度とエコーを考慮した場合、照射ビーム直径は小さいほど良好な結果が得られ、雑音を考慮すると大きい方が好ましいという相反する結果が得られた。聴取実験の結果からは、照射ビームのウエスト位置から蠟管面上のレーザービーム照射点までの距離が 3≦z≦4mm、スポット直径になおすと 85～110μm が最適であることがわかった。

(d) トラッキングエラー

蠟管の音溝の幅 254μm より細いビーム直径 85～110μm で照射すると、光学式再生では触針法のように直接に針で音溝をなぞっていないために、蠟管の音溝のうねりや駆動装置の位置誤差のためにトラッキングエラーが生じる。このトラッキングエラーが再生中に起きると、再生音声の音量が極端に減少し、蠟管全体にわたる安定な再生ができない。

図 27 に示すように、トラッキングエラーが起きると蠟管からの反射光スポットが検出面上で横ずれが生じる。この横ずれをトラッキングエラー信号として検出し、レンズを移動させることで照射ビームを音声再生したい音溝まで移動させトラッキングを補正する音声再生装置を開発した。

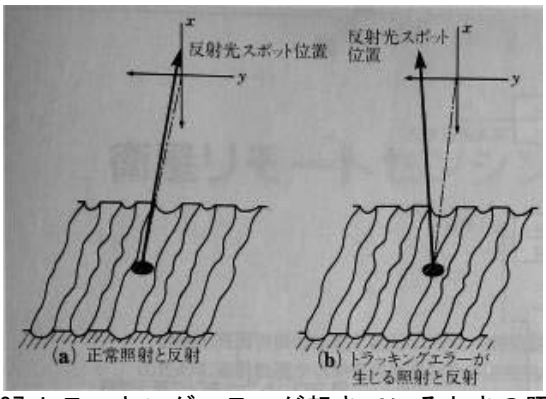


図 27 トラッキングエラーが起きているときの照射状況

このトラッキングエラー補正機構付光学式音声再生装置を**図 28** に示す。レーザービームは、対物レンズと駆動装置付レンズを通った後、コーナーキューブプリズムを介して蠟管表面に照射される。

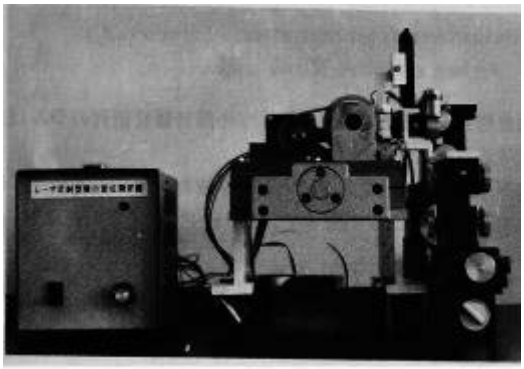


図 28 トラッキングエラー補正機構付光学式音声再生装置

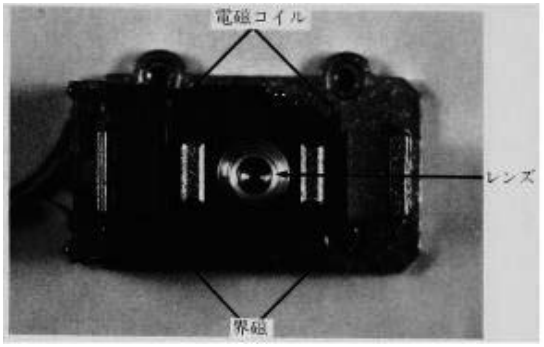


図 29 レンズの駆動装置

音溝からの反射ビームは再度コーナーキューブプリズムを通して上方に反射され二次元位置検出器(浜松ホトニクス S1300 13×13mm)に入射される。この音声装置において、レンズ駆動装置は**図 29** に示すコンパクトディスクプレーヤのレンズ駆動装置を用いた。

図 28 の補正機構付光学式音声再生装置の信号処理回路の概略図を**図 30** に示す。

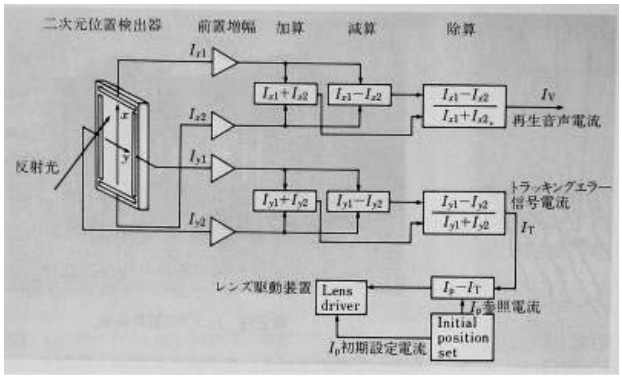


図 30 トラッキング補正回路

二次元位置検出器上で反射光スポットの縦方向の時間的位置変化は音声信号 I_V として検出され、横方向の時間的位置変化はトラッキングエラー信号 I_T として検出される。音声再生の最初の段階で、初期設定電流 I_P をレンズ駆動装置に印加し照射スポットを音溝の中央に合わせる。トラッキングエラーが起きないときには、初期設定電流 I_P とトラッキングエラー信号 I_T とは等しいため $I_P-I_T=0$ となりレンズは駆動されない。トラッキングエラーが起きると、差電流 $I_P-I_T\neq0$ で照射ビームを作っているレンズの駆動装置を $I_P-I_T=0$ となるまで駆動し、照射ビームを振って照射スポットを音溝の中央まで移動させ、トラッキングエラーを補正する。このようなトラッキングエラー補正機構付光学式音声再生装置を用いることで、蠟管からの音声再生がより安定にかつ確実に行えるようになった。

6. むすび

ポーランドから送られてきたピウスツキ録音蠟管レコード資料がきっかけとなり、古蠟管レコードからの音声再生に関する工学的研究が行われてきた。その成果を、録音した人物像や録音蠟管の意義と合わせて、蠟管レコードの物理化学特性、保存状態と修復、レプリカ作製について述べるとともに、録音蠟管からの音声信号検出法について重点を置いて解説した。音声再生法としては、加速度センサーを利用した触針法と非接触型のレーザービームを利用した光学的音声再生法が実用性が高いと考えられる。両者を比較すると、光学的再生法は傷があったり破損している蠟管でも音声再生ができる利点があるが、トラッキング制御の問題や触針法に比べて音質がやや低下するという欠点がある。

本報告で述べなかった問題に、再生音声における雑音軽減処理がある(文献 12)。一般に多くの蠟管は、保存状態の悪さと録音技術の未熟さから蠟管表面の状態が悪く、かつ録音された音溝が極めて浅い。したがって、ここで紹介した音声再生法だけでは、音声の明瞭性が悪く、再生音声に対して雑音軽減処理が不可欠となる。雑音としては、傷に相当するスパイク状のものと白色変質物に相当するランダム状のものに大きく分かれる。これらの雑音の除去として、スパイク状のものは時間波形上で、ランダム状のものは周波数領域上で処理する方式が有効と考えられる。いずれにせよ、雑音の性質と合わせて音声信号の性質をも考慮して、最適な雑音軽減法の研究が必要である。歴史的には蠟管レコードは短期間で消えてしまったが、短期間でも数百万本以上生産されていることから、多数が現在まで残っていると推定されている。その多くは音楽が録音されたものと考えられているが、ピウスツキ、北里、加計のように個人的に録音した蠟管のなかに、言語学や民族学の貴重な資料や当時の著名な人々の肉声が残されている可能性があり大変興味深い。特に、ピウスツキ蠟管と同様に、滅びつつある少数民族の音声言語や民族音楽などが録音された蠟管は、ヨーロッパ、旧ソ連、アメリカなど各地に散在しており、再生と解読が待たれている。したがって、音声再生技術の確立は、貴重な文化遺産である未再生の蠟管からの情報入手の可能性を開くことになり、人類の財産である音声による精神文化をよみがえらせることになる。これらの仕事は、現代の科学技術を研究する者に課せられた責務であり、それはまた歴史が私達に

残したロマンへの挑戦でもある。

本報告を世界的観点に立脚して眺めてみると、触針法による蠟管からの音声再生と再生音声の改良に関する研究は世界の中の数ヵ所の博物館などで行われているものの、録音蠟管からの音声再生を組織的に、かつ非接触法による音声再生の研究を行っているところは見当たらない[文献 13、14]。それだけに、この分野における一層の研究が期待される。

本報告の中の音声再生に関する研究は伊福部達教授(北大電子科学研究所)、岩井俊昭助教授(現在、静岡大学工学部)、川嶋稔夫講師(北大工学部)に負うところが大であり、これらの諸氏に厚く御礼を申し上げる次第である。さらに、本報告の大部分は国立民族学博物館を中心とする国際研究組織 ICRAP (International Committee for Restoration and Assessment of Piłsudski's Life and Work)[文献 2]の中の重要研究推進課題として取り上げられてきたもので、その組織の諸氏からの激励に対して深く感謝の意を表す次第である。

参考文献

1) 朝倉利光, 伊福部達編: ピウスツキ録音蠟管研究の歩み(北海道大学応用電気研究所, 1986)
2) 加藤九詐, 小谷凱宣編: 国立民族学博物館研究報告別冊 5 号"ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究"(国立民族学博物館, 1987)
3) 先川信一郎: ロウ管の歌――ある樺太流刑者の足跡(北海道新聞社, 1987)
4) H.Jüttemann: *Phonographen und Grammophone* (Klinkhardt & Biermann, Braunschweig, 1979)
5) R.ジェラット(石坂範一郎 訳): レコードの歴史――エジソンからビートルズまで(音楽之友社, 1981)
6) G.L.Frow and A.F.Sefl: *The Edison Cylinder Phonographs 1877−1929* (Kent England, Great Britain, 1978)
7) T.Ifukube, T.Kawashima and T.Asakura: J. Acoust. Soc. Am. 85, 1759 (1989)
8) T.Iwai, T.Asakura, T.Ifukube and T.Kawashima: Appl. Opt. 25, 597 (1986)
9) T.Asakura and N.Takai: Appl. Phys. 25, 179 (1981)
10) N.Takai, T.Iwai and T.Asakura: Appl. Phys. B26, 185 (1981)
11) T.Iwai, N.Takai and T.Asakura: Optica Acta 28, 1425 (1981)
12) 伊福部達: 電子情報通信学会誌 70, 407(1987)
13) *Proc. Int. Symp. B.Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture* (Hokkaido University, 1985)
14) *A Joint Technical Symposium: Archiving the Audio-Visual Heritage* (Stiftung Deutsche Kinemathek, Berlin, 1987)

(1992 年 4 月 13 日 受理)

＊ 朝倉利光「古蠟管レコード資料からの音声再生」『応用物理』61−6 : 556−568(1992)を、著者の許可を得て転載した。その際、誤記・誤植を正すとともに、段落をさらに細かく区切った場合がある。

＊ Author & title: T.Asakura, "Reproduction of the Sounds from Old Wax Phonograph Cylinders."

よみがえったモノとコト、よみがえらせた物と者

山岸 嵩

『ユーカラ・沈黙の80年～樺太アイヌ蠟管秘話～』(NHK総合テレビ「NHK特集」1984年放映)、『カラフト・アイヌ望郷の声』(NHK教育テレビ「ETV特集」1985年放映)、山岸嵩「よみがえった《ロウ管》」(木下順二ほか監修『新訂中学国語』2: 199–215、教育出版、1987 所収)の制作過程と放映後の声を通して裏話的に……

1．話の端緒

わたしが初めて蠟管の存在とその再生作業の試みの話を聴いたのは、フリーの科学読物作家本田ニラム(本名藤野重光)さんからだった。かれは当時ある科学番組の構成に携わっていたのだが、それの担当部局である科学番組部ではなく、学校放送部のわたしに「これはお前の仕事だ」とわざわざ知らせに来てくれた。科学雑誌の用で立ち寄った北海道大学で、応用電気研究所の伊福部達さんから聞いたのだという。「録音したのは祖国の独立運動をしていたポーランド人学生で、レーニンの兄なんかと一緒にロシア皇帝暗殺事件に加わり、サハリンに流刑された人らしい」と言う。おそらくそのあたりがわたし向きだとニラムさんは判断したのだろうが、かれも正確な名前は知らなかった。しかし、独立と革命の運動に敗れた流刑者が、どういう経緯でか流刑地で、当時では家一軒買えるほど高価な蠟管レコードに、カラフト・アイヌのユーカラを録音し、それがポーランドに80年間眠っていた末に、日本の音響工学の粋を尽くして再生されるという話は、なんとも刺激的だった。ニラムさんはこう付け加えた「伊福部さんはまだ若い助教授だが魅力的な研究者だ。作曲家伊福部昭の甥だけに、耳がよい」。

早速伊福部さんに電話したところ、これは北方文化研究施設の黒田信一郎、井上紘一の両人に依頼された仕事だから、まずはそちらをとおせと言われ、両氏との付き合いが始まった。互いに何度か訪問するなかで、お二人にピウスツキその人の名前の正確なつづりと発音に始まり、事柄のおおよそと、さまざまな問題点を聴かされた。二人ともそれらが解明されていく経緯が番組化されることに積極的だった。蠟管はすでに日本に向けて発送される段階になっており、わたしは即座にNHK特集として特別番組に提案することに決めた。この番組枠――略称してN特――は提案制で、どの部からでも提案することができ、通れば比較的長期の制作期間と、割と潤沢な予算が与えられるのだ。

しかし、そのためには最低二つの条件が必要だった。第一は蠟管再生が技術的に困難でも成功する可能性が高いこと。第二はピウスツキその人の魅力と、かれが残したものを発掘することに意味があり、再生に値するということだった。わたしは三氏や関連する人々に接触し、確信に近い感触を得て提案し、それは通った。

2．まずモノありき

このプロジェクトの成否は、まず第一に脆い上にカビだらけの蠟管の再生にあった。番組としては、もし再生に成功しなくても、その過程自体がドラマチックであれば必ずしも作品と

して成り立たないわけではない。そういうドキュメンタリー番組も民放 NHK を通じ少なからずある。

しかし、わたしはこの番組の成否の第一を、まず日本の音声工学や光工学の技術にかけた。それでなくては、わざわざポーランドから空輸してくる意味がないではないか。

さいわい伊福部研究室は熱気に満ちていた。伊福部さんは学生や院生だけでなく、さまざまなところで働いている卒業生や、まったく違った分野の研究者にも声をかけて、かなりオープンな雰囲気で進めていた。とはいえ北大全体やその中の応用電気研の中で、他の研究室にどう受け止められていたかは定かではなかった。閑静な研究の場に、場違いな人間がどやどやと撮影機材などを持ち込み、時に何日も粘ったりしたわけだから、少なくともわたしたちは歓迎されるはずはないのだが、格別の苦情も受けなかった。

それには朝倉利光さんの存在があったようだ。同じ応用電気研の教授である朝倉さんは若い伊福部さんの仕事をじっと見つめ、後ろから助けていたようだった。黒田、井上の両氏に次いで、このプロジェクトの中心的推進者であった小樽商科大学の和田完さんは、後になってこう記している。「朝倉との出会いは、蠟管再生のための技術チームの編成への展望が開けただけでなく、朝倉の政治力による多額の資金調達とマスコミへの宣伝工作の開始への弾みをつけられるのである」(「ブロニスワフ・ピウスツキの古蠟管――黒田信一郎へのレクイエム――」(小樽商科大学言語センター『Language Studies』1994)。何のことはない、わたしたちの方が乗せられたわけでもあったのだ。それかあらぬか、朝倉さんにはずいぶんと迷惑をかけたが、一度も叱られも嫌な顔もされず、ご自分の研究室をわたしたちの機材置き場として使わせてくれた。

和田さんは提案の段階で NHK に黒田さんと共に訪ねてこられて、万が一蠟管再生がうまくいかなかった時の場合として、自宅に保管している針金式の録音機にユーカラが録音されているはずだから、それを再生して代用することもできると、申し出てくれたことがあった。彼のお父さんが戦前カラフトで開業医をしていて、アイヌなど原住民の骨格標本を集める傍ら、そんなこともしたのだという。針金式の録音機とは見たことも聞いたこともないし、和田さんのお父さんの収集品には興味がわいた。しかし、それを初めから蠟管再生失敗時の代案としておくという考えは問題だった。この番組では蠟管再生の失敗は同時に番組自体の失敗なのだ。百歩譲って次善の策を考えておくのはいいとしても、スタート前に彌縫策を検討するというのはあまりに敗北主義だ。もし成功しなかったなら、やはりなぜそうなったかの中にまずはドラマを求めるしかない。わたしは率直にその考えを述べ、「針金式録音の再生はその後で第二弾としてやりませんか」と申し上げた。しかし、せっかくの好意を彌縫策といわれ、和田さんはいたく立腹され、蠟管の番組が終わった後も、ほかの話は持ち込まれたが、二度とお父上の遺品の話はされなかった。ちなみにほかの話というのは、明治時代に日本からポーランドへ持ち込まれた相当数の浮世絵が、彼の地で見つかったというものだった。日本から多数の陶磁器が送られたとき、その詰め物として厚手の和紙に刷られた浮世絵が使われたのだという。面白そうだったが、わたしはすでに転職が決まっていたので同僚を紹介したのだが、残念ながらこれは番組化されなかった。

このほかにも書ききれないさまざまなことはあったが、まずはモノの方――蠟管再生の方――は目途が立って、次はヒトの方だった。

3. そしてヒト
――隠れていた人と集まった人――

ヒトといった場合、ここでは大きく二分される。蠟管に吹き込んだ側の人とその再生に関わり聴き取る側の人だ。そして、そのそれぞれはさらに現地住民およびその縁故者と、その訪問者や研究者とに二分される。

その中心にいるのがブロニスワフ・ピウスツキであることは言うまでもない。

その名を初めて聞いたとき、わたしはまったく初耳だったのだが、なんとなく堺利彦のものを以前に読んでいたとき、似たような名と境遇

の人に堺が触れていたような気がして、全集を調べてみた。案の定『平民新聞』の発行停止処分後に出した家庭婦人向け雑誌に、珍客ピルスードスキの訪問を受けて、楽しい時を過ごしたという随筆を載せていた。通じる言葉は互いに不得手な英語ではあったが、同じ人間、同じ同志として実に愉快な一日を持ったという。堺利彦は戦前の社会主義者の中で、わたしが最も敬愛している人だ。その文と井上さんに頂いた現地少数民族の子供たちの中でほほえんでいるピウスツキの写真をながめ、まだ何も知らぬかれを好きになり、なんとしてもこの番組を成功させようと思った。

そんなわたしに次々と知識を与えてくれたのは黒田さんと井上さんだった。井上さんはピウスツキその人の生涯や業績の追跡だけではなく、彼の縁者をヨーロッパ、アメリカ、日本国内に探し、北海道と横浜に遺族がいることをつきとめた。カラフト時代の妻チュフサンマとの間の息子と娘の遺族である。娘大谷キヨさんの方は比較的早く居場所がわかった。戦後カラフトから引き上げてきて結婚し三人の娘をもうけ、まだ健在で三人の娘も北海道でそれぞれ家庭を持っているという。

早速取材をしようとして、問題が起こった。キヨさんは取材どころか会うことすら頑強に拒否しているというのだ。自分たちを捨てた父のことなど話すのも嫌だと言われているらしい。事情はどうあれ、その後盲目になった母と共に残された子としては、当然の感情であろう。さらにそれに民族差別の問題がからむ。きわめて難しい問題だ。いずれにせよ拙速主義は絶対に採らないことを井上さんと話し合った。

ところがここに信じられない事件が起こされてしまった。どこから話を嗅ぎつけたか、同じ NHK の報道のディレクターが、わたしのところに来て番組のことを聴き、ピウスツキの遺族のことなども尋ねた。わたしは事情を話し、決して無理な取材をしないようにと念を押し、かれは了解して帰っていった。にもかかわらず、とんでもない映像がニュースで流れたのだ。入院している病院にいきなりカメラが入っていき、必死に逃げまわるキヨさんを追いかけまわしたのだ。

仰天したわたしは件のディレクターを探した。見つけたら多分ぶん殴っていただろう。見つからなかったが、かれの反対にもかかわらず、かれの上司がかまうものかやっちゃえと強行したらしいことが分かった。そこでわたしはこちらも上の方と、あまりあてにならないが労組にも話して、正式に問題化することにした。しかし、結果は無残だった。上司も厳重抗議とかを形はやったのだろうが、報道からは自己批判の言葉の一片もなかったのだ。

そもそも NHK には華の芸能、鬼の報道、仏の教育という言葉がある。番組制作の現業三部門を端的に言い表したものだという。いつごろできたものか知らないが、華の芸能はともかく、鬼の報道と仏の教育には注釈が要る。共に局内での力関係、それも上層部のそれであって、対権力となれば教育もたいしたことないが、報道にいたっては、常に永田町あたりの閻魔様ににらまれないかとびくびくしている青鬼なのだ。そんな報道に言うべきことも言えないのだから、仏が教育への蔑称語であることは言うまでもない。

これ以上荒立てると番組が作りにくくなると暗に脅しすかされ、涙を飲んだのだからわたしも仏だったが、ともかく外から見れば、報道であろうと教育であろうと同じ NHK である。キヨさんは面会謝絶の入院中なので、キヨさんの娘さんたちにわたしが謝ってまわるしかない。まず、住所の分かった次女のナミさんを北海道大樹町の郊外にたずねた。しかし恐れていたとおり、やはり門前払いだった。無理もないと感じつつ、本来なら出演交渉のために訪ねる予定だったお宅の前で、ぐずぐずしていたわたしは終バスを逃してしまった。郊外というより山中の別の村というほど離れていて、とても荷物を持って歩いて帰れる距離ではない。もちろん公衆電話などない。仕方なく、母屋から遠く離れた製材か何かの仕事小屋の軒下を無断で借りて、野宿をすることにした。暗くなった頃わたしは一人の青年に起こされた。両親が話だけは聞くと言っていると告げる。息子さんだった。それからの数時間、初対面だったが、わたしたちは互いに率直に話し、尋ね、聴き入った。ナミさんは以後の取材も許されただけでなく、

母はまだ無理だが姉妹たちにも伝えておくと言われた。息子さん――ピウスツキの曾孫――は、深夜大樹駅近くの旅館まで車で送ってくれた。

このようにしてピウスツキの遺族については、娘の方はご本人は無理だったが、その子供たちとは連絡が取れた。間もなくこれも井上さんの尽力によって、息子木村助造の未亡人とその子和保さんとも連絡が取れ、取材できた。

次は録音機に吹き込んだ者の方だが、これは年齢的にいってまず無理なので、それを聴き意味を取れる者たちとなる。これは二風谷の萱野茂さんたちに協力していただいたが、聴き取れる者はいなかった。しかし、カラフト・アイヌ語研究が専門の北海道大学の村崎恭子さんの尽力で、彼女のインフォーマント金谷フサさんの記憶を頼りに探っていき、蠟管から再生されたアイヌ語の意味をはっき聴き取った浅井タケさんにたどり着くことができた。そしてさらにそこで聞いた話から、吹き込まれた声に祖母塚田ヌサラケマのそれを聴き取った遺族の和江さんにめぐり会え、彼女たちはそれぞれ番組の二つのクライマックスシーンを生み出してくれた。

戦前の樺太に遺族を訪ねた人も、井上さんの尽力で何人か分かり、ギリヤーク（現ニヴフ）語の研究者服部健さんや、実業家の能仲文夫さんなど健在の方々にはお会いして、当時の樺太の様子や、妻チュフサンマの印象などを聴いただけでなく、貴重な写真や著書などを借りることができた。

次なる人はピウスツキやアイヌなどの少数民族やその言語や文化を研究する学者たちだった。

これは北海道大学の助教授と助手では肩書き不十分とみた黒田さんが、自分も北大と同時に兼任していた大阪の国立民族学博物館の教授加藤九祚さんをプロジェクトの頭に持ってきて、その名で呼びかけたのが利いたか、文化人類学や言語学にとどまらず、実にさまざまな領域から、またプロジェクトが国際を掲げ、実際にも国際的だったので、蠟管を保管していたポーランド、ポズナンのアダム・ミツケヴィチ大学の教授マイェヴィチさんを先頭に、西欧諸国から少なからざる研究者があつまった。その中には日本語が堪能なひともいて、二作目の『カラフト・アイヌ望郷の声』では、デンマーク出身で香港の大学で教えているというキーステンさんには、番組の狂言回しまでお願いした。もちろん相方には、これは十分に芝居っ気のあった黒田さんを配したうえではあったが。

キーステンさんといえば、余談になるがのちに転職したわたしは、ポーランドのクラクフで、偶然共同で司会をやらされたことがあったが、ポーランド語どころか英語も怪しいわたしは、そこでもずいぶんと助けていただいた。

黒田さんの芝居っ気といえば、これは余談でなく、蠟管から初めて明瞭な日本語が取り出されたときの笑顔と声が忘れられない。札幌での何回めかの撮影の最中、再生作業に取り組んでいた伊福部さんから、蠟管から日本語が聞こえたという知らせが来た。急いで駆けつけたら、はっきりと「私はピルスツキさんの蓄音器を借りまして、ただ今、日本の謡をここに吹き込みます」と聞こえる。わたしは早速、おもしろいものが出てきたからちょっと来てと黒田さんに電話して、やってくる彼を撮るようカメラマンたちに言った。スーツに着替えた黒田さんが満面の笑みを抑えて、もっともらしい顔で飛び込んできたシーンは、番組にそのまま生かされたとおりだが、じつは、あたかも初耳のような笑顔で部屋に駆けつけてきた黒田さんは、当然のことながら疾うに伊福部さんから報せを受けていて、すでに聴いていたのだ。

しかし、これは決して黒田さんの芝居っ気のなせる技ではなかったろう。蠟管から言葉がはっきり取り出され、しかも出てきた言葉が、この蠟管がピウスツキのものだということを証明してくれたのだ。いいかげんな物を持ってきて、ピウスツキにこじつけて、できもしないことをやっているのではないか、という陰口がなかったわけではない。そんなものはこの一声で吹き飛んでしまうのだ。わたしはこの声を聴いたとき、これでこの番組は番組になるぞと心の中で快哉を叫んだが、黒田さんのそれはもっと大きかったに違いない。だから頼まれれば何度でも心から微笑み、分かっていても「何か出てきたんですってねえ」と言いながら飛び込んで

こられたのだ。やらせであっても、決してやらされではなく、黒田さんは飛び込んできたのだ。このプロジェクトの看板には加藤さんの名があっても、実際上の責任者は黒田さんだった。番組制作上の自分に置き換えるまでもなく、わたしははっきりとそう感じた。

こうやって、ようよう番組はできあがったのだが、思い返せば数え切れない方々にお世話になった。せっかくの好意や協力を無にしてしまったものもある。ピウスツキが東京に来たとき泊った銀座箱館屋の主人信大蔵の子孫である俳優信欣三さんや、蓄音器博物館と言えそうなほどの機器を見せてくれた音声機器会社の資料室の方々には、せっかくロケに協力していただきながら、時間と構成の都合で、ついにまったく生かすことができず、謝るしかなかった。今考えても申し訳なく思う。

なんとも残念だったのは、ピウスツキの娘キヨさんに終に番組に出ていただけなかったことだった。じつは娘のナミさんから、母がもう長いことなさそうだから今のうちに入院先で撮影してくれと連絡があり、急いで駆けつけ撮影はしたのだ。が、技術スタッフの一人が不注意ミスで消してしまったのである。かれは、蠟管のトゥスクルの声を聴いていた和江さんが、突然「ばばの声だ」と叫んで泣き出したクライマックスシーンでも、不注意ミスで音声をひどい状態で収録してしまっていた。音が命の番組なので音声係は緊張し、異様な雰囲気にカメラマンもさりげなく、しかし必死の面持ちで二人とも最善を尽くしたのにである。そのときは、もう一度あの場面をやってくれるように頼んでくれと言われ、呆れてものも言えなかったが、今度は上司にはどうか報告しないでくれと手を合わされた。キヨさんが仏様になられたからか、やはりこちらが仏の教育だったからか。

霊柩車に乗せられて遠く去っていく最後のカットだけが、なぜか消去を免れ残っていた。それを見ながらわたしは、わたしなどの想像できないほど辛かったであろうキヨさんの生涯に改めて思いを馳せた。娘キヨさんは今ごろ天国で、まだ母の胎内にいるとき別れた初対面の父ピウスキに告げているのだろうか、孫たちがなんと言おうと、自分は命をかけてもあなたのことなどしゃべりたくなかったのだ……と。

NHK の内側ではいろいろと悶着があったけど、外の方々には本当にお世話になり、そのなかにはすでに他界された者も少なくない。今までに名前を出した中だけでも、本田さん、黒田さん、和田さん、能仲さん、金谷フサさん、浅井タケさん、信欣三さんがそうだ。もしあの世でキヨさんがまだ道に迷っていたとしたら、この人たちは彼女を間違いなくピウスツキの所に案内してくれるだろう。それにしても、かく名を連ねたこの故人たちは、なんと役者揃いだったことだろう。

浅井さん金谷さんは先祖代々の天性の演技者だったし、明治維新の立役者の一人榎本武揚の配下で函館戦争を戦いながら生き延び、銀座にバーを開いた信大蔵の孫の信さんは人も知る新劇の名優だった。能仲さんは話せば名の通り能弁で、樺太探訪記はしばしば筆は滑っても、まさにすべるがごとく活劇調だったし、本田さんは動物をしゃべらせたら右に出るものがない脚本家で、その昔は演劇文化工作隊などを組み、後に浅利慶太等と劇団四季を創設した日下武史などと北海道の樽前山麓あたりをうろついたこともあったらしい。その辺は定かではないが、彼らがあだ名で呼び合っていたことは確かだ。黒田さんの芝居っ気と和田さんの男前は、教壇などより舞台に立たせてみたいほどだった。

この人たちが生きていて、あのポーランド映画の巨匠アンジェイ・ワイダに会っていたらどうだっただろう。この番組が機縁でわたしはポーランドのクラクフで彼に逢って話をした――と言ってもロシア語が堪能な井上さんと埼玉大学の澤田和彦さんの通訳で――が、彼がわたしなどではなくこの人たちと会っていたならば、彼はピウスツキ一族の数奇ともいえる生涯を、あの名作『地下水道』や『灰とダイヤモンド』を凌ぐ、壮大な映画へと想い描いたのではなかろうかと思えてならない。

最後は、こうやって多くの人の力で出来上がり放映されたものが、どう受け止められたか、視聴した人々の声にふれて終わりたい。

４．視聴した大人、させられた中学生、高校生、大学生の声から

幸いにして放送直後から数多い感想が寄せられた。そのほとんどが番組に出ていた者や出来事の推移に感情移入していて、涙を流した人も少なくなく、ネガティブな声はまずなかった。特徴的なのは、初めは蠟管の再生がはたしてうまくいくか、という技術的興味で見始め、次第に歴史的な出来事や人間的な問題に関心が移っていったという声がかなりあったことだった。視聴率も 10 パーセント台で、プライムタイムの硬い番組としてはまあまあだった。専門家の評価も悪くなく、放送批評懇談会からは、1984年6月に放映されたものの中で最も優れた番組として月間ギャラクシー賞なるものをいただき、NHK の名作百選の中に選ばれた。

しかし、この番組を利用した授業では、生徒や学生諸君は、情緒的段階にとどまらず、少数民族問題やその言語や文化の保存や再生の意味を鋭く問うた。中学生がどう受け止めたかについては、すでにポーランドのクラクフで行った学会で発表しているので、ここでは大学生の声にふれたい。

森鴎外記念会の理事倉本幸弘さんは、大学で番組を使った授業を済ました後に、学生たちのレポートを送ってくれた。

何人かの学生は、留学したことで逆に母語への愛情がわいた自分の経験と重ね合わせて、少数民族の言語や文化の重要性をつづり、別の何人かは絶滅種トキの孵化や飼育、あるいは古い寺院や絵画の修復と比較して、保護の必要を論じた。しかし、ユーカラは本当に現代によみがえったのかの問いには、ほぼ全員が否定的だった。中にはたった一人であれ、その人を心から感動させたとしたら、それはそれでその瞬間だけでもよみがえったのであり、意味があったのだ、という意見もあったが、時の流れの中で少数者の文化が滅んでいくのは仕方ないことだ、その意味では真によみがえるということはあり得ないことだという点では、ほぼ全員が一致していた。しかし、ではどうするか、なにをすべきか、それらを可能にするためには国家と少数民族の関係はどうあらねばならぬのか、などについてまでは論じられたものはなかった。

森鴎外はピウスツキより４年早く生まれて４年長生きしたのだが、ピウスツキが西から東へ流刑される年より３年早く、ほとんど同じ航路を通って、東から西へ留学した。彼はすでにロシアには少数民族問題があることは知っていたらしいが、留学先のドイツのベルリンで、貧困層が多く住んでいた区域のある一家のお針子をしていたらしい娘と深い恋仲になりながら、彼女を捨てて帰国したことは、自身が書いた『舞姫』によって広く知られている。ピウスツキの帰国が祖国の独立であったように、鴎外の帰国は、日本が近代国家になるための大普請中だったゆえであることは、これも彼の『普請中』に読み取れる。帰国を促したのは、ピウスツキにあっては後のポーランド初代元帥になった実弟ユゼフだったが、鷗外でも元帥山縣有朋だった。

国家と民族というと、アメリカの反対で国連では国家として認められていない国パレスチナの出身で、米コロンビア大学の教授だったエドワード・サイードを思い出す。2000 年 1 月 3 日の朝日新聞でかれは記者に、自由貿易や市場主義では解決できない現実の格差こそが、人類の対決課題なのだとはっきり言い、グローバル化の中で、なぜ民族や宗教の違いにこだわる動きも強まっているかの問いには、文化の均質化から逃れようとしているからだ、民族や文化がまざりあい、自分はだれかという自画像がゆらいで、それが自分たちだけの郷愁の世界に帰りたいという心理につながり、過去の世界が心の避難所になっているのだ、と彼は答える。そしてさらに国家は市民の権利を守り国民に責任をもつために必要で、民族自決の主張も他の共同体や民族を破壊し滅ぼす権利はないと語ったうえで、文化の多様性を口にすることと、実際に異文化を持つ人々と共存することは別問題だとし、「我々はまだ真に共存するためのモデルがない。共存が何を意味しているかを、だれもしっかりと理解していない。」と言い切る。

学生諸君がそれ以上進めなかったのも仕方ないことだったのだろう。しかしサイードはそこにとどまらず、具体的提案を自分の夢として語った。

それは記憶の銀行をつくることです。世界には公共の図書館もない民族がたくさんいる。沈黙させられ、散逸した記憶を集めるのです。アメリカの先住民やアフリカから奴隷として来た人たちの記憶も重要です。パレスチナ人の記憶は仲間と収集を進めているところです。この記憶の銀行、記憶の博物館に、失われようとしている我々小さな民族の記憶を集め、だれもが利用できる共有の財産にしていくのです。実現すれば、地球の文化の本当の豊かさや歴史の多様性を知ることができる。それによっても、次の世紀の姿は変わるのです。

サイードはこう語っただけで亡くなってしまったが、彼の夢が実現すれば、おそらくピウスツキが録音したものも安住の地を得るだろう。しかし、ただそこに保管されるというだけではなく、それが利用されて、そこから文化の本当の豊かさや歴史の多様性を知ってもらうまでには、従来の図書館や博物館にはなかった科学技術と、世界のさまざまな国や民族の多くの人々の、そうしたいという熱意がからみあって、初めて可能になるもののような気がしてならない。あたかもこのプロジェクトがそうであったように。

＊ Author & title: T.Yamagishi, “‘Items and Matters’ That have been Resurrected and ‘Things and People’ That have Implemented Them.”



第三回ブロニスワフ・ピウスツキ記念国際シンポジウム
(クラクフ、ザコパネ、1999 年)のポスターより



記念切手 2 ズウォティ(2002 年)



記念コイン 2 ズウォティ(2008 年)



記念コイン 10 ズウォティ(2008 年)

樺太アイヌ語研究における B.ピウスツキ蠟管再生の功績

村崎 恭子

私の生涯の仕事は、「文字のない樺太アイヌ語を直接話者から習い、記述して他の人にもこの言語を伝えること」です。これは 1960 年に東大言語学科に学士入学した時から始まり、東外大、北大、横浜国大の教職を歴任、定年退職してから 11 年経った今も変わりません。

まず、これまで私がこの仕事に従事した半世紀をざっと振り返って、私の仕事に与えた「ピウスツキ蠟管再生」の恩恵がどんなに大きいかをたどってみたいと思います。そして次に、その後の蠟管をめぐる B.ピウスツキの年譜などの新しい研究結果と再生内容の分析から新たに解った樺太アイヌ語研究の新しい展望を考えたいと思います。

「ピウスツキ蠟管再生」をめぐる出来事

1. 1983 年 7 月に 100 本ほどの蠟管が北大にパリから到着した。
2. 同年の 9 月に村崎が東京外語大付属日本語学校から北大言語文化部日本語系に転職して札幌に赴任。朝倉研究室で再生音が完成し、カセットテープに録音された。
3. 1984 年 2 月 蠟管再生音を持って NHK 取材班と一緒に道内の樺太アイヌ古老を訪ねる旅。2/18–20 札幌–苫小牧–日高門別–振内–新冠–札幌。2/19 村崎が浅井タケさんに初めて会う。
4. 1984 年 6 月 25 日 NHK 特集「ユーカラ沈黙の 80 年～樺太アイヌ蠟管秘話～」が全国 TV 放映。
5. 1985 年 3 月 北里蘭録音の蠟管 243 本が京都で発見、再生プロジェクト始まる。
6. 1985 年 5 月 樺太アイヌ古老と一緒に芽室で合宿、蠟管再生音を聞いてもらうため。
7. 1985 年 9 月 ①ピウスツキ国際シンポジウム「B.ピウスツキとアイヌ文化」北大
8. 1986 年 7 月 R.アウステルリッツ先生を北大に招聘(JSPS で 2 ヶ月)
9. 〃 8 月 G.オタイナ女史を北大に招聘(科研で 2 ヶ月)
10. 〃 9 月 ロバート(・アウステルリッツ)さん&ビクトリアさんと村崎が山田秀三先生と一緒に初山別を探す地名の旅。
11. 1990 年 7 月 17 日–8 月 20 日 サハリン調査旅行「サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究(文部省科研国際学術研究)」
12. 1991 年 10 月 ②ピウスツキ国際シンポジウム「B.ピウスツキ生誕 125 周年記念シンポジウム」サハリン・ユジノサハリンスク
13. 1992 年 9 月 村崎が横浜国大教育学部に転勤。
14. 1994 年 4 月 30 日 浅井タケさん没。
15. 1999 年 9 月 ③ピウスツキ国際シンポジウム、ポーランド・クラクフ&ザコパネ
16. 1999–2003 年 ELPR(環太平洋の「消滅の危機に瀕した言語」に関する緊急調査研究)
17. 2001 年 9 月 27 日–12 月 27 日 ポーランド・スロベニアの日本語学科のある大学で「アイヌの言語と文化」集中授業
18. 2002 年 9 月 丹菊逸治さん(当時千葉大院生)が横浜国大に来てくれて勉強会開始。これが「樺太アイヌ語の会」に発展して現在も進行中。

19. 2011 年 3 月　一般向けの「樺太アイヌ語セミナー」開始、現在も進行中。

「ピウスツキ蠟管再生」の功績、波及効果

1. 樺太アイヌ語の新しい話者に出会うことができた。1974 年に藤山ハルさんが亡くなった時誰もがこの方言は絶えたと思っていた。樺太アイヌ語の寿命が 10 年伸びた。
2. 母語の音声が孤独な話者(タケさん)に大きな喜びを与えた。同時に研究者もリアルな勇気を与えられた。
3. 伝承者、実演者の絶えて久しいハウキの実態を再現できた(表 1)。
4. 蠟管演奏者と書写テキスト(1912)のインフォーマントが特定できた。話者 9 人中 4 人、東内忠蔵(ラマンテ)、山辺安之助(ヤシノシケ)、シシラトカ、イポフニの声が入っていた(表 2)。
5. 年譜などの周辺資料によって蠟管の収録年月日、収録地などの特定に手がかりが得られるようになった。
6. 研究の幅が国際的にも、学際的にも、時間的にも広がった。
7. 話者の絶えた言語を研究するしっかりした展望が開けた。
8. 樺太アイヌ語口承文芸を再現する手がかりができた。

［今後の課題］

以下の二つの緊急課題が考えられる。

1. 樺太アイヌ語テキスト研究(日本・ポーランド国際研究)
   ①B.ピウスツキ(1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*
   ②金田一京助(1912)あいぬ物語
   ③金田一京助(1913)北蝦夷古謡遺編

2. サハリン・クリール先住民の言語地名を手掛かりとしたサハリン・クリール地誌研究(日本・ロシア国際研究)

   例えば、アイヌ語地名についてであるが、①の N14, 15, 24, 25 の話者 Ipoxni の収録地は Xunup とあるが、これは hup-nup《トドマツ・原》と推定できる。しかし、実地調査をしないと特定できない。こんな地名がたくさんある。北海道とは異なるアイヌ語地名のクセも見つかるかもしれない。このような国際研究が盛んになれば領土問題などだんだん消えていくことを期待する。

2011. 9. 17 日本社会言語科学会招待講演
「樺太アイヌ語の終焉とその再生の可能性」資料より

１．樺太アイヌ語の半世紀４つのエポック

①黄金の常呂時代（1960–1974）
②暗黒の模索時代（1974–1983）
③たった一人の語り部の時代（1983–1994）
④アイヌ言語文化振興と再生の時代（1997–現在）

２．忘れられない人々、私が教わった語り部たち(敬称略)

①藤山ハル(1900–1974) 西海岸ライチシカ(来知志)、常呂在住
②太田ユク(1894–1980) 西海岸マオカ(真岡)、常呂在住
③長嵐イソ(1882–1964) 東海岸ナイロ(内路)、タライカ方言話者、斜里在住
④浅井タケ(1902–1994) 西海岸オタスフ(小田洲)、日高門別在住
⑤島村トキ(1899–1993) 西海岸ウシロ(鵜城)出身、日高門別在住

３．樺太アイヌゆかりの先達者たち

①B.ピウスツキ(1866–1918)リトアニア出身、ポーランド人
②チュフサンマ(1878–1936)東海岸アイハマ(相浜)出身、B.ピウスツキの妻
③山辺安之助(1867–1923)東海岸オチョポッカ(落帆)出身、南極探検隊にイヌ使いとして参加
④東内忠蔵、ラマンテ(1872–1908)東海岸トンナイチャ(富内岸)出身、村でただ一人のハウキの語り部
⑤千徳太郎治、タロンチ(1872–?)東海岸ナイブチ(内渕)
⑥北里 蘭ﾀｹｼ(1870–1960)ドイツ語教師、蠟管録音機で日本語のルーツを求めてボルネオから樺太まで録音旅行した、北里柴三郎の従弟
⑦金田一京助(1882–1971)岩手県出身
⑧山田秀三(1899–1992)東京出身
⑨服部四郎(1908–1995)三重県亀山出身
⑩知里真志保(1909–1961)幌別出身
⑪久保寺逸彦(1902–1971)網走市出身
⑫A.チェホフ(1860–1904)1890 年にサハリン旅行『サハリン島』
⑬ラペルーズ(1741–1788)フランスの探検家、『世界周航記』の中に樺太アイヌ語の語彙集が収められている。
⑭伊能忠敬(1745–1818)地理学者、上総の人、大日本沿海全図作成
⑮間宮林蔵(1775–1844)北方探検家、常陸の農家出身、1808(文化 5)年に樺太探検
⑯松浦武四郎(1818–1888)北方探検家、1856(安政 3)年に樺太探検

４．日本・樺太関係史

1787 ラペルーズ樺太探検
1808 間宮林蔵が樺太探検、間宮海峡を発見
1856 松浦武四郎が樺太探検
1875 樺太千島交換条約、アニワ湾一帯の樺太アイヌ 800 余人が北海道に強制移住帰化させられる。
1887 B.ピウスツキ樺太に流刑
1890 チェホフ樺太旅行
1896 ピウスツキ、刑が軽減されて移住農民の身分を得る。アイヌに初めて出会う。
1902–03 ピウスツキの蠟管録音機を使って録音が行われた。(樺太と北海道で)
1904 日露戦争、山辺安之助日本軍に協力して勲章を与えられる
1907 ポーツマス条約によって樺太島北緯 50 度以南を日本が統治することが認められ樺太庁が置かれる
1907 金田一京助はじめて樺太へ旅行。*トンナイチャで山辺安之助と東内忠蔵(ラマンテ)に会う*
1910 樺太アイヌ二人、山辺安之助、花森新吉が白瀬隊長南極探検隊に参加。
1915 金田一京助第 2 回樺太旅行
1935 久保寺逸彦樺太で採録
1940–43 知里真志保樺太に滞在
1944 夏 知里真志保再度樺太訪問
1945 第二次世界大戦終結。確かなデータはないが、敗戦により樺太の日本人居住者はアイヌ人も含めて 30 万人が日本へ引き揚げる。そのうち 28 万人が北海道へ引き揚げたと

いう。樺太アイヌの居住者は1500人足らずと思われる。昭和20年のデータしかない。

５．樺太アイヌ(K)の特徴、北海道アイヌ(H)と異なる点

(1) K には母音の長短の区別があるが、H にはない。ex. reera(K)/ rera(H)(風)

(2) H の音節末-p, -t, -k, -r が K では-h, -rV になる。ex. cep/ ceh(魚)、set/ seh(ベッド)、tek/ teh(手)、kur/ -kuh ~ -kuru (人々)

(3) K では、複数表示が文法的で義務的である。

(4) K では、数詞は 1 から 10 までは H と同じだが 10 以上は H が二十進法なのに K では十進法である。kunkutu(～十)、tanku(～百)、wantanku(～千)

(5) K では、老人ことばと若者ことばの区別が多くの語彙や語法についてある。ex.kurasno 若/ kunne 老(黒い)、kuani 若/ anoka 老(私)

(6) 口承文芸のジャンルや形式が K と H では異なる。ex. hawki(K)/ aynu yukar(H)(英雄叙事詩)、oyna(K)/ kamuy yukar(H)(神謡)

(7) K には、シカ(鹿)はいないがトナカイがいる。

(8) K には、獣皮や魚皮でつくる着物がある

(9) K 特有の民族楽器がある。tonkori(トンコリ、五弦琴)、kaco(シャーマンの太鼓)

６．参考文献(出版年代順)

Piłsudski, B. (1912) Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore, Cracow, in: K.Refsing, ed. (1996), Early European Writings on the Ainu Language, vol.10, Curzon

金田一京助(1913)『あいぬ物語』博文館(『金田一京助全集 5, 6』三省堂 1973 に収載)

金田一京助(1914)『北蝦夷古謡遺篇』郷土研究社

知里真志保(1942)アイヌ語法研究～樺太方言を中心として～、『樺太庁博物館報告第 4 巻第 4 号』(『知里真志保著作集 3』平凡社 1973 に収載)

服部四郎(1957)アイヌ語における年長者層特殊語、『季刊民族學研究』21-3(『日本の言語学』大修館 2002 に収載)

服部四郎(1961)アイヌ語カラフト方言の「人称接辞」について、『言語研究』39

村崎恭子(1963)千島アイヌ語絶滅の報告、『季刊民族學研究』27-4

古川(村崎)恭子(1971)樺太アイヌ語テキスト～タライカ方言民話～、『金田一京助博士米寿記念論集』三省堂

村崎恭子(1976)『カラフトアイヌ語』国書刊行会

村崎恭子(1977)呪文・呪術と言語――あるカラフトアイヌのシャーマンのこと――、『伝統と現代』1977 年 5 月号、伝統と現代社

村崎恭子(1979)『カラフトアイヌ語――文法編』国書刊行会

Alfred & Elzbieta Majewicz (1986), An Ainu-English Index-Dictionary to B. Piłsudski's Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore of 1912, Adam Mickiewicz University Press, Poznań Poland

小林忠雄編訳(1988)『ラペルーズ世界周航記――日本近海編――』白水社

田村すず子(1988)アイヌ語、『言語学大辞典』三省堂

村崎恭子(1992)B.ピウスツキ録音の樺太アイヌの YAYKATEKARA「恋の歌」、村崎恭子編『サハリンと B.ピウスツキ――B.ピウスツキ生誕 125 周年記念国際シンポジウム報告――ユジノサハリンスク 1991. 10. 31-11. 2――』ピウスツキをめぐる北方の旅実行委員会

村崎恭子(1989)『樺太アイヌ語口承資料 1』昭和 63 年度科学研究費補助金(一般研究 C)「樺太アイヌ語の記述的研究」報告書

NHK ビデオ『ユーカラ 沈黙の 80 年～樺太アイヌ蠟管秘話～』50 分 NHK 特集名作 100 選

村崎恭子(1993)『サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究――サハリンアイヌ語、ウィルタ語、ニブフ語』文部省科学研究費補助金(国際学術研究)研究報告書
村崎恭子・T.デグラーフ(1993)サハリンにおける少数民族の言語状況、『学術月報』46–3
村崎恭子訳編(2001)『浅井タケロ述 樺太アイヌの昔話』草風館
村崎恭子訳編(2001)『浅井タケロ述 樺太アイヌの昔話 CD10 枚版』草風館
村崎恭子(2001)B.ピウスツキ収録の昔話 11 編と民話 1 編――再転写によるアイヌ語テキストと日本語訳――、『少数民族言語資料の記録と保存――樺太アイヌ語とニヴフ語――』ELPR 報告書 A2–009、2001
村崎恭子(2003)ことばの永遠の命を願って――樺太アイヌ語の半世紀――、『少数言語をめぐる 10 の旅』大角翠編、三省堂
ジョン・バチラー著・村崎恭子校訂(2008)『ジョン・バチラー自叙伝 我が記憶をたどりて』北海道出版企画センター、北方新書 009
村崎恭子(2009)『樺太アイヌ語入門会話』緑鯨社
村崎恭子編(2010)『藤山ハル口述 樺太アイヌの民話(ウチャシクマ)ウェネネカイペ物語』ＡＡ研北東アジア研究第 2 巻、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
田澤守編(2011)『カラフトアイヌの稚咲内移住に関する研究調査――概報 1――』樺太アイヌ協会
村崎恭子(2012)話者の絶えた樺太アイヌ語――その終焉と再生の可能性――『社会言語科学』第 14 巻第 2 号 2012 年 3 月、3–16 ページ
村崎恭子編(2013)『藤山ハル口述 樺太アイヌ語例文集(1)』北海道大学アイヌ・先住民研究センター

(なお、斜体で示した資料は、今回の考察で蠟管再生音声と何らかの関連性が認められたもので注目すべきものである。)

［表 1］ピウスツキ蠟管の録音内容

樺太アイヌ関係ジャンルと編数

分類	ジャンル(アイヌ語)	日本語訳	P 蠟管数	蠟管番号
韻文の物語	(1) hawki	英雄詩曲	13 編	13,20,23,25,27,29,30,33,39,42,43,48,**55**
〃	(2) oyna	神謡	6 編	21,36,**38**,41,49,63
散文の物語	(3) tuytah	昔話		
〃	(4) ucaskuma	民話	1 編	**46**
歌謡	(5) yaykatekara	恋の歌	8 編	7,17,24,35,44,45,59-1,59-2
〃	(6) ihunke	子守歌	2 編	22,53
〃	(7) hecire haw	踊り歌	3 編	**15**,**37**,52-1
〃	(8) cipo haw	舟漕ぎ歌	1 編	**14**
〃	(9) sake sinohca	酒歌	1 編	40
〃	(10) rekuhkara	喉鳴らし	5 編	12-1,12-2,12-3,16,28
〃	(11) tusu	巫術	5 編	26-1,26-2,52-3,52-4,60
〃	(12) yayan yuukara	普通の歌	4 編	18-1,18-2,47,52-2
楽器演奏	(13) tonkori	トンコリ演奏	3 編	19-1,19-2,32
?	(14) ?	不明	2 編	18,**54**
		合計	54 編	

ただし、**太字の番号**の蠟管は話者が特定できるもの(7 編)。

- 上のデータは ICRAP(B.ピウスツキ北方資料研究会)の言語・音楽班(1983–1986)で再生された蠟管テープを、メンバーで実際に聞いたり古老に聞いてもらったりして、検討して得たものである。
- 樺太関係は 1902 年に録音された可能性が高い。
- ピウスツキ北方資料研究会言語・音楽班メンバーは以下の通りであるが、現在故人になられた方も

多く、所属などは当時のものである。(五十音順)浅井享(富山大)、池上二良(札大)、大島稔(小樽商大)、萱野茂(二風谷アイヌ資料館長)、切替英雄(北大)、佐藤知己(北大)、谷本一之(北教大)、田村すず子(早大)、中川裕(千葉大)、萩中美枝、藤村久和(北海学園大)、村崎恭子(北大)。

- 実際に再生された蠟管は全部で 63 本で、ケースだけがあって蠟管がないものが 6 本あり、蠟管が存在するものには蠟管ナンバーを 1 から 63 をつけ、ケースだけの蠟管には 64 から 69 の番号を便宜的につけてある。従って、実際の録音内容がケース記述と異なる場合が多々ありうる。
- 再生された 63 本のうち実際に音声が聞き取れるのは 54 本だけで、後は雑音ばかりで無音声で役に立たない。1 本(約 2 分半)の中に複数の演目が入っている場合がある。それをハイフンで示した。
- ラベル記述から得られる録音情報については、切替英雄「ピウスツキ蠟管ケースの記載」『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』国立民族学博物館研究報告別冊 5 号(1987)に詳しい。

［表 2］List of the Speakers in Piłsudski's "Materials 1912"

	話者	話者和名	年齢	収録地 (P 表記)	収録地 (M 表記)	収録月	年	蠟管ナンバー 記載情報
N.1	Numaru		53	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.2	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	w14, w15
N.3	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.4	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.5	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.6	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.7	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.8	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.9	Ipoxni		32	Xunup		Jan.	1903	w37, w55
N.10	Ipoxni		32	Xunup		Jan.	1903	
N.11	Ramante	東内忠蔵	36	Tonajci	Tonnayca	May	1903	w38 wenenekaypa
N.12	Sisratoka		28	Tarajka		Jan.	1903	
N.13	Ponciku		28	Aj	Ay	Jan.	1904	
N.14	Ipoxni		32	Xunup		Jan.	1904	
N.15	Ipoxni		32	Xunup		Jan.	1903	
N.16	Numaru		53	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.17	Cibeka		44	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.18	Ipoxni		32	Xunup		June	1903	w54
N.19	Ipoxni		32	Xunup		May	1903	
N.20	Jorusamma		42	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.21	Jasinoske	山辺安之助	38	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	w46?(sumari caskuma)
N.22	Jasinoske	山辺安之助	38	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.23	Jasinoske	山辺安之助	38	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.24	Ipoxni		32	Xunup		Feb.	1903	
N.25	Ipoxni		32	Xunup		Jan.	1903	
N.26	Nita		28	Aj	Ay	Dec.	1903	
N.27	Nita		28	Aj	Ay	Dec.	1903	

(話者総数 9 名)　　(蠟管 7 本・話者 4 名)

＊ Author & title: K.Murasaki, "Merits of Sound Reproduction on B.Piłsudski's Wax Phonograph Cylinders for Sakhalin Ainu Study."

資　料　編

ブロニスワフ・ピウスツキ年譜

井上 紘一

波蘭の志士ブロニラウ、ビルスドスキー氏なる人あり、郷里ウヰルナ市の中學校を卒へて聖彼得堡の法科大學に入り修學中、露國革命派と意氣相投じ、資を擲て其擧を助け、遂に露國警察の探知する所と爲りて捕はれたるは十九歳の時なりしが、樺太北部の寒村に流謫せられて、居ること十二年、土人ギリヤク及びアイヌと交わりて能く其言語風俗に精通し、ギリヤク考を草して露國地學協會記事に掲載されたり、後西伯利大陸に轉任するを許され、浦鹽斯德に移り地學協會博物舘管理の任に當り、傍ら新聞事業に從事中、露國大學院設置の亜細亜研究會より樺太南部在住「アイヌ」の實地調査を託され、樺太南部に渡りてアイヌの事情を調査研究すること三年有半、其間我が北海道アイヌの事情をも調査せんとして、同道に渡航したること二回、日露開戰の危機に迫りて去りたりしが、戰後より本邦に渡來し、東京に滯在すること五箇月、普く知名の人類学士に就きて研究を遂け、去月二十四日を以て歸國の途に就きたり……[1]。

1866

● 露暦 10 月 21 日(グレゴリウス暦 11 月 2 日)、ロシア帝国ヴィルノ県にある母の相続領地ズーウフ(現ザラヴァス)にて出生。ユゼフ・ピョトル・ピウスツキと、ビレーヴィチ家出身のマリア・ピウスツカの第三子で長男、ピウスツキ家の嫡嗣。両家ともリトワニアでは由緒正しい貴族の家柄である。

1875

● 7 月 4 日、「ズーウフ」の大火で屋敷がほぼ全焼。県都ヴィルノ(現リトワニア共和国首都のヴィルニュス)へ一家を挙げて引っ越した。

1877

● 9 月、年子の弟ユゼフ(のちの再興ポーランド共和国初代元帥)とともに、ヴィルノ第一ギムナジヤに入学。

1882

● 春、次々弟のアダムを含むピウスツキ 3 兄弟は同世代の若者らと語らって、自主教育サークル「スプイニャ」を組織した。最初の非合法活動に従事する。

1883

● 6 月 14 日、6 年次の学年末試験に失敗し、落第が宣告される。
● 7 月 10 日、ヴィルノ第二ギムナジヤへ転校。
● 11 月 4 日、母マリアの手術が執行されて、深く落ち込む。
● この頃、バニェヴィチ家の娘ゾフィアに恋をする。初恋であった。

1884

● 3 月 3 日、ゾフィア・バニェヴィチの許でピアノのレッスンを受ける。恋語らいの間、就

[1] 露國ビルスドスキー氏寄稿「樺太アイヌの狀態」(上)――『世界』二十六號五十七頁所収、東京:京華日報社(明治三十九［1906］年六月十日発行)――の「編者序」より。「ブロニラウ、ビルスドスキー」はブロニスワフ・ピウスツキを指しており、同記事は彼のアイヌ関係処女作である。原文はロシア語。訳者は上田將であることが判明している。「編者序」はあるいは訳者による「著者紹介」か。いずれにせよ、ピウスツキ本人の手になる略歴メモか、口頭で語られた経歴を、上田が邦訳した文章であろう。ピウスツキの正確な略歴が、1906 年には邦文で公表されていた。

寝中の母親を騙すべく、妹のマリアがピアノを弾き続けた。
● 春、末子(第 11、12 子)の双子弟妹が風邪をこじらせて死亡。
● 8 月 20 日、母マリア・ピウスツカが永眠する。享年 42 才。

1885

● 4 月末、ゾフィア・バニェヴィチは、母親の差し金でペテルブルグへ遣られ、鉄道関係事務所に就職。
● 8 月 3 日、追試を経て 7 年次を無事修了するも、ヴィルノ第二ギムナジヤは辞めることを決断。
● 8 月 19 日、ゾフィアを追って、帝都サンクト・ペテルブルグに到着。翌 20 日には彼女と再会するも、二人の仲は母親によって引き裂かれた。その後、傷心のブロニスワフを慰めたのが、母親とともに上京した年子の妹マリア・バニェヴィチであるが、その詳細は詳らかでない。
● 8 月 27 日、ペテルブルグ第五ギムナジヤの 8 年次編入学。

1886

● 6 月、同ギムナジヤ卒業。7 月 29 日、サンクト・ペテルブルグ帝国大学法学部入学手続きを済ませる。
● 12 月末、帰省し、クリスマス休暇をヴィルノで過ごす。ブロニスワフにとっては「最後の帰郷」だった。

1887

● 2 月 1 日、休暇を終えてペテルブルグに戻る。
● 3 月 3 日、ペテルブルグ市内で 3 月 1 日に起きたロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件の容疑者として拘束され、ペトロパヴロフスク要塞の独房に収容される。
● 4 月 15〜19 日、元老院に特設された法廷で審理が実施されて、ブロニスワフを含む全被告 15 名に死刑が宣告される。
● 4 月 23 日、皇帝の特赦により、ブロニスワフは懲役 15 年とサハリン流刑に減刑される。
● 5 月 8 日、レーニンの兄アレクサンドル・ウリヤノフら 5 名の死刑囚に対して、シュリッセルブルグ要塞で絞首刑が執行された。
● 5 月 27 日、父ユゼフが遠くから見守る中で、ブロニスワフを乗せた護送列車はペテルブルグを出発、これが父子の「永久の訣別」となる。護送列車は、モスクワを経由して 6 月 6 日、オデッサに到着した。
● 6 月 9 日、ロシア義勇艦隊社の「ニージニー・ノヴゴロド」号は、525 名の既決囚を載せてオデッサを出港。
● 8 月 3 日、同号はスエズ運河、コロンボ、シンガポール、長崎を経由して、この日に北サハリン西海岸のアレクサンドロフスク哨所に入港。
● 8 月 9〜12 日、ティモフスク管区ルィコフスコエ村(現キーロフスコエ)の監獄まで徒歩で護送される。
● 8 月〜12 月、懲役囚に科される通常作業に従事する。加えて、役人や入植囚の子弟の家庭教師も務めだし、近在のギリヤーク(現ニヴフ)たちとの交流が始まる。

1889

● ティモフスク管区警察署事務部での勤務開始。

1891

● 1 月、ルィコフスコエ村を訪ねたリェフ・シュテルンベルグとの出会い。友情は終生維持される。これを機にシュテルンベルグと協力して、ニヴフ研究を推進する。

1893

● 7 月、ルィコフスコエ測候所での勤務開始。

1896

● 5 月 14〜17 日、父ユゼフの嘆願書が功を奏し、5 月 14 日付皇帝戴冠特赦令が適用されて、刑期の「三分の一」が削減されることになる。父親は 92 年 4 月、94 年 11 月にも同様な嘆願書を提出したが徒労に終わっていた。
● 7 月〜8 月、測候所設営のためコルサコフスク管区へ派遣される。アイヌの人たちとの初邂逅。

1897

● 2 月 27 日、軽減された刑期の 10 年が満了し、強制労働から解放されて、ティモフスク管

区ルィコフスコエ村に農民として登録される。
- 5 月 23 日、ロシア帝室地理協会プリアムール支部のアムール地方研究会(OIAK)は、同研究会博物館にブロニスワフを採用すべく、その居住地をウラヂヴォストクへ移すよう求める請願書を提出。しかし事態が紛糾して、中々結着しなかった。
- 9 月～12 月、アレクサンドロフスク哨所にて、サハリン島医務局主任 L.V.ポドゥプスキー医師の下で文書係を務める。勤務は翌 98 年 4 月まで継続された。

1898

- 4 月 20 日、民族学関係処女作「樺太ギリヤークの困窮と欲求」擱筆、論文は『ロシア帝室地理協会プリアムール支部紀要』(4 巻 4 分冊、1898 年、ハバロフスク刊)に掲載された。
- 5 月～8 月、ルィコフスコエ村の測候所に勤務。夏には父ユゼフが再び嘆願書を提出して、息子のウラヂヴォストク移転への高配を求めた。
- 11 月 28 日、プリアムール総督はブロニスワフのウラヂヴォストク居住を許可する。
- 11 月～12 月、OIAK 運営委員会はニヴフ民族資料の収集をブロニスワフに託し、200――11 月半ばに 140、12 月末に 60――ルーブリを送金した。

1899

- 2 月、ウラヂヴォストクにおける 1 年間の在住許可証が発給された――但し、警察の監視下に置かれる。
- 3 月初旬(12 日頃)、ウラヂヴォストク到着、OIAK 博物館の物品管理人(年俸 600 ルーブル)として館内に住みこむ。
- 10 月 28 日、パリ万博への極東地方関連出展品が、ロシア義勇艦隊社の「ヘルソン」号で搬出された。これは P.P.セミョノフ・ロシア帝室地理協会副総裁が OIAK 博物館に託した事業。出展品の構築はブロニスワフが担当、自らの収集したサハリン・ニヴフ資料 158 点も含まれていた。1900 年のパリ万博では、国際審査員がこの極東コレクション展示を高く評価して、ブロニスワフに銀牌を授与した。

1900

- この年、ブロニスワフは OIAK 博物館主事を務める。
- 3 月 17 日、自らの年俸を半分に減額して、残額では館に必須の標本製作者を雇用するよう申し出る。

1901

- この年、ブロニスワフは OIAK 博物館の司書を務め、沿海州統計委員会とも雇用契約を結ぶ。書記の N.V.キリロフ医師に協力して、同委員会の活動に積極的にかかわる。
- 2 月 23 日、N.A.パリチェフスキーOIAK 副議長と連署で作家チェーホフへ、「サハリン島と極東の旅」に関する著作の寄贈を求める書簡を送る。作家からは当該著作が寄贈された。
- 3 月 15 日、OIAK 準会員に選出される。
- 5 月 17 日、OIAK 博物館退職が承認される。ブロニスワフは衰弱した健康を養生すべく、より乾燥したブラゴヴェシチェンスクへの転地を願い出て、博物館での有給勤務も辞退することを申し出ていた。その背景には、パリチェフスキー副議長との確執があった。
- 夏、ニヴフ少年のインディンがサハリンからウラヂヴォストクに到着。ブロニスワフは、サハリンの教え子で最も聡明だったインディンを、勉学継続のため州都に呼び寄せることに成功する。
- 8 月 27 日、OIAK 博物館は月俸 50 ルーブリでブロニスワフを臨時雇用する。
- 10 月 18 日、プリアムール総督からブラゴヴェシチェンスク居住が許可されたが、転地療養の着手は急がなかった。この頃からサハリン出張をめぐってロシア帝室科学アカデミーの打診があったからであろう。

1902

- 2 月 17 日、科学アカデミー副総裁がブロニスワフへ電報を送り、民族資料収集を目的とする南サハリン出張を要請した。
- 4 月 2 日、父ユゼフ・ピウスツキがペテルブルグで永眠する。享年 69 才。
- 5 月 5 日、沿海州知事はサハリン島知事へ、「ピウスツキの行動に瑕疵はなく、州行政府に勤務している」と報告。
- 5 月 31 日、プリアムール総督は、アカデミーの委嘱によるブロニスワフの南サハリン出張を許可する。

- 7 月 5 日、中東鉄道会社の汽船「ゼーヤ」号でウラヂヴォストク港を出発、サハリン島へ向かった。ブロニスワフに託された任務はアイヌとオロッコ(現ウイルタ)の民族資料収集。彼はこのとき旅行許可証、1,000 ルーブリの出張費、OIAK 運営委員会から委託された民族資料購入の前金 50 ルーブリ、そしてカメラと(恐らく)エディソン式蓄音器も携えていた。また肺結核を発病したインディン少年も、故郷の島で養生させるべく帯同していたであろう。
- 7 月 11 日、コルサコフ(旧大泊)に到着。13 日、シヤンツィ村(旧落合、現ドリンスク)を訪ねる。
- 7 月 16 日～8 月 6 日、西海岸のマウカ(旧眞岡、現ホルムスク)地区に滞在して、アイヌ資料の収集や人口調査に従事し、蓄音器でアイヌの歌も収録した。
- 8 月 6 日、セミョノフ=デンビー商会の漁船に便乗して函館へ向かう。マウカ・コルサコフ間連絡船の当期営業が終了したため、函館を経由してコルサコフへ戻ったもので、函館には 3 週間滞在した。その間は G.P.デンビーの屋敷に逗留して、子息や森高夫妻(メリ夫人の兄弟)の案内で市内や近郊を見物する。但し、これは日露両国にとって非合法の「初来日」だった。
- 8 月 30 日、函館よりコルサコフに帰着。
- 9 月 10 日か 12 日、コルサコフにて M.N.リャプゥノフ・サハリン島知事と懇談。13 日以降はオトサン(小田寒、現フィルソヴォ)、セラロコ(白浦、現ヴズモリエ)の両村を訪ね、熊祭りに参加した。
- 10 月 8 日、リャプゥノフ知事の裁定で、ティモフスク管区在留農民身分に算入される。
- 11 月 14～24 日、シヤンツィ、オトサンを歴訪し、それぞれの村でアイヌ子弟のための識字学校開設に尽力する。いずれも冬場に開校され、前者では 18 才のインディン、後者では 27 才のタロンヂ(千徳太郎治)が教師を務めた。
- 11 月 24 日、東海岸のルレ村(魯礼)を訪ねて聴取り調査に従事、「ハウキ(英雄詞曲)」を初めて採録する。12 月 10 日、シヤンツィ村に戻った。
- 12 月 14 日、アイ村(相浜)に移り、アイ・コタン酋長バフンケ(木村愛吉)のロシア式丸太小屋に居候して越冬した。バフンケ宅はブロニスワフの定宿となるであろう。

1903

- 年初、ペテルブルグのシュテルンベルグから電報を受け取る。ブロニスワフの希望通り、南サハリン調査の継続を認めるとの内容で、前年に創設された「中央・東アジア研究ロシア委員会」が以降の調査資金を提供することとなる。彼は同委員会の調査助成第 1 号として、1903 年度に 700 ルーブリ、1904 年度は 750 ルーブリを受領する。1905 年度分は 1,000 ルーブリと算定されたが、調査は 6 月に中断されているから、全額は受け取れなかったであろう。
- 2 月 1 日以降 4 月 29 日までの 3 ヶ月間、ルレ村に半月(2 月 15 日～3 月 1 日)滞在して昔話や「ハウキ」の翻訳に従事したほかは、アイ村に腰を据えてアイヌ語学習などに励んだ。「バフンケ酋長の愛姪チュフサンマ/シンキンチョウ」との恋物語は、この春に出来したものと推定される。
- 2 月 28 日、インディンは肺結核が重篤化して入院、授業は中断を余儀なくされる。彼は 4 月初めにコルサコフの病院で息を引き取った。
- 4 月 24 日、1902/03 年の冬にシヤンツィ、オトサンの両村で実施した識字学校の活動報告を擱筆。
- 4 月 30 日～5 月 16 日、小舟で東海岸伝いに南下し、オブサキ(負咲)、オチョフポカ(落帆、現レスノエ)、トゥナイチャ(富内、現オホーツコエ)、アイルポ(愛郎、現スボヴォドナヤ)を歴訪。トゥナイチャでは山邊安之助らから「ハウキ」や「オイナ(神謡)」を採録した。
- 6 月 6 日、北サハリン踏査のため、多来加湾へ向かう便船を確保すべくコルサコフへ赴き、そこで W.シェロシェフスキの手紙に接する。5 月 5 日(グレゴリウス暦で同 18 日)付の手紙は「交通丸が来函したら、あなたと一緒か、たとえあなた抜きでも直ちにピラトリ(平取)へ出発する」と追記していた。4 月半ば(グレゴリウス暦で 5 月初旬)に函館入りを果たしていたシェロシェフスキは、遂に痺れを切らして、この最後通牒に及んだわけである。ロシア地理協会が派遣した北海道アイヌ調査の顛末は、本書に付載したシェロシェフスキの旅行記「毛深い人たちの間で」を見られたい。ところでブロニスワフの方は、直ちに北サ

ハリン行きを中止、便船の契約を解除してナイブチ(内淵、現ウスチ・ドリンカ)へ走り、日本語の通訳(千徳太郎治)を雇い入れたものの、サハリン島知事が出国を許可せず 2 週間余り足止めを食らった。

- 6 月 24 日(20 日？[2])、エディソン式蓄音器一式を携えたブロニスワフは、千徳太郎治を伴ってコルサコフを出港し、海路函館へ向かった。
- 7 月 8～10 日頃(グレゴリウス暦[3])、ピウスツキ一行は函館港に着いたと推定される。かくて発足したロシア地理協会調査団(シェロシェフスキ団長、ピウスツキ団員、千徳通訳)は、直ちに調査計画を策定する。
- 7 月 30 日、函館には既に「数週間」滞在しており、千徳と協力してアイヌ語テキストの露訳を完成させ、弟妹との面会にサハリンへ赴いたシェロシェフスキの帰函を待機中と、シュテルンベルグへ報告している。シェロシェフスキは 7 月 31 日か 8 月 1 日に帰函を果たしたとみられる。
- 8 月 2 日頃、ピウスツキは函館で路頭に迷うアイヌの人たちと遭遇する。和人に騙されて、大阪から辛うじて函館までたどり着いた、白老のノムラ・シパンラム(野村芝蘭)ら一行であった。調査費から 5 円を捻出して、野村らの帰郷を支援した。これが機縁で、調査団はまず白老村を訪ねることになる。
- 8 月 4 日夜半、シェロシェフスキ、ピウスツキ、千徳の 3 名は「肥後丸」に乗船して室蘭港へ向かう。
- 8 月 5 日早朝、「肥後丸」が室蘭港に到着。調査団一行は、室蘭から鉄道で白老に至るも出迎えはなく、線路北側の和人村の小旅館に荷物を預けて、南側のアイヌ・コタンへ赴く。散策中の 3 名はシパンラムの姉妹イシュウチ、妻ネンタシク、兄らと遭遇し、シパンラムの広壮な「チセ」に案内される。シパンラムは、賓客に鮮魚を振る舞うべく出漁して不在だった。シパンラムの兄(名前不詳)はその後、彼らを海辺へ案内する。3 名は夕刻に旅館へ戻って就寝。
- 8 月 6 日朝、就寝中の彼らの部屋をシパンラムが訪ねてきて、アイヌ式挨拶「カラプテ」を交わし合う。その後、アイヌ・コタンでの宿泊をめぐる交渉が展開されて、シパンラムが、白老郡各村戸長役場の「各村戸長」から了解を取り付けることを条件に、自宅への受入れに同意するや否や、当の各村戸長――当時の各村戸長の名は佐伯茂治である――が登場して「許可」を与えた。同日夕刻、調査団の 3 名はシパンラム宅に転がり込んで、食客となる。
- 8 月 7 日朝、シパンラムは即席の五右衛門風呂をしつらえさせて、客人に朝風呂を提供する。旅の疲れと汚れを洗い落とした 3 名は、心機一転して、白老での調査研究に着手した。
- 8 月 12 日正午前、白老コタンの野村芝蘭宅にさしかかった「青森の人」飯島桂と友人の生田は、ピウスツキに呼び止められて、そのままチセの中へ連れ込まれる。シェロシェフスキもピウスツキも「上着をぬぎ、日本の単衣を纏ひ、ポンチ絵の如き姿にて研究し居たり」と飯島は記している。早くも午後 1 時には、調査団の 3 名と日本人 2 名が連れだって社台へ赴き、和風化の著しい田村弥吉宅で休息する。彼らは夕刻に野村宅へ戻り、風呂をつかい、アイヌ料理に舌鼓を打ったのちに、ピウスツキの蓄音機から流れる「樺太アイヌの謡歌」に耳を傾けた。この夜は、彼ら 5 名とシパンラム夫妻が大きなチセの中で雑魚寝する。
- 以降 8 月末前後まで、調査団一行は白老に逗留する。シェロシェフスキの「毛深い人たちの間で」は、白老とその周辺の風物やアイヌの生活をつぶさに記録するが、正確な日付を欠くため「年譜」への収録は不可である。詳細は同旅行記の記載に譲りたい。
- 8 月末前後の一日の正午、平取を目指す調査団一行は、白老駅頭でアイヌたちが見送る中、列車で白老を発って早来駅へ向かった。早来では乗馬数頭と道案内を雇い、小さな旅籠に 1 泊する。
- 翌日、日高地方の原生林を騎乗踏破し、鵡川で一泊する。平取までの行程は白老から鵡川までが 30 ㌔、鵡川から平取まではさらに 30 ㌔、併せて 60 ㌔である。鵡川では、ジョン・

[2] ピウスツキの復命書はコルサコフ出発を「6 月 20 日」と明記するも、在コルサコフ日本領事館が発行した蓄音機搬出許可書の日付は「7 月 7 日」(露暦「6 月 24 日」)であった。本「年譜」では後者を採用する。

[3] 露暦では 6 月 25～27 日頃。以降、北海道滞在中はグレゴリウス暦を採用する。

バチェラーの布教で長老派教会に帰依した「プロテスタントのアイヌら」が、バチェラー師の札幌からの指示で調査団を出迎える。

- 翌々日、調査団一行は日高山麓の山道を走破して沙流川の河岸に達し、同日午後には平取コタンに到着した。村で唯一の旅籠に止宿する。9 月初旬のことと推定される。シェロシェフスキの「毛深い人たちの間で」に見える平取の件は、白老に比して精彩を欠くが、1 週間余りの滞在と想定されるからやむを得まい。シェロシェフスキが記す波乱万丈は、とみに険悪化していく日露関係をもろに反映している。調査団は、函館のロシア領事を介して伝えられた、ロシア大使館の調査中止命令には抗えなかった。とはいえ、ピウスツキが平取で遂行した調査は、短期間とはいえ頗る実り多いものだった。のちに執筆する学術論文では、平取で聴取した情報にかなり言及しているからである。
- 9 月 10 日頃、調査団一行は騎乗で平取を後にして、最寄りの鉄道駅――やはり早来であったと想定される――に至り、一両日中には札幌に到着したであろう。
- 9 月 12 日前後、シェロシェフスキ、ピウスツキ、千徳の 3 名は札幌入りを果たしたと推定される。バチェラーの「珍客来る」(『ジョン・バチラー自敍傳』所収)によると、彼らは「二三日」札幌に滞在し、ピウスツキはバチェラー宅に「少時く」宿泊したという。一方、シェロシェフスキは「一昨日/?!/」――即ち 9 月 15 日――、「豊平館に投宿し、道廳に出頭」する(小樽新聞 9 月 17 日付記事「波蘭人の土人研究」)。札幌での彼らの動静は概して不詳であるが、唯一知られるのは、シェロシェフスキが「博物館」を訪ねたという事実のみ。恐らくは札幌農学校の博物館であろう。千徳が通訳としてこれに同行したのは確実ながら、ピウスツキの参加は不詳である。
- 9 月 15 日早朝(?)、調査団一行は、プラットホームでバチェラーに見送られて札幌駅を後にした(「珍客来る」)。室蘭到着後、ピウスツキ(と千徳?)は、そのまま連絡船に搭乗して、同日中に函館に至るが、シェロシェフスキの函館帰着は 9 月 17 日だった。別行動の経緯は不明である。
- 9 月 19 日、ロシア地理協会調査団が函館で解散し、ピウスツキと千徳は半月ほど日本に滞在したあと(?)、サハリンのコルサコフへ戻る。
- 9 月 24 日[4]、ピウスツキと千徳がコルサコフに帰着。
- 9 月 28 日、アレクサンドロフスクのリャプゥノフ知事から、この日付の私信が届く。知事は、コルサコフスク管区でのアイヌ実態調査と、異族人統治規定の改正をめぐるサハリン案の起草を担当するよう懇願していた。ピウスツキは、南サハリンでの民族資料収集に加えて、上記の 2 課題も請け負うことになる。
- 9 月 29 日、アイ・コタンの定宿に戻る。
- 9 月下旬、ブロニスワフとチュフサンマは、バフンケ酋長の「取計らひで[…]全部落民が集まつて盛大な結婚式を擧げた」(樺太日日新聞 1934 年 1 月 10 日付記事「愛し夫よ何處?」)[5]。
- 10 月 14 日～11 月 29 日、コルサコフに長期滞在して、ナイブチに開設する識字学校のために資金や現物(学用品・図書)の寄付を募る。フォン・ブンゲ知事代行からは、支援金 200 ルーブリの約束を取りつけた。11 月 29 日、ナイブチ村に到着。
- 12 月 2 日、ナイブチに開設された寄宿制学校では、千徳太郎治が教師を務める傍らで、ピウスツキも教鞭を執った。瞠目される教育法は、アイヌ語をキリル文字で表記する形での作文指導である。自然発生的に「アイヌ文語」が成立してゆく。千徳らは 1906 年に滞日中のピウスツキとの間で、まさにこの「文語」を駆使して手紙を交換しあった。
- 12 月 18～20 日、生徒たちを引率してアイ村へ赴き、バフンケと共催した「狐送り」の儀式を見学する。

1904

- 1 月 21 日、ロシア帝室地理協会は、学術研究への顕著な寄与に対して、ピウスツキに銀牌を授与する。特に評価されたのは、人類学民族学博物館のために収集した樺太アイヌ資料とその整理分析、地理協会が派遣した北海道アイヌ調査への参加協力、OIAK 博物館主事並びに OIAK 書記としての業績などである。
- 1 月 26 日(グレゴリウス暦 2 月 8 日)、日露戦争勃発。ナイブチの寄宿制学校では、開戦の

[4] グレゴリウス暦では 10 月 7 日。これ以降、露暦に復帰する。
[5] 但し、記事に「年」の記載はなく、「1904 年」は編者の推測である。

知らせに怯えた父兄が先を争ってわが子を引き取りだして、予定の 3 月末を待たずに閉校を迎えた。

- 2 月 12 日、チュフサンマが、ピウスツキの長男木村助造を出産[6]。
- 3 月 31 日～11 月 13 日、戦時下にもかかわらず、前年 6 月に急遽中止した北サハリン踏査を敢行する。アイ村を犬橇で出発したピウスツキは東海岸を北上して、4 月 5 日に最北端の村ナイェロ(内路、現ガステロ)、翌 6 日にはタライカ(多来加)地方のチフメネスク哨所(敷香、現ポロナイスク)に至る。
- 4 月 6 日～6 月 12 日、タライカ地方に逗留してアイヌ、ウイルタ調査に従事。その間、4 月 22 日～5 月 4 日、5 月 22 日～6 月 1 日にはナイェロ村に滞在した。
- 6 月 25 日～7 月 17 日(グレゴリウス暦 7 月 8 日～30 日)、弟のユゼフ・ピウスツキが訪日して東京に滞在する。ユゼフは、日露戦争で捕虜となったロシア軍将兵からポーランド人を選抜して戦闘部隊を組織し、満州戦線へ投入する案を以て外務省や参謀本部と掛け合うが、成就しなかった。
- 6 月 13 日～10 月 7 日、ブロニスワフの方は、チフメネスク哨所からポロナイ川を舟で遡上したのち、上陸してティミ川上流域へ至り、近在する河谷に立地するニヴフ集落(ウスコヴォ、ハジリヴォ、スラヴォ、コムルヴォ、チルヴォ、プロヴォ、ウルンクルヴォ)を舟で巡回して、ニヴフ調査に従事した(7 月 13 日～8 月 9 日)。前後にはティモフスク管区のロシア人村落オノル(6 月 24 日～7 月 8 日、9 月 2～25 日)や、刑期を勤めたルィコフスコエ村(8 月 10 日～9 月 1 日)にも逗留する。当初はオノル村で越冬する心積りだったが、予定を変更し、9 月 25 日には同村を去って帰途に就く。
- 8 月、1903/04 年の冬にナイブチで実施した識字学校の活動報告をルィコフスコエ村にて擱筆。
- 9 月 26～28 日、ポロナイ川を下り始めるや猛烈な台風と遭遇、アブラモフカ村に避難する。29 日、増水した川に漕ぎ出したところで舟が転覆して、九死に一生を得るような体験もした。
- 10 月 7 日、チフメネスク哨所を経てナイェロ村に到着。当初の予定では同村で熊祭りに参加し、またナイブチから千徳も呼び寄せて、ナイェロのアイヌやチフメネスクのウイルタの子弟のために識字学校を開設するはずだったが、戦時下の混乱でいずれも実現せず、4 名の少年に対して識字教育を実施できたのみ。同村には 11 月 1 日まで留まった。
- 11 月 13 日、家族の待つアイ村に帰着。
- 11 月 16 日、コルサコフに赴く。これ以降は 1905 年 2 月 10 日まで、活動拠点を同地に移したようである。そこで人心の動揺、飢餓、物価高騰を目の当たりにしたピウスツキは、予定していた西海岸調査を断念。離島して大陸に居を移すことを考え始めるのも、この頃のことであろう。
- 11 月末、オトサン、セラロコを訪ねて、熊祭りに参加する。
- 12 月頃～翌年 2 月頃、戦時下で識字学校の開設が叶わぬため、希望者を対象に「訪問授業」を実施する。訪問教師を務めたのは、千徳太郎治と、インディンの教え子である 18 才のトゥイチポである。前者はルレ、ナイブチ、アイ、オトサン、セラロコの 5 村、後者は自身のシヤンツィ村をそれぞれ担当した。

1905

- 1 月 27 日～2 月 9 日(?)、シヤンツィ、ナイブチ、アイ、オトサンを歴訪する。
- 2 月 10～23 日、最後のコルサコフ滞在。離島を控えての残務整理――収集した民族資料の発送と保全措置、採録したテキストの翻訳、統計データの収集、資料製作者らとの清算など――に奔走する。
- 2 月 23～26 日、ウラヂミロフカ(豊原、現ユジノ・サハリンスク)に滞在。旅に携行する食糧を辛うじて入手することができた。
- 3 月 1～5 日、アイ村にて身辺整理。5 日、妻のチュフサンマ、息子の助造との離別。
- 3 月 6 日、オトサン村にて友人のシャマンが「別れの儀式」を執行してくれた。

---

[6] 子息木村和保氏の御教示よると、昭和 38 年 9 月 14 日付で作製された戸籍では、父上の生年月日が「明治 36 年 2 月 12 日」と記載されているとのこと、生年は 1903 年である。しかし、編者はそれを 1 年遅らせることを余儀なくされた。

●3 月 10 日、ピウスツキは 7 日にマグンコタン(馬群潭、現プガチョヴォ)に至り、犬橇の到来を待機していたが、この日に北へ向けて出立。ナイェロを経由して(11 日)、チフメネスク哨所へと向かう。
●3 月 12～23 日、チフメネスク哨所に逗留。折しもインフルエンザが猖獗を極めて、ピウスツキも罹患したため、出立に大幅な遅延が生じた。
●3 月 28 日～4 月 13 日、オノル村に滞在。
●3 月、リャプゥノフ知事に依頼された「アイヌの習俗整備と統治に関する規程草稿(トムスク手稿)」をオノル村にて擱筆。
●4 月 13 日～5 月 12 日、ルィコフスコエ村に逗留。同村に滞在中、「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」、「アイヌの習俗整備と統治に関する規程草稿」――リャプゥノフ知事に提出された修正稿――を、この順序で擱筆した、とピウスツキは記している。
●4 月 28 日、1904/05 年の冬に実施した識字教育の活動報告をルィコフスコエ村にて擱筆。
●4 月 30 日、刑期が満了していたピウスツキは、1904 年 8 月 11 日付特赦令にもとづき、首都を除く帝国全域の希望する場所に居住することが可、というリャプゥノフ・サハリン島知事の裁定が通達された。念願のヴィルノ県(現リトワニア共和国)への帰郷が可能となる。
●5 月 12～30 日、デルビンスコエ村(現ティモフスク)に滞在。
●6 月 11 日、小型舟艇「ウラヂヴォストク」号でアレクサンドロフスク港を発ち、サハリン島から脱出。
●6 月 12 日、アムール河口のニコライェフスクに到着し、10 日ほど滞在する。ハバロフスクへ赴く途上でマリインスクに立ち寄り、アムール地方に在住するアイヌの人たちの消息を訊ねた。
●7 月初旬、ハバロフスクに到着。
●7 月 14 日、中央・東アジア研究ロシア委員会の W.ラドロフ議長宛に近況報告を擱筆。ハバロフスクで接したシュテルンベルグ同委員会書記の手紙に、約束されたロシア横断鉄道無料切符の送付は無理だろう、とあるのは「まことに遺憾」と記している。
●8 月初め、3 年ぶりにウラヂヴォストクに戻る。
●8 月 5 日、12 日、「ピウスツキ OIAK 準会員のサハリン調査の成果討論会」と銘打つ OIAK 主催の連続講演会が催される。プログラムは(I)異族人の許への旅、(II)サハリン異族人の歴史的過去、(III)異族人をめぐる学術協会の課題を謳っていたものの、18 日に予定されていた第 3 回討論会は、開会の 1 時間前に日露講和の知らせが届いて、お流れとなる。
●8 月 23 日(グレゴリウス暦 9 月 5 日)、日露間のポーツマス講和条約が締結される。
●9 月中旬(?)、日本占領下の南サハリンを訪ねて、アイ村で家族――チュフサンマ、助造――と会う。家族引取りの交渉は、バフンケ酋長の峻拒に遭って不首尾に終わった。家族との「永久の訣別」。
●10 月初旬、神戸を訪ねてニコライ・ラッセル(スヂロフスキー)の事務所を手伝う。
●11 月、OIAK の委嘱により、アムール流域のトロイツコエ村でナーナイ民族資料を収集する。
●11 月 5 日、ハバロフスクの全市民集会で演説、「市民ビューロー」設立を提案して 100 ルーブリを寄付。
●12 月 5 日(グレゴリウス暦 12 月 18 日)、友人の N.P.マトヴェイェフ(筆名ニコライ・アムールスキー)、彼の 11 歳の娘ゾーヤとともに、ウラヂヴォストクを出港して日本へ向かう。この日以降、ピウスツキがロシアの地を踏むことはなかった。
●12 月 7 日(グレゴリウス暦 12 月 20 日)前後、ピウスツキら一行の乗船は、恐らく敦賀港か門司港に入航して、脚部疾患治療のため入院するゾーヤを、ピウスツキも福岡医科大学病院まで送り届けたものと推定される。
●12 月 8 日、ピウスツキの長女木村(結婚後の姓は大谷)キヨ、アイ村で誕生。

1906

●1 月初め前後[7]、ピウスツキ上京。
●1 月 6 日頃、報知新聞記者の取材を受ける(報知新聞 1 月 7 日付記事「浦鹽よりの二珍客」)。

[7] 露暦では 12 月中旬に当たる。これ以降はグレゴリウス暦を採用し、必要の際は露暦も括弧内に併記する。

記事にはピウスツキが築地の「セントラルホテルに投宿」とある。同記事は 1 月 10 日付の北海タイムスと馬關毎日新聞にも、ほぼ同じタイトルで転載されている。なお、7 ヵ月半に及んだ日本滞在中の彼の動静は、澤田和彦作成の「ブロニスワフ・ピウスツキ日本暦」が詳述しているので、参照されたい。本「年譜」では重要事項を摘記するに留める。

- 1 月下旬～7 月初旬、京橋区尾張町の箱館屋裏二階に居を定める。ピウスツキが在京中に親しく付き合ったのは二葉亭四迷(長谷川辰之助)、横山源之助、上田將、宮崎民蔵・寅蔵(滔天)兄弟、福田秀子、橘糸重らである。坪井正五郎、鳥居龍蔵、關場不二彦(理堂)、小谷部全一郎、神保小虎、村尾元長などアイヌ研究者、また黄興、宋教仁など民報社系の中国人革命家、そして亡命ロシア人たちとも交流があった。新聞に掲載された関連記事は「露國人類学者」(東京朝日新聞、2 月 8 日付)、「日本婦人の研究」(報知新聞、3 月 9 日付)、「外人の日本婦人研究」(北海タイムス、3 月 20 日付)など。
- 3 月 16 日(露暦 3 月 3 日)、ロシア交通省官房からピウスツキ宛に送付された、サンクト・ペテルブルグまでの無料鉄道切符――一等車 2 席分――がウラヂヴォストクに到着する。しかし、余りにも遅すぎた。
- 6 月 18 日頃、本郷の中黒写真館で二葉亭と一緒に記念撮影を行う。
- 6 月、肉親がパリ経由の電信為替で、長崎の「ヴォーリャ」社気付として送金した 500～600 ルーブリ(帰国旅費)が到着する。しかし長崎では受け取れず、結局、発信地のクラクフで受領することとなる。
- 7 月、東京を後にして長崎へ赴く。長崎では稲佐の志賀親朋宅に居を定める。
- 7 月 10 日、アイヌ関係処女作の「樺太アイヌの狀態」(上)が、上田將の邦訳で京華日報社の月刊誌『世界』26 号で公刊される。これは、ピウスツキがルィコフスコエ村で擱筆した「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」前半部の日本語訳である。
- 7 月 30 日、米国の大北汽船会社の「ダコタ」号に搭乗して長崎を離れる。
- 8 月 1 日、「ダコタ」号は 7 月 31 日に神戸に寄港したあと、この日、横浜に入港する。
- 8 月 3 日、「ダコタ」号が横浜港を出航し、太平洋上を一路シアトルへ向かった。
- 8 月 10 日、ピウスツキの「樺太アイヌの狀態」(下)が『世界』27 号に掲載される。
- 8 月 16 日頃、「ダコタ」号がシアトルに入港。以降は大陸横断鉄道で米国を東進、シカゴを経由してニューヨークに着く。さらに大西洋を横断して欧州に至り、ロンドン、パリを経て、オーストリア統治下のポーランド(ガリツィア)に到着する。
- 10 月 21 日頃、ポーランドの古都クラクフに着き、弟ユゼフの滞在する保養地ザコパネへと向かう。19 年半ぶりの兄弟再会。
- 11 月 7 日頃、クラクフに戻り、翌年の 5 月末までこの町を拠点にする。
- 11 月 20 日(露暦 11 月 7 日)、サハリン島知事は、1905 年 10 月 21 日付の特赦令にもとづき、ピウスツキに対する警察の監視と、首都での居住権制限を解除し、また裁判で喪失した諸権利も復活させる、との裁定を通達する。遅まきながら、ピウスツキ家の領地や資産の相続権を回復、首都にも住めるようになる。
- 11 月 21 日、二葉亭四迷宛書簡に「すでにこちらで私に許嫁が用意されていて、たぶん結局は結婚することになるでしょう……。私は彼女と二十年も会っていませんけれど」と記したが、マリア・ジャルノフスカをめぐって確認できる最も早い言及である。彼女は旧姓バニェヴィチ、ブロニスワフの初恋の相手(ゾフィア・バニェヴィチ)の年子の妹で、彼にとっては単なる幼馴染に過ぎなかった。1886 年の秋、姉のゾフィアとの仲を引き裂かれて落ち込むブロニスワフに同情するうちに、二人は相愛の仲になった模様である。マリアは 1889 年に、かなり年上の資産家ヤン・ジャルノフスキと結婚したが、この当時は、一人息子のヤンを夫の許に残して別居中であった。
- クリスマス週間、ヴィルノに在住する末妹ルドヴィカや叔母のステファニア・リプマンが、相次いでブロニスワフを訪ねる。ルドヴィカは 1903 年の秋、サハリンを訪ねることを計画するも、日露関係の紛糾で断念していた。積もる話に花が咲いたであろう。
- 年末、ペテルブルグ在住の弟カジミェシュがジャルノフスカの住所を、兄の求めに応えて手紙で伝える。

1907

- 1 月 21 日頃、ペテルブルグのジャルノフスカ宛に「懐旧?」の文を記すも発送しなかったが、4 月 16 日には第 2 信を執筆する。いずれでも、彼女が 1903/04 年のクリスマス週間に、

サハリンのブロニスワフへ電報を送った事実に言及しており、それへの返信との心算が窺える。第 2 信では「夏にザコパネへ行きます。[そこで]会うのはどうでしょうか。いずれにせよ蒸し暑いピーテルを、数週間は後にされるでしょうから」と記している。

- 5 月 17 日、マリア・ジャルノフスカがクラクフに到来する。20 年ぶりの再会であった。
- 6 月初め～7 月後半、ジャルノフスカとともにチェコの保養地カルルスバードで静養する。
- 8 月、カルルスバードからクラクフへ戻り、ほどなくガリツィアの保養地ザコパネへ居を移す。その後 8 ヵ月間、同地が拠点となる。ブロニスワフとマリアは当初、学生用ホステルに投宿するが、11 月以降はクルプフキの食餌療法ペンション「ヴィラ・ヒュゲア」で愛の巣を営む。
- 夏、ピウスツキ家の 4 兄弟がタトラ山中――ユゼフの山荘であろう――で家族会議を催す。出席したのは、ヴィルノから訪れていたヤンとその妻マリア、ユゼフとその妻マリア、ペテルブルグからのカジミェシュ、そしてブロニスワフとその同棲者マリア。奇しくも女性たちはすべて母親と同名だった。
- 9 月 9 日、二葉亭四迷宛書簡に「あなたにまずお伝えしたいニュースは、私の結婚です。妻の写真を送ります。妻は私の幼馴染です」と記す。
- 10 月 22 日、マリア・ジャルノフスカは 5 ヵ月の同棲生活を切り上げて、ザコパネを後にする。彼女はクラクフ、ワルシャワ、ヴィルノを経てペテルブルグに戻った。ブロニスワフは、その直後から 12 月にかけて、心情を吐露する情熱的な手紙 30 余通をマリア宛に執筆する。そのうちの 17 通はヤン・スタシェルが 2003 年に公刊しているが、11 月 23～24 日付の手紙では、フィンランドを希望するマリアの意向にもかわらず、ルヴフで共同生活を開始する提案を伝えていた。
- この年、「樺太アイヌの経済生活をめぐる概況」と「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」がウラヂヴォストクで公刊される(ともに『アムール地方研究会紀要』10 号所収)。後者は、1906 年の夏に東京で上梓された「樺太アイヌの状態」のロシア語原典に当たる。

1908

- 1 月後半、マリア・ジャルノフスカがザコパネに再来。彼らは「ヴィラ・ヒュゲア」に逗留する。
- 3 月頃、ブロニスワフとマリアは、ガリツィアの都市ルヴフ(現リヴィウ)へと居を移す。1 年余りに及んだルヴフ期のブロニスワフは、マリアという伴侶を得て充実した至福の時を過ごしたであろう。それは、以降の数年間にポーランド、ロシア、ドイツ、フランスの学術雑誌に発表された夥しい数の論文からも覗える。マリアは声楽のレッスンに通って、生計を支えるべくプロの歌手を目指した。しかし、彼女は発病して、乳癌と診断される。

1909

- 春、マリア・ジャルノフスカは乳癌手術を受けるべく、ペテルブルグの「法律上の夫(ヤン・ジャルノフスキ)」の許に戻る。
- 5 月、マリアの手術が執刀された結果、乳癌はかなり重症で、転移もあることが判明する。しかるに、小康を得たマリアは再びブロニスワフの許へ走ることになる。
- 8 月～1911 年 1 月、西欧諸国を 18 ヵ月間遍歴する。ブロニスワフはルヴフの有力紙「クリエル・ルヴォフスキ」の通信員も兼ねており、また売却用にアイヌの工芸品や、フォークロア・テキストを収録した蠟管も携えていた。
- 11 月～翌年 5 月、パリに滞在する。大学区の周辺で転々と居を移しながら図書館通いを続け、ソルボンヌ大学の聴講生でもあったようである。マリー・キュリーなど、フランス在住のポーランド知識人たちとも交際する。

1910

- 2 月、とんぼ返りでクラクフへ赴き、マリア・ジャルノフスカをパリに連れてくる。キュリー夫人が発見したラジウム線を用いての放射線療法も試みられた。
- 4 月、病状が悪化して再手術が必至となるや、マリアは自らの意思でパリを離れた。パリに到来した「法律上の夫」が、彼女をペテルブルグに連れ戻したという情報もある。
- 6 月初め～翌年 1 月、ロンドンに滞在する。日英博覧会で「アイヌ村」を実演する沙流アイヌ――のちに男女各 4 名と子供たちと判明する――と会って、聴取り調査を試みることが目的だった。博覧会の通行証を入手するまでに 7 週間を要したものの初志貫徹して、50

以上の物語を採録する。若干のアイヌ工芸品や蠟管の売却にも成功したらしい。
- この年、「アイヌ」と題する辞典項目が、F.A.ブロックハウス、I.A.イェフロン共編『新百科辞典』に収録される(第1巻所収、サンクト・ペテルブルグ刊)。

1911

- 1月末、パリを経由してクラクフに戻る。
- 5月12日、マリア・ジャルノフスカがサンクト・ペテルブルグにて永眠。
- 夏～翌年4月、ポトハレ地方の大地主ザモイスキ伯爵に招かれて、クゥジニツェの屋敷に逗留する。同伯爵と語らって、郷土誌研究会の設置計画をぶち上げることで、元気を取り戻した。
- 11月25日、ブロニスワフの発議で、同研究会はタトラ協会の民族学部門として発足する。彼はその議長に就任し、地元ポトハレ地方の郷土誌研究を組織する。剰え、収集品を収蔵・展示する施設として、タトラ博物館新館の建設までも構想する。

1912

- 5月～12月、ブィストレにあるコルニウォヴィチ医師の持ち家に居を定める。それはクゥジニツェとザコパネの中間にあった。30年後には、まさにこの家の屋根裏部屋で、ピウスツキの残した蠟管が発見されることになる。
- 10月、博物館事情視察のためプラハへ向けて旅立ち、(恐らく)スロヴァキアのマルティン、そしてチェコのヴィノフラディを訪ねた。
- 12月、ブロニスワフはクラクフとザコパネを駆け抜けて、スイスのヌシャテルへと向かう。その前に、民族学部門の議長職辞任を唐突に申し出るも、受け入れられず、彼は国外から送付する手紙によって、その職責を全うし続けることになる。
- この年、主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』(英語)が、クラクフのポーランド学芸アカデミーから上梓される。

1913

- 1月3日～5月、ヌシャテル大学の聴講生。
- 5月初め～7月10日、パリに滞在。
- 6月25日、タトラ協会宛に書簡を執筆するが、そこには「ギネット=ピウスツキ(Ginet-Piłsudski)」という署名が初めて見出される。ギネット家はリトワニア大公家に連なる由緒ある家柄で、ピウスツキ家の本家筋に当たる。ブロニスワフはこの頃、己をリトワニアとポーランドの狭間に立つ者、ないしは両者を統合する者と見做す境地に達したものと忖度される。遂にはGinet-Piłsudzkiと綴るに至る。
- 7月10日～10月、ベルギーのブリュッセルに滞在、ソルヴェー研究所で仕事をする。
- 8月3日、ザコパネではタトラ博物館新館の起工式典が挙行されるも、ブリュッセルに滞在中のブロニスワフは欠席した。
- 10月、ザコパネ郊外のブィストレに戻り、民族学部門議長として、郷土誌研究の組織化と推進に本腰を入れる。守備範囲は地元のポトハレからオラヴァ、スピシュ地方へと広がっていく。加えて、彼はタトラ協会の幹部でもあり、また創刊が決定された『ポトハレ年報』の編集主幹も務める。

1914

- 3月、クラクフのポーランド学芸アカデミーが民族学委員会を新設し、ブロニスワフはその書記に任命される。これは年俸600クローネの、同委員会では唯一の有給職員だった。とはいえ、欧州での7年間で彼が手にした初めての定職であり、定収入だった。彼はザコパネもしばしば訪れて、『ポトハレ年報』創刊号の編集作業を完了させている。ゲラ刷りまでは目を通したものの、印刷された本冊を目にすることはなかった。『年報』創刊号は1921年にようやく刊行されて、巻頭にはシェロシェフスキの手になるブロニスワフの追悼文が掲げられている。
- 6月末頃、ブリュッセルに滞在する。石川三四郎が「十年前に日本にて懇親を結んだ」「ピルスヅスキイ」と同地で遭遇したと伝えるからである。石川とは1906年2月25日、神田小川町の「牛屋」で催された、新紀元社の晩餐会に招かれたときに会っている。
- 8月5日、オーストリアがロシアに宣戦布告、第一次世界大戦が勃発する。
- 12月初め、ロシア軍のザコパネ進駐が現実味を帯びてきたため、ウィーンへ逃れる。この地には翌年の4月まで4ヵ月余り滞在する。

ブロニスワフはロシア国籍者であるが、米国横断中にロシア旅券を紛失しており、再発給の手続きを進めるも捗々しい結果は得られなかった。加えて、ロシアに入国するとシベリア送りにされかねない、という牢乎たる信念を堅持していたとも伝えられる。したがって、ポーランド内を走る塊露国境を越えることを強く逡巡して、故郷のヴィルノはおろか、ワルシャワですら訪ねることがなかった。

開戦後の欧州では、概してポーランド人 3 会派――ロシア統治下のワルシャワを拠点とする民族主義志向の親露派、ローザンヌに結集して保守主義を標榜するポーランド人亡命者らの親西欧派、そしてユゼフ・ピウスツキをリーダーとするポーランド社会党系の親塊派――が、それぞれの思惑で国家や社会の再建を果たすべく鎬を削っていた。戦時下のブロニスワフ・ピウスツキは、弟のユゼフと政治信条を共にするとはいえ、まったく不得手な政治に手を染めて、独自の政治的役割を果たすことになる。それはいわば敵対する二者を仲介し、和解を模索し、統合を志向するという役回りであるが、彼が生涯を通して追求した役割でもあった。

その嚆矢が、亡国ポーランドの実情を世に知らしむべく編集・公刊された『ポーランド百科事典』にまつわる一件である。当時は同趣旨の百科事典編纂がウィーンのみならず、ワルシャワやローザンヌでも別途に進行していたが、いずれも在米ポーランド人から寄せられる募金を当てにしていたため、3 件の統合が焦眉の急となる。その纏め役としてブロニスワフに白羽の矢が立てられた。

1915

- 3 月 31 日、ウィーンにてオーストリアの旅券が発給される。
- 4 月、バンドゥルスキ派――バンドゥルスキ・ウィーン司教の率いる親塊派――の百科編纂グループの正式代表としてローザンヌへ派遣される。激烈な論戦が交わされる中で、ブロニスワフは公正な仲介役に徹して、数ヵ月後には統合を成し遂げる。『ポーランド百科事典』(フランス語)は 1919～1920 年にスイスのフリブールとローザンヌで上梓された。
- この年、ロシア帝室地理協会の『ジヴァヤ・スタリナ』誌に「樺太島アイヌの熊祭りにて」が掲載される(同誌 23 年度 I–II 分冊、サンクト・ペテルブルグ刊)。

1916

- この年の初頭、ローザンヌに設置された「ポーランド・リトワニア委員会」の議長に就任する。ポーランド国家再興に際するリトワニアの処遇が主要な議題だった。ブロニスワフは、自分と志を共にする旧リトワニア大公国復興主義者と、リトワニアの分離独立を主張する民族主義者との和解を求めて奔走するも、折合いをつけられず、結局、リトワニア人民族主義者らは委員会を後にした。彼はその後もポーランド・リトワニア合同にこだわり続けて、死の直前まで、三国分割以前の両国の緊密な関係を証する歴史文献集の編纂に携わっている。
- その後の数ヵ月、中立国スイスで戦火を逃れて、自らの担当する『百科事典』項目の執筆に邁進する。かなり長期に及ぶラペルスヴィルのほかに、ローザンヌ、ヴェヴェイ、チューリヒ、ジュネーヴ、フリブールにも滞在したことが知られている。フリブールには『ポーランド百科事典』編集局があった。

1917

- 2 月、ローザンヌとジュネーヴで「シベリアにおけるポーランド人」と題する一連の講演を行う。この講演は翌年、フランスのルピュイで印刷されて、販売益は全額が慈善事業に寄付された。
- 6 月、チューリヒのポーランド協会の協力を取りつけて、戦場となったガリツィアの子供たちをスイスへ避難疎開させる救援事業を立ち上げる。ブロニスワフはプラテル・ツィベルク伯爵――欧州の貴族では最高ランクに属する高名な慈善事業家――と連名で、在米の著名な音楽家パデレフスキへ電報を送って、米国での基金構築を要請する。ところがパデレフスキは、全米から寄せられた募金 5 万スイス・フランを、ポーランド協会に断りなく、ピウスツキ、ツィベルクと連名の銀行口座に振り込んでしまう。この醜聞は「チューリヒ事件」と喧伝されて、協会幹部連はブロニスワフを強く非難し、剰え彼の高潔さや愛国心を疑い、学術業績までも嘲笑の的にした。「チューリヒ事件」は彼の心を深く傷つけることになる。
- 8 月 15 日、「ポーランド国民委員会」がローザンヌに創設される。連合国側は直ちに同委

員会を、ポーランド人の政治的願望に応える唯一の代表機関として承認する。議長に就任にしたのは親露派の保守政治家ロマン・ドモフスキ――ユゼフ・ピウスツキの政敵――である。当時のユゼフは、ドイツ軍に身柄拘束され、マグデブルグの監獄に収監されており、政治生命の危機に瀕していた。国民委員会はこれを奇貨とみて、パリに設立した委員会代表部における常勤ポストをブロニスワフに提案する。後者はその提案を受け入れた。

- 11 月半ば頃、ブロニスワフはパリに至り、同代表部の有給職員となって、公館内の一隅に居を構えた。彼が国民委員会から託された仕事は広報関係で、とりわけ編集者として多忙であった。また誰とでも話ができる才能が買われて、委員会外の重要人物との応対もしばしば任された。

1918

- 春、ポーランド人将兵捕虜の多くが抑留されているルピュイを短期訪問する。この地ではポーランド語隔週刊誌『イェニェツ・ポラク(虜囚のポーランド人)』が発行されており、同誌別冊として、彼の『シベリアにおけるポーランド人』の印刷が進められていた。ルピュイから戻ると、ブロニスワフはこれらの読者を対象とする新聞の発刊を具申する。
- 4 月 27 日、パデレフスキ宛に長い手紙を書き、「チューリヒ事件」に対する自らの関与を改めて説明している。
- 5 月 3 日、敵対する諸会派の和解を訴える覚書を擱筆し、多くの知友の間に自ら届けて回った。これは、いわば彼の遺書であったろう。ブロニスワフの病状は目に見えて悪化し、寝室の空気が蒸し暑くて重過ぎると訴えだす。友人らが田舎での静養を勧めると、同意したかのようにも見えた。さらには、委員会における自らの政治的役割に対する疑念や、誰かが己に毒を盛るか、謀殺するのではないか、という恐怖を周囲に洩らすこともあった。
- 5 月 16 日、友人らが手配してあった診察時間に医師を訪ねたブロニスワフは、放心状態で帰ってくる。
- 5 月 17 日、早朝に起床して友人を訪ねるも不在だったため、「この世とおさらばすべく、注射してもらいにやって来た。私にかけられた二つの嫌疑は、そのいずれでも私は潔白だ……」との書置きを残した。芸術橋(ポン・デザール)の守衛は 11 時 45 分、橋の上で上着を脱ぎ、セーヌ川へ抛るや、己の身もそこへ投じた男を目撃する。ブロニスワフはこのとき満 51 才 5 ヶ月半であった。
- 5 月 21 日、午前 8 時 15 分、ブロニスワフの遺体がミラボー橋(ポン・ミラボー)の袂で発見される。
- 5 月 29 日、ノートルダム寺院で計画されていたブロニスワフ・ピウスツキの葬儀は、急遽中止されて、遺骸はパリ郊外モンモランシーのポーランド人墓地へと運ばれる。埋葬儀式を執行したのは、地元の教区司祭だった。

参考文献

(邦文文献)

飯島生「北海道紀行」『博物學雑誌』40(1903):15–17、飯島桂「北海道紀行其二」同誌 42(1907):35–38

井上紘一「ブロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸文化の研究』(国立民族学博物館研究報告別冊 5 号)45–65(1987)

井上紘一「B.ピウスツキと北海道:1903 年のアイヌ調査を追跡する」井上紘一編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』11–31、札幌:北海道大学スラブ研究センター(2003)

井上紘一「日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事(1903–1939)」(上・下)『関西外国語大学研究論集』91:267–280、92:185–201(2010)

井上紘一「日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事(1903–1939)増補改訂版」[電子稿[8]]

コヴァルスキ、ヴィトルド、井上紘一訳「ブロニスワフ・ピウスツキの遍歴:日本出国から自殺まで」『ポロニカ』4(1993):38–53 [Kowalski 1992(ロシア語版)からの邦訳]

澤田和彦「ブロニスワフ・ピウスツキ日本暦」澤田和彦『幕末・明治・大正期の日本とロシ

[8] 「電子稿」と付記された本稿、ならびにピウスツキ作品の拙訳稿は未刊行ながら、PDF 版での提供は可能である。入手を希望される方は、inouek.sap@gmail.com 宛に御一報ください。

アの文化交流に関する実証的研究』25–64、さいたま：埼玉大学教養学部(2007)
沢田和彦編『ポーランドの民族学者ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』(埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書 5)、さいたま：埼玉大学教養学部・文化科学研究科(2013)
シェロシェフスキ、井上紘一訳「毛深い人たちの間で」[本書に収録]
ピウスツキ(露國ビルスドスキー氏寄稿)「樺太アイヌの狀態」(上・下)『世界』26：57–66、27：42–49、東京：京華日報社(1906)
ピウスツキ、[二葉亭四迷宛書簡 15 通(安井亮平翻刻・邦訳)]『二葉亭四迷全集』別巻、114–164、筑摩書房(1993)
ピウスツキ、井上紘一訳「樺太ギリヤークの困窮と欲求」(原典 1898 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「樺太アイヌの経済生活をめぐる概況」(原典 1907 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」(原典 1907 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「樺太島の原住民における分娩・妊娠・流産・双子・畸形・不妊・多産」(原典 1910 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「アイヌ」(原典 1910 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「樺太島アイヌの熊祭りにて」(原典 1915 年刊)[電子稿]
ピウスツキ、井上紘一訳「アイヌの習俗整備と統治に関する規程草稿」(原典 2000 年刊)[電子稿]

(欧文文献)
“Bronisław Piłsudski Chronicle. Part 1: 1866–1905,” K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, pp. 445–490, Saitama (2010)
“Bronisław Piłsudski Chronicle. Part 2: 1905–1984,” K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 379–423, Saitama (2010)
Inoue, K. (ed.), *B. Piłsudski in the Russian Far East: From the State Historical Archive of Vladivostok* (*Pilsudskiana de Sapporo* no. 2), Sapporo: Slavic Research Center of Hokkaido University (2002)
Inoue, K., “Bronisław Piłsudski’s Endeavours on Ainu Education and Self-government,” K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, pp. 337–366, Saitama (2010)
Inoue, K., “The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903,” K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 3–37, Saitama (2010)
Kowalski, W., “The European Calendarium: Bronisław Ginet-Piłsudski in Europe 1906–1918,” K. Sawada and K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 129–150, Saitama (2010)
Латышев, В.М., *Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского: Пролегомена к биографии*. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство (2008)

＊ Author & title: K.Inoue, “B.Piłsudski’s Chronological Record”

毛深い人たちの間で *

ヴァツワフ・シェロシェフスキ
井上 紘一 訳

プロローグ

私の極東への旅は頗る「政治的」な動機に発する。

1900年、ロシア帝国の憲兵隊がコジョン教授宅を捜索した際、ステファン・ジェロムスキと私の名前が運悪くも記載された手紙を押収した。私たちはまさにこの手紙がもとで、[アダム・]ミツキェヴィチ記念碑の除幕式当日に、労働者が碑の周辺で展開した見事なデモ行進を組織した�廉で告発され、またその日のために準備された焔のような檄文の執筆者にも帰せられた。デモ行進は実に見事で、檄も格調高い美文ながら、組織者と執筆者はいずれもユゼフ・ピウスツキとスタニスワフ・ヴォイチェホフスキの両人だった。しかるに、檄の「文体」にいたく幻惑された憲兵隊は、名のある文士の作品の筈だと執拗に拘った。そこで、私は城塞(ツィタ)監獄(デル)に収監されるが、ジェロムスキの方は、そのとき見舞われた大喀血のお蔭で辛うじて難を逃れた。私は監視つきを条件に保釈されるも、審理は長引き、一年ほど経った頃、遂に祖国(ナ・ローヂヌ(ロシア語)故郷)のイルクーツクへ「帰される」との噂が耳に入る。イルクーツクは、私が十五年をヤクート地方で過ごしたのち、町人の住民台帳に登録された「故郷」である。「帰郷」案はどうにも好きになれなかったので、私はピョートル・セミョノフ元老院議員に泣きついた。同議員は、私も一会員であるサンクト・ペテルブルグの帝室地理協会の副総裁だった。

セミョノフはかつて、「オフラナ」[帝政ロシアの政治警察]の抵抗にも拘らず、地理協会から金牌を授与されたヤクート人に関する拙著を楯に、私のポーランド帰郷権獲得に尽力してくれたことがある。

私の気高い庇護者は、力の及ぶ限り全力を尽くすことを約し、そのために、関連情報はすべて提出するように求めた。数日後、彼は暗い表情で、もはやお手あげだと告げて、ワルシャワ総督府は政治案件全般に「広範な自治権」を享受するばかりか、「かの地の憲兵隊もシェロシェフスキ一族を不倶戴天の敵と称するが、それも故ないことではない」と語った。そこで見せられたオフラナ文書からの抜粋には、まず1818年の軽騎兵にして、1830年代は「蜂起軍(インスルゲンツキエ(ロシア語))」将校だった私の祖父カイェタンを筆頭に、1863年が父方の伯父たちと父、そして1880年代は私の姉妹たちと従兄弟のように、シェロシェフスキ一族のすべてが「叛徒」として列挙され、末

---

* 原典：Wacław Sieroszewski, “Wśród kosmatych ludzi,” in Wacław Sieroszewski, *Szkice podróżnicze. Wspomnienia* (*Dzieła*, tom XVIII *Varia*). Str. 219−274. Kraków: Wydawnictwo Literackie (1961).

原文は一切の章立てを欠いているが、訳者の判断で5節に区分して、適宜小見出しも加えた。訳者の注記は、本文中の角括弧内に収めてある。

邦訳に際しては、アルフレト・マイェヴィチ氏の英訳版(2004)と I.A.ソロヴィヨヴァ氏の露訳版(2004)も参照した。この場を借りて両訳者に謝意を表したい。

尾には私自身が同列に「殊の外頑迷にして」(オソボ・ウボルストヴユシチー(ロシア語))危険思想の持主と特記されていたのだ。私は「万事休す」と観念する。

だが、そんなことはどうでもよい!… われわれはこうしよう!… ——と、温情高潔のわが元老院議員は、私の落胆ぶりを見かねて慰めてくれる——われらは目下、極東に関心を有する。科学アカデミーと協力して、あなたのためにアイヌ調査を企画しよう……。日本列島の北方の島々には、そう呼ばれる部族がいるが、われらの農民に酷似した毛深い人たちからなる、頗る興味深い部族だ……。あなたはそこへ一、二年赴かれて資料を収集し、研鑽も積まれるがよろしい。著書を出版しよう。ヤクート人に関する著書で既に経験されたように、その本のお蔭で、あなたは再び祖国への帰還を果たされるだろう……。

果たして、どうすべきであるか?!… 設けて間もない家族や、数年前に取り戻したばかりの祖国を、おいそれとは見捨てる気にもなれず、私は数日間、沈思黙考を重ねつつ己との闘いに明け暮れた挙句、今は政治犯流刑囚としてサハリンに滞在中の——ほかでもないピウスツキ元帥の兄——ブロニスワフ・ピウスツキの同行がもし認められるならば、との付帯条件を提示して受諾を申し出た。こうして調査団は全面的にポーランドの標識を帯びてゆくが、加えて、アイヌ語を縦横に駆使するブロニスワフ・ピウスツキは、アイヌたちを支援・擁護し、面倒も見てきたから、彼らの間では絶大なる人気を博している。彼はまた戯れ半分ながらも、「アイヌの王様」という尊称すら奉られているのだ。

件の付帯条件が受け入れられて、半年間の予備研究を済ませると、私は蒙古・満洲・中国を経由地に選定して、日本へ向けて旅立った。

函館

1903年の6月半ば、私は、北海道——蝦夷(イエゾ)——島の南岸に立地する最大の港町函館にいた。和風の「小ホテル・キト」[実際は「キト旅館」]に止宿する。そこでは一泊一円(2ポーランド・ズウォティ)で清潔な畳敷きの小部屋が与えられ、家具調度は僅かに衝立・青銅製火鉢(ヒバチ)に加えて、鶴の立ち姿を描いた掛物(カケモノ)が壁に懸かるのみ。食事も、その方がはるかに安上がりだから日本料理屋で済ませる。数ヵ月に及ぶ日本滞在のお蔭で、私は既に日本の料理にも習慣にも習熟し、言葉すら身に着けることにもなった。英和[・和英]袖珍辞書の助けを借りては、見事に意思疎通を図ることもできた。私が各単語の脇に記された漢字を対話者に示すと、相手は頷いて一呼吸するや、同じ辞書の中に私の必要とする漢字とその英訳文を直ちに見つけてくれたからだ。万国共通の擬態語や身振り、また自尊心の強い日本人なら誰しも学校英語を通じて学ぶような、幾つかの「ピジン」語彙[1]の総動員は、最高に陽気で活気に溢れる、賑々しい会話を創出した。旅館内の人々は、客も含めた全員が参集して会話に耳をそばだてるし、店舗内でおっぱじまるときは、道行く人の半分が忽ち蝟集する。全員がお喋りに加わり、私の辞書を奪い合い、大声を上げて哄笑する。なかんずく旅館の娘(ムシメ)[女中のことであろう]たちは「愛してるわ」「同衾しよう」「贈物を下さい」といった、爆笑を買うような漢字を好んで探し当てるのだ。アイヌについて何かを聞き出そうとするも、然るべく手を振りながら「far(遠い)」と言って、軽くあしらわれてしまう。美しい娘(ムシメ)らは、おちょぼ口を膨らませて「面白いことは何もないわ」とか、「アイヌ・デス・ドゥルティ(dirty)」(アイヌは汚いです)とか、「アイヌは、犬を恋人にした娘の末裔だ」とか、はたまた「腰から下は犬の姿で、尻尾さえあるのよ!」とまでも極言する。

[1] 中国語・日本語・ロシア語の単語が入り混じったチャンポン語彙。

もうとうの昔にここにいる筈のブロニスワフ・ピウスツキの到着を待つ間、私は神社仏閣・劇場・博物館を歴訪しながら、町とその周辺を散策した。近在する火山の駒ケ岳(コマガタケ)の登頂すら計画していた矢先のある日、ロシア領事のヘデンストレム([M.M.]Hedenström)氏が不意に訪ねて来て、ますます激化する「日本の民族主義的煽動」!… に鑑み、旅館を出て領事館へ移るよう要請、さもなくば私の安全は保証しかねると告げた。

> いずれ頓挫する筈だ!… 彼らがそれを敢行することはまずなかろうが、暴走はありえよう……。日本の群衆が何をしでかすかは量りかねる……。数年前、ドイツ軍の膠州(キャオチャオ)[湾]占領に対する新聞の煽動報道を受けて、当地では白昼堂々とドイツ領事が殺害されたものの、司直はいまだ犯人を挙げるには至らぬ……。嗚呼、アジア人は虎のごとく、礼儀を弁えるも残忍である……。警戒を怠らぬこと、また独りでの外出は避けること、なかんずく当地の要塞などに近づかぬよう、そして写真撮影は一切差し控えられよ!… ――と、彼は意味深長に締め括った。

領事は人員を差し向けて、まさに拉致さながらに、私の身柄を領事館へ移させた。そこは私にとって頗る快適ながら、十分に退屈もかこつ……住処だった。私は不愉快な壁で忽ち外界から遮断され、昨日までの知己は冷ややかな挨拶で私を遠ざけるし、陽気な娘(ムシメ)らももはや微笑んではくれず、いつもなら僅かな小遣銭と引換えに、植物や甲虫(こうちゅう)の採集を賑やかに手伝ってくれた子供たちの群れまで、跡形もなく姿を消した……。

そしてブロニスワフ・ピウスツキも一向に到来する気配がない。彼に宛てて手紙や電報を送るも梨の飛礫、遂には金欠病こそ彼の到来を妨げる首魁との想定で送金までも試みるが、返事すら届くことがなかった……。余人をもってブロニスワフ・ピウスツキに代える案が度々脳裏をよぎるも、和人以外に余人を想定するのは不可能であるのに、アイヌらは和人こそ土地の簒奪者と見做しているから……、代案は事態をややこしくするだけだ。私は長考熟慮の末、アイヌ・英語小辞典を小脇に抱えて独りで調査に赴くことを決断する。とどのつまり、私は生涯で今一度、ヤクート人の間で遭遇した状況に倣って、難局を乗り切ることとなる。

梅雨の季節が到来し、太平洋からは刺すような季節風(山背(ヤマセ))が絶え間なく吹き荒れ、低く垂れこめる雲はわれらに、車軸を流すような雨を間断なく浴びせかける。伝説・昔話・信仰を採録するにはうってつけの季節だ……。領事館に引きこもる私は、強いられた無為に怒り心頭である……。時間潰しに和人たちから様々な情報を収集する。

遂に、ある日、サハリンから手紙が届く。密かに運んでくれたのは、病気治療の目的で日本の温泉にやって来たある女教師である。ブロニスワフは、電報やお金は受領したものの、サハリン知事が「広範な自治権を行使して、ペテルブルグや東シベリア総督府からの命令にも拘らず、私の出国に許可を出さぬ」ので、出発できない旨伝えてきた……。

嗚呼、これぞまさしく広範な自治権を、民に損害をもたらすときは意欲的に行使するも、生活の福利と安寧がかかわるときは臆病を極めこむ、あの世界に冠たる官僚主義だ。再び、絶望的な電報がペテルブルグとイルクーツクへ向けて発信された。

噴火湾への旅

私はその間、長老派教会北海道伝道団々長のバチェラー氏(mister Batchelor)とともに、噴火[内浦]湾(Volcano Bay)の湾岸に立地する至近のアイヌ集落を数ヵ所巡回した。旅程は室蘭(モロラン)までが蒸気船、以遠は帆船で湾内を数十キロ航行、上陸後は騎乗で[伊達]門別町から有珠(ウル)村に至るものだが、すばらしい旅であった。

この地方は、和人によって開拓され、完璧に農地化され、立派な道路と清楚な和風家屋も完備するから、日本列島北部の諸地方と比べても

全く遜色がない。例えば植生であるが、米・小麦・大麦・印度藍・空豆・油菜・亜麻といった栽培植物や、樫・樅・ハンノキ・松といった森林性樹木、道路の両側に植樹されたキリン(*kirin*[「桐」であろう])の美しい並木などは全く同じだ。キリン樹は、和人が当地へ持ち込んで北の風土に順化させたもの。その軽くて高共鳴性の木材は琴(ハルファ)や下駄(サンダル)の製造に使われている。

稠密に分布する和人住民の間には、二、三戸の葦小屋からなる小さな村々など、アイヌの残像があちこちに点在する。葦で階段状に葺いた大屋根で蔽われる葦小屋は、ポーランドの葦葺小屋を彷彿とさせる……。ミステル・バチェラーの信者は大半がアイヌだったから、われらは概ねこうした住居に寝泊まりする。

尊師が自らの務めを果たし、証明書を執筆し、訴えに耳を傾け、争議を仲裁し、儀式を執行する間、私は内装・生活用具・衣装を観察し、子供たちと仲良くなり、家屋や人々を撮影した……。さらには古い信仰や習俗の痕跡もあまた発見する。あちこちの改宗者らの家の前ですらも、削掛け呪具の「イナウ(*inau*)」が林立するすばらしい「ヌサ(*nusa*)」が見出され、そこにはかなり以前に殺された熊・狐・狼……の干上がった頭部も、杭に刺しこむ形で掲げてある。屋内でも、古びた削掛けの「イナウ」が随所に散在するも、すべては恥ずかしそうに隠されるか、さもなくば尊師が現れると忽ち姿を消すのだ。

同じことは私の研究においても出来した。現地の人たちは私の「世俗的」質問に対し、渋々と投げ遣りな回答をくれたが、尊師自らもそれらを、彼に特有の聖書文体というやや不思議な手法で説明する。彼は私の研究に対して頗る好意的だったものの、私たちの見解は水と油ほどかけ離れていたから、両者の議論は一部が英語で、また一部はミステル・バチェラーの弁えるロシア語でも行われたとはいえ、全く不毛であった。尊師は至る所で、原初に神が人類に授けられたものの、偏に彼らの罪と野生化の所為で崩れて、堕落に追い込まれた「宗教」の痕跡を追究するが、私の方はアイヌの信仰の内に、仏教や儒教の浸透により壊されたとは雖も、偉大なるシャマニズムの見事な残像を認めるのだ。ミステル・バチェラーはアイヌが白人種に属し、シベリアから満洲と朝鮮を経由して南の群島に到達したと主張する。私はといえば、黄色い肌で薄毛の周辺諸民族とは著しく異なるこの謎の部族に、滅亡した原人類、つまり大昔に太平洋の底に沈んだ大陸――東のアトランティス――の住民、の痕跡を求める見解に傾いていた。

この所説については、幾つかの伝説が仄かに語るのみならず、地質学研究も、蝦夷(イエゾ)島と千島諸島は日本列島の中・南部の島々より年代的に古いとの結論を報じ、海深測量の結果も同断である。加えて、アメリカ大陸とアジア大陸の内陸部には見られぬのに、両大陸の相対する沿岸部だけに残存として発見され、例えば、若干種の甲虫(こうちゅう)や植物のように海流で運ばれることも、「人参木の一種」――odmiana skalnych baranów [*Vitex agnus castus*]――のような風任せの移動もありえぬような、若干種の動植物の事例をめぐっても、同趣旨の見解が伝えられている。

今や絶滅の危機に瀕するコリヤーク・カムチャダール・ギリヤーク・ゴリド、なかんずくアイヌといった諸民族は、彼らの現今の隣人たちとは著しく違っているのに、絶滅したか絶滅に瀕するアメリカの諸民族とは、その習俗や外貌をめぐって極めて多くの類似点を共有するから、今は消失した島々――はたまた諸大陸――が作り上げる架橋を介して、両大陸の間には密接な――そして古い時代には容易な――接触が存在したという確信が期せずして生まれてくる。もしこれらの土地にかつて住民がいたとすれば、アイヌは間違いなくその末裔であろう。この仮説がどこまで正しいかを検証すること、それが私の課題であった。したがって、尊敬措くあたわざるバチェラー氏は、自らが聴取したアイヌ情報の翻訳に際して、無意識ながらもそれを逐一潤色なさるから、私の仕事にとって氏の仲介は深刻な障碍となった。そこで、着手した研究に熱が入るにつれて、私はブロニスワフ・ピウスツキの到着を、ますます熱烈に渇望

するようになる。

だが、ミステル・バチェラーは、一つのすばらしいチャンスも恵んでくれた。つまり、私のために人類学的身体計測への道をつけてくれたのだ。アイヌは、あらゆる原始民族の例に洩れず、被検者ないし被撮影者の身体が計測や撮影の実行者の所有物と化すと見做されるがごとき、自らの理解を絶するような行動には恐怖を覚える。加えて、アイヌの抵抗は身体計測が日本軍への自らの徴兵――それまでは兵役が免除されていた――を促進するのではないか、との危惧によっても強められた。しかるに尊師は自らの教区民の偏見を打破することに成功したから、私は[旧]室蘭(モロラン)と有珠(ウソ)の周辺において男女十数人の計測を実施した。――だが、計測の結果は、アイヌの慣習・信仰・道具類・衣装のみならず、同様にまた彼らの人類学的形質タイプにまでも、和人の影響が深く及んでいることを、私に強く確信させた。被計測者の大半は混血者(メティス)であり、はたまた恐らくは「四分の一」混血(kwarteron/quadroon)の和人だった。それを物語るのは、頭蓋骨の形態と筋肉組織であるが、止めを刺すのは、蝦夷(イェッソ)の東部や北部およびサハリンに在住するアイヌに比して、遥かに微弱な多毛性である。

ブロニスワフ来函

したがって、私は極度に落ち込んで函館に戻り、難局から如何に脱すべきか思案に暮れていた矢先に、晴天に霹靂のごとくブロニスワフが姿を現した。彼は陽気で元気溌剌、国外用旅券を交付せよとのペテルブルグからの断乎たる命令が、サハリン島官吏の間にどれほどのパニックを惹き起したかを､面白おかしく物語る……。

> これはポーランドの陰謀だ、あなたはシェロシェフスキでなくて、偉大な革命家である私の弟ユゼフであり、しかも私を連れ戻しに来たのだ……という風に、彼らは堅く信じて疑わなかったのですよ。けれども、彼らはもはや抗うことができなくなって、この通り、私はここにいます……。サハリンの通訳も一緒に連れてきました。半分アイヌで半分は日本人ですから、どちらの言葉もよく知っていますし、ロシア語さえも話せます……。名前はタロンチ(Taronci[日本名は千徳太郎治(せんとくたろうじ)])……。頗る頼り甲斐のある男です……。あなたも私も日本語ができませんから、日本の当局者との対応では、必ずやすばらしい仲介者になってくれますよ……。

タロンチの給料と生活費は、われらのつましい調査費をかなり逼迫させ、また混血児の落ち着きのない目と狐のような顔も、私には全く気に入らなかったとはいえ、彼をサハリンへ送り返し、しかも給与の一部を契約不履行の違約金として支払うのに要する費用は、彼が残留する際の経費のほぼ半額に匹敵すると見込まれるから、私は妥協せねばならなかった。

われらは大車輪で旅支度に着手、必要な食糧と物資を購入して、研究計画を策定した。それによると、われらの実地踏査は、和人の影響の波及が最小限に留まる、東と北の最果ての集落から開始すべきとされた。まずそこで、形質と習俗の両面でアイヌの基本タイプを確立させた上で､フォークロア･信仰･人種における様々な変異を跡付けながら、より和人化された中央部へ向けてゆっくり移動する予定であった。しかるに、ある事件が出来して、われらの当初計画は忽ち逆転を余儀なくされる。

シパンラムとの出会い

ある日、ブロニスワフが私の許へ駆け込んできて、すべてが順調に進み、既に現地のアイヌたちと友好関係を樹立したから、計画は変更して、出会いを活用すべきだ、と彼はえらい剣幕で捲し立てた。

> 「活用する」ったって、一体、どのように? 何を「活用する」のだ?
> 直ちに彼らを引見してくれ。
> 誰をだね?

アイヌたちを。
彼らはどこにおるのか?…
ここにいるよ……。

ブロニスワフは廊下へ向けて半開きの扉を指さす。私はまさにそこに、がっしりとした体格のアイヌの立派な蓬髪頭を認めた。身振りで彼に入室を促す。身に着けた白地の長いキモノは、黒と青と赤のアイヌ文様で刺繍が施されている。裸足ながら、逞しい脛を蔽うのは破れかぶれの薄汚れた脛当。入室すると忽ち床に蹲(うずくま)って、両耳の脇に垂れ下がる巻毛と、黒々と輝く長い顎髭を撫でだし、しかるのち、祈るように合わせた両の掌をすり合わせた。私も客人の前に蹲るや、このアイヌ式挨拶――「カラクテ」(*karakty*[辞書では*karahte~karapte*と記される])――はブロニスワフが既に手解きしてくれていたから、同じ仕草を繰り返した。お決まりの茶が出てきて対話が始まる。客人は自らをシパンラム・ノムラ(Śpańram Nomura[日本名は野村芝蘭(しまんらん)])と名乗り、室蘭(モロラン)東方の海辺にある白老村で暮らしていると告げた。彼はそこで自前の資産、舟や網を有するも、旅の和人が持ち込んだ大きな儲け話に乗せられて、細君や数名の隣人とともに大阪の博覧会[浜寺で開催の第五回内国勧業博覧会]へ赴くことに同意、彼らはそこにアイヌの村を「設営」し、「熊祭り」を上演することになった。三ヵ月にわたって「上演」し続けたものの、和人の興行師は彼らを欺き、一文も支払わぬまま破産し、逐電してしまった。したがって、物品・鍋釜・薬缶や銀の装飾など……売れるものはすべて売却するも、辛うじて確保できたのは函館までの汽車の切符だけ!… 当地では文なし、知人もいなかった……。

無一文じゃ旅籠(はたご)とて門前払い、わしらには一夜を過ごす所もありません……。大阪を発ってからは、一粒のコメも口にしておりません……。妻は病人です……。博覧会で脚気(べりべり)を患いましたのに、その病すら客に見せるよう……言われましたよ。どこへ訴えたものか見当もつきません……。ここじゃ誰も、わしらに見向きもしません……。わしらは「アイヌ」だ……。和人たちはわしらを嫌っておる。馬鹿にしておる……。溺れて死んだ方が余程ましだ!… すると、「善霊」は突如として、気高い心の「旦那(ニシュパ)(*niszpa*)」をわしらの所へ送ってくださった……。

頭と感謝の眼差しをブロニスワフへ向けつつ、彼は再び自らの「荘厳な顎髭」を撫ぜながら、全身を折り曲げてお辞儀をする。

本当に不思議な巡り合わせだ…… ――ブロニスワフが会話に割って入る――路上に立ち尽くし、途方に暮れてあたりをきょろきょろ見回す人たちが目に止まる……。近づいてゆき、「そこで何してるのだ」と、私はアイヌ語で声をかけた。彼らは一瞬、雷に打たれたように身をすくめる。声を失って立ち尽くすばかり。一人の女が泣きだす。和人たちが蝟集する。そこでアイヌらを脇へ連れてゆき、根掘り葉掘り訊ねた……。彼らに弁当(ベントウ)(米飯を詰めた小箱)を買ってやる……。するとようやく彼らの舌は呪縛から解かれていった……。奇蹟ではないか?… われらの旅立ちの前日に……。彼らの所へ赴くのは、ごく自然の流れだ……。われらは直ちに、アイヌ的生活の核心へ、しかも友好関係のもとで案内されるだろう……。しからば、われらの仕事は完璧に別物となるよ、私は彼らをよく知っている。われらの一片の志に対し、彼らは全身全霊で応えてくれよう……。私は一円(2ズウォティ)を与えたが、少な過ぎた。彼らには汽車賃も煙草銭も当座の路銀も渡さねばならぬ――と、ブロニスワフは熱弁を締め括った。

われらの会話中に姿を現したタロンチは、はるかに抑制的である。

金は渡すべきですが、ほどほどに留めねば――と、物静かに忠告した。

渡したのは四円である。ノムラは嬉しさ余って声を失う。彼は肉付きのよい顔に心からの愛情を浮かべて、細君は帰宅させるものの、われらを支援し、また付き添うべく、自らは残ることを申し出た。われらは合議の末、申し出は断る。街中(まちなか)では彼を必要とせぬから、彼も直ちに帰村して、そこですべてのお膳立てを整えるがよい、と。彼は「エイロ・ロ・ロイ(*eiro-ro-roj*)!」(「何というすばらしい贈物だ」)、「ヤイ・ラ・イゲレ(*jai-ra-igere*)!」(「有難う」)と、間断なく繰り返しつつ退去した。

白老

初日

数日後、われらは室蘭(モロラン)から単軌鉄道で東へ向かった。線路は太平洋の岸辺に沿って伸び、紺碧の波が随所で砂浜に打ち寄せる。黄金の筋をなす陽光が、先頃の驟雨で見事に甦った一帯に降り注ぐ。鬱蒼と茂る森で黒ずみ、青白い浅瀬に縁取られた岬が、青い海と空に向けて幾筋も張り出している。内陸には、薔薇色の巌を頂く紫の山脈が延々と連なる。幾つかの山頂は煙を吐いており、火山であった。至近ではさほど高くない青白い円丘が払暁の藍のなかでまどろむ。海と山並みの間に横たわる平地には、村や小さな町があまた認められ、一軒家もあちこちに点在する。

これらの家々の間では、葦壁のアイヌ家屋に高く聳える葦葺き屋根が一際目を惹いた。こうした家は必ずしも多くないが、個別に小さな集落をなして海辺や漁場に集結している。樫・楓・楡の木々……。繁茂する庭常(にわとこ)・行者大蒜(ぎょうじゃにんにく)・針槐(はりえんじゅ)の緑地、巨大な蕁麻(いらくさ)の繁み、立ち枯れた玉蜀黍(とうもろこし)や黍の畑。これらすべてが家屋をすっぽり囲っているから、ごく最近までは森の民にすぎなかった人たちの巣窟が、莫大な労力を投じることで辛うじて本来の藪から離脱できたかのような風情である。一方、小ぶりで端正な和人の家屋は、その周辺に野菜畑や花壇を残すのみ、全体が太陽に向けて露出されている。われらは幌別、登別(ノリベツ)、その他の駅をやり過ごす。アイヌの家屋がその数を増してくる。五番目の白老駅で下車した。

線路が村を南北に折半している。北側は和人たちの居住区だ。そこでは文化が感ぜられ、ほとんど一つの町をなしている。美しい端正な家々がかなり整然と連なる広い通りには、各種店舗・郵便局・学校・警察署・測候所や、地元の農業関係事務所等が軒を連ねる。往来の激しい通りでは、色とりどりの着衣の子供たちの群れが、下駄の音を響かせて走り回る。われらが下車して、列車が動き出すや否や、その大半は未成年者だったが、物見高い群集がわれらを取り囲んだ。彼らから、村には旅館があることを聞きだして、その旅館へと向かう。

ノムラ・シパンラム氏には手紙で到着を知らせてあったのに、われらの期待に反して、彼は出迎えに来ていなかった。

旅館は結構清潔だったが、われらの旅の目的を知った宿の亭主は強気に転じ、小さな部屋の一人分の宿料として、大都市の一級ホテルに泊まれるほどの法外な額を吹っかけてきた。われらは荷物を預けると、別の宿を求めて、南側のアイヌの村へ足を向けた。私は道すがら持論を開陳する。われらはアイヌとともに暮らし、一緒に食べ、飲み、眠り、身繕いも可能な限りアイヌ風にせねばならぬ、さもなくば、彼らに打ち解けてもらうことも、またその生活を知ることも叶わぬではないか、と。このアイヌ化案に対し、ブロニスワフは直ちに賛成してくれたものの、タロンチだけは顔を顰めて難色を示す。むしろヨーロッパ化か、日本化の方が好ましい……、との表情を隠さなかった。

> 何の益もないこと、ただ汚いだけですね——彼は苦々しげに説く——アイヌはどこも一緒です、ヴォトカをやれば、やっぱりやって来ますよ……。

アイヌ・コタンは、馬鈴薯・豆・玉蜀黍・葱やその他の野菜が植わる畑の間に、雑然と点在する家屋からなる。壁と屋根は葦造り、窓には

ガラスも、はたまた和風の「障子(ショージ)」も使われていない。戸口に懸かるのは蓆である。気温が[摂氏零下]十二度から十五度に達して、吹雪が連日吹き荒れることも珍しくない冬場は、一体、どうして凌ぐのだろうか。だがこのときは、緑に包まれた家屋が一幅の絵のような美観を呈し、まさにポーランドの風物を彷彿とさせる。家々は雑な列をなして海辺に至るが、そこには黄色の砂浜で縁取られた大きな湾が開ける。舟着場と[地曳]網漁に誂え向きの浜である。砂丘には一連の大型漁舟(いさりぶね)が丸太の台座に鎮座し、舟の陸揚げに使用する巻上げ機も何台か目にとまる。

陸の側では、樹木の繁茂するチャシ・コツの鮮緑色の山並が湾を半円状に取り巻き、その背後の一端には有珠(ウフイ)火山の赤茶けた頂きが聳え、他端では、大洋の青い海原へ切り込む暗い岬の彼方へ、砂原岳(シャワラダキ)[さわらだけ]の大火口を縁どる薔薇色の円錐が、照り輝く腐植土(ロストーチャ)の間からいきなり突出する。ペツ川[「ペツ」はアイヌ語で「川」を意味する普通名詞、ここでは白老川を指すようだ]は、村を縦断して海へ注ぐ。われらは砂地の広い道をゆっくり進んだ。神の造られしが儘に全裸の子供たちは、吃驚して遊びを止め、われらをじっと凝視する。家々の奥には、人の気配がするも誰一人姿を見せず、村はまるで死者の世界のようだ。

シパンラムの住まいを訊ねようにも、その相手が見当たらない。上唇部に見事な入墨をした婦人が通りかかるが、われらを認めるや、あたふたと道を取って返した。さらばとて、とある家を訪ねる心算で戸口に懸る蓆の前に立ち、アイヌの慣習に倣って、三度の咳払いで訪意を伝えようとした矢先に、近くから優しい叫び声がわれらの耳に届いた。

キーク、キーク!

タロンチが素早く振り返る。隣家の前には、今しがた見かけたばかりの婦人が、勝るとも劣らず美しい入墨を施した今一人の婦人と立っている。両婦人は、われらを驚いたように見つめながら、耳の脇に垂れ下がる自らの毛髪を撫でている。

あれは、われらのマダム、シパンラムの細君だ――と叫んで、ブロニスワフは彼女らの方へ駆け寄る。

彼のあとをわれらが、われらのあとは子供や犬どもが追う。戸口には、乱れ髪の女たちや顎鬚を蓄えた男たちが相次いで姿を見せる。その一人が重々しい足取りでわれらの方へやってくる。男はわれらの二歩手前で蹲るや、ブロニスワフの目を見据えて「カラクテ」を始める。つまり、掌を祈るがごとくすり合わせ、重々しく顎鬚を撫でだしたのだ。ブロニシ[ブロニスワフの愛称、ここではピウスツキを指す]も同様にカラクテを返すと、二人は堰を切ったように対話を始める。彼らは大まじめで、相手の健康や互いの家族の健康、漁の成果など……について訊ねあった。

このアイヌはシパンラムの兄であった。われらはタロンチも例外とせず全員が順繰りに、やはり大まじめで挨拶の儀式をゆったり交わし、相手の健康や家族の健康、漁獲について語り合った。その後、シパンラムの兄は、婦人らが恭しく待ち構える家へわれらを誘(いざな)う。シパンラム夫人のキモノの中には、団子のように丸々肥えた末息子が裸身を潜めていた。

シパンラム夫人自身は一歩も動かず立ち尽くしていたが、われらが近づき、私の目が彼女の鹿の目を思わせるやや怯えた漆黒の目と交差すると、彼女の右手がゆるゆると持ち上がって、耳の脇に垂れる毛髪の束を撫でたあと、それを唇の入墨の上へ引き寄せ、両腕に沿わせ、さらにはだらりと垂れた左手に沿って指先に至るまで……走らせた。それが女のカラクテ、つまり挨拶であることを知った私は、お返しに、掌のすり合わせと撫鬚を三度繰り返す。シパンラム夫人は作法を心得ていたから、私が団長だと知って、私から挨拶を始めたのだ……。私たちは再び、お互いの健康、家族の健康、漁獲……について、ひとしきり語り合う。しかるのち私

が別の婦人を応接する間、シパンラム夫人と挨拶を交わしたのはブロニスワフである。

彼とのお喋りは長引いた。ネンタシク(Nentasik)――これがシパンラム夫人の名前だった――さんは、次のように語ったそうだ。彼女の夫は、われらに新鮮な魚を振る舞うべく、隣人と連れ立って海へ出かけて留守である。彼女は義兄とともに、出迎えに駅へ赴いたものの、列車の到着に間に合わなくて、われらを見つけられなかった。われらは汽車に乗って立ち去った、と告げる者もいたという。

> よくある和人の嘘ですよ。わしらは悲嘆に暮れて帰宅しましたが、その間に、わしの姉妹のイシュウチ(Isiuci)が「ニシパ(*niśpa*)」(旦那)の姿を路上で見かけ、旦那方はもう到着していると申しました。
>
> 到着してますとも、長居のつもりです……――と、ブロニスワフは笑いながら、交わされている会話を私に通訳する。

われらは屋内へ招じ入れられる。箱・樽・什器・道具類が満載の大きな玄室[セム(sem)]を通り抜けて、入口に対面する大窓や、側壁に設けた幾つかの小窓を通して採光される、広々として清潔な主室(ペタ)に入った。窓辺には就寝用の板床が低くしつらえてある。主室の中央に四角く仕切られた炉では火が燃え盛り、その煙は鉤や横木、そこから吊下がる魚を黒く染めながら、高い屋根裏の深い漆黒の中へ消えてゆく。屋内に天井はなく、粘土を踏み固めた床の炉端には、葦製の美しい茣蓙が数枚延べてある。

われらは東面の大窓の側に座るよう請われた。その場所は室内でも特上席とみなされているからだ。主室には箱類を別にすると、椅子はおろか家具も一切なかったから、われらは床へ直に腰を下ろした。茶と和菓子でもてなされたあと、飛び切り上等の燻製魚も振る舞われる。その座を取り仕切ったのはシパンラムの兄であるが、ネンタシクとイシュウチも然るべく手伝った。大勢の子供がひそひそ囁きながら主室を縦横に駆けめぐり、若い娘の姿が玄室の闇をよぎる。

> きっとシパンラムの娘、ショトゥナシ(Siotunaś)に違いない。彼が慌てて大阪から戻った理由の一つだった……。和人客や魚の仲買商らに娘が「熱を上げている」という怪しからぬ噂が、彼の耳に届いたからだ……。細君が煩くせがんで帰村を急かせたから、彼は博覧会事務局に損害賠償さえ求めず、持物を二束三文で叩き売った……。細君の持病とされた「脚気(ベリ・ベリ)」すら、なぜか急に直ってるぞ……。ほらね!… そうだろう!… だが後生だから、娘には目を向けないでくれ……、あたかも彼女はここにいないかのように。さもないと彼女は姿を隠し、二度と戻っては来ぬだろうさ。私は彼らを熟知している――ブロニスワフは私に警告した。

茶会が終わると、主人の兄はわれらに、大形魚捕獲用の長槍や、魚網・釣竿その他の漁具を披露した。そして、われらを村内視察に連れ出し、道すがら、アイヌが高い柱の上に倉を建ててきたわけを語る……。

> 蟻・野鼠・廿日鼠・狐の害を防ぐためですよ……。昔は住居も柱の上に建てたものだ。

彼はわれらを海辺に案内した。そこには、舟置場からほど遠からぬ砂丘に見事な「ヌサ・カムィ(*nusa-kamuj*)」が見出されたが、出漁時に海の神々へ敬意を表すべく立てられたものだ。そこでは何本もの「イナウ」が横なりに林立する。イナウとは、巧みに仕上げられた削掛けを伴う、人の背丈ほどの柳・水木・榛(はしばみ)の枝の呼称であるが、その天辺に集中する削掛けの束は、逆さに立てた[カトリック教会の]聖水盤を彷彿させる。岸に並ぶ舟には、ふさふさとした同様の「イナウ」ながら、やや小ぶりのものがそれぞれの舳に取り付けてあって、これは「カムィ・ルゥ(*kamuj-ru*)」(神の道)と称する。

われらの散策には子供らの群れが遠巻きに随行したが、耳も顔もピンと尖って、ジャッカ

ルを思わせる半野生の犬どもは、麻・蕎麻・巨粒蕎麦(*Polygonum sachaliniensis*)の繁みに身を隠し、われらに向かってけたたましく吠え続けた。大人の住人らは、建物の蔭や暗い玄室に身を潜めて、われらを仔細に観察していた。帰路には、高い支柱の上に建てられた木製の大型檻で飼育される、小さな狐(シュマリ) (*szumari*)を視察した。

雪が降れば、犠牲に供する予定だ！――と、アイヌは説明する。

夕刻が近づく。女主人はますます落ち着かなくなり、しきりに外へ出ては海上を見やるも、シパンラムの戻る気配はなかった。待つのもこれまでだ。われらは別れの挨拶を済ませて旅館へ向かった。

第二日

翌朝、われらが目を覚ますと、戸の外から来訪を告げる咳払いが聞こえてきて、われらの部屋の中へ日本式にいざりつつ入って来たのは、ノムラ・シパンラムである。われらは順々に、長いこと掌をすり合わせ鬚を撫でながら、健康・家族・漁獲を訊ね終えると、ノムラは再び咳払いを三度繰り返し、威儀を正して語りだした。

立派な「ニシパ」である旦那方にお目にかかれ、この僻地とやつがれの陋屋へ御光臨も賜りまして、嬉しい限りです……。海では何が起こるか知れませんから、昨日は夜半に漁から戻れました。旦那方の天界での取りなしのお蔭で、幸いにも大魚を仕留めまして、いまだ昨夜のうちに旦那方を夕食へお招きすべく参上いたしたものの、ガタピシ汽車での長旅でお疲れになり、既に御就寝でした。ですから、高貴な「ニシパ」である旦那方を起こすことは差し控えましたが、今は、わしの家人一同、いや全村すら挙げて、旦那方とともに海の幸を饗食し、各自に配当される肉片を持ち帰るべく、賓客である旦那方の御到来を待ち構えております……。今でこそわしは貧しいが、祖父と父は「ニシパ」で、やつがれもここの村長でありましたから、わしの隣人らは挙って、騙された哀れなアイヌに救いの手を差し伸べて下さった異国の「ニシパ」とお近づきになれるよう、心から願っております……。

長広舌は、自宅で催す祭宴への重ねての招待で締め括られた。私は宿の件の方が先決だと主張したが、それはおいそれと即決できる類の問題ではなく、このような重大事では、準備と議論に長い時間をかけるのがアイヌの流儀なのだ、とブロニスワフは断言する。そこで、ブロニスワフはまず手始めにシパンラム邸の見事な造りと壮大さを褒めあげたが、これは主人を欣喜雀躍させた。次いで、宿の亭主の貪欲と不親切や、去来する来客のもたらす恒常的騒音と騒擾に対する不満を訴えた挙句、彼は以下のような含蓄に富む謎までも掛けたのだ。即ち、われらが住居・生活の対価として支払うお金が、もしあの狡猾な和人ではなくて、例えば彼シパンラムのようなわれらが友、ないし彼の指名する誰かの手に渡るとしたら、われらにはその方が遥かに好ましいのだが、と……。

シパンラムは、われらの提案に明らさまな驚きを示して、自らの貧困・無知蒙昧、快適な暮らしの欠如、われらのような紳士の口には合わぬ劣悪な食事、商店・郵便局・役場の遠いこと……について、再び語りだした。彼の抗弁ならびに振舞い全体が、私には些か腑に落ちない。われらは持論を曲げなかった。すると、利益を侵害された和人たちが彼に危害を加えることを、実は心配しているというのだ……。私は一笑に付して、それは全く和人らの見当違いだ、われらはいずれにせよこの旅館を去る心算であって、行き先は、もし彼の所でなければ誰かほかの者の家、あるいは隣村の社台(Sataj)[か]厚真(Atma)、はたまた平取(Piratori)までも足を伸ばすかも知れぬ、と告げた。

われらが会いにきたのはアイヌであっ

て、和人ではない――と私は駄目を押す……。

地名の列挙に加えて、「駄目押し」が漁師をいたく感動させる。彼はわが国の農夫と全く同じ仕草で頭を掻きむしり、自分は当然ながら喜んで迎えたい、しかし……かほどの重大事だから細君とも相談せねばならぬと語った。

彼は退去に際し、タロンチとなにやら囁き交わしたが、その後は再び日本式に恭しく後ずさりしつつ戸口の外に消えた。だが直ちに戻ってきて敷居の手前から、宿の主人にはいくら払うのか、と訊ねる。われらが数字を告げるや、彼は「ハイェ・ク・ラム(*haye ku ramu*)!」(嗚呼、神様)と呟いて、長いこともの想いに耽る。戸を静かに引いて閉めたものの、彼がその場から立ち去った気配はなかった。ブロニスワフは嬉々として、あれこそが典型的なアイヌの振舞いであり、すべてはわれらが望むように落着すると断言するも、私は何かよからぬ予感を覚えた。再び訪意を告げる咳払いが廊下に響き渡り、戸が引き開けられると、隙間から覗いたのはシパンラムの蓬髪頭と、爛々輝く両の眼である。

> 結構です、引き受けましょう。宿の亭主に支払うのと同額をわしにお払いください。わしは旦那方に恩義がありますので断れません。但し、各村戸長(カク・ソング・コチョ)――村長と警察署長を兼ねる役職――を訪ねて、なぜアイヌとの暮らしを望まれるのか、そして、わし即ちシパンラムは恩義に報いるべく!!… 旦那方を引き受けねばならぬことも、説明して下さるようお願いします。
>
> まことに、すばらしい!… 即刻、各村戸長を訪おう。

私は、彼の悩みが遂に突き止められたので同意する。だが、われらが着心地のよい日本のキモノをヨーロッパ式装束に着替える暇もあらばこそ、部屋の敷居の前に姿を現したのは、ほかでもなく各村戸長[明治13～大正8年に存続した末端行政機関「各村戸長役場」の長、当時の白老郡各村戸長は佐伯茂治]その人である。その出立ちは洋装で、金ピカ・ボタン付きの黒い警察官用制服を纏い、筋入りのズボンをはいてゲートルを巻き、サーベルを佩帯するという完璧な「正装」だ。敬礼し、サーベルを外して畳の上に跪き、武具は脇に置く。私たちは握手し、「今日は(コンニシヴァ)」と日本語で挨拶を交わした。われらが頂戴した名刺には、長々しくもすばらしい彼の肩書が、日本の漢字のほかに英語でも記してある。われらもまた極東での慣例にしたがって、お返しに名刺を差出す。私に言わせるならば、西洋で実践されるような、自らの名をもごもご口頭で名乗ったのち、客人の住所を紙切れに書き留めたり、その個人情報を婉曲な方法で聞き出す労を重ねることに比べると、名刺の交換は遥かに礼儀に適った慣行である。

シパンラムは姿を消した。そこで、この和人との間では旅や天候、当地訪問の目的をめぐって、ごく普通の社交的会話が始まる。

お決まりの茶と和菓子とケーキが出てくる。各村戸長は、学術の崇高なる使命や、日本政府による学術の重用や学者支援をめぐって長口舌を揮った。

> けれどもわが国の教授には、それぞれに自前の専門領域があり、その埒を外れることは許されぬ……。ところで、貴殿らは何を探しておられるか。
>
> 何よりも先ず、アイヌの神々について学びたい…… ――と、私は彼の不安を鎮めることにこれ努める。
>
> ほう、あの木の削掛けの「イナウ」とな?… ――と見下げるように彼は笑う――そいつは研究しても宜しいが、地図を書くことは罷りなりませんぞ!…
>
> われらは日本製の地図を所持している――と私は応じた――ともあれ、あなたはわれらに関して、札幌の知事から特別な訓令を受けておられるでしょうね……。
>
> 本官は如何なる訓令も受領しておらん……。本官が申すことはすべて、掛値なしに本官の衷心と、貴殿らの安寧を慮る本官

の懸念に発するものである……。本官は貴殿らに、用心を怠らぬよう忠告しておく。アイヌは頗る貪欲で狡猾であるぞ。したがって、貴殿が博物館のために購入する物品の支払いは、本官立会いの下でなさらねばならぬ。本官が彼らに支払いを行うであろう。本官がこれを求めるのは、上司からの指示であるからだ。本官は貴殿らを教導せねばならぬ……。

彼は長々としゃべったのに、タロンチの翻訳は短かった。最も肝心な部分を隠したのではなかろうか。警官は退去に際し、シパンラム宅におけるわれらの宿泊を、寛大にも認めてくれた。

つまり、あなたはそのことを既に御存知でしたか。

本官は何でも承知しておる!… ――と決めつけて一礼するや、彼は戸口へ向かってすたすたと歩き出した。

しかしながら、ポーランドについては何も知らず、われらの度重なる抗議と解説にもかかわらず、彼は相変わらず、われらを「ロシア人(ロスヤニン)」(オロス)と呼びつづけた。

その日の夕刻、シパンラム宅へ引っ越した。われらはそこで、心温まる歓迎を受ける。東壁の「聖なる窓」の右手に当たる貴賓コーナーがわれらの指定席だった。そこにはわれらのために、菖蒲製の薄縁が板床の上に延べられ、木枕も添えてある。上掛けと小さなクッション枕は自前で携行していた。主人は直ちに「小さな祈り」を執行する。つまり、われらの持参した一瓶のヴォトカを、彼はまず金色の熊が底に描かれた赤い漆器椀へ空けて、それを一気にあおった。飲み干す前には数滴を炉の上に振り撒いて、「火の女神」に向けて短い祭文を唱えた。

彼女は女であるから――彼は解説する――どんなに些細なことでも腹を立てるのです。ですから旦那方の到来を祝賀する本番の「ヌサ」は明日執り行われるにも拘らず、彼女は今日もまた慰めてやらねばならんのですよ……。

少々酔っ払った主人は、われらが独り寝で「退屈」せぬよう、自分の娘を夜の床に侍らせようと申し入れた。われらの拒絶に彼は愕然となり、暫くの間、気落ちして座り続け、もの思いに耽る。

しからば、わしの妻を差し向けよう……。妻ならば、よもやお断りなさらんでしょうな!… ――と、彼は厳粛に告げる。

君は阿呆か!… ――ブロニスワフは食ってかかる――われらは和人の商人に非ず、われらにそのような習わしはないぞ。

無論、わしは阿呆でしょうよ!… けんど旦那方のような友人には、わしらが持っている最上のものを何でも差し上げるのです……。もし旦那方が函館で救って下さらなんだら、わしらはどうなってたでしょう……。和人はわしらを浮浪者として牢屋にぶちこみ、不名誉千番にも鎖をかけて家まで護送した上、罰金まで科したことでしょう……。ともかく、わしの祖父と父は「ニシパ」で、やつがれも数年前は当地の公選村長だったのですよ…… ――と、彼は向きになって復唱した。

女たちがこの会話を聞いていたかどうか定かではないが、彼女たちのわれらに対する態度は直ちに途方もなく親密となって、年頃のショトゥナシはあからさまに媚を振りまいた。

第三日

翌日、朝一番で風呂が用意される。われらは一晩中、蚤や虱に情け容赦なく襲われ続けたから、風呂はとても有難かった。ショトゥナシと叔母のイシュウチが玄室から鉄底の半裁樽を転がしてきて、レンガでしつらえた炉の上に置き、樽に水を張って薪に火を点けた。われらは恭しくも、下から熱せられた釜につかるよう招請され、先ずは私に白羽の矢が立った。日本では誰もが必要に迫られて裸体に慣れ、脱衣行為

にも鷹揚であるとはいえ、衝立もなかったから、私は好奇の視線から多少なりとも逃れるべく、普段はネガ・フィルムの現像時に使用する黒テントを拡げた。しかしながら、叔母かショトゥナシが、ひっきりなしにやってきては釜の下の火を掻き起こしてゆくので、私が独りになれる時間は長くなかった。この火起こしのお蔭で、釜の湯は短時間に加熱されたから、私はいたたまれずに湯船から飛び出し、入浴が終わるのを待ち構えていたアイヌたちを大いに驚かせ、かつ喜ばせることになった。次にブロニスワフの番となるが、彼はアイヌ語が達者だったから、適時に火を落とすよう、ショトゥナシへ告げることができた。

ブロニスワフからのちに聞かされたことであるが、ショトゥナシは、父親の申し出をわれらが断ったのは、一夜だけのことと解したから、「その一方で、われらがここに長逗留する予定とも承知していて、われらとはいつも仲良くすることを願っていた!」と語ったそうだ。

われらはそれぞれに野帳を整え、撮影機器や人類学的計測装置を点検して、決然と仕事に着手した。

ノムラ宅で過ごす日々

雨天の日と夕刻はフォークロア、つまり伝説・信仰・昔話を採録し、昼間は住宅や聖地、原野や聖なる森を訪ね、博物館標本を探索して入手する。私はそのほかに、子供たちの助けを借りて蝶と甲虫(こうちゅう)の標本採集にも携わり、――十点ごとに一銭(2ポーランド・グロシャ)!を与えていた。この提案は村の若者世代の全体に、暫時の採集熱を掻き立てることとなる。当初は中々信用されなかったものの、向こう見ずな挑戦者数名が数銭ずつせしめるや、少年のみならず少女らさえも「魔法の」小フラスコを求めて続々とやってきた。昆虫は必ず――「砂糖のような粉末」がコルク栓で密封された――この不思議な小瓶に収めよとの指導に接して、私の秘匿するものが様々に取沙汰された。――粉末は「青酸カリ」だったから、この小瓶を子供らへ渡す気にはなれなかった。彼らがひょっとして「舶来の砂糖」に幻惑され、それを味見せぬとも限らないからだ。青酸カリをベンジンに代えてみたところ、私の最大の関心事である甲虫目の昆虫は、湿気を吸って形状を崩してしまったから、悲惨な結果に終わる。

われらの物品購入は父親や母親たちの間に、なくもがなの大騒動を招来した。何人かの果報者が、古いがらくたの対価として途方もない大金を手にする。それを知った人々は我れも我れもと、まっさらな即製品を持ち込み、未使用であることを楯に倍額で引き取るよう求めだして、数々の悲喜劇さえ出来したからだ。その存在を知りつつも入手が最も困難だったのは、信仰にかかわる品々である。その実見をこの上なく熱望した数点のイナウは、われらの視線の埒外にあった。撮影すら許されない。われらに向けられた不信は一向に減少せず、却って増大するかに見えた。

ショトゥナシはブロニシへの当てつけとして、一人のアイヌ青年を連れて来る。この男は、主室(ペタ)には全く足を踏み入れず、誰とも挨拶を交わさず、われらにも名乗らなかったが、玄室の蔭の娘の寝床に腰を下ろして、キラキラ輝く両の眼でわれらをじっと見守り続けた。

> 彼には目を向けないでくれ、後生だからシパンラムには、彼のことを何も聞かないでおくれ、娘の求婚者なのだから……。両親は、彼の姿が全く見えない素振りをせねばならんのだ……。

その青年は夕食にすら呼ばれず、娘が密かに運んで来たものを食べたが、夜更けに姿を消し、彼とともにショトゥナシも消えて、彼女が帰宅したのは夜明け寸前だった。父親は彼女に一言も話しかけなかったが、シパンラム夫人の方は、あの青年は一体何者だね、という私の不用意な問いに対して答える。

> どんな青年だって?… 青年なんて一人もいなかったよ、私は見てないわ。

ショトゥナシは、われらが在宅する間はいつも外出して、野菜畑で一心不乱に除草したり、馬鈴薯を掘りつづけ、女主人はずっと不機嫌で、当たり散らしていた。

彼女は一体どうしたのかな——と、タロンチに訊ねると、日本製ベルトに常時帯びる時計の銀鎖を弄びつつ、彼は外交的沈黙を守ったが、遂に口を開く。

彼女はあなた方へ売却した品の値段が、余りにも安すぎたのが不満で悩んでますよ……。もし彼女の娘と寝ておられたら、彼女の親戚だったでしょうから話はまた別でしょうが、今はそう……とても悩ましいわけです!

われらは土地の人たちとの関係を良くすることに極力腐心してきたから、タロンチの説明は途方もなく滑稽に聞こえた。

それはどうかな! ——ブロニスワフは反駁する——このような手厚いもてなしは、アイヌの間で今一つ尋常ではないものだ。こんなこと、サハリンでは皆無だよ。ここの戒律は、正直のところ、はるかに緩やかだから、シパンラム夫妻はわれらの拒絶を、さほど深刻ではないにせよ、彼らに対するある種の軽蔑の印と受け取ったやも知れぬ……。だが、ほかに何かわけがある筈だ。一走りして、ショトゥナシから直に話を聞くのが一番だ!

ブロニスワフは、娘への贈物として小鋏を手に取るや、姿を消した。野菜畑からは程なく、朗らかな笑声と会話が聞こえたが、この会話にはタロンチも女主人も均しく興味津々で耳を傾けていた。

当たり前だが、そんなことじゃなかったよ——と、ブロニスワフは笑いながら説明する——ショトゥナシとはもはや仲直り、小鋏も御の字で受け取ってくれたよ……。だが事態は些か、より深刻の様子だ。漁獲がパタリと途絶えたのだ。ここ数日来、村では誰も魚一尾獲れておらぬ……。われらのために歓迎の宴を催したいのに、肝心の魚がないのだ……。魚が消えた理由は、もしかすると……われらの当地滞在に対する神々の不満かも知れぬ……。和人らはその種の噂を流している!… 今夕、もし空舟で戻るようならば、海辺で大祈祷を挙行し、新しい「ヌサ」を立てる計画だ……。エカシ・テパ(Ekaś-tepa)——[‘*tepa*’]は「褌」の意、シパンラムの年長親族の綽名——は既に隣村の敷生(しきう)(Si-Kiu)へ使者を送って、祈祷会を催すべき日取りと、その際にどのようなイナウを立てるべきか? をめぐって、サムクス(Samukus)長老へ助言を求めさせたそうだ。サムクスの言辞は常に有効適切で、彼は「タマッコト(*tamatkoto*)」(賢者)と見做されている。返事はまだない!… 皆は興奮しているそうだ。

われらとても、その一件の解決はある程度までわが調査団の命運にもかかわるだけに、やはり興奮し、また関心も覚えた。タロンチでさえも不安を隠さず、外で耳にしたニュースを刻々と伝えてくれる。

彼らは、いつ「ヌサ」を立てるべきかをめぐって口論を重ねてますが、それは酒(サケ)の資金がないためでして、酒(サケ)がなければ「ヌサ」は立てられません!

ノムラは今日中にも「トルコーツァ(*tol-kooca*)」(送別料理)をわれらに出すべきだ、と言い張る者もいますが、ネンタシクは不同意でして、あなた方からは困ったときに余りにもたくさん助けてもらったから!…と言ってます。

サムクスからは久しく返事がありません……。拙いことにならねばよいが……。皆は口角に泡を飛ばしてます!…

ノムラが再度の不首尾に関する知らせを嘆きつつ漁から戻ると、私はブロニシへ、以下の

ことをノムラに伝えるよう頼んだ。即ち、われらはやはり友人として、是非とも儀式に参加したいが、魚を捕まえられるわけでも、またイナウが削れるわけでもないから、祈祷会に必要な量の酒(サケ)を提供させては貰えぬか、と。ノムラの気は直ちに晴れたものの、作法は彼に長考熟慮を命じる。しかるのちに、この件を長老たちと相談することを、われらに約束した。彼は姿を消し、夜更けになって泥酔状態で帰宅する。

ネンタシクは肚を括って待ちつづけ、娘にも就寝を禁じていた。夫婦喧嘩が出来する。ノムラは細君に対して雄弁の長広舌を揮った。自分の茣蓙の上で顔を伏せて横たわる彼女は、返答拒否を貫き、度重なる哀願にも一切耳を貸さず、夕食も出さず、自分の寝所へは向かわずに、娘と寝床をともにすべく玄室へ直行した。独り残されたノムラは、寝所を蔽う垂幕の中から頭を覗かせて、われらに嘆きのエールを送った。しかしながら、翌日には平和が回復された。

祭り前夜

ノムラは、われらの酒(サケ)が受け入れられ、われらも儀式へ招待されたことを厳かに告げた。だが、それがいつ挙行されるかはサムクスの一声次第。しかし村では誰も、供犠の前に神々の機嫌を損ねるのを恐れて出漁せず、加えて、直ちに執行せよとの命令はいつ下されるとも限らぬからだ。儀式の執行は、舟が海上にある限り厳禁とされていた。

かくて、祝祭の気運が漲る。「巧みと知識の人たち」は、「イナウ」の材料として用意された木片の炙りに着手する。われらはショトゥナシの弟妹――居合わせたのは五人ほどだった――から、われらの隣人が、「ウトゥカニ(*utukani*)」と称する木[水木]で「イナウ」を作るよう命ぜられたことを教わる。われらは、今日中に各村戸長(カク・ソング・コチョ)を訪ねるよう、主人から頼まれるより前に、[イナウ製作の現場へ]作業の観察に赴くことを決めていたのだった。

旦那方はまだ彼の許を訪ねておられぬが、彼はもう旦那方の所に来ましたね……。今日はここにたくさんの人が集まります……。彼が誰にも腹を立てることのないよう取り計らう方が、よろしいのではないですか――と、主人はわれらに意味深長に語る。

そこでわれらは燕尾服を着用し、和人の村へ向けて出発した。途中で暫時、あるイナウ作りの家に立ち寄る。彼は窓辺の板製寝台に腰を下ろして、火で炙って柔らかくした柳の棒から、頗る薄い皮膜をナイフで削り上げていた。削掛けの束は、その先端で、ある種の巻毛の房のようなものを形づくるのだ。

これらの削掛けは、見るからにアイヌ自身を彷彿とさせるな!… ――と、私は自らの印象をブロニスワフに披瀝する。

まさにそうだね!… 幾つかのサハリンの削掛けには顎鬚があって、口や目や鼻まで彫り込んであるよ――ピウスツキは私の見立てに同調する。

そしてまた、地上で暮らすアイヌと神々の仲を取りもつ仲介者でもある。

皆がそう言うね!…

アイヌに人身供犠の伝説はないのかな?…

知らんな。聞いたことも、訊ねたこともないぞ……。ひょっとして優しすぎるかもね!

とはいえ、この方面でも追究してみよう。ここでも蒙古の事例に類するものがないとも限らんからな……。蒙古では、かつて生きながら供犠に付された馬が、紙に描かれたその画像で代替されていたぞ……。

こんなお喋りを重ねるうちに、われらはいつの間にか、各村戸長(カク・ソング・コチョ)宅の前に来ていた。彼は、事務所に併設された小さくて頗る清潔な宿舎で暮らしている。彼はわれらを事務所へ案内し、火鉢(ヒバチ)近くの畳に座らせて、強いて礼儀正しく、かつまた多弁であろうとも努める。しかし、彼の微笑みの裏には、不安と苛立ちが透けて見え

る。十分に魅力的で若い細君は直ちに、可愛らしい茶碗に入れた苦いお茶を運んできて、漆塗りの脚付き小盆に載せたケーキも勧める。「カク」[各村戸長]は、突然、高圧的な声音でいきなり「書類」を要求した。われらは通常の外交旅券以外、書類は一切所持せぬが、旅券ひとつあればどこでも十分だったと答え、加えて、あなたは札幌の「総督」[前出の「知事」と同様に、官選北海道長官を指す]から、われらにかかわる訓令を受けておられる筈だがと逆襲するや、自分は如何なる文書も受領しておらず、われらはそれゆえ即刻、警察署へ出頭せねばならぬ、と居丈高に捲し立てる。つまり、要するに逮捕されるというわけだ。

私は、彼の言うことに従うつもりは毛頭なく、しかも幾つかの日本の学術機関の庇護下にあるのだから、東京から明示的な命令が届かぬ限り、警察署には出頭しないと言明する。

すると、彼は急に態度を軟化させ、今日は函館から札幌へ移動する軍部隊が村を行軍通過するが、外国人がそれを見ることは罷りならんのだ……、と言いわけを述べだした。

われらはまさか警察署行きは望んでおらんだろうから、今日一日は外出を控え、路上には姿を一切見せぬよう、さもないと面倒なことになるぞ……と、彼は忠告した。われらは軍隊には全く関心がない旨明言した上で、「総督」からの文書が届くまでの暫時、白老における学術目的の滞在を認める許可証を発行するよう要請する。彼は表情を和らげ、和紙(ビブウカ)の断片に筆を走らせて「これ、これのポランド(Porando)人は、白老村とその近辺で、アイヌの生活に親しく接すべく滞在中である」と書いてくれた。かくて気に染まぬ訪問は、別れに際しての偽りの微笑みと、深々としたお辞儀という甘味添加をもって、遂に大団円を迎える。

貴殿らはその鼻で、なかんずく夜間には、屋外を嗅ぎ廻ったりせぬよう……、これは貴殿らの安寧を慮る助言であるぞ――これは、敷居口に立ってわれらを見送る、各村戸長の餞の辞だった。

路上で出喰わした洋装の和人二人は、われらへ向けて鋭い威嚇の視線を投げかけた……。村でも異常な動きは察知できる。われらは、シパンラムが付添いとして派遣した「中の息子」にせっつかれて帰宅を急ぐ。少年に事の真相について訊ねるも、語ってはもらえない。全般的興奮はわれらにも伝わってくるが、格別に憂慮したのはシパンラムである。われらがシパンラム宅に入るや否や、かなり立派な顔立ちで色黒の見知らぬ紳士が訪ねてきた。彼は黒っぽい質素な洋装で、腕には赤い腕章を巻いて、札幌の新聞の通信員を名乗り、われらのことはバチェラー氏から聞いて訪ねて来たと告げる。立派な英語を操る。われらの仕事の進展と、この先いかほど白老に留まり、その後どちらへ赴く意向であるかと訊ねた。彼は退出に際して、「カク」[各村戸長]と同様に、街頭には出ぬように勧める。軍隊の遍在と、人心の全般的動揺は、開戦の噂が流れるだけでも暴動を起しかねぬからだという。

あなた方は、失礼ながら、研究のために拙い時機を選ばれましたな――と、彼は薄笑いを浮かべて論評する。

誰にも予見できぬのではないか?…

そうでしたね。そうですが、今日も、明朝も!…、外出は避けた方がよろしいですよ。部隊では病人が続出し、兵士が四名も死にましたから!

会話が続く間、身なりから見て軍人と思しき別の和人が、敷居に座って聞き耳を立てていたが、促しても入室しないばかりか、返事すら返さなかった。和人たちの訪問は、われら全員に憂鬱な印象を与えた。シパンラムは、これら和人が去ったあとも長いこと陰鬱な面持ちで坐しつづけ、子供や女らは物蔭に身を隠していた。そこへ前触れもなく入室してきたのが、われらにとっては未知の、人品卑しからざるアイヌの二人連れである。彼らが貴賓席へ通されて、荘

厳な挨拶の儀式が終わったあとで、二人はサムクスの使者であると、われらにも告げられた。返事の遅れは部隊の行進が原因で、行軍部隊が通過するまでは、誰にも道路の通行が許可されなかったとの説明がある。サムクスは、明日執り行われる儀式に向けて到着し、それには、異国の方々も参加してよろしいとのことだった。

この決定は全員に陽気な気分を取り戻させた。シパンラムは私から一円を借りると、神々と客人らへ敬意を表し、朗報を祝うべく、直ちに息子を走らせて酒(サケ)を求めさせた。そして、北の壁際に置かれた大型の宝箱から、黒漆塗りの見事な古式椀が取り出され、炉の東隅に据えて、ヴォトカが並々と注がれたが、その前には、内側が朱と金で彩色された黒漆塗りの酒盃[トゥーキ]も五個ほど並べられる。そこには、内底に金の熊が描出された周知の酒盃もしっかり鎮座するが、これは主人専用の盃である。それぞれの酒盃の上には、美しく彫刻され着色された木製短剣の、「髭の守護者[捧酒箆、いわゆる髭箆(ひげべら)]」(*iku-pasin*[正しくは*iku-pasui*])が載せてある。豪華に装飾された楡樹皮繊維製長衣(カフタン)[アトゥシ]を纏って、ヴォトカのすぐ傍に座を占める主人は、まず最初の酒盃に「神々のため」ヴォトカを並々と注いで、自分の年長親族で、また当代村長でもあるエカシ・テパに、それを奉呈した。盃を受け取った村長は、顎鬚を厳かに撫でながら、当家専属の「イナウ」が林立する「東の窓」近くのコーナーへ顔を向ける。彼は酒盃を山に向けて持ち上げ、地下に向けて下ろしながら長いこと祈りつづけ、ぶつぶつ祭文を唱える……。ノムラはその間、次の酒盃へ酒(サケ)を注いで自分の兄へ渡すと、兄もまた同様に顎鬚を撫で、祭文を呟きだして、「捧酒箆」の先を酒(サケ)に浸し、それで炉の火と炉の枠へ、また灰の中に突き刺した小「イナウ」群へも酒(サケ)を振り撒き、しかるのちに、恍惚状態で目を瞑(つぶ)って跪(ひざまず)いた。主人は三番目の客人のためとて第三の酒盃に、そして第四のそれは自分自身のために、それぞれ注いだ……。今や全員が既に祭文を唱え、視線を起こして山を崇め、ヴォトカを火の上に振り撒き、長くて見事な顎鬚も撫でたわけだ……。エカシ・テパはその後もずっと跪いたまま、両の眼で「イナウ」を凝視しつつ、片手では己の顎鬚を撫でつづけた……。炉の火だけが光源である屋内を支配する荘厳な静寂(しじま)の中では、断続的に発せられる敬虔な呟きのみが耳を打ち続ける……。暖かい夜空の星たちは、広く放たれた「東の窓」を覗き込み、遠くに響く上げ潮のざわめきは、敬虔な囁きや後悔の溜息と溶け合う……。われらは鉛筆と野帳で武装する外来者であるから、この興味深い舞台からは、たとえどんなに瑣末な事柄であろうとも、決して見落とすことはなかった……。

何の前触れもなく、突然、壁の外で足音がして、日本兵三名が「聖なる窓」[白老では「東の窓」に同じ、後出のように「神窓」ともいう]に影を投じた。彼らは一斉にライフル銃を肩から降ろし、「戦闘準備」の構えで銃身を家に向けた……。敬虔なる呟きは止み、人々の動きも停止する。アイヌたちは、魔法にかかったかのように凝り固まる。白状するが、私もやはり不愉快な連想が頭をよぎり、各村戸長(カク・ソング・コチョ)の脅しと通信員の助言も想起された。兵士らはギラギラ輝く細い目を、誰よりもまずはわれらに向ける……。日本兵らが一斉に弾薬嚢へ手を伸ばしたときは、不快感がいや増した……。われらは引き続きノートに記帳する振りを続けたが、寸毫も恐怖の色を見せなかったアイヌらの豪気には、私もやはり驚きを禁じえなかった。突如として窓辺に愉快そうな笑い声が拡がり、弾薬嚢から取出された紙巻きタバコが、馬鹿笑いで開いた兵士たちの大口へ運ばれるまでには、長い時間を要した。

どうだ、怖かったかね！——兵士の一人が日本語で訊ねる——俺たちは、お前らが何をしておるか 、見に来たのだ!…

御覧の通り、祈っておりますだ——エカシ・テパは答える。

そうだ、そうだろうて!… お前らは神々へ捧げると称して、ヴォトカを飲んでおる

のだ……。

ひょっとして旦那方もどうです、ちょっと嗜まれませんか!?…

いや、俺らは禁止されておる……。服務中だ……。

兵士らは紙巻きタバコを吸い終えると、やって来たときと同様に忽然と姿を消した。そして再び、煌々と輝く星々は天空の高みから、広く開け放たれた「聖なる窓」を通してわれらを覗き込みつづけ、暖かいそよ風は高まる潮騒を運びながら、海の方から吹き寄せていた。今に至るまで、あの「聖なる窓」における日本兵らの、意表を突くような象徴的顕現……が私に与えた不思議な印象は、依然として記憶に新しく、それに思いを馳せることもしばしばの昨今である。

この一件はアイヌたちの間にも、負けず劣らず大きな印象を残した。

威儀を正した鬚面の男らは、黒と白の正装に身に固めたまま、酒で満たされた供犠用酒盃を目前にしながらも、長いこと不動の姿勢で座りつづけた。そして、シパンラムの息子が入口に懸る蓆の下から頭を出して、「もういないよ」と囁くや否や、威風堂々たる男たちは無言で、一斉に飲物へ手を伸ばし、だらりと垂れ下がるアザラシのような口髭を、木彫の「捧酒篦」で慎重に持ち上げつつ、酒盃を一気にあおった。

空になった酒盃に、シパンラムは再び酒を注いだ。

それ見たことか、彼らはただ嚇したかっただけさ! ——最初に声を上げたのはエカシ・テパである。

それなら、しくじったな!… ——と、若い客の一人が笑い出す。

虐める相手は、どうしていつもわしらアイヌなんだ。通りすがりの者が余所様の家を覗くとは、しかも、親族ですらそこを通して覗くことは禁じられている「東の窓」から覗くなんて、もっての外だ!… ——と、シパンラムの兄は憤慨する。

今や、罪を購うのに、どれほどの酒を飲み干せばよいのやら!… ——と、主人は溜息を吐いた。

酒盃に注ぎ、それを飲み干すことの反復は、ますます円滑に進行する。祭文はますます短くなり、人の動きはますます激しさを増してゆく。主人は自分の宝箱を開けて、削掛けで編み上げた礼冠[サパンペ]ではあるが、経年と煙の所為で真黒に染まった代物をそこから取り出す。彼がそれを自分の頭に仰々しく被せるや、他の人たちも己の礼冠を着衣の中から引っぱり出すか、あるいはシパンラムから予備の礼冠を拝借する。冠の先端にはギラギラ輝くお守り——熊の爪、鷲の嘴、木・骨・角を彫り上げた狐・狼の頭、魚・亀の像——が取り付けてある。会話はさらに声高となる。シパンラムが嗄れ声で歌いだした。ブロニスワフは、すべてをアイヌ語のまま速記する。タロンチは私のため、ロシア語に通訳する。ノムラはその歌の中で、大阪から戻るときの悲惨な旅や、われらとの出会いを最大限の情熱を傾けて叙述する。その場の全員がわれらの周りに集合して、口々に感謝を述べ、かの忌々しい酒をわれらの盃にも注いでくれるから、われらはその都度、飲み干さねばならなかった。われらには一つだけ、どうしても実行不能なものがあった。それは木彫の「捧酒篦」で威厳を保って口髭を持ち上げることだったが、結局は、寛大にも免除してもらえた。

わしに一円くださいな。見ての通り、和人たちはべらぼうなことをしてくれましたよ……。神々はひどくお怒りです!!… ——私の脇までいざリ寄って、ノムラは囁いた。

しばらく経つと、シパンラムの息子が空瓶を小脇に抱えて和人村へ駆けつけた。一方、屋内は騒々しくなって、アイヌたちは歌いかつ叫び、競いあって和人らを罵倒する……。

わしらが奴隷身分に落とされてから、どの位経つかな?…

わしらから生業(なりわい)の場を召し上げといて、わしらアイヌは週に三日、「ダイミヨサ(dajmijosa)[大名様?]」のため労役に服すか、賠償金を支払わねばならなかった!…

海や森からの産物の半分は、和人の領主(パンシ)へ差し出すべし!…

わしらが理由(わけ)もなく鞭打たれ、二本の柱の間に磔(はりつけ)られ、絞首台に髪の毛で吊り下げられて以来、どれほどの時が流れたか!…

あるいは今のことだが、わしらの土地はすべて略奪されて、度重なる請願・陳情の末に、破廉恥にもちっぽけな地所が分与されたが、この地所は住居と幾条かの馬鈴薯畑でもう満杯だ。

その地所に課される税金の高いこと! 海岸の借地料もまた然り!…「アヨ(*Ajo*)!」

彼らは、無毛豚のように体毛がないことで、威張り散らしておるのだ!…

「フット、フット(*Hut! Hut!*)」(恥を知れ)――女たちが叫ぶ。

「アイ・オイナ(Aj-ojna)」(至高の精霊)がわしらに、人が必要とする所にはすべて毛を与えたのが、彼らには妬(ねた)ましいのよ……。とどのつまり彼らは毛深い女が好きなのだ、だからこそ、わしらの娘たちを追い回すのさ……。

「イセンラㇺテ(*Isenramte*)!」(まさか)――女たちは笑う。

彼らの顔に毛が三本生えると、それをとても大事に育てるそうな。海の彼方から来られた紳士(パンシ)方のようになりたいのだ!「アイヌ・ボタ(*Ainu bota*)!」(然り、わしはアイヌだ)。わしらがそのことに思い悩む必要はない、旦那方と同様、既に幾世紀もそうなのだから…… ――矛先がわれらの方へ向いてきた。

再びわれらの盃が充たされて、再度、顎鬚を荘厳に撫ぜ、忌々しい酒(サケ)を飲まねばならなかった。

祭宴が果たしてどのように終わるかは、頂点に達した興奮が、女や子供たちにまでも拡がりだしたから、私には全く見当がつかなかった。主催者らは彼女たちに、――飲み残された酒盃が背後からそっと渡される――「パチェス(*paczies*)[正しくは*pa-keś*]」と称する飲物を気前よく振る舞っていたからだ。主人が跪いたまま私の方へ密かににじり寄ってくるのを見て、私は三度目の一円の貸付けをほとんど覚悟したそのとき、入口の枠を叩く音が聞こえた。蓆を上げて身を乗り出したネンタシクは、不安に駆られて夫を呼ぶ。慌てて庭へ飛び出した夫は、間もなく当惑の態で、脱いだ礼冠を手に戻ってきて、小声で囁いた。

警察だ!… 散会を命じてる!…

「威風堂々たる」男たちはしばらく押し黙る。

気晴らしをすることすら許されんのか――と、サムクスの使者は呟く。

彼らは命令を受け入れて、飲み残したヴォトカとの別れに、あからさまな未練を残しつつも退出する。敷生からの客人たちは、エカシ・テパが自宅に招待した。

競技会

翌日は早朝から、われらが家の前面で、当地の小学校の生徒らが愛国的示威集会を催した。彼らは木銃を肩に担いで整然と行進し、幾種もの軍事演習や武器操作実習も繰り広げる。のべつ幕なしに大声を張り上げて、日本の国歌を歌い続ける。生徒の半分はアイヌで、もう半分が和人だったが、集会の指揮を執ったのは十四歳のサコチ(Sakoci)――「賢人気取りで大の和風かぶれ」のサレッテ(Sarette)の息子――である。彼らの演習をわれらが頗る静粛に見学したことを確かめるや、少年たちは解散して、一部は帰宅したが、一部は海岸へ向かった。そこでは「ヌサ」の建立に先立って、スポーツ競技会が催されることになっていたからだ。われらは後者のあとを追った。

競技の種目は徒競走・跳躍・槍投げだ。参加

者は専ら若者たちであるから、まさに絵に描いたように見事な光景が繰り広げられる。競技場は、真珠色の波が常に打ち寄せる黄色の砂地に延びる、よく踏み固められた平坦地。背景では晴天の瑠璃色の空が、太平洋の青い鏡面に寄り添う。このように静かで暖かでよく晴れた日々が、この地の初秋には極めてしばしば訪れる。とりわけての見物(みもの)は槍投げだが、そこで使用される長槍(オップ)(*op*)は、アイヌが――海豚(いるか)・一角(イッカク)・鮫・太刀魚といった――大型魚を捕獲する際に使用するものだ。標的は老朽木の断片であるが、投擲場所から三十メートル離れた地点に置かれている。投擲場では、褌を着けただけの全裸に近い青年たちが順繰りに立ち、優美に体をのけ反らせたあと、弾みをつけて槍を投げる。圧倒的に若い女や子供らからなる観衆は「イシリ・クラウッチェ(*Isziri-Kurautcie*)!」、「ホタラ(*Chotara*)!」、「イセン・ラマテ(*Isen-ramte*)!」、「イラム・シトネル(*Iram-szitner*)!」といった掛け声を発して、自らの称賛ないしは不満を表明する。近くの丘の上に腰を下ろす髭面の年輩者たちは、競技の成り行きを静かに、かつ熱心に見守る。私の頭を、古代ギリシャの浅浮彫の記憶がよぎった。

和人らの発する銃声で中断を余儀なくされた、と村では語られる昨日の祭宴が、アイヌたちのわれらに対する友情を頗る高めたお蔭で、私は彼らの競技の様子をカメラに収めるだけでなく、映画撮影機による記録さえも可能となる。私の撮影機は旧式で、本体もトネリコ材の大箱だったから、三脚に取り付けるのにもかなりな時間を要したが、それにも拘らず、われらの新しい友人たちは辛抱強く待ってくれて、自らの競技をすべて、わざわざやり直すところまでも協力してくれた。

「賢人」サレッテ

村は既にお祭り気分一色で、必要な「イナウ」作りに携わる人たち以外は、誰も働かない。われらはこの機会を捉えて、白老川[原文では「ペツ川」とある]の川向こうにある数軒の家を、シパンラムの案内で訪ねた。われらはなかんずく、先述の和風文化にかぶれた「賢人」サレッテの家を訪ねた。住宅には和風の床が張られ、部屋も襖・障子や窓で仕切られていて、確かに彼は半和風生活を享受している。まさに窓辺に坐して、日本語の書物を読んでいるのだ。屋内の一隅に据えられた仏壇がわれらの目を惹いた。しかしそれは、部屋の四隅や天井の梁に、はたまた「仏壇」の中ですら、新旧の「イナウ」が賑やかに懸けられるのを決して妨げないのだ。「賢人」はまた、その日に予定される「ヌサ」建立式への出席も明言する。われらが入室するや、彼は素通しガラス入りの眼鏡を鼻に掛けた。彼は視力抜群で、しかも――群来(くき)の到来を逸早く伝える――「追跡者」の役さえ務めるほどだから、この際の眼鏡着用は学識(ウチョノシチ)のひけらかしにほかならぬ。しかるに「学識」は別にして、彼は神々や人々の不興を買うことは望まず、細君は和人である。家では子供たちと日本語で会話する。彼の長男はわれらを胡散臭そうに眺め、何も受け取ろうとせず、話そうともしなかった。

ヌサの建立

夕刻前に、「ヌサ」の建立式が間もなく開始、との知らせが届く。われらは海岸に赴くが、そこへはすべての村人が三々五々集結中だった。海側は地肌を曝すも、陸側では山査子(さんざし)[浜茄子であろう]・薊(あざみ)・野草が密生する砂丘では、数人の「イナウの匠(たくみ)」が、丘の天辺に列状に立てられた幾本もの長い小柱に「イナウ」を結縛する作業を進めている。競技の方は、素っ裸ないしほとんど全裸の子供たちが幾つかのグループに分かれて、小弓による弓射や投げ矢競技に熱中し、また波打ち際の一線に、丸太を敷いて並置された舟の列の周りでは、鬼ごっこにも打ち興じていた。

夜の帳が降りてゆく。暮れなずむ山々の上に懸る黒雲の大群は、アイヌの豊かな蓬髪を髣髴とさせる。幾つかの火山の火口部の上だけは、あたかも大地の熱い息吹がそこから雲を逐い

払ったかのように、かそけし光を放つ星々によって空もしらずむ。西方の高い岬の彼方では夕焼けが、乱舞する金粉のように消えてゆき、山々の尾根や黒い森の輪郭、そしてアイヌ家屋の葦葺屋根の切妻の上には、かすかな銅(あかがね)色の光線を注ぎかける。

村から延びる小径では、黒白の図柄で装飾された長衣を纏う長老たちが、白い「イナウ」の束や――椀・酒盃・桶といった――儀礼用漆器を抱えて悠然と歩いているが、各自が運ぶのは自らの所蔵品から精選されたものだ。

海は長い波を転がしながら単調な潮騒を奏でる。沖を走る見知らぬ孤舟は、波間に消え、また波頭に現れては、岸へ向けて舟足を速め、陸(おか)では汽車が、谷間の奥に虚ろな音を単調に響かせて通り過ぎる。

遂に、各家の主人が全員顔を揃えるや、丘の近くに円座を組み、「イナウ」を配置する順序をめぐって相談が始まる。誰しも言い出しっぺにはなりたがるから、神々や人々の誰一人として怒らせ、傷つけたりせぬためには、よくよく議論を尽くすことが重要だ。議論で仲裁役を買って出たのは、背中に赤と白の図柄を切り伏せた黒っぽいキモノを纏う、まだ若くて元気溌剌なアイヌである。われらとは初対面だったから、彼は近づいてきて、名前は名乗らずに「撫鬚と掌のすり合わせ」でわれらと挨拶を交わした。彼はやや勿体ぶった態度で、魚が不足したから神々に支援を求むべく人々は決議したのだ、アイヌの間ではこれが太古から受け継がれた習わしであって、このあとは酒(サケ)を飲むであろう、とわれらに説明し、さらに、われらが儀式に参加してくれるのはとても嬉しいとも付言した。若者らはその間、丘の海側に半円状に立てられた「イナウ」の列に沿って、茣蓙を並べてゆく。このように波の届かぬ高みにあって、部分的には草も繁茂する丘は、ありとあらゆる儀式の場として頗る重用されるため、特別に「マサラ(*masara*)」と呼ばれている。

まずは年長者らが祭文を唱え、若い連中はその次だ!…――と、われらに説明がある。

顎鬚を蓄えた男三人が「ヌサ」の傍らに坐して、酒(サケ)で満杯の大きな「シントコ(*sintoko*)」(漆塗りの桶)に対面している。その一人が朗々と神々や魚や人間たちをめぐって、延々と続く荘厳な祭文を唱える。一人の若い「汲み役(チェルパチ)」が、長老三人の前に据えられた四個の酒盃――第四の酒盃は神々へ捧げられる――にヴォトカを注いで、各盃の上には美しい「捧酒箆」を一つずつ載せてゆく。四人[ママ]の長老が酒盃の前に跪き、天や海を仰ぎつつ祈り始める。怒り猛る熊が発する咆哮を思わせる祈りには、折に触れて大絶叫が挟まれる。さまざまな声は混じり合って、嵐のような「レチタティーボ」(叙唱)となる……。あちこちの家々からは、今なお酒(サケ)が大量に運び出されている。われらが奉納した酒(サケ)なぞ、ほんの僅かな部分を占めるに過ぎない。運び込まれた酒(サケ)は、「汲み役」がすべてを共通の「シントコ」に空けると、「酌役(ポトチャシー)」が[そこから柄杓で掬っては]敬虔に飲み干された空の「酒盃」へと注ぎ分けてゆく。「イナウ」にも時折ヴォトカが振り撒かれる。最初の長老三人の脇には、新しい四人の長老が坐して、顎鬚を撫で、片腕を突き出しながら……、再び長いこと祈りつづける。彼らは立ち上がるや、酒盃を天に向けて高く掲げる……。腰を下ろす。そして再び飲み、祈りを唱えながら、渦巻く削掛けが冠部を形づくる「イナウ」の天辺、しばしば口が描かれるその中央部、そしてまた「脚」の始まる下部にも酒を振り掛ける。彼らはほんのお印に振り撒くだけで、その大部分は自らが飲み干す。若者らは己の番が回ってくるのをじりじりと待ちつづけ、違反行為のないように一部始終をじっと凝視する。わが主人は「重い神々」の分として、われらの奉納した酒(サケ)を入れた桶はわざと別置している。これらの神々には、彼がエカシ・テパとともに祈りを捧げることになっているからだ。

儀式は深夜に、女や子供たちも含め、すべての者にヴォトカが大盤振舞いされたあとの、全

員参加の乱痴気騒ぎをもって幕を閉じた。海上に天高くかかる月が、アナクレオン[紀元前六世紀ギリシャの抒情詩人]の時代と同じ銀の光で地表を照らしつづける中に、家路に就く酩酊した長老たちと、大声を上げて彼らを先導するしどけない姿の女たちや、陽気な裸の若者らの華やかな行列があった。

効験あらたか

翌日、われらはある種の不安とともに、祈祷の効験や如何に、と待ちつづけた。われらと不安を共にする女主人は、太陽が西に傾くにつれて、ますます頻繁に家の前に出ては、小手をかざして、青味の募る遠い海を見守ることを繰り返した。すると突然、一人の少年が注進に駆けつける。

舟たちが戻ってくるよ!…

子供らは全員がショトゥナシを先頭に、その後ろにはシパンラム夫人も、海へ向かって一斉に駆けだした。われらもそこへ向けてひた走る。前日の「ヌサ」がしらずむ砂丘には村人の半数が佇んで、夕焼けの深紅色に染まり、きらきら波立つ太平洋の海原に見入っている。われらの目では何も見えなかったが、地元の人たちは、漁師たちのお帰りだ、「高潮」が始まったからもう間もなくだと断言する。巨大な波は、実際に、ばかでかい渦が逆巻く寄せ波をますます高く押し上げる。海上では水平線の彼方から、不気味な紫色の線がこちらへ流れてくるが、われらは突如として、この線上に一つの黒点を、次いで第二、第三の黒点も認め、ついには、全速で接近中の漁舟(いさりぶね)編隊の全容も確認する。ほどなく、舟端で拍子を合わせて水を打つ櫂も既に識別できる。逆巻く大波は同編隊を、時に呑みこみ、時に天高く押し上げる。既に指呼の間となるや、人の姿やその顔までも判別可能となるが、海鳴りがあらゆる音をかき消してしまう。高潮は山なす水塊を数十メートルの高みにまで持ち上げるが、落下させる段になると、滝のような破壊力でそれを海岸に叩きつける。彼らは果たして無事に接岸できるのだろうか、と私は危惧を表明した。

接岸できますとも!… ——と、タロンチは一笑する。

漁舟(いさりぶね)編隊は斜めに縦隊列を組んだ。先頭の舟とわれらの間は、僅かに波一つ。岸に集まった人たちは幾つかの小グループに分かれ、岸辺に沿って散開する。山のような大水塊が先頭の舟を捉えると、天辺の渦をがぶりと巻き込んで、舟をわれらの方へ押しやる。漁師らは、蜻蛉が翅でそうするように軽々と櫂を操って、舟を後退させながら泡立つ大波の背後に押し止めたが、渦巻きは舟の僅か数メートル先にまで迫る。私は、漁師たちの技量と沈着に驚きを禁じえなかった。

大波がずしんと岸に落下して、自らの膨らんだ艀から、ほとんどわれらの足元へ舟を投げ出し、砂の上にさっと広がる。漁師たちは直ちに舟から飛び降り、艫と舳を抱えて陸の方へ曳いてゆく。われらのグループから少年たちが応援に駆けつけ、舟の艫に打ちこんである環頭釘に長いロープを通し、近くにある巻上げ機にしっかり結縛する。同機には即刻、長老や若者たちが飛びつき、手分けしてそのシャフトを押し始める。[ギリシャ神話の]サテュロス[ディオニュソス神の従者、半人半獣の森の神]さながらに毛むくじゃらな長老の脇で押すのは、だらりと垂れ下がる乳房が常にシャフトの上で揺れつづける、背に子を負った半裸の女であるが、その後ろでは、青年の青銅像のように素っ裸の若者が踏ん張り、さらに、口の周りには髭の、また両の腕(かいな)にも青い絵の入墨を施した、腰の周りに布の帯を巻きつけただけの女、そして再び、口元・唇・両腕に同様な入墨を施し、何本もの頭髪の房がしなびた顔に振り掛かる、仕事で日焼けした年配の女……、と続く。

皆はその筋骨逞しい脚を砂中深くまでめりこませながら、全身を託して[シャフトを]押し続けた……。まさに石器時代の勤労を偲ばせる情景だ!… その間、小さな坊主たちが舟底の下

へ丸太を並べてゆくと、漁師らは両側から舟を引き上げる。次の大波が押し寄せる前に、舟は既に薪材の上に鎮座して安全に格納された。シパンラムは重々しい表情を崩さず、舟から獲物を下ろしながら幾つかの籠へ詰めてゆく。

大漁だ！小魚もさることながら、彼らは太刀魚二尾の捕獲にも成功したが、頗る大きかったから、二艘の舟に収めるには、洋上で解体分割せねばならなかった。子供らが獲物を家に運ぶ傍らで、シパンラムは幸せそうなネンタシクとともに、一年前に殺した狐の乾いた頭部を収める、熊皮の袋を抱えて家路に就いた。狐の頭は、漁へ赴く舟の艫に、豊漁を祈念して必ず懸けられるものだ。

獲物は庭先から「神窓」を介して室内の主人へ手渡されるが、主人は窓近くにしつらえた鈎に一尾ずつ懸けてゆく。鍋に水を満たして、豪華な夕食の調理が始まる。その間には、漁に参加しなかったか、漁運に恵まれなかった隣人たちが次から次へと訪ねてきては、家族の規模や主人との関係の遠近に応じて魚肉の断片を入手してゆく。

> これらすべてがあるのは、わしが「重い神々」に祈ることができたお蔭だ。
>
> 旦那方を神々は愛しておられますぞ!……——と、シパンラムは荘重に告げた。

最近の数日間に生起した出来事は、われらを地元の人たちに頗る近づけてくれた。彼らはわれらの豪気や、アイヌに対する友情や、気前の良さ……をめぐる物語を、日毎に尾鰭をつけて語るのだ。われらは至る所で、好意溢れる微笑みで挨拶され、冗談半分のわれらの返答が熱狂的に復唱され、家宝——漆塗り酒盃、角製・骨製・木製の古式刀、年代物の高価なお守り——なども進んで見せてくれる。それらに付された値段すら割引いてもくれた。

われらの名声は一円に広まってゆく。われらはそれに便乗する形で敷生(シ・キ・ユ)、社台(サ・タイ)、「ミツビキ(Micibiki)」、「クシュン[コタン](Ksun)」、「ウトカンベツ(Otu Kambet)」……といった隣村を訪ねた。案内してくれたのは、いずこでもノムラ・シパンラムか、彼の指名する身内の誰かだったが、「信頼措くあたわざる人」として彼の親戚などに紹介されたこともある……。したがって、われらの滞在は常に友情と信頼に取巻かれていたわけだ。とはいえ、このような状況でも各村戸長(カク・ソング・コチョ)かその助手は、われらにべったり付きまとったのも事実で、それなりに鬱陶しかったものの、アイヌたちはいつも、たとえ一両時であれ監視を外れて、われらが仕事を進められるよう、何らかの方便で彼を回避する策も見出してくれた。彼らの口と心は、かくて開かれてゆく。われらの野帳でも、醗酵した麹のように記載が増殖を続ける。ブロニスワフ・ピウスツキが謎々・歌・昔話・伝説を熱心に採録する傍らで、私はスケッチを試み、写真を撮影し、映画撮影機を回し、氏族・経済関係の研究に携わって「親族名称」表も作成した……。

計測ならず……

頗る重要でありながら適切な条件が整わず、唯一実現しなかったのは、人類学的身体計測と被毛の研究である。それには、独立した部屋が必須だった。裸身の開示に何らの羞恥も覚えぬようなアイヌたちでさえ、他人の家で脱衣するのは野蛮な行為であり、また家主にとって甚だ不名誉なことだとも見做したからだ。私はしたがって、これらの機器を抱えて、何らの成算もなく家々を廻らねばならなかった。些細なことが雰囲気を壊して、既にその気になっていた者が、どんなに金を積まれようとも、はたまたヴォトカを提案されても、頑として脱衣を拒むのだ。私が何度か試みたあとで、一件の拒否が電撃のごとく周囲へ波及して「拒否ブーム」に火を点けたから、計測は諦めることを余儀なくされる。わざわざ計測してくれと申し出ておきながら、その期に及んで急遽拒否する者が続出したからだ。

結局、私も深追いはしなかった。この地方は習慣・信仰・言語のみならず、また[人類学的形質]タイプという観点からも、強度に和人化

されているからだ。和人の血が混入していないような家族は皆無で、その多くでは、和人の出自が誇りを以て公言される始末だ。異族婚の夫婦も頗る多い。ところで、伝説が語る所によると、まださほど昔でもない幕藩体制の頃、アイヌの村々では、シベリアのどこかで行われていたのと全く同様に、来訪する和人の役人らに、娘たちを一夜妻として提供する義務を負っていたという。

送別の宴

すべての与件はわれらに、人種研究でよりよい成果を上げるべく、海岸線からも古来の交易路からも外れた奥地の集落へ赴くように命じていた。まずは沙流川の河谷、アイヌの大集住地の一つであるピラトリ村[現平取町]から着手することを、われらは決定した。

> そこからは、わしらの先祖様の「森の領分」が始まる。だが沙流の衆はならず者ばかり、その大半は札幌で監獄に入っておるよ…… ——と、エカシ・テパ村長は私に説諭する。

ネンタシク、イシュウチ、またその他多くの女たちまでが、われらには失望した……、きっと彼女らの娘の誰かと夫婦になって、末永く留まってくれるものと思っていたのに……と、あからさまに思いの丈をぶちまける。シパンラムは頭を掻きむしって、もしどうしてもと言うのであれば、彼を引き止めることはできぬが、「はあそうですか」で済むわけがない、必ずや別れの宴を催さねばならぬと語る。そこでわれらには、たとえ僅かでも手作りの酒を用意したいから、出立は数日延ばすよう申入れがなされた。このような大祭に供されるのが、和人から買い入れたアルコール飲料だけというのは、何としても様にならぬわけだ!

> 神々はアイヌのこさえた酒の方がお好きなのだ——と、シパンラムの兄はきっぱりと断言する。

したがって、われらは出発の日を待つ間、近在の村々を訪問しつづけた。漁場を訪ねて魚網・倉庫・塩漬加工場・乾燥小屋、そして高い柱の上に設けられた見張り小屋も視察する。小屋には見張り役が常時詰めて、鰊や鰯(*iwas*)の群来に目を光らせているが、これらの漁獲は大半が農業用の優れた肥料に加工されるのだ。

避けることの叶わぬ出立の日が遂に到来する。その前夜、正午以降はもはや誰も出漁せず、村で最大のエカシ・テパの家宅に全員が参集した。

何ともはや凄まじい酒宴であった!… 蝦夷島の南西岸[原文では「南東岸」と記されている]一帯の住民の間では今なお、これをめぐる伝説が語り継がれていることを請け合ってもよい。われらとしてはヴォトカに大枚二十五円(50ズウォティ)を叩いたが、アイヌたちは海に匹敵する量を持ち込んだ。絶え間なく到来しつづける女主人や主人たちはそれぞれに、凄まじい味ながら、中に含まれるフーゼル油が飲用者を忽ち酩酊させる、白濁した米の「自醸酒」を満たした桶を抱えてくるのだ。顎鬚を蓄えた男や主人たちは、炉を囲む形で着座する。われらは無論、第一の環へ招じ入れられたが、すぐ外側の環には女や若者らが屯するなか、その背後では裸の餓鬼どもが忙しなく、嬉々として右往左往する。彼らへ向けて叱責の声が飛ぶや、そのたびに暫くは厳粛と静寂を取り戻してはいた。われわれは挙って重々しく顎鬚を撫で、「近い神々と遠い神々」や「軽い神々と重い神々」へ祈りを捧げ、家付きのすべてのイナウ、また炉内に立てられた新しいイナウ列にも満遍なく酒を振り撒いた。第一の環の長老たちが削掛け製の礼冠を頭にかぶると、シパンラムは咳払いを三度繰り返したあとで、再び、われらに捧げる賛歌を荘重な低音で歌い上げる。函館でのわれらとの出会いを語る段になると、遂に感極まって、彼の小鹿の目を思わせる漆黒の目からは涙が迸る……。われらが「重い神々」へ捧げた犠牲と、その結果として恵まれた「海での恒常的豊漁」に話しが及ぶや、称賛の咳払いが満場に拡がり、われらの出立が束の間のことで

あるよう、そして再び戻ってきた暁には、もはや彼らの許に永久に留まってください、という要請で彼が語りを締め括るや、女たちはこれに手拍子で応え、男らは一斉に「アヨ・ロ・ロペ(*ajo- ro-rope*)!」と叫びだした。

さらにエカシ・テパも、またシパンラムの兄も、そしてまた何人かの長老も立ち上がって弁舌をふるった……。それぞれの弁士が語り終えると、われわれは挙って「パレセコロ(*parese-koro*)!」とか「ホタラ(*chotara*)!」(「どうかお元気で」、「万歳」)と叫び、口髭を「捧酒篦(オフラニヤチャ)」で厳かに持ち上げて盃を干した。この所作は、われらも既にマスターしていた。演説はますます華麗に、ますます長大に、そしてますます熱を帯びてくる……。その際に好まれた話題は、友情、同胞愛、賢者の優しさ、愚者の憎しみである……。

ブロニスワフが答辞を述べる番が遂に回ってきた。彼もまた、やはり慣習に倣って咳払いを三度繰り返したのち、自らの演説をアイヌ語で朗々と吟じだした。若者らの間ですら、笑声や悲鳴は聞かれなくなった。ブロニスワフは、アイヌの善良さと客人歓待の習わし、彼らの豪気と現在におけるその惨状、また南北の島々も含めたすべての島嶼にアイヌの民(ナルド)が遍在して、天の星に擬えられるほどの大人口!… を擁した頃の、彼らの往時の威勢と栄華について語った。

> 君たちは数が少ないけれども、互いに助け合うこと、愛し合うこと、そうすれば、数の多い民に伍して、強くて幸せな民になれるだろう……。ホタラ・アイヌ(*Chotara Ajnu*)!――と締め括って、演説は終わった。

深い沈黙がしばらく続いたあと、人々は思い思いに酒盃をあおる。エカシ・テパが立ち上がって、自分の頭から礼冠を外し、それをブロニシの頭にかぶせる。シパンラムは、同じことを私に対して行った。エカシ・テパは、その後の演説のなかで、われらは彼らの兄弟であり、部族の一員に迎え入れられた……、と告げる。

> ブロニ・クル(*Broni-kuru*[アイヌ語で「ブロニシ君」ほどの意味か])よ、わしらの承知するところ君はわしらのクラフトゥ(*Kraftu*)(つまりカラフト)の同胞を、オロス(*Oros*[ロシア人])たちから守ってくれとるそうだな!… ――エカシ・テパはブロニシへ顔を向ける――御礼仕(つかまつ)る!…

歓声と拍手と歌が一斉に沸き上がる。女たちはわれらの肩越しに大きな輪を作って、しゃがんだり蹲ったりしながら「聖なる舞」を披露する。われわれは延々と飲みまくったが、折りにふれては呑み残された酒盃(*paczieś*[正しくは*pa-keś*])を、後ろや背後にいる女や若者らへも渡しつづけた。

隣合わせの人たちが顎鬚を撫でながら互いに不朽不滅の友情を誓いあうなかで、輪舞に参加する人たちは一丸となって、われらに同じ友情を誓約した……。感涙が止めどなく流れ落ちるなか、口髭を支える「捧酒篦(オフラニヤチャ)」の下からは酒が奔流のように迸る。談笑や歓声や悲鳴や歌は、踊りの回が改まるごとにますます盛大となってゆく。遂には輪舞の列すら解体されて、各自は気の赴くままに、行き当たりばったりの人を相手に飲みつづける……。

遂にはエカシ・テパまでが飛び出して、女たちの輪のなかで「熊踊り」を披露しだす始末。ほかの人たちも同じように踊りだしたから、屋内は気儘な跳躍の跋扈で大混乱をきたし、熊の唸り声や咆哮が充満するなかで……、踊り手はそのパートナーへ襲いかかり、唸り声で嚇し、爪を剥いて引掻く仕草を続ける……。私をパートナーに選んだのはエカシ・テパ、そしてブロニシの相手はシパンラムだった……。

われわれは踊り疲れると中座して、酒(サケ)で喉を潤す。だが興奮した女や娘っ子や若者らは寸刻たりとも休息しない。長老たちもまた、踊り狂う細君の姿に挑発されて、重い腰を上げつづける。われわれは「鴉の舞」、今一つの「熊踊り」、そして淫猥な「鹿踊り」も舞った。何人かの長老は既に困憊して床に倒れこみ、女らが介抱し

ている。シパンラムは酒盃に鼻を突っ込んですすり泣く……。独りエカシ・テパだけは矍鑠として、ありとあらゆるコーナーや神々を相手に舞いつづける……。若者らは住居の裏手のどこかで遊んでいるらしく、野菜畑の方から彼らの歌声や笑い声、また藪の枝や野草を折る音も聞こえてくる……。

その場は極度の興奮状態にあったから、私が写真撮影に焚くマグネシウム粉末の閃光も、格別な印象を与えることはなかった。

伐らせてやれ! 焚かせてやれ!… 旦那方は何をしても構わんぞ……。わしらの身内だ――と、家へ連れ帰ろうと努める細君や息子に抗いながら、長老らは吠える。

罰として、もう一桶の「シントコ(*sintoko*)」を気張って下さらなくちゃいけませんぜ!… ――シパンラムは私の手を摑んで口ごもる。

明日よ、明日だってば! ――細君は彼を宥めつづける――家に帰ろう、ほれ、皆の衆も家路に就いとられますよ!

黙れ!… お前は何様だ、碌でなしめ……。お前はヒラメ(*samambe*)[2]だ! 精々のところ、男にまとわりつく存在に過ぎんぞ!… わしはここを動かん……。酒(サケ)を持ってこい――男は女の手を振り払いながら怒鳴り散らした。

とはいえ、嫁御らは自らの旦那さまを、アルコール臭ふんぷんの小屋から優しく引きずり出してゆく。そこにとり残されたのは、人力による限り、どうしても動かすことの敵わぬ者たちだけであった。

平取

鵡川から平取へ

翌日の正午、われらは[白老の駅頭で]コタン住民の半分の拍手に送られて、列車で早来(ハヤキ)[はやきた]駅へ向けて旅立った。もう半分の住民は払暁に、太平洋へ向けて既に出漁していた。

早来(ハヤキ)では、小さな旅籠(はたご)に一泊する。われらはその日のうちに乗馬数頭と道案内を雇い入れて、翌朝には森林を掻き分けつつ平取(ピラトリ)へ向かった。ポレーシエ地方かヴォルヒニア地方[いずれも旧ポーランド領で名高い森林地帯]の山道を髣髴させる道は、原生の落葉樹林を縦走する。樫・櫸・楓・楡・ハンノキの巨木、そしてやや湿潤な所では榛(はしばみ)や樅の樹林が、ゴチック式大寺院におけるアーチ天井さながらに、高所でそれぞれの梢を寄せ合っている。蔦(つた)やその他の蔓性植物が、あちらこちらで巨大な樹幹に巻きついてはいるものの、通行不可の藪を形成することは頗る稀だ。却って樹間距離はかなり広くて、もし、わが国の梨や林檎の木の高さまで生長する大羊歯(しだ)・山査子・榛・水木・漆(うるし)の木などが下生えの藪を形成しなければ、そこはかなり開けた空間である。これらの美しい樹種の葉は既に深紅の色調を帯びているから、さながら火焔のごとく、森の暗みのなかできらきらと輝く。アイヌらは漆を有毒樹と見做すので、同樹の木陰に留まることは強いて避け、その近くでは決して就寝しない。道は空虚そのものである。たった一度だけ蝦夷鹿の群れが、われらの馬どもの蹄の音に驚いて木立の間をさっと駆け抜けた。鉄道線路からおよそ四十キロ離れた所で、われらは村落に初めて遭遇するが、その小村は鵡川河畔にあって、鬱蒼たる森で蔽われた幾つもの丘の真直中、とある谷間に立地するらしかった。

その村で暮らすのは、プロテスタント派のキリスト教に改宗したアイヌたちである。信徒を代表する若い女は、日本語の読書きができて、僅かながら英語さえも解する。彼女はわれらをあたかも旧知のように迎えてくれた。何でもミステル・バチェラーが、われらの到着を手紙で予告して、アイヌとのラポール樹立に手を貸す

[2] 「働く能力も、またその意欲もなく、多情なだけの女」に向けられた蔑称[アイヌ語辞典によると'samambe~samampe'は「平目、鰈類の魚」を指す――訳者注]。

ように命じたとのこと。暫くは、この村で幾許かの時を過ごすべきかどうか迷った。われらの研究にとって、ここはすべてが余りにもキリスト教的であり過ぎるからだが、平取(ピラトリ)までは、いまだ三十キロほどの道程が残っている。そこでわれらはこの村で一夜を過ごした。そして翌日の昼下がりには、沙流川――'*saru*'というアイヌ語は「草が繁茂する」という意味である――の岸辺に立った。実際、河岸には大牧草地が延々と連らなり、そこで初めて、われらは馬群や赤牛の群れを目にした。和人到来以前のことであるが、往時のアイヌは馬飼育に従事して、馬の放牧者として著名でもあった。彼らはのちに零落し、現地産馬群は消滅してゆくが、日本政府は繁殖用の牝馬(ひんば)と種馬をオーストラリア[正しくは、ハンガリーを含むオーストリア・ハンガリー帝国]と蒙古から導入する。

ペンリ村長

村は、河谷を見下ろす丘の斜面に拡がっている。当地の葦小屋は、海辺に立地する村々の家屋よりも大型で、骨組にもより上質の木材が使用されているが、そのスタイルにはやはり歴然たる和風様式の影響が認められる。われらが止宿した村で唯一の旅籠(はたご)は、和風の板造り建築ながら、アイヌ式屋根で蔽われている。

到着直後、われらの前にまず姿を見せたのは、村長を務めるペンリ[ペンリウク]長老である。この人物については、われらもいまだ函館にいる頃から聞き及んでいた。私がこの世に生を受けて以来、これほどまでに毛深い個人に出逢ったことはなく、コーカサスのアルメニア人の間で実見した名高い「毛むくじゃら(ヴロースヒチ)」たちと雖も、彼の足元に遠く及ばない。その顎鬚たるや、まさに目の直下から始まる。額には襤褸布で結んだ頭髪の束が幾筋も垂れ下がり、耳からもまた鼻腔からも剛毛が叢生し、数本の孤毛が巨大な鼻の先にも生え出している。睫毛はほとんど眉毛と分かちがたく、眉毛は擦り切れた大柄の口髭といった観を呈する。腕部と脚部は獣毛で蔽われて、前開きの楡樹皮製長衣の下からは、赤と灰色をない混ぜた色調の、熊の縺れ毛が顔を覗かせている。私は頗る御満悦だったが、ペンリの方は、なかんずく、われらがアイヌ語を解することを知って、余り幸せそうではなかった。

> このように値の張る通訳たちを使うのは、どんな御了見かな!… ――と、渦巻く縺れ毛の中に隠れた両の眼を輝かせて、彼は詰問する――金の浪費ですぞ……。わしならば、何であれ完璧な話をして差し上げたのに!… わしはあらゆることを知っとるし、ここでは最年長じゃからな……。徳川(トクガヴァ)の将軍(ショグン)のことも、函館の榎本(イノモト)[武揚]の叛乱もよく覚えとるぞ――榎本より年上だってことも忘れちゃおらぬ……。わしの爺さまはまた「ヨチチネ」(十二世紀の義経(ヨシツネ))公[3]とも昵懇で、公から頂いた形見の品、とても高価な宝! を持ってござる。ミステル・バチェラーも旧知だし、ミステル・ランドールも知っておる……。東京にも、樺太(クラフトゥ)(サハリン)にも行ったことがある……。ここを訪ねる客は誰もが、わしの所に滞在なさるから、旦那方もどうぞお泊りなさいな!…

そのことについては、改めて訪ねたときに話し合うことを約束する。われらには、来訪の準備を然るべく整えるためとして、一円の前借が申し入れられた。長老の機嫌を損ねることは望まなかったものの、われらは直ちに、人類学的身体計測用スタジオと写真現像用暗室を確保すべく、一戸建て住宅の借用を決断した。これまでは、黒生地と赤生地を二重に張った小テントを暗室に使用してきたものの、何とも使い勝手が悪かったからだ。われらの道案内――彼は白老の一族に属していたから、ペンリの怒りを

---

[3] ピラトリ(平取)には、和人たちが自らの民族的英雄・源義経の栄誉を讃えて建造した[義経]神社がある。ペンリは己を神社の番人、はたまたその神官とすら見做している。

意に介さなかった――の協力で、適当な一戸建てが造作なく見付けられた。その家の持主らは和人漁業者に雇われて、海辺で鰊漁に従事しているので、住宅は一夏を通して空家となっていたのだ。われらは家主の親族へ、彼の言い値で家賃を支払い、数枚の敷物と僅かな必需什器を購入して、頗る順調に入居を果たした。われらの出費は剰え、これによって大幅に削減できるようになる。魚や猟の獲物はアイヌたちからふんだんに入手可能だし、米・小麦粉・乾パン・砂糖・茶葉は持参してきたからだ。旅籠では、白老におけると同様に頗る高額の食費が請求された。ペンリ宅に止宿したならば、われらは皮まで剥ぎ取られかねぬのでは、とも懸念した次第だ。長老からはちょっとした小物を購入するとともに、もし身体計測と写真撮影に同意してくれるならば、「重い神々に対する充分な祈り」を約束する! とも告げて、彼を宥めることにこれ努めた。彼は翌朝、楡樹皮製キモノのうちで、黒・赤・白の文様が入った一張羅を羽織って現れた。われらが脱衣を求めだすと、仰天する。彼は長いこと躊躇(ためら)うも、「重い神々に対する祈り」を今一度祝うべきことを条件として遂に譲歩する。さらなる交渉のなかで、これには身体計測への合意が含まれることも認めさせた。作業の終了後、彼は重い溜息を吐いて、われらがこれを行う所以を問うた。彼には、アイヌは果たして「シシャム(*Sisiam*)」(和人)なのか、それとも「フレシシャム(*Furesisiam*)」(赤い和人、即ちヨーロッパ人)なのか、確かめたいからだと説明する。

> 「アイヌ・ボタ(*Ajnu bota*)!」(そうなのか……)。なるほど、もしわしらが旦那方[の側]だとすると、旦那らはこの土地を召し上げるわけじゃな…… ――と叫んだ。

その考えを彼の頭から叩き出そうと試みるも、徒労に終わる。彼はわれらを信用しておらず、次のように約束して口を噤んだ。

> わしは和人が嫌いだから、和人には何も喋らぬが、樺太(クラフトウ)に行ったときはロシア人がとても気に入った……。だが沈黙を守るのも頗るつらいもの! それは人の腹の中で止めどなく回り続けるから、「重い神々」に対する祈りはしばしば唱えねばならぬわけだ……。

身体計測と写真撮影に同意する人たちを、われらの許へ差し向けるという条件のもとで、われらは彼の祈祷への支援を断らなかった。

> それに対して、いくらいただけるのか?
> 計測された者に銀貨一円、そしてあなたには十銭(20グロシャ)を差し上げよう。
> 女どももやはり求めておられるか。
> 勿論、女の方々も必要です!…
> 早速わしの妻を遣わそう! 齢(よわい)を重ね過ぎておるかのう?… 彼女は老けて見えるが、わしより三倍も若いのだぞ!…

ここで彼はわれらに対して長口舌をふるい、自分にも昔は妻が一度に三人も四人もいたが、今は一人で用が足りていることなど、色々な話をしてくれた。この日は、ペンリの細君のほかに彼の姪っ子ヨンカの夫君も計測し、翌日にはヨンカ本人――妙齢の美女である――もやってきた。

ペンリの精力的な宣伝のお蔭で計測の志願者には事欠かなかったものの、女らは脱衣を潔しとせぬから結果的にやや遜色があった。とはいえ、彼女らが在宅時や作業中に、あるいは川岸で楡や春楡の繊維を機織り用に洗浄・漂白するとき、われらがその下帯一つの姿を目撃しても、彼女らは全く意に介さなかったにもかかわらず……である。

研究の成果と限界

しかしながら、われらにとって最も困難な課題は毛髪の入手であった。たとえ微小量の毛髪であれ、その切断には男たちですら、どんなに金品を積まれても同意せぬのに、毛髪試料は頭髪もさることながら、全身からのサンプルが求

められるからだ。われらにとっても、それは格別に重要な課題である。アイヌ研究に関する著作を繙いてみると、アイヌの多毛性にかかわる事象は、ほかのありとあらゆる記載を凌駕することが了解されるからだ。彼らの間には、著しく密生する頭髪が腰に達するほど長大である個人が散見され、古代ギリシャや古代ローマの絵画から抜け出してきたセイレーン[ギリシャ神話に登場する半人半鳥の海の魔女(サイレン)、美声で舟人を魅惑して死に至らしめる]やファウヌス[ローマ神話に登場する半人半獣の林野の神(フォーン)、ギリシャ神話のサテュロスに対応]かと見紛うばかりだ。腰のくびれた部分に小さな尻尾のように、捩れた長めの毛の束を何本か備える者もいる。毛髪は所構わず不揃いに生え、腕・脚・腹の上に房をなして点在する。胸部の被毛は背部に比してかなり僅少で、女には胸部被毛が欠如する。両性とも多毛は三十歳頃から始まる。どんなに僅かな和人の血の混入も、多毛性の緩和に強い影響を及ぼす。

しばらく経つと、われらは自らの経験にもとづき、混血者を直ちに判別できるようになるが、これは、被計測者の綿密な親族関係の研究によっても常に追認された。われらに然るべき指標を提供してくれたのは、頭蓋骨や骨の形態、――アイヌの白と赤に対する黄色一点張りの和人といった――皮膚の色調、眼形や歯の上顎前突というよりは、むしろ筋肉組織の特徴である。和人の筋肉とその付着部位が幾分扁平な形状であるのに対し、アイヌのそれは紐状で、結節のように捲き上がるヨーロッパ人型に近似する。筋肉質の和人とアイヌを並べて撮った裸体写真が直ちに、両者の相違点を見せつける傍らで、アイヌとヨーロッパ人の同様な比較は、両者の人種的親縁性を反駁の余地なく立証する。

私はこれらの問題に絶大な興味を覚えたから、能う限り多くの計測をこなすべく努力を惜しまなかった。毛髪試料は、身体計測機器の中に鋏を忍ばせて、窃盗によって入手した。結局、被計測者の数が増えるにつれて、身体計測は当座の流行にさえなってゆく。それまでは姿を見ることも稀で、やって来る時は決まって夫の同伴者だった若い女たちですら、独りで来訪するようになる。そこでわれらは、あるアイヌの若い衆と激突するところまで追い込まれた。彼の禁止にも拘らず、その許婚(いいなずけ)はわれらの許へやってきて、計測させたからだ。彼がこの件をペンリに直訴するや、ペンリはわれらへ「重い神々」に対する「熱い」祈りを科すとの裁定を下した。

ブロニスワフ・ピウスツキもその間、豊かな収穫の秋(とき)を迎えていた。頗る多くの信仰・伝説・古謡をここで発見したからだ。ペンリは当初、すべての語りを自らの利益のために独占しようとしたが、われらは程なく、彼は自らが既にミステル・バチェラーへ語ったものを再話するか、あるいは日本の学校副読本に所載の物語を恣意的に再編して、われらにはそれを紛う方なきアイヌの昔話と言いくるめたか……のいずれかであると看破した。そこでわれらは、昔話や英雄叙事詩(プイリ ーナ)の語り手の探索に着手するのだった……。

だが森の中ではペンリも誠実だった。アイヌたちが獣に向けて設置した罠や仕掛け弓を求めて、われらを案内してくれたからだ。彼はまた猟師らの頗る古風な慣習についても意欲的に語り、狼・犬・熊の「ヌサ(*nusa*)」の意味も逐一解説する。私は博物館標本として、――柱の上に刺しこまれ、削掛けで飾り立てられた――動物の乾いた頭部も幾つか入手することを希望した。敬虔な白老の衆は、そのように罰あたりなことには聞く耳を全く持たなかったが、海千山千のペンリは、この件を頗る明快に解決する。

> 「ヌサ」のある所を御存知じゃな? そこは夜な夜な精霊たちが徘徊するから、誰も寄り付かんのじゃ……。旦那がそこにおられるまさにそのとき、わしがもしも「重い神様」に祈りを捧げたとすると、そこで何が起きようと、わしもまた神様も一切関知せんじゃろ。何しろわしたちは――神様は静聴に、わしはお喋りに――専念しておる

からな!…

このような「熱い」祈りに、べらぼうな量の酒(サケ)が必定であることは自明だった。

すべてが上首尾に推移したあとで、われらが近在の村々を訪ねようと計画していたとき、突如として事態が急変する。人々がわれらを避けだして、彼らの来訪は稀で、しかも短時間となる。ペンリだけは相変わらず訪ねつづけるが、彼とても口数がめっきり少なくなる。何ごとかと探りを入れるも甲斐なくて、情報収集にタロンチを派遣しつづける。狡賢い混血児は、人々の舌を滑らかにすべく酒を買うと称して金を持ち出すも、戻ってきたあとはただ笑うだけで、ルペシテ(Rupeśte[沙流川上流の「るべしべ(累標)」])の女呪術師(チャロヴニーツァ)をめぐって、ありそうもない戯言(たわごと)を伝える。彼女が異国人との会話を禁止したからだというのだ。われらにとっては、強いられた失職状態が始まった。

「義経」の刀

ある日の夕刻、前触れもなくペンリが姿を見せて、自らが所有する「イチチネ」(義経(ヨシツネ))の「イコロ(*ikoro*)」(刀)を買ってくれるならば、われらに向けられた恐怖全般の原因を明かしてもよいと告げた。

この「イコロ」だけは、まことに至高の聖物、家宝なのじゃ……。これはまだ誰にも見せたことがないからに、高値は覚悟なされよ!…

値切りに値切って「牡馬半頭(ブウ・コニヤ)」(二十五円)で手を打ち、十円は前金として直ちに渡し、残金は翌日、見分した上で支払うことにする。加えて、普段のもてなしや家付きのイナウへ祈るときに使用する「シントコ」にも、一瓶の酒(サケ)を注いだのだ。ペンリの舌は数杯の酒盃を空けると滑らかになって、小さな声で囁きだした。

御承知でがしょう、二方(ふたかた)の和人が来村され、わざわざ函館から参られたとのこと。そのお一方は高位の旦那、黒い蝙蝠傘(パラソル)をついて歩いていなさる……。御両人とも、旦那方がここで何をしておいでか、頗る執心の御様子、根掘り葉掘り訊ねて回られ、夜毎には窓越しに見張ってござるよ……。もし誰かが旦那方を訪ねると、その者にはひどく立腹なさる由!… 人々は震え上がっておるのじゃ……。わしは違うぞ、東京、函館、札幌、樺太(クラフトゥ)にも行ったことがあるからな……。わしの所には、ありとあらゆる「ニシパ」が北からも南からも馳せ参じるゆえ、わしは恐れぬが、気の毒な小者のアイヌどもが恐れるのだ……。何となれば、かの蝙蝠傘の旦那は、各村戸長(カク・ソング・コチョ)とも、沿岸警備官とも、森林監視官とも、はたまた知事その人とも昵懇の仲……。だからこの旦那は、仰山の害をなすこともお出来だ!… わしも旦那方にこう申したい。あの名高い女呪術師のいる累標(ルペシテ)へ行かれるがよろしい……、と。彼女は興味深いことを仰山語ってくれるじゃろうし、旦那方はまた、どこにもないような新しいイナウも目にされることじゃろうて……。ここでもし、わしの「イコロ」を買い上げていただけるなら、入手に値する物は、もはや何もありません!…

……彼は目配せして、如才なく頭を振って頷いた。われらの仕事を完璧に麻痺させかねぬがごとき何事かが出来したことは明らかだから、吉報ではない。私は[東京のロシア]大使館へ手紙を書き、不可解な障碍の除去を要請することに決し、同時にまた、好ましくない庇護者たちの手が届かぬ、どこか遠方へ向けて実際に出立することも決断して、許婚(いいなずけ)の件で立腹させた若者を相手に、乗馬の手配をめぐって交渉を開始する。彼は突如として怒りの矛を収め、自分の方から乗馬賃貸契約の提案を携えてやってきた。

戦争……

出発の日さえ既に決定して、[賃貸料の]前金も支払った日の正午頃、突然、シパンラムが何

の前触れもなく現われた。われらは即刻、疲労困憊して空腹を持て余すシパンラムを食卓に座らせる。しかしながら、再会の喜びは、われらの友人とともに現れ、寸刻も彼から離れようとせぬペンリの存在によって水を差されつづけた。知人たちや彼の親族について、また白老や敷生(シキウ)の状況などをめぐって、われらが連発する問いに対し、シパンラムは上の空でぼそぼそ口ごもりつづけるから、村長のいる所では語れない何か、内緒話のあることをわれらは了解する。そこで、長い道程の徒歩での走破と、頗る早朝の起床に鑑みて、彼には直ちに就寝するよう命じ、われら自身は、ペンリが自ら立ち去るまで辛抱強く待ちつづけた。

ペンリが「イコロ」の見分を申し出たので、われらも同道して同宅へ赴くも、それは、擦り切れた並製の鞘に納まる、何の変哲もない日本刀と判明する。刀身は鍛鉄ですらなく軟鉄製で、手に持つとブリキのように折れ曲がる。古代の日本刀はまさにこのようなものだったと請け合って、彼はわれらを言いくるめようとも試みる。われらは、その話の信憑性は度外視して残金を支払い、長老とはけりを付けた。だがペンリの方はさらに、「イコロ」は頗る貴重な宝物だから、自分の目で収納場所まで見届けねばならぬと食い下がり、われらへの同行を希望する。だが、その申し出はきっぱり断り、彼には二十五銭の「手切れ金」を渡した。タロンチは道案内の許へ遣わし、明後日に向けて乗馬を手配するよう伝えさせるとともに、われら自身は可及的速やかに帰宅する。ブロニスワフは住宅のまわりを一周して、外で立ち聞きする者がいないことを確かめ、私はノムラを起こした。

さあ、今やわれらだけだ。わが友よ、話しておくれ!

わしが参ったのも、まさにそのためですよ!… ——敷物の上に座りなおしたノムラは声を落として囁く——よく聞いてください! 戦争が始まるそうです!… 旦那方をめぐっては、まず御両名は軍事密偵だ……と、お一方(ひとかた)は——私に顔を向ける——自前の黄色い機械で至る所の地形を写しているのだ……と、また、ロシア人(Oros)らが船で乗り付けてきて、これらの土地を奪い、人々を殺すだろう……と、そして、これらロシア人たちの露払いを務めるのが、旦那方にほかならぬ[4]……と、芳しくない噂が飛び交ってます。ですから、旦那は殺(や)らねばならぬ……と、しかも、旦那方がここで見たことの一切合財が[ロシア側の]人々に筒抜けとならぬよう……、御両名の書きものや、写真や、あの丸めたリボンの束[映写フィルムであろう]はすべて押収すべきだ、というのです……。ですから、累標(ルベシテ)へは後生だから行かないでください。あそこは山奥の僻地ですから、和人らはきっと、あそこで旦那方を襲うに違いない。そしたら、どうなるでしょうか! 強盗団の仕業と語られるのが関の山、それでお仕舞ですよ……。わしらの白老へ是非とも戻って来てくださいな。皆は旦那方を愛してますし、恋しがってもおりますからに!… わしがこちらへ参ったのも、累標(ルベシテ)へ赴かれぬようお願いするため、どうか行かないでください!…

シパンラムはひどく興奮しているが、われら自身は、俄かには信じがたい和人らの企てに対する警告それ自体よりも、危機と称される事態からわれらを救出すべく、善意に発して走破された六十キロの道程に、むしろ心穏やかではおられぬ。和人らの企てそのものに疑義を呈するや、ノムラは、自分の言うことに耳を貸すよう

[4] 宿命的な話であるが、[ロシアの]巡洋艦「ノヴィコフ」は一年後、白老とその近在の村々を実際に砲撃している[該当する巡洋艦名は「ノヴィク」だが、「ノヴィク」が白老を砲撃した事実はない——訳者注]。

……哀願し始める。

旦那方を調査すべく派遣されておるのは、並の巡査ではないですぞ、もっと恐ろしい奴だ……。この地に滞在する奴の一人は、憲兵だとのこと……。

そもそもどんな権限で? なぜなのだ? われらは何か、法に触れるような事でもしでかしたかい?…

わしには判りかねます。戦争だ……、と世間では大騒ぎ。新聞も色々と書き立てるのですよ……。

われらは余りにも長く、また余りにも完璧に世界から隔絶されてきたから、この情報はわれらにとって、まさに晴天の霹靂だった。

えい、ままよ!… 戦争は、たとえ始まるにしても、直ぐというわけではなかろうし、われらを追尾すべく遣わされた警官と雖も、並の巡査よりは賢かろうから、却って、よりましではないか……。われらは、秘匿を要するようなことは、何一つおこなっておらぬ……。即刻、札幌へ手紙を書き、直ちに現像するよう求める依頼状を添えて、生フィルムを送付してやろう。そうすれば、それらのフィルムには、踊り、遊戯や競技、日常の「挨拶(カラクテ)」、機織り、漁舟(いさりぶね)編隊の帰還、「ヌサ」の建立のほかには、何一つ見出されぬことが確認されよう…… ——と、私は議論を開陳する。

シパンラムは、いまだ納得しがたい風情だった。

エピローグ

翌朝、朝食をもてなされたノムラは、われらに僻遠の地へは赴かないでくれと、最後の最後まで懇願を繰り返しつつ、われらからのプレゼントを抱えて立ち去った。

しかしながら、平取(ピラトリ)には、われらの取り組むべき仕事がもはや何もなかった。ブロニスワフと相談の上で、われらは、十分な根拠を欠くような恐怖を理由に仕事を中断せぬこと、今回は累標(ルベシテ)へ赴かぬこと、そして、さらに東を目指して、今一つのアイヌ人口の顕著な集住地である釧路地方か根室地方へ移動することを決断する。したがって、われらが賃借した乗馬は、沙流川の上流[つまり累標]ではなく、下流へ向けてわれらを運ぶという条件で、契約は維持した。

われらが今後の計画を練り、旅の準備を進めていたまさにそのとき、ペンリが、大声を上げて駆け込んできた。

政府伝書使の御到来!… ほれ、手紙じゃぞ!

彼はわれらに、政府公印の捺された大型封筒を手渡した。やや驚き、かつ動揺もしたわれらは、早速、その場で開封する。函館の[ロシア]領事は、[東京のロシア]「大使館からの訓令にもとづき、調査を直ちに中止して東京へ戻るべきことを通達する」と記していた。

そのとき、眉を曇らせたブロニスワフへ、私は静かに語りかけた。

そうだ!… ロシアと日本の戦争だ。それは果たして、ポーランドへ何をもたらすのだろうか?!

＊ Author & title: W.Sieroszewski, “Among Hairy People.” Japanese translation from the Polish by K.Inoue.

樺太のポーランド人たち[1]

アレクサンデル・ヤンタ＝ポウチンスキ
佐光 伸一 訳／井上 紘一・尾形 芳秀 注釈

(一)プロローグ

東京の冬は厳しくはない。厳寒といったものではなく、せいぜい冷え込み程度である。雨か、雨混じりの雪が少し降るぐらいである。むしろ晴天のことが多く、空はとても青く澄みきっている。背の低い住宅街の屋根の向こうには窓を通して、日本の神聖な山である富士山が広がり、それはまるで雪のピラミッドが水平線上にそっと書き込まれたかのようである。

夜になると、晴天は、主に海からやって来る風に包まれるが、それとて冬だけである。翌日になると、私が住んでいる家の周りではいつもは緑の庭が霜氷によって白くなっていることがある。庭全体は、まるで花壇のように、背の低い小さな樹々や、その枝の上に茂る針葉樹の葉の群生に囲まれ、庭の真ん中にある銀色のプレートのような池の底へと、芝生の斜面を通って流れ込んでいる。池にはアーチ状に湾曲した橋が架かり、橋は水面に反射し円を描き、それは空中に宙づりになり、庭のフレームの中に閉じ込められている。

このような冬の晴れたある日、私は日本の北方、サハリン[樺太]に出かけることを決めた。何のために。これこそ旅立つ前には自分に必ず問うことになる、いつもと変わらぬ質問である。何のために。何のためにひとは問題や悪天候や困難さを求め、世界中を漂泊し彷徨(さまよ)うのだろうか。何のために。

何か秘められた力や、論理的でも、賢明でも、理性的でもない何か別の動機や、はるかかなたの異郷の物事に引き付けられる法則があるに違いない。謎を解決するためという答えもあるかもしれない。しかし不安に駆られて、そう好奇心よりは不安に駆られて、もっと分かりやすく言えば直感や理解しがたい衝動に駆られ、より本質的に言えば、何か隠された理由により、そこへと押し出され、駆り立てられ、導かれると説明もできよう。このようにひとは支度をし、決断し、ついにある日、自分でもなぜそうなったか分からぬまま、旅立つのである。

しかし、日本の北方となると、私の日本滞在の初めから注意を引き付けた別の動機も存在した。それはサハリンにはポーランド人がいるからである。ツァーリのロシア、ツァーリの流刑の時代からの生き残りである。東京にいた当時の公使[2]であり、後にワシントンで大使を務めた人物が、日のいずる島のポーランド人の最大の集落をおよそ十年前に訪問して以降は、誰

---

[1] 原典：Aleksander Janta-Połczyński, “Polaki na Sachalinie,” w: Aleksander Janta-Połczyński, *Ziemia jest okrągła*（地球は丸い）, str. 241−298, Warszawa: Rój (1936).
A.ヤンタ=ポウチンスキ(1908−1974)は、ポーランドの紀行作家、ジャーナリスト、詩人。ポーランド電報通信社東洋特派員として1933年12月末に来日。ポーランドのユゼフ・ピウスツキ元帥の命を受け、同元帥の実兄ブロニスワフ・ピウスツキの遺族の消息を尋ねて、1934年1月4日、大泊港に着き、1月12日まで樺太に滞在した。

[2] 再興されたポーランド共和国の初代駐日特命全権公使スタニスワフ・パテク(1866−1945)。在任中(1921−26)の1925年8月にサハリン在住ポーランド人を初めて訪問した。

もそこには行っていなかった。

したがってそのことはいっそう私を駆り立て魅了したのだった。問題はただひとつだけだった。季節である。東京においてさえこのような旅行は、まるで北極遠征のように見なされる。自分がアムンゼンやリチャード･バードのような毛皮の外套を持っていないことを考えると、出発する前から寒気がした。私は衣装ダンスにいろいろな事態に対応した衣服の備えがあるが、北極に対応したものはなかった。頼みもしない情報提供者の次のようなセリフのせいで、私は勇気とぬくもりの最後のかけらも失った。

「冬にサハリンだって」
「聞いたこともないよ」
「この季節にそんな旅行を」
「夏まで待ったほうがいいのではないですか」

しかし、私は夏にはまったく別の緯度と経度の場所に行く予定だったので、すぐ出かけるか、あるいは永久に行かないかを決断しなければならなかった。「聞いたこともない」って、でも私自身は聞いたことがあるのだ。冬に不吉なこの北方に出かけた人が東京にいるからである。天候に敏感だと言われている日本人が、である。

私が見た地図が示すところによると、南樺太の首都である豊原は北緯 47 度に位置し、それは地球の反対側の緯度でいうルヴフ[3]に相当する。私の旅をヨーロッパ地図に移し変え、豊原をルヴフに重ねると、およそクレタ島からルヴフまでの旅になる。つまりどういうことか。それほど悪くないということである。

私の記憶が正しければ、ルヴフから北極まではかなりの道のりである。この比較をより正確にするためには、寒流が流れ込み、カムチャツカから直接風が吹き、オホーツク海のそばに横たわっているルヴフを想像すればそれでよい。こんなところで日本家屋に住んでいるのだろうか。よく知られているように日本の家屋は窓が紙で出来ているというのに。

これからの出来事に対し先入観を持つのはやめよう。今のところ私はまだ東京にいるのだし、ジャパン・ツーリスト・ビューロー(JTB)でこの旅行の地理と時刻表について研究中なのだから。それは次の通りである。

初 日	14 時 35 分	急行列車で東京の上野駅発
二日目	6 時 20 分	青森(日本の本州の北の港)着
	7 時 10 分	北海道行きの船出発
	11 時 40 分	函館(北海道、蝦夷の南の港)着
	12 時 30 分	函館から北部へ急行列車で出発
三日目	6 時 35 分	稚内(北海道の北の港)着
	8 時 30 分	サハリン行きの船[4](宗谷海峡経由)出発
	16 時 30 分	大泊(サハリンの南の港)着
	17 時 30 分	豊原行きの列車出発
	18 時 25 分	豊原着

言い換えれば、四回乗り換えのある、距離にして千マイル、時間にして五十四時間の旅である。そこから明らかになるのは、ひとがまるで悪魔のように私に語っていた旅も、それほど恐ろしいものではないということである。

この予定に従い、私は本日出発する。北方遠征ということに合わせて、可能なあらゆる防寒装備をした。一目で分かることだが、毛皮の外套に、セーター二枚、ウールのダブルの手袋、すべてがダブルで、私だけがシングルで、旅に乗り出した。

ポケットは紙でいっぱいである。書類や指令書である。ポーランドの新聞を個人的に持ってきた。東京の公使館で見つけ集めたものである。ノートには樺太に住むポーランド人数名の名前が書き留めてある。それほど多くないし、正

---

[3] 当時オーストリア統治下にあった旧ポーランド領(ガリツィア)の都市。ソ連時代はリヴォフと称したが、今はウクライナ共和国の都市リヴィウである。

[4] ヤンタ=ポウチンスキの便船「宗谷丸」には、満洲国外交部次長の大橋忠一や中央情報社の菱沼右一社長が同船していた(菱沼右一「人物往来」『樺太日日新聞』1934 年 1 月 7 日付朝刊)

確でもない。東京の公使館の公文書は 1929 年に焼け、わずか数枚が災禍を免れたにすぎず、それとて端が焦げているのである。しかしこれら数枚の紙は私にとって今のところ、唯一の情報源なのである。

しかし私は情報などあてにしていない。もうすぐ現地に行って、実際どうなっているのかを自分の目でみることができるのだから。この「現地で」というのが、何年も前から私にとって、人や、国そして物事を学ぶための唯一の方法となっていた。この方法を今度は樺太にも試してみよう。

(二)出発

日本の列車は世界最良のひとつとの名声を博している。北方行きの特急には一等車がないが、プルマン式車両の二等車が備わっており、真ん中に通路があり、脇にベッドがあり、ベッドは日中はずらっと並んだ快適なソファーに早変りする。列車はどんな気難しい要求にも応えることができる。もちろんアメリカ由来の共同寝台というシステムに慣れる必要があった。それは完全に日本の習慣の精神に合ったものである。つまり異性がいても遠慮することなく、この点に関して彼らは慎み深さを知らないし、持ち合わせてさえいない。

この旅の初めから最後まで私は日本人の中で唯一の白人であった。車両では、自分の家のように場所が割り振られ、まず初めに靴を脱いだ。そしていつも笑顔の感じのいい使用人のボーイ、現地風に言えば格好のいい制服に身を包んだ「ボーイさん」が靴をすぐに集める。このボーイこそは歩く親切心のような人物である。

アメリカ製の車両できわめて東方的な特徴のひとつは、縁が真鍮製でぴかぴか光った痰つぼが車両の床に埋め込まれていることである。それは普通われわれが紙屑入れやゴミ箱として利用しているものである。

車窓の向こうには穏やかな日本の村の風景が通り過ぎる。遠景には万年雪に包まれた峰を頂く山々が見える。近くには米の畑が見える。刈り入れ後の畑が水に浸り、穏やかな小山の上で半円の段丘となって広がっている。また柳や藺(い)ではなく、竹の林も見える。

突然この風景の中から現地の建築物の一角が現れる。といっても単なる村人の百姓家であるが。薄く弱々しい壁、等間隔に水平に配置され、紙がはめ込まれた窓枠、玄関口、廊下、庇、竹の細い枝からできた垣根、支柱、それに支えられた屋根はまるで屋根板に隠されているかのようで、きわめて急斜面になったり、平たく広がったりしているが、縁はいつも折り曲げられている。

窓外の風景を楽しむ時も終わった。すでにずいぶんと暗くなり、すぐに夜がやって来た。夜はとても暗く窓の向こうには灯りが群れとなって散りばめられ、それは薄闇の底から空に向かって立ち上がる遠方の山々まで散らばり、日本が縦も横もいたるところで電化されていることを物語っている。

食堂車で私は自分がひとりぼっちであることをある程度意識した。すべての日本人のグループがわたしの方を、まるで変人でも見るかのように、無邪気な、子供のような、つまりそれゆえに何とか我慢できる好奇心を持って眺めている。私たちは首都を出発し、旅行者が、そしてむろん外国人はめったに通らないルートを進んでいる。それはこの白人の旅の道連れに対する乗客の態度にも反映している。

私はお椀の中に五つか六つくらいの細かな料理の入っている日本のお昼ご飯を注文した。それは切り分けられた生魚の鯛や、タコの肩の部分であり、それは酸味のある味で肉厚があり硬い。そして野菜で濃厚な味付けのされた魚の味のするブイヨンスープ、そして醤油という辛いこげ茶色のソースが赤くて辛い大根にかけられた生野菜のサラダのようなもの、そしてお米のご飯は欲しいだけもらうことができる。

私がこの食べ物とお箸で格闘している様をみんなまじまじと観察していた。私はこのそれほど困難でもない技能の習熟に十分な時間があって、黙って上手に行動したので、乗客からは笑顔の共感の念が私に寄せられた。結局好奇心からは解放されたので、私は気分を変えるため幾分自由に周囲を観察することができた。

私の視線と注意は、この食堂車で私たちにサービスを行う日本人の若い女性の上に思わず

留まった。飾り立てていたので(きちんとした服装をしているとは言いがたい)見ているのがつらかった。日本でこのウィーン風あるいはベルリン風のウェイトレスのスタイルを観察する機会は一度ならずあった。白いエプロン、髪の毛には白いレース、ワンピースは脇の下でカットされていて(つまりベルトが脇の下にあるのだ!)、ランプの可愛いシェードのような形で足にぶらさがり、膝の上で留まって、必ずしも格好よくはない足の残りをあらわにしている。全体はこのように上出来でなく、みすぼらしく、彼女を眺めると、立派で風格がある着物の仕立てがなつかしくなり、着物の上で広い模様の入った帯で平らにすることによって、胸のほうではなく背中のほうが盛り上がった日本女性のシルエットの方が好ましく思えた。

この後ずっと樺太まで私について回る面倒を引き起こすことがひとつあった。言葉の問題である。お決まりの会話から少しでも離れると、日本語以外の言葉ができる人は誰もいなかった。つまりどこでも通じるのは、英語の会話というよりもむしろ機械的に習得したいくつかの言葉だけである。聞いたり理解したりするのに慣れたものとは少し違った風に質問すると、私たちは意思疎通が不可能となる。あてずっぽう以外の方法はなく、身振り手振りで推測するが、自分が理解されたか、自分が何の話をしているか相手が知っているか、確信はできない。

東京では幸いにも小さな本を持っていた。それは赤い祈祷集であるが、突然予期せぬ必要があった場合や何か日本語で言いたい場合には役に立っていた。自分が旅行する国では、現地の言葉で少なくとも十五個くらいのフレーズは言いたいという野心を私は最後まで保ち続けていた。

それらのフレーズを、人々がとりわけ親切心の国である日本で、さまざまな礼儀を示す機会に寛大に与えられた、何か必需品ではない感じのよい付け合せのような、ぜいたく品のように捉えてくれることはとても嬉しいことだった。別の場合、つまりその親切心が必要性に代わるとき、つまり誰も英語を理解しない場合、私が自分の「日本語ハンドブック」からふさわしい状況を見つけ、文章や単語を的確に選び出す必要があるときには、私が日本語の話し方、特に理解の仕方を彼らに教えているのだという誤解が生まれることがあった。特に、彼ら日本人が理解できない場合にそうだった。

(三)北方の島に関する情報

北海道は見渡す限り雪が降る。天気のいい日には、厳しい寒さが雪の表面や、水平線のはるか遠方から立ち上がりこちらに迫ってくる絵のように美しい山の姿を照らし出す。列車は機械で脇に除雪された雪の谷間を全速力で進み、車両は揺れ、窓の外の世界は陽光に溢れて陽気で、背の高い円錐形をなす駒ヶ岳を、視界の届くぎりぎりの範囲まで追いかける。駒ヶ岳はヴェールのような雲に包まれ、ここ北海道の南部では、富士山と同じ象徴と聖地の価値を持っている。第二の富士山と呼ばれている所以である。

何か喜びのようなものを感じ、私にとってこの冬の初雪であるこの果てしなく続く雪景に恵まれたという有頂天の感情を覚えた。今朝、青森港で夜明け前に起きたとき、私を起こしたのは、戸外から吹いてきた厳寒の風だった。ホーム上には周りに雪山が出来ていた。列車から船に乗り換えたのは、まだ夜だった。そのときようやく夜が明け始めた。雪は空色や群青の光に溢れ、遠方の海岸の盛り上がった岸辺のあたりではばら色に染まり、その後、雪の白さが燃え立ち、それはいたるところで目に突き刺さるほどだった。冬だ。船のマストの上では霜の花が咲いていた。

これから北へと旅立つ。さらに遠くへだ。明日はすでにサハリンにいる。私はほとんど人のいない車両の窓のそばの静かな自分の場所に戻り、スーツケースの中から分厚い日本年鑑を出し、樺太について記載されたページを開いた。サハリンの南部は日本に属するので、「樺太」という名称を持ち、「カラフト」と発音するとのことである。

ふと気付くと、本を読んでおらず、本から頭を上げ、サハリンに関する考えが自由に展開するままにしていた。私の想像力の中では、この世界の果ては、人類の残酷さ、拷問と徒刑の恐ろしい歴史と結びついた悪魔の島としてこれ

まで存在し続けていた。シベリアの果てといった感じである。知っていることといえば、世界から切り離され、神や人からも忘れ去られた、いつも変わらぬ無慈悲な島ということのみである。非人間的な島と言われているのも故あってのことである。犯罪と涙の島である。流刑者、犯罪者、社会や人生から見捨てられた者たちが完全に姿を消すためにやって来る島、鞭が支配する島である。役人、司祭、誰であろうと罰としてここに送られてきたのである。罰として犯罪者と暮らし、犯罪者の番をし、必要なら鞭打つことを余儀なくされていた。サハリンでは鞭打たれることになる者は少なくない。

強制的に居住させられた居留民や住民、犯罪者を取り仕切る島の上役および権力はやりたい放題であった。すべて自由に任されていたのである。彼らのことを、警棒を持ち監督している者もいなかった。犯罪者を厳格・無慈悲に扱うのが最良のことだった。つまり鞭打つことである。もっとも自分たちは犯罪者の暴動や復讐を絶えず恐れているのだが。そのような事件は一度ならず起こっている。サハリンの森は、脱走した囚人の一味を匿っている。しかしそれとてたいした損害ではなかった。

したがって、ここでは人間狩りが行われていた。犬に見つけられた者は言い訳する間もなく射殺されるという暗黙の捜索があった。ツァーリの国の最北の地である北方の島では、その歴史に耳を傾ければ、恐怖心のあまり髪の毛が逆立つようなことが行われていた。現在、この同じ島から届くニュースはそれとはまったく別のものである。1905 年の日露戦争の結果、ポーツマス条約によりロシアが日本に譲渡したサハリン南部は大日本帝国の北端をなしている。

サハリン島はアザラシのような形をしている。オホーツク海と日本海の間に浮かび、ロシア沿海州の向かいに横たわり、緯度 50 度線でまるでナイフでのように真っ直ぐ切り離されたこのアザラシの尻尾は、ここ二十五年間で日本の植民者が急激に押し寄せる土地となった。この地で開拓者としての自分たちの能力を試し始めたのである。道路や鉄道が作られ、この地方は発展し始めた。その暗い歴史もゆっくりと忘れられた。北海道あるいは本土や九州といった、もっと遠くの島から植民者がやって来た。

1905 年にはわずか 1 万 2000 人だった樺太の人口は、2300％増加し、1932 年末の集計では 29 万 3000 人であり、その大部分が日本人である。さらにそこにいるのは、かなり多くの朝鮮人、「アイヌ」と呼ばれる現地住民が少し、わずかな数のロシア人残留者、そしてポーランド人である。

南樺太の面積 3 万 6090 平方キロメートルは、大日本帝国の総面積(67 万 5086.941 平方キロメートル)の 5.3％にあたる。この地域は台湾より大きく、北海道のおよそ半分、朝鮮の六分の一であり、日本の統治時代からとりわけ農業分野で進歩し発展した。1931 年の農業生産高は 200 万円以上であり、大麦、燕麦、ジャガイモでは国内第一位を占める。

南樺太の最も豊かな二つの財産は、森林(200 万ヘクタールつまりこの島の三分の二)と魚である。かなりの土壌に石炭があり、さらにこれまで少ししか採掘されていないが、北部のロシア側には石油も豊富にある。漁業、狩猟は、オホーツク沿岸の島の東岸の村に在住するわずかな数のアイヌ人たちの主な収入源となっている。

私は本を閉じた。窓の向こうにどこまでも広がる雪原の上に、速く流れる雲に遮られていた月が完全な姿を現した。風が突然吹き、雪煙が起こった。北に向かうほどいっそう悪天候になる。私は赤い本で「風」という言葉を捜しだし、車両の中で私にベッドを出した客室係に「風(ふぅ)」といってみた。

彼はとても感じよく笑い、お辞儀をしながら日本語で言った。「オヤスミナサイ」。

自分のところに戻り、辞書を開き、どんな意味かを調べてみた。そんなことだったのか。「おやすみなさい(Dobranoc)(ドブラノッツ)」ということだった。

(四)恐ろしい渡航

早朝、私たちが終着駅である稚内に到着したとき、周りの世界は雪に覆われ灰色で、いたるところで風が吹きつけていた。乗客は、旅の終りに暖かい車内で融けてしまったかのように、

わずか十数名しか残っていなかった。駅は暖かく、ただ窓の外に、カンテラと吹雪でぼんやりと曇った淡い灯りがかすかに見えるだけだった。さらに、待合室の窓を通して、薄闇の中、近くの岸辺で激しく揺れる漁船も見えた。サハリン行きの船は、空が明るくなってから出発するそうだ。明るくなると仮定しての話だが。

待合室の中は寒かったので、みんな鉄製のストーブを真ん中に引き寄せ、その周りに集まった。みんなというのは日本人のみである。私は唯一の外国人、よそ者、白人であった。彼らは主に和服を身にまとい、木製のサンダルである「下駄」を履いていた。ただヨーロッパ風のつばつき帽子を被っている者もいたし、分厚く、丸いつばなし帽子を被っている者もいた。まるで毛皮でできたビスケットのような不思議な毛皮の襟と耳あてで耳の縁だけを覆っている者もいた。ほとんどすべての日本人が冷気を吸い込まないように、表が黒く、綿やときには毛皮の詰め物をしたマスクを顔にしていた。

空が明るくなった。私たちを船まで送り届けるために、艀が岸辺に近づき、波に揺られながら待っていた。積載容積二千トンの船は港湾の深くに錨を沈め停留していた。

海が防波堤にぶつかり、白い猛り狂った泡が二階の高さまで跳ね返っていた。素晴らしい旅行が私たちを待ち受けていたのは言うまでもない。北方の海はこの時期、冗談ではすまされない事態になることがある。船は大きくないが、ほとんど真新しく、清潔ですべての快適さを考慮して装備した船室を備えており、まるで船自身がもう待ちきれないかのように、港湾の中で揺れている。その後、錨は上げられ、方向転換し、海へと舵を取り、スクリュー全開で海へと進んだ。吹雪で覆われた稚内の小さな港と小山の間を通って、私たちは抑制がなくなり、むき出しとなった恐ろしい水面へと出て行った。

私は下の甲板からそれを眺めていた。風が何だというのだ。狂った強風が何だというのだ。風は、たてがみのように前甲板を吹き払い、連なる波を鞭打ち、雨が鋭くそして硬くぶつかる前に、顔に細かな塵として埃を吹きかける。船は驚くほど揺れ動く。ときには波は船首にまで達し、船が転覆するのではないかとさえ思われる。しかしただ横に倒れたり、両側に傾いたり、波の上に乗り上げたりしていた。二時間ほど、このように狂ったような異常な旅を続けていると、ボーイの一人が私のところにやって来て、ノートから引きちぎった一枚の紙を差し出した。そこには乗務員か船員の一人が、あまり正確ではないが、理解するには充分な英語で何かを書きつけていた。

ポーランド語に翻訳するならおよそ次のようになる。

> 本船は、大泊には向かっていません。進路を変えたからです。嵐がひどいので待たねばなりません。明日、大泊に向かいます。

それ以上は知るよしもなかった。まったく言葉が通じなかった。私の赤い本は、アングロサクソン系旅行者向けに、もっとも役立つような情報を盛り込んだ日本語ハンドブックだったので、いらいらさせられた。つまり自分が言いたいことは何もそこで見つけられなかったのである。したがって私は最後に本に載っていることのみを言ったのだが、日本人の答えは残念ながら、私のハンドブックの著者が提供しているものとは、まったく違った響きをしていた。

というわけで嵐のためなぜ船がサハリンに行かず、稚内に戻っているか知ることはできなかった。先ほど離れたばかりの島の小山の連なりの陰に身を潜め、船は大きな音を立てて錨をおろし立ち止まった。立ち止まったという表現は的を射ている。というのも私たちはユダヤ人が市場で衣服を試着せず、あれこれ前や後ろや脇に投げ捨てるかのように揺れていたからである。直前に受け取った通知の最後の文章を眺めた。「明日、サハリンに行けるかもしれません」「行けるかもシレマセン」とのことである。

私は客室の窓から眺める。海はまるでどこまでも続く川のように船の上を流れ、どこかに向かって急いでいるようであり、波が次々と押し寄せ、風はざわめいているというより、闘いの前の闘牛のように吼えていたと言えるほどだった。昨日、「風」を日本語で何というか思い出し、それが何かを理解しながら、ポーランド語の単語を補って発音してみた。

「風(ふう)のクソッタレ(Psiakrew)(プシャクレフ)」

三日の予定の旅はまるでゴムのように弾力的に四日に伸びた。これ以上伸びないと誰が分かるだろうか？ そんなこと分かりっこない。

(五)四日目

甲板で日本人に会った。彼は私に対し、この国ではあまりないような質問を英語で尋ねたのだった。それは「あなたは誰ですか」「何のためですか」「どこから来たのですか」「なぜですか」といったものだった。私は彼に借りを作らないように返事をした後、彼に対しても同じ質問をした。彼はジャーナリストで、東京の「中央情報」という名の雑誌の編集長だと分かった。この雑誌のタイトルは「中央のニュース」あるいは、「中央からの情報」という意味である。

この雑誌は、祖国の外、つまり植民地や外国に住む日本人向けであり、わが国では「ポーランド通報」に相当する。彼の名は菱沼右一[5]といった。二年半サハリンに住んでいたとのことである。彼はこの地方について語り始めた。サハリンに興味を持ったのは以前のことだが、自社の雑誌との関係で相変わらずこの地に携わっているという。

「ピウスツキ元帥[6]のお兄さんのブロニスワフがサハリンに住んでいたことはご存知ですか」と彼は尋ねた。

私は、自分は知っているし、サハリンと北海道の原住民であるアイヌ人に関するブロニスワフの研究についても聞いたことがあると言った。

菱沼氏は活気づいて言った。

「日本語のタイトルで『北蝦夷秘聞』という本をご存知ですか。私の義理の弟である能仲文夫[7]が書いたのですが、ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン滞在史と彼の恋愛事件に丸々一章を割いています」

「それはまったく知りませんでした」

「いいですか、ロマンですよ。本当のロマンです。サハリンでは予期せぬものがあなたを待ち受けていますよ。それをあなたにお見せしてご案内し、見つけ出すことをお引き受けしますよ。私と義弟はそのことを知っていますから。もう何ヶ月もこの問題の痕跡の探索に費やしてきました。あなたはご自分でそれを目にすることになりますよ。もうひとつ別のこともお知らせしましょう。私たちの船には満州国外交部次長が乗っていますよ。もしお望みなら……」

事態は滑稽なものになった。山と山はぶつかることはないが、ひととひとはぶつかり出会い、宿命や運命のありえない定めにより同じ方向に導かれることがある。私の旅にはそのような体験や兆候が少なからずあった。私は新京の満州国外交部では大橋次長[8]に会うことができなかった。私が満州の首都滞在中には彼は一度もいなかったからである。今、このふたつの島の間の、波立ち荒れ狂う海上で、船の向こうでは波がとどろき、船がリズミカルに揺れる中、旅の道半ばの船上で、何の脈略もなしに出くわす

---

[5] 菱沼右一(ヒシヌマ ウイチ)(1883–1944)、『報知新聞』『国民新聞』の記者・社会部長・理事を経て、『樺太日日新聞』の主筆となる。1931 年、東京で「中央情報社」を創立して社長を務めた。文筆活動には、葛西猛千代・西鶴定嘉との共著書『樺太の地名』(1930)もある。

[6] ユゼフ・ピウスツキ(1867–1935)。ブロニスワフの年子の弟。1918 年に国家の再興を果たし、新生ポーランド共和国の初代元帥として国家首席に就任した。

[7] 能仲文夫(ノナカ フミオ)(1907–1983)は、樺太日日新聞記者、外地評論社社長兼主筆を経て、拓殖省・南洋庁・朝鮮台湾総督府・満鉄・南洋開発で嘱託を務めた。戦後は星光化学工業社長。著書には上記の『北蝦夷秘聞～樺太アイヌの足跡』(大泊・豊原：北進堂、1933、復刻版『樺太アイヌの足跡』東京：第一書房、1983)のほか、『血に彩られた北樺太～現状と資源』(中央情報社、1935)、『赤道を背にして～南洋紀行』(復刻版 東京：南洋群島協会、1990)などがある。

[8] 大橋忠一。大橋は満洲国建設の立役者の一人で、当時は次長とはいえ事実上の外務大臣であった。

のである。

彼は深い肘掛け椅子に座り、アメリカ人風に脚を机の縁にもたせかけ、何かの書類に没頭していた。彼は親切で感じがよく、満州国はいつ成立したか、むしろ「どのように成立したか」についてしばらくの間私に話してくれた。大橋次長はこの問題の展開を初めから知っている、あるいはそれが始まる以前から知っている人間の一人とも言えた。彼は私に、すでに知識や歴史として受け入れられている最新の状況は、本人にとってもいかに予想を超えるものであったかを語った。というのは、満州がこれほどの規模になり、世界地図に現在のような形で出現しようとはだれも予想しなかったし、知る由もなかったからである。

彼と話していると、この人物は、歴史が新しい形を成すのを監視し、ただ見守っているだけでなく、それが形作られる作業に対し、ほかならぬその展開に対し、少なからず影響力を持っているという印象を受け、そのように理解した。しかし彼の話を私が意味づけしようとすると、私にとって重要な具体的な点はすべて一般論の中へと消え去ってしまう。その一般論というのは、満州問題に関しては、運動や、改革、革命、戦争はいったん解き放たれると、ひとはある程度までしかコントロールできないという、明確だが、あまり具体的ではない暗示である。もしそれらの影響力が強まり、自分の活動範囲を超えてしまうと、すぐにその影響力は、自分たちに定められた範囲やプログラムを破壊してしまうのである。

その全体性はひとの手を離れ、己自身の重さとリズムによって自分の求める方向に発展し、先へ進み、入念に準備し熟慮したにもかかわらず、予想を超える、あるいは予想を裏切るような結果へといたるのである。それはコントロール不能になり、己の圧力と勢いによって導こうとする人や、ただ歴史の鼓動に合わせて舵を取ろうとする人を巻き込むのである。

私が大橋次長との会話から得たのは以上のような結論だった。彼との会話は、外交上のあいまいさに溢れていたが、その素材の表面の下には、満州国の誕生をめぐって、すでに確立し歴史に組み込まれた解釈や、様々な事件の結末を訂正するような未知の事実や事件の宝庫があった。なぜなら現代史とは、かつてもそうであったし、現在も相変わらずそうなのだが、事実ではなく、政治に仕えるものだからである。

ようやく翌日になって、わたしたちの船はそれより先に進むことを決定した。朝になると錨を揚げ、「大海原」に乗り出したのだった。

私はこれまで多くの海を見てきたが、今回私たちが海岸の防波堤を越えて、防波堤が灰色の日の彼方の薄闇の中に遠ざかるやいなや出くわしたような､野性的な海は見たことがなかった。

恐ろしい嵐はいつまでも続いた。山のように波が高まり、積み重なり、私たちの船に押し寄せてきた。すべての乗客は見ているのが気の毒になるくらい船酔いしていた。わたしはまだ何とか我慢し持ちこたえていたが、おそらくもう長くは我慢できないという気持ちになったのは、海の上では初めてのことだった。甲板を散歩した。というのも船室ではひとはまるでボールのように投げ捨てられるので、座っていることはできなかったからである。私は具合の悪さから何とか気をそらすために、海の写真を撮った。というのも読書などできないことは明らかだったからである。

このような状態が昼食まで続いた。私は我慢のかけらを寄せ集め、心配することは何もなく、まるで何もなかったかのように食堂に行こうとした。

食堂では、揺れはいっそうひどく感じられた。最悪なのは、終りなくどこまでも傾いていくという感覚だった。この傾きは、外的世界のすべての苦しみとなっている平衡感覚の完全な欠落を何とか自分で補うために、ゆっくりと穏やかに胸の奥まで吸い込む呼吸よりも長い間続くのだった。船は横に傾き、長い間戻って来なかった。転覆するのではないだろうかと思うほどだった。

私は何か食べるものを注文した。私はこの食堂室では、驚いた顔をした青白いウェイターを除くとひとりきりだった。このウェイターは若い青年で、今日のような日には仕事どころではないと思っていることは明らかだった。しかし、この生き残りの乗員は、倒れないようにテーブルや椅子の肘掛を支えながら、私の周りを忙し

そうにあたふたしていた。彼は注文したものを私のもとに運んできた。船が反対側に傾いた瞬間に私のテーブルに近づいてきて、テーブルのそばで立ち止まった。何か見えないが恐ろしい力が彼をそのテーブルから引き離し始めたからだ。しばらくの間、その力に抗して、彼は前へ進もうと試みた。しかし船はさらに脇へと傾き、容赦なく、彼を後方へと引っ張った。

風がこの青年に吹きつけたため、私のところに近づくことができなかったのである。耐久力が問題となっている。あと一ミリメートル、あとせめて一秒。自分の身体を英雄的な努力によって、手でテーブルの脇にしがみつき、彼はお盆を私のテーブルに置いた。まさにこの瞬間に極度の揺れがやって来た。お盆は、まるで何か見えざる力により掃き出されたかのように、均等に傾いたテーブルから落ち、ウェイターは後方へと下がった。激しく後退しながら、倒れこみ、とんぼ返りをし、壁の方に転がった。お皿は、台所道具やきちんと閉めていない扉のあたりで割れて恐ろしい音を立てた。その背後では外の海の音や、船の連結部の気味の悪い音が轟いていた。粉々になったお皿からこぼれたスープや散らばったお米が隅に集められた。

これで私の昼食は終わった。もう一度試してみようとはしなかった。すぐに甲板に出てみた。それは船が自然の力によってまるで獣のように扱われる光景を最後まで見届けるためだった。船べりに立つと、巨大な波が反対側から襲い掛かり、泡を立て、水しぶきが船の脇に打ちつけ、山のような水の大きな圧力が押し寄せた。それは、まるで船を打ち負かし、沈め、打ち砕こうとしているかのようだった。

夕方近くになって、風が少しばかり弱まり、船を投げつけるのをやめ、激しく強く揺らす程度になったときには、皆ホッとした。わたし達の前には、遠方の対岸の暗闇の中で輝く大泊港の灯りがあった。もう樺太だ。

(六)初めの儀式

船から大泊港駅への出口のところで、日本人を待つ人込みの中から私を引き留める者がいた。彼はロシア語で話しだし、少し無遠慮な質問をその場でいくつかした。私は、彼が警察官だということを肌で感じ、私に関する情報をすでに持っているのだと思い、自制しながら、しぶしぶ質問に答えていた。しかし最後にパスポートの提示を求められたときには、断固として異議を唱えた。

「なぜですか。私は日本の領土にいないというのですか。日いずる国の国境など越えていませんよ。何か規則や法律でもあるのですか。それなのになぜパスポート検査などあるのですか。私が誰であるかをあなたはよくご存知なのでしょう。どうなんですか」私は彼を質問攻めにした。

「樺太だからです」彼はのらりくらりと言った。「大日本帝国の海外領土になるのです。東京により任命された別個の知事のいる植民地なのです」

仕方がなかった。私はパスポートの提示を拒否することはできなかった。警察官は列車まで私に同行し、パスポートで読み取ることのできるものをすべて書き写し、私の名字が正確にどのように綴るかということについて丁重ではあるが私と議論した。列車は走りだした。したがって、私たちは一緒に次の駅に向かうことになった。というのもすべてを調べるには時間が足りなかったからであり、彼は列車での滞在を延ばすことによって、私が樺太にやって来た意図と私個人に関してより否定的な見解を作り出そうとした。

「つまりあなたはポーランド人がいるからということですね。彼らは何をしているのですか」まるで自分が知らないかのように尋ねた。

監視つきの旅は私をうんざりさせ始めた。窓外は深い闇であり、厳寒であり、吹雪が吹き払った雪の荒野である。車両の中には鉄製のストーブがあり、車掌がそこに炭をくべている。列車の中は船の乗客の熱気や、皆和服を着た大泊の住民の熱気に溢れている。ストーブのできるだけ近くに座りながら、目のところまでショールで身をくるむ者もあり、また毛皮の襟を立てている者もある。取調べをした天使のような監

視者が最初の駅で乗り込んできてから、ずっと私の方を穴が開くほど見つめている。話をする者は誰もいなかった。

窓外に時折姿を現し、厳寒によって乳白色のコーティングのように凝縮した夜の雪の世界の中で、この旅行は一時間と少し続いた。豊原に到着した。誰もいない駅の建物から雪に覆われた広場まで、広々とした通り、むしろ道といったほうがよさそうなものが続いていた。人力車(それは牽引動物が人間である、速くて安い東洋の乗り物である)が、二輪車の二本の長柄の間で、新参者の旅行客を待ち受けている。車夫はみな手に提灯を持っている。馬をつないだ箱馬車は一台だけ脇に停車しているが、目の前には自動車用の車道が立ちはだかっている。

私はその箱馬車に乗り込んだ。ドアを閉めた後、私は足元に燃える木炭と雪かき用のシャベルを見つけた。鎖のついた人力車の後輪が、サハリンで昔からよく知られている囚人の足かせのがちゃがちゃというような音を立てた。私の手は仕事でいっぱいだった。片手にはスーツケースを持ち、もう片方の手には人力車の車夫とのコミュニケーションを助けるはずだが、実際はそれをより困難なものにしていた赤い日本語ハンドブックを握り締めていたからだ。しかしそばには菱沼氏がいた。彼は花屋という意味を持つ花屋本店(ハナヤ)という現地の最もよいホテルまで私を、というよりも車夫を道案内した。私たちは出発した。ホテルは、その所有者だけでなく、その様式と習慣という点からも日本式のものだった。

日本式というのは、あらゆるものが保守的だった。まず靴を脱ぐことから始まる。これは入口ですぐに行わねばならない。その後にはとても高い敷居を越え、マットを敷き詰めた廊下の木製の床の上に足を下ろす。ここからは靴下とホテルが提供するスリッパのみとなる。そして木製の日本家屋の内部を彷徨わなければならない。冬の夜、世界の果てからここまでやって来て、自分たちの言葉を話さず、習慣も知らず、必死にその場に存在し、その国や状況の異質性に何とか対処しようとする様がおとぎ話のように滑稽な、この奇妙な生き物を見ようと、従業員すべてが出てきた。

(七)雪の中の喫茶店

幸いにも駅からはずっと私の後ろには菱沼氏の姿があり、おそらくこの花屋本店に宿泊を希望していた大橋次長の姿もあった。

従業員は良心的で、私というこのエキゾティックな客に対し、あらゆる点で出し惜しみせず、最良の部屋を提供し、入浴の準備をしてくれた。滞在中、私は彼らの気配りの的となった。身振り手振りでコミュニケーションを取り、喜んで私の世話を始めた。着物を着た女の子たちが散り散りに走り、建物全体が、ひそひそ声や服の擦れる音や小走りで溢れ、女の子の一人が私を部屋に案内し(私は毛皮の外套にスリッパという格好だった)、数人の男の子が私の荷物を運んだ。スクリーン[襖のこと]が開いた。初めのスクリーンが開くと小さな玄関があり、もうひとつのスクリーンが開いた所が私の居場所である。部屋には家具がなかったが、清潔でぴかぴか輝いていた。床の代わりに藁のマット[畳]が敷いてあり、その上にはクッションと、小さな机がひとつ置いてあり、壁には木が張られていた。

壁の窪みには枯れ枝の入った花瓶が置かれ、その頭上には「掛物(カケモノ)」と呼ばれるものがあった。それはここに特徴的な情景で、巻地図が開かれたような「掛物」には、大振りの筆遣いで書かれた文字がいくつか並んでいる。おそらく、何かの詩かあるいは中国哲学から取られた格言であろう。しかし窓の外で猛威を奮う厳寒がホテル全体と私の部屋まで浸透してきているという感覚を和らげものは何もなかった。

天井まで伸びるパイプ状の煙突を備えたストーブが部屋の真ん中に置かれているが、火のかけらさえなかった。むしろスクリーンと言った方がよさそうな窓は、外壁全体にわたって紙が張られていた。窓の外には本物のガラス窓で厳しい寒さの屋敷への侵入を防ぐための廊下があるはずなのだが、風と寒さに対してはこの薄い仕切りは何の役にも立たず、風も寒さも嬉しくなるほど部屋の中に吹きつけてきた。

北方での生活はこのように壁の取り払われた籠の中で始まった。この籠なら窓から紙をはがしさえすればカナリヤだって飼うことがで

きるだろう。ここの寒さは比較できないほどひどく、まるで犬小屋のようだった。この日本風の建物は全体が同じ構造を持っており、樺太ではよく出会うタイプのもので、変わることのない保守主義の一例であり、また環境への見事な適応という日本人の構成要素をなす、伝統的な生活様式への結びつきの一例となっている。

つまりこういうことだ。日本家屋はマレー半島の亜熱帯地方に由来する熱帯地方の構造を持っており、強情にもそれを大日本帝国の北端まで持ってきたのである。気候がどうだというのだ。ここではそんなものは重要ではない。日本人は、もし必要があれば、気候に逆らってでも出かけて行く。これが今日の彼らの勝因である。木でできた家はザコパネの建築物を思い起こさせる。唯一の違いは窓に紙が張りめぐらされていることであり、これが冬のザコパネに受け入れられるかどうかは私には分からない。日本人は気候に対する我慢強さがないと言われていた。見たところ、そんな日本人など樺太には一人もいない。

私はストーブに火を入れ、勇気を出して毛皮の外套を脱ぐほど、私の素晴らしい鳥籠が暖かくなるにつれ、こういった私の物思いがゆっくりと広がっていった。ストーブに火が点っているうちはまだ我慢ができるが、いったん火を消すと、そこはもう冷凍庫である。私は自分の言語学の能力を最大限に発揮して、何か暖かい食べ物が欲しいと表現してみた。従業員、魅力的な日本人女性は皆持ち場についており、いかなるときにもひざまずき(とりわけ、襖を開けたり閉めたりするときにはそうする。これは客、あるいは男性一般そのものに敬意を示すための日本の伝統的な習慣である)、私は直接まじまじと見ることができないという気持ちになった。部屋に出入りする男の子も女の子も、私に理解できない言葉を浴びせ、彼らはそれらすべてをひざまずき、おでこで深く地面[畳]を叩きながら、心地よいおまじないのような言葉を絶えず唱えながら行う。沸き立つほど親切心に溢れ、彼らはあらゆる機会に、小さなしかし魅力的な敬意と好意で満たされている。

このことが彼らを楽しい思いにさせていることは明らかである。彼らはお互いに小さい声で話し、私のことを話題に楽しそうにささやき合い、私がまた何か落とさないか、何かなくさないか、何か探さないか、何か分からずに彼らに尋ねないか、なすすべがなく微笑まないか、じりじりと震えるほど待ちわびていた。

彼らは、私がすぐに就寝すると思っていたようで、私のためにベッド[寝床]をしつらえるべく足走に退出した。彼らは地べたに寝ているのだ。厚くて硬いマットレス[敷布団]のようなクッションを広げ、その上に掛け布団を三枚ほど敷き、頭の下には、清潔さのためにタオルを敷いた重い大きな包みのようなものを置き、火を消した後、夜中に私が凍えて死んでしまわないようにと、足元には亜麻布で包んだ熱湯の入った容器[湯たんぽ]が置かれた。そして、私が服を脱ぎ、お風呂に入り、眠りに就くのを手伝うための、準備は整った。

しかし、そのとき、少し待ってもらうために日本語で「チョットマテ」と言った。私はそのとき、もう夜が更けていたが、豊原に住むポーランド人を誰か訪ねてみたいと思っていた。私は、この同じ通りで、教会の近くに住むピョトルフスキ神父の住所を持っていた。少年たちが私の手助けをしてくれた。私たちは一緒に、もう夜も遅いので誰もいない通りをカトリック教会[天主公教会]の方に向かって一団となって進んで行った。

(八)ザハリャシュ修道士

灰色の背の低い壁を持つ、バラックのような木造の家が通りに沿って広がり、雪の外套を羽織って腰をおろしていた。建物の脇には煙突の鉄製パイプがそびえ立っていた。出口の上の屋根の上には質素な十字架が架かっていた。豊原の教会はこのようなものだった。さらにこのすぐ隣に、家というより同じような木造のバラックがあり、それが天主公教会の所在地であった。

扉への通路は雪かきされていた。何度も何度もノックしてみたが無駄だった。最後に私はドアを押してみる決心をした。ドアは開いた。鍵がかかっていなかったのである。中に誰かいないか、私の日本人のガイドと一緒に探してみたが、誰も見当たらなかった。すでに私が戻ろう

としていると、奥深く、暗い中庭から誰かの足音が聞こえ、何かの人影が現れ、廊下を通って私たちの方へ近づいてきた。私は英語で話しかけてみたが、返答を聞いてすぐに、相手はポーランド人だと分かった。したがって、今度はもう一度ポーランド語で話しかけてみた。

「今日、こちらに到着したのです。ポーランドからサハリンにやって来ました」と私は言った。
「あなたはここにお泊りになりたいのですか」

髭で覆われた顔の奥深くから、用心深い、執拗な眼が私を眺めていた。

「私は宿を求めて来たのではありません。お会いしてお話をしたくて来たのです」

扉が開いた。日本人だった。私が自分の用件を話しているのを確認すると、別れを告げ出て行った。

「すぐに火をおこしますよ。お茶を御馳走します。どうぞお掛けになって、少しだけお待ちください。失礼します」

私はひとりになった。書き物机、本の入った棚、テーブル、つまりこれは教会の執務室なのだ。
鉄製のストーブに火が点った。毛皮の外套を脱いだ。ティーポットを持って彼は戻って来た。

「ピョトルフスキ神父様でいらっしゃいますか」と、明りのところにいるのが、神父であることを知りながら、ようやく今になって聞いてみた。
「違います。ピョトルフスキ神父様は布教に行かれました。ここにいるのは私ひとりです。修道士ザハリャシュと申します。よろしくお願いいたします」

会話は途切れた。お互いに尋ねた質問は以上だった。つまりポーランド人はいた。だからどうしたというのだ。ポーランド語を話す。まだ忘れていなかったのだ。他の人と同じなだけである。ザハリャシュ修道士は子供たちに教えている。しかし教えるのは、ポーランド語の授業のために教会に来ることを望んでいる子供だけである。彼らにしてもときどきやって来るに過ぎない。日本の学校で学んでいるからだ。したがって親たちは心配していない。

「子供たちは日本語を話すのですね」
「日本語だけで話をしている家庭もあります。例えば、ジェヴスキ家がそうです。あるいは豊原から三つ目の駅の小沼に住んでいるチェハンスキ家もそうです。そのうち、あなた自身ご覧になると思いますよ」
「彼らは日本語をどれほどできるのかね」
「悪くないです。文句をつけるほどでもないです。むしろ上手と言ってもいいくらいです」
「本題に移りましょう」

ザハリャシュ修道士は本棚の製本された本の中からサハリンに関するドロシェヴィチの本を取りだした。帝政時代の本としては、これがサハリン監獄の全体像を示す唯一のものであるらしい。サハリン、それは涙と恐怖の島である。
情報が詰まったこの本に私たちは目を通した。当時の写真があった。ロシア人についていろいろと質問をした。ロシア人はもうここにはほとんどいなかった。散り散りになったわずかな家族がいるだけであった。中には死刑囚[流刑囚]の子孫たちもいる。そのうちの二人はもちろんポーランド人である。
ドアの上に日本の天皇の肖像画が架かっていた。その後ろにあったのは十字架と聖人画だけだった。日本では天皇はまだ残っていて、そのおかげでここに送られた人はこれまで生きてこられたのである。死後に神に頼むことはないので、少なくとも生きている間は、半神に頼ろうということなのである。
ザハリャシュ修道士が私の視線に気づいた。

「私たちのここのキリスト者は、何よりもまず日本人なのです。ですから、この肖像画は彼らのためなのです。ここでは皇族に対する愛着や熱狂がどれほど大きいかご存知ですか」会話は彼の個人的な回想へと移っていった。

ザハリャシュ修道士はロシアでの冒険や迫

害にまつわる話を少なからず胸に秘めており、手紙と食糧を持って扮装し、生命の危険を冒しながら、どうやってウラジオストックのシリヴォフスキ司教のところまで辿り着いたかを、詳細に、正確にそして長々と話した。しかしその後で、再びサハリンのポーランド人の話になった。明日すぐに訪問を開始しよう。まず初めに豊原、その後でポーランド人が住んでいる他の駅や集落を訪れることにしよう。

「ピョトルフスキ神父様は、明後日の土曜日には帰っていらっしゃるはずです。日曜日の礼拝式を執り行うことになっていますから。説教は日本語でなさいます。あなたもお聴きになる必要がありますよ。ミサが終わった後には、ポーランド語でもお説教をされます」

私は何も言わなかった。火が燃え尽きようとしていた。厳しい寒さのため窓の向こうに見える庭は、まるで白い椰子の木が生えているかのようだった。

「ここにはポーランド人神父が三人います。大泊のスタニスワフ・ムハ神父、この島の西岸の港の真岡のパウリン・ヴィルチンスキ神父、そして、ここのピョトルフスキ神父です。ここでは健康は頑強でなければいけません。それは気候ではなく、むしろこれまでとは違った生活条件に耐えることです。ムハ神父とヴィルチンスキ神父は、この国にあまりよく辛抱できているとは言えません[9]。真岡では例えば牛乳はありません。ヴィルチンスキ神父は常に節食しなければならず、深刻な病気をいつも患っています」

その後すぐに言い訳をするかのように、次のように付け加えた。

「ここにいるのは私とピョトルフスキ神父様だけで、神様のご加護で何とかやっていますよ」

私がホテルに帰ったのはもうかなり遅い時刻だった。私はザハリャシュ修道士と明日、豊原のポーランド人家族を二軒[旧市街のジェヴスキ家とボルコフスキ家]訪ねる約束をした。雪の中を私はようやくホテルにたどり着いた。するとホテルでは、女中が全員私の遅い帰りを我慢強く待っていた。

日本人女性の一人が朝と夜の一日に二度やって来る。彼女はひざまずき、頭を低く垂れて告げる。「オフロです」。フロとは入浴のことである。「オ」という言葉は尊敬を表す。日本ではすべてが尊敬されている。特に泊り客(オキャクサン)に関してはその通りである。毎回「オ」という接頭辞をつけずに、何かを言うことは不可能である。

そこには、ひとつだけ問題があった。しかしそれは根本的なものだった。つまり風呂場へは長い廊下を渡って行かなければならなかった。廊下は、控え目に見積もっても摂氏二、三度という厳しい寒さだった。その代わりにお風呂はなんとか我慢できるほどの熱さだった。浴場には数人いて、ホテルの女性オーナーがその娘と一緒だったが、そこには破廉恥な点は何もなかった。私たちの考える恥の感覚は日本にはない。それは、一人ひとりは多かれ少なかれ同じ体格をしており、下着の下に何を持っているかはあらかじめ分かっているという原則に基づいているのであろう。

特別な振舞いをする必要はないのである。他の人はこの種の問題に関する理に適った、もっともなこのような立場にすぐに慣れていたが、どこか別の場所なら「モラルの侵害」と天に向かって叫びながらの抗議を受けただろう。例えば、私が脱衣するときは、少なくとも女中が一人いて、彼女の助けを私が断ったときは、間違いなく私に対して悪印象を持ったにちがいない。女中は二人や三人でなく一人だけでよかった。表情を維持するためには、理想的な無関心さを保たねばならず、ここのすべてのことは私にとってしごく日常的で常識的なことであり、これまでそれと違ったことなど一度もないよ

[9] 私が樺太を去ったのちに、スタニスワフ・ムハは大泊で重病を患い、札幌に搬送されたが亡くなったという情報がもたらされた――原注。

うなふりをしなければならなかった。私はできるだけそのような表情をしようと努め、何とかうまく行った。

もし今朝、風呂場に遅れなければ、私は風呂場で満州国の外交部次長と出会っていたはずだった。彼と親密に話す貴重な機会を失ってしまった。朝食には旅の知り合いの菱沼氏を招待した。夜になると私の所には、ザハリャシュ修道士が来ることになっていた。

(九)ポーランド人流刑者の家

今日はもうそれほど凍てつく寒さではなく、ただ風だけが昨日より強く吹いており、灰色で、低く垂れこめた灰色の雲が、まるで吹雪のようにあらゆる方向から吹き寄せた。

ザハリャシュ修道士は時間通りに現れ、私たちは雪掻きで脇に寄せられた二列の雪土手の間を通って、豊原の反対側[北部の旧ウラジミロフカ、後に豊原旧市街と称した]の端にあるジェヴスキ家へと向かった。

道中、私は詳しい紹介を受けた。それによるとユゼフ・ジェヴスキ[10]は、数十年前にサハリンにやって来て、刑期を務めた後にここに定住し、結婚したのだった。農場を創設し、ジェヴスキ家は現在では繁栄し子供もたくさんいて、日本人からでさえ豊原でもっとも尊敬される住民と見なされているのだった。

話をしているうちに家の前に到着した。そこには、通りに大きく広がる土台のしっかりした屋敷があり、雪の外套をまとい押しつぶされそうになっていた。

玄関と屋敷を抜け、大きくて暖かい部屋へと一直線に向かった。ザハリャシュ修道士は私を紹介し、訪問の理由を説明した。

「この方は、外国にいるすべてのポーランド人を訪ねているのです。だから今回はサハリンにやって来たのです」

この言葉によって急に困惑した状況になった。座るように丁重に頼まれ、すぐにお茶が出された。しかし私たちはまだ十分に話をしておらず、彼らは訪問した際とは違って、私のことをますます不思議そうに眺めるのだった。つまりポーランドからサハリンまでやって来るとは信じられない様子であった。このような訪問に慣れている人など誰もいないのである。まして、あらかじめ知らされていなかったので尚更である。

主人だけがテーブルにつき、私を眺めたが何も話さなかった。白くて鬱蒼とした顎鬚に隠れた彼の口から私が耳にしたのは、純粋で正確なポーランド語の単語の響きだけであった。彼は年配で背も曲がっていたが、年老いている様子ではなかった。壮健であると言った方がいいであろう。夫人[11]は容姿端麗で、彼より二倍は体が大きく見え、お茶やパンケーキの周りで忙しそうに働き、そうすることによって会話に入ることを断っているかのようであった。

私は、ポーランドからやって来た客人を見に集まった子供たちにだけ話しかけた。小さな子供が二人と十代の子供が二人だった。耳をそば立てると、彼らが話しているのは日本語だった。

そうしているうちに年長の息子が現れた。ジェヴスキ老人は私にすべての子供の名前を言い、手を伸ばして彼の方を指差した。

「この子はフラヌシ[次男フランチシェク]です。」

彼は家の入り口でまず靴を脱いだ。日本の慣習はこの家庭でも採用されているのだ。子供たちは足を組んで地べたに座ったが、老夫妻は椅子を持ってくるようにはっきりと言った。

「フラヌシは何歳だい」と少年に尋ねた。赤面し当惑し、苦労しながら言葉を吐き出した。
「四十歳です」
「十四歳」と老人が訂正した。

子供たちはすぐには理解できず、日本語で数字を繰り返してからようやく笑った。フラヌシはいっそう赤くなった。なぜなら下の兄弟たち

[10] 豊原旧市街に住む牧場経営者、樺太ポーランド人会二代目リーダー。
[11] 妻ヴロニスワワ。小沼のチェハンスキ家の長女、サハリン生まれ。

が彼を引っ張り始めたからであり、彼は部屋の隅の方に隠れた。女主人がランプを持ってきてテーブルに置いた。屋敷はもう暗くなっていた。

「フラヌシ、家畜の様子を見て来なさい」と、老人は彼に自分の仕事を思い出させた。

使いに出されたフラヌシは靴を履き、毛皮の帽子を被り、棒のついた紙の提灯の中の蠟燭に火を付け、牝牛のところに出て行った。

何か寛いだ雰囲気になった。これまで滞っていた会話が弾み始めた。ジェヴスキは戸棚のどこからか古い色あせた写真を取り出し私に見せた。それはまるでサハリンでの自分たちの歴史について私に示しているかのようであった。そこには帝政時代の思い出が少しあり、それはわずかであったが、しかしもちろん楽しい思い出ではなく、写真は湿気で傷み、何が写っているかははっきりとは分からなかった。さらに家族が巡り歩いている写真があった。それは大部分が葬式のものであり、開いた棺桶の所に全員が集まっていた。

また、結婚式のものも一、二枚あった。一番新しいのは、新しく赴任した駐日ポーランド公使スタニスワフ・パテク(注２参照)と一緒に写ったものだった。それは最も華やかで最も楽しさに溢れていた。植民地に在住する全員が集まっていた。ジェヴスキはまだサハリンにいる人たちを示し、もうサハリンから出て行った人や、亡くなった人を教えてくれた。彼はこの写真の話に長時間留まり、それからようやく会話はポーランドへと移った。サハリンに住むポーランド人が今でも覚えているこの訪問によって、彼らが若いときに追放され、外国に支配されていた頃のことだけを覚えている地域で、前代未聞の出来事が起きていることを初めて理解し、確信し、感じたのだった

人や文書で噂やニュースがやって来た。それによると、ポーランドは(1918–19 年に)体制が新しくなり、自由と独立が達成され、ワルシャワが首都になり、今ではロシアや日本と同じように独立国家となったということである。このことすべてをすぐに信じ、このような遠く離れたところで知ることとなった。

ピウスツキという名前を人々は耳にした。この名前は、彼らが住む人里離れたところでも、はじめて聞く名前ではなかった。というのも年配の者なら誰でもブロニスワフのことを覚えていたからである。

最初はみんなそのピウスツキとは、ブロニスワフのことだと思っていた。かなり後になって、ピウスツキの死に関するニュースがやって来た。しかしすでに彼らにとってそれは新しい情報ではなかった。それがユゼフの兄のことだともう伝えられていたからである。

ジェヴスキはこのことをまるで記憶の深い層から取り出すかのようだった。それによるとブロニスワフは子供を教え、初めは相浜に暮らし、東岸の馬群(潭)に住み、後で内路に行き、その後で白浦村[日露戦争まではシラロキとかシララカと称した]のアイヌ人たちの所で暮らしたのだった。

「一緒に銭湯に風呂に入りに行ったくらいです」と彼はまるで同意を求めるように言った。

「ブロニスワフは善良で、そして有名人でしたよ」と彼は付け加えた。

「ロシア人もポーランド人も、とくにアイヌ人たちは彼のことをそういう風に覚えていますよ。北部の村に行ったら聞いてみなさい。年寄りはみんな覚えているし、知っていますよ」

パテク公使の写真を手に持ったまま、彼は自分に問い始めた。

「当時から何も起こっていない。まるで当時のポーランドに近づくことができるかのようです。唯一の例外はポーランド人の神父がここにやって来たことですよ。しかし、神父たちはここに三年以上いるので、みんなここにポーランド人神父がいることに慣れてしまったのです。しかし、今ではポーランド出身のポーランド人ではなく、サハリン出身のポーランド人なのです」

奥方と子供たちはテーブルにつき、子供たちはより大胆に、より自分らしく、より打ち解けた様子になった。それはまるで私の姿をよく観察し、私が何を言っているか、どのように話を

しているか聞くためのようだった。しかし彼らが理解しているのは実際半分くらいだということが私にはよく分かっていた。ここに持ってきた新聞の束を開いた。

ジェヴスキは眼鏡をかけ、自分の目に飛び込んできた最初の頁の最初の記事を読み始めた。子供たちは挿絵を眺めていた。新聞は新しくなかった。昨年の秋のもので、写真や記述に溢れていた。彼らが当時のニュースに読みふけるままにしておいた。

(十)日曜日

サハリンのポーランド人は二つのカテゴリーに分かれる。それは死刑囚や流刑囚のように、一年に二度やって来るオデッサ発の戦艦からの一団と一緒にここに強制的に連れてこられた者たち、そしてロシア革命によりサハリンに投げ出され、ソヴィエトの支配下に戻すという北京条約に基づき日本人が離れるまでは日本が支配していた北部に入植していた人たちである。

彼らは農場やパン屋で雇われた[実際はほとんどが自営だった]。彼らはパンの製造に秀でた能力を持っていたため、駅で到着する列車の乗客に対しパンを販売する権利をすぐに手に入れ、商売は成功した。大泊、新場、北部の白浦など、いろいろな駅でパンの独占販売を行った。さらに北海道でも、例えば旭川の駅で自家製のパンを販売したのは多かれ少なかれミハウ・ラジェエフスキ[12]だけだった。ボルシェビキから逃れ、北樺太にやって来て、次に豊原に入植[亡命]したポーランド人のカジミェシュ・ボルコフスキ[豊原旧市街のパン屋]と私は知り合った。

ザハリャシュ修道士は次の日の日曜日に、私と一緒に小沼には行けなかったので、ボルコフスキが私を案内しようと提案してくれた。そのうちに、ピョトルフスキ神父が帰って来た。私は、ザハリャシュ修道士と一緒の彼に通りで会った。彼らは駅からの帰りだった。ピョトルフスキ神父は若くはなく、背も低いが、その動きはエネルギーとしなやかさに溢れ、善良な顔と、灰色の深い目の持主で、私の到着を知っていた。夜は布教に付き合って過ごした。ザハリャシュ修道士は夕食の準備に取り掛かった。

ここ二十年間の極東でのポーランド人の生活に興味がある者なら、誰でもゲラルド・ピョトルフスキと必ず会わなければならない。東洋のポーランド人はみんな彼のことを知っている。中国では長江の漢口(はんこう)、その後ハルビンなどで十九年を過ごした。もちろん中国語を容易にマスターし熟達した。中国でおよそ四半世紀を過ごした 1930 年になってようやく日本語を習い始めた。

当時、サハリンで伝道を行っていたのは、ルヴフ司教管区のフランシスコ会(ポーランドではベルナルド会)だった。1930 年 1 月 25 日にそれはポーランド人に譲渡され、ピョトルフスキ神父が任命された。以前は、ここはポーランド人に敵意のあるシレジア人が支配していた。三人の神父と一人の修道士から編成された最初の一団がポーランドを出発したのは 1930 年の秋で、次は 1931 年 11 月だった。神父たちは最終的にサハリンへと出発する前に北海道の札幌で準備を整えた。それは何よりもまず日本語の勉強だった。

樺太でポーランド人による宣教(布教)が公式に開始されたのは、1932 年 5 月のことだった。神父たちはみな日本語をかなり上手に話した。ピョトルフスキ神父はちょうど翌日の説教の準備を終えたところだった。

三十分の説教を準備するために十時間あるいはそれ以上の時間がかかり、当時はまだそれを暗記して話せなかったので、読むだけだったと私に話してくれた。今ではもっと簡単に速く準備できるそうだが、そのテクストや原稿を見ると、まだかなり難しいのではないかと思う。彼らは、話すだけでなく、少なくともそれと同じレベルで書いたり読んだりできるように、絶えず語学の勉強をして、自分の語学力を磨いている。彼らは日本語の初等読本、アルファベッ

[12] 旭川在住の亡命ポーランド人(牛島秀彦『もう一つの昭和史 2 風雪日本野球 Ⅴ・スタルヒン』毎日新聞社、1978)

ト、文法などの本を持って旅行している。というのも他の仕事も決して少なくないからである。ここでの彼らの生活条件は想像する限りきわめて質素なものではないかと思う。多くの場合、かなり低いレベルで生活しているのではなかろうか。ここでの彼らの生活、自己犠牲、そして困難な仕事への献身を、私は驚きと尊敬の念を持って目にした。

私は、豊原カトリック教会[天主公教会]での早い時間のミサに出席した。私は玄関で外套と靴を脱いだ。玄関の間にはあらゆる種類の外套が掛けられ、靴が残されており、私はスリッパを履いて、日本人にとって神社の役割を果たしている部屋の敷居を跨いだ。内部は暖かくて明るく、朝から暖炉が燃えていた。清潔に掃除されたマットの上で、日本人信者の大部分がうずくまっていた。多くの信者は和服を着ていたが、もっと「文明的な」服装をしている者もいた。背中に子供をおんぶしている女性も少なからずいた。これは日本風の子供の抱き方であり、まるで瘤のようである。赤子は広い帯で母親の肩に結びつけられ、頭だけが見えていて、動くたびにあらゆる方向に揺れている。彼らが航空機の仕事や操縦の才能がなく、それは個人的にそうなのでなく、人種的特徴と半ば冗談に考えられているのは、若いときに母親の背中で揺さぶられていたからかもしれない。

つまり彼らが三半規管に損傷を受けたのは、あらゆる方向へ傾く頭が無頓着に揺すられたからだというのだ。これにどのくらいの真実が含まれているか私には分からないが、もし長い間守られてきたこの子供の抱き方の習慣が、空を飛ぶ能力に悪い影響を与えることが証明されれば、国の防衛に適った習慣を作るために、このようなやり方をきわめて厳格に禁止する法令が現れるのではないかと思う。

脇にある二つの小さなベンチに、全員でわずか数人の顎鬚を蓄える年老いたポーランド人やロシア人の一家の長老が腰かけた。私もそこに座った。まるで炭のような黒い髪をした日本の子供たちの間には、明るいブロンドの頭が見えた。ポーランド人の子供たちだ。子供たちは同じように足を組んで地べたに一緒に座った。私のそばには、まるで私たちの村からまっすぐやって来たかのようなショールを被った女性がいた。ピョトルフスキ神父は、ミサでは日本語で黙示録を読み、日本語で説教をした。私は理解できなければ理解できないほど、それをますます大きな驚きをこめて聞いた。ミサの後、ポーランド人に対し少し言葉をかけた。そのうちに、ザハリャシュ修道士は、めったには集まらない彼の弟子に会えるように私を呼んだ。ここでは時々ポーランド語の授業があるという。

ここには新場のルボヴィエツキ家[新場駅のパン屋]と小沼のチェハンスキ家の子供たちが来ていた。彼らはいつもの日曜日と同じように両親と礼拝式にやって来たのだ。

ザハリャシュ修道士はこの機会を利用して、ミサはほとんど終わろうとしていたので、ポーランド語の授業のために子供たちを集めた。子供たちはザハリャシュ修道士が好きで、喜んでここにやって来ていた。しかし残念ながら両親たちはこの勉強の利益をきちんと理解しておらず、まるで神父の影響を受け入れるのではなく、強制的にすべての子供たちに画一的な日本の学校教育に甘んじる準備ができているかのようであった。日本の学校に通うことによって、子供たちは日本人に完全に馴染み、日本語でのみ書いたり読んだりし、小さな時から自分をほとんど日本人だと思うようになるのだ。しかし日本人たちは彼らを、決して自分たちと同じ日本人だとは思っていないのである。

ポーランド史にまつわる絵が掛けられた明るい部屋には、本の詰まった本棚が壁際にあり、すぐ脇の机の前では小さな子供たちが座って、修道士の監督のもとでポーランド語の本からテクストを書き抜いている。子供たち、特に女の子たちは綺麗かつ丁寧に書き、彼らの上達と熱心さに、ザハリャシュ修道士はいくら喜んでも足りぬといった様子だった。

私が行ったことで少し困惑させてしまったようで、彼らはポーランド語を話したがらなかったが、最後にはみんな何らかの文章や、詩を読んで自慢したがった。ザハリャシュ修道士は彼らがたまにしか来ないので、勉強に継続性がないことだけを残念がっていた。しかしポーランド人神父らがやって来てからは多くのことが改善された。以前にはポーランド語に対する

意欲も授業もなかったからである。今でも家庭では日本語かロシア語が使われている。

するとボルコフスキ[豊原旧市街のカジミェシュ]が現れ、小沼への列車の時間だと言った。チェハンスキ家の子供たちはすぐに出て行った。私たちも集合して、毛皮の外套を着用し、帽子を耳に押し当てた。雪が降り始めた。

(十一)小沼

列車で半時間だった。その集落は線路のそばまで広がり、まるで半分は雪中に埋没したかのように見えた。雪も豊原より多めらしい。ボルコフスキの助言に従って、出発の前に買い求めたオーバーシューズが、ここではとても役に立った。というのもここでは、ひとは膝までが雪に埋まりながら前に進み、場所によっては完璧に埋没してしまうからである。

道中、ボルコフスキと四方山話をした。彼はアメリカに兄弟がいて、もう二年も会っておらず、彼に関する情報も何もないとのことだった。

そうこうするうちに、小沼に住む最初のポーランド人を訪問することになった。小沼は比較的新しい名称で、それ以前は「ノーヴィ・アレクサンドロフスク」[ノヴォ・アレクサンドロフスク]と呼ばれていたが、さらに以前の当初には「ポポヴェ・ユルティ」と称された。

それはユゼフ・コスティラの家であり、彼は自分で敷居から雪を掃き出していた。強壮で顎鬚を蓄えた老人はすでに私の到着を承知しており、愛想よく私を招き入れた。二つの小さな部屋はとても貧相で汚かったが、コスティラ家はサハリンで一番うまく行っていないとボルコフスキから事前に聞いていたので、私は驚かなかった。主人はポーランド語が下手だったので、私たちはロシア語でコミュニケーションを取らねばならなかった。彼がここに送られたのは二十六歳のときで、つまりそれから四十年をサハリンで過ごしたことになる。妻はポーランドのトロヤノフ、現在のルベルスク県に置いてきたとのことだった。

しかし、ここサハリンではチェハンスキ家の娘[次女マルツィアンナ]を二番目の妻にしたのだった。ボルコフスキはこのことを私に告げ、コスティラの二番目のサハリン妻は自分が奪い、現在も一緒に住んでいると率直に語った。コスティラが金持だった頃、ボルコフスキは農場の助手として雇われたのだが、後で妻はボルコフスキと申し合わせて老人の所から一緒に出て行った。ボルコフスキと彼女は新しく自分たちで働き始めた。この時期からコスティラ老人はお金を失い、酒に溺れ、自分の家で何とか生き延びているだけになった。

> 「ひどく悲しいだけですよ」とまるで結論のように、コスティラは私とボルコフスキに言った。
> 「息子は軍隊に取られました。帰って来るのをここにひとりで座って待ち続けるだけです」と彼は付け加えた。

彼に息子がいたのだろうか。息子に関しては、後で分かったのであるが、日本人の孤児の男の子を、わずか三歳のときに養子にしたそうだ。この子は老人よりも上手にポーランド語を話す。ロシア語も話せる。洗礼名はスタニスワフで、日本の名前はオノブ・サイチという。コスティラは引き出しから何か紙のようなものを取り出し、制服姿の男の子が写っている写真をそこから抜き出した。彼はそれを私の目の前に差し出して、誇りを込めつつ活気づいて言った。

> 「これが息子です」

彼に別れを告げた。次を訪問する時間になったからである。彼はまた戻って来るように、自分のことを忘れないようにと頼み、ポーランド語を忘れたことについて謝罪し、私たちを敷居まで送り、私の訪問中にまた厚く積もった雪を箒で掃き始めた。

ボルコフスキは私に、コスティラの妻との顛末について補足し、説明し続けた。それに対し罪の意識と、私の前でそれを正当化する必要性を感じているようだった。

小沼にはチェハンスキ家が二軒[長男アントンと次男ヤンの家]ある。両家とも流刑者の息子で、両家とも大工である。彼らは自力で家を建て、二軒の家は見たところ、二つで一つのように見える。その木造家屋は、強靱な松の丸太と板で作られ、地面にしっかりと土台を置き、

風や雨に対し耐久性があり、悪天候から守られていて、居心地がよく暖かい。風通しがよく、かろうじて暖房されているに過ぎない自分たちの家からここにやって来る日本人は、しばらくすると、すぐに眠り始める。このようにやって来てすぐ寝るということはよくある。

ヤン・チェハンスキは、ちょうど数日前に妻に捨てられた。妻は他の男と出て行ったのだ。したがって、数歳のまだ幼い娘と二人きりでいて、少し心配し、少し機嫌が悪かった。隣人たちは彼を慰め、助言を与えるかのように眺めているものの、実際はただの好奇心に過ぎないことをよく理解していたからだ。彼の家族の話は小沼中を駆け巡り豊原にまで達していた。

その反対に、アントニ・チェハンスキのところでは、何もかもが一番いい状態だった。子供は六人いて、妻は家事に長け、家を守り、子供の面倒を見、もし私の目に狂いがなければ、間もなく夫に七番目の喜びを与えることになるだろう。

部屋全体に日本の新聞が貼られ、そのおかげで地面の熱がよく維持されていた。窓のそばには、まるで看板から取ってきて壁に貼られたかのような日本の歴代の天皇の肖像画が貼られていた。卵型の頭をした赤ら顔の彼らが油絵石版画の中からこちらを眺めていた。その隣にはどこからここに辿り着いたのか分からないが、1919 年にアメリカで発行された、司令官と勝利者の後光に包まれたピウスツキ元帥のポスターがあった。

ベッドの上の壁には、長女(八歳)が描いた自家製の絵が掛けられ、それはベルベデル宮殿の前でベンチに腰掛けるピウスツキ元帥のかなり有名な肖像画を写したものである。その肖像画ではピウスツキはベンチの横に立つ夫人と、木からリンゴを取っている娘たちと一緒に描かれている。これはかつてポーランド系アメリカ人の雑誌に掲載された、画家のグロテスクな空想に溢れた作品である。チェハンスキ夫人と子供たちは、私がポーランドの絵に気付いたことをとても快く思っているようだった。

しかし、会話はロシア語以外で行うのは不可能だった。ポーランド語を話そうとするのはとても難しい様子だった。ザハリャシュ修道士の尽力のおかげで、子供たちは私のことを理解できたようだった。

彼らは、時々ロシア語の言葉の後にポーランド語の言葉を突然続けたりした。お互いの間では日本語で話をしていた。どこか用事から夫が玄関に帰って来て、敷居で靴を脱ぎ、外套から雪を払い、私の方へ固い力強い手を差し出した。私たちは珈琲を飲み、話を始めた。農場をたくさん所有し、仕事は十分にあり、問題がひとつもないことに満足していた。

サハリンでは、彼らのうちの誰も自分の土地を所有していないし、所有できないという、既にジェヴスキが語ったことを、彼は裏付けた。賃借りするだけで、契約は三年ごとに更新されるという。日本人は、日本人を小作に雇うように説得するのである。したがって、ポーランド人たちは今やポーランドのパスポートを持って生活している。日本人も彼らの価値を評価する方法を身につけている。つまりパスポートによって「ロシア人」と区別するのだ。かつてはみんな「ロシア人」だった。

「ロシア人」は、ポーランド人とは異なる価値の劣る階級である。例えばコスティラは自分のパスポートを新聞の束に丁寧に包み、私に渡すとき、私がそれを彼から盗むのではないかと恐れながら、私の手に置いた。というのもこれは彼が所有しているものの中で最も価値のあるものだからである。

チェハンスキとさらに会話を続けた。

> 「土地は自己所有させてくれないのですね」
> 「とんでもないことです。土地はわれわれ日本人のものだというのです。土地を求めて私たちは闘いました。お金を出しても今でもまだ無理です。もちろん賃借りはできますが。しかし、それはここのポーランド人を苦しめています。今でも問題です。自分たちの土地を持たないことが彼らに嫌な気持ちにさせています。そうすると人は頑張ってあくせく働かなくなります。すべて他人のものになるのですから。これは最悪で残念なことです[13]」

チェハンスキの農場へと話は移った。百五十平方サージェニ[1サージェニ＝2.134 メート

ル]あるとのことである。牝牛を十八頭所有し、牛乳を販売している。馬を一頭役畜として所有し、ブタを二頭飼育し、雄豚は市場で販売する。燕麦を蒔き、ジャガイモを植えている。裏庭の菜園では野菜も栽培する。かつてロシア時代には、大麦や小麦まで育てていた。サハリンには製粉所があった。今では製粉所はない。というのは、日本人はパンを食べないので[14]、必要ないのである。今では小麦粉は南[本土]からパン屋が運んできている。

チェハンスキは農場の雑事についても私に紹介した。

> 「放牧地は共有で政府の管理なのです。家畜の頭数に応じて支払いがあります。政府の木は幹単位で販売され、自分たちで森に行って購入した木を伐採します。最も儲けになるのは家畜です。ジャガイモは価格が低すぎます。豊原ではようやくアルコール蒸留所が建設され、アルコールが出回っています。秋には、まだ新年の前だというのに戦争についての話がされていましたが、その後はそうでもありませんでした。
>
> 戦争は不幸をもたらしました。ロシア人が北からやって来たときのように、日本人は自分たちのものを持ち去り、ロシア人が最初に殺すのが私たちであるようにするため、私たちを残しておいたのです。税金は日本人より多く払わねばならず、植民地への予算として政府は今でも絶えず税金を要求します。子供たちは日本の学校へ通うことを強制されます」

その後、土地と雪のことを話した。そして昨年亡くなったばかりの父親の話となる。その後、突然、最後に厳かにそして感動した様子で、初めて私に質問をした。それはポーランドに関する質問であった。彼自身はサハリンで生まれたとのことだった。

(十二)大宴会

黄昏時の直前に私たちは短時間で駅へと戻った。ルボヴィエツカと結婚したムリン[15]の家に途中で寄った(ルボヴィエツキ家は新場駅の近くに住んでいた)。ムリンはロシア人だったが、三人の娘すべてをポーランド語で教育を受けるために豊原に送っていた。彼は、帝政時代、サハリンに対するツァーリの支配が戻って来るとは信じていない人間の一人であった。子供たちにとって日本の学校は不十分であった。母親がポーランド人で、ポーランドに関してはポーランドが強国であり、発展しているというニュースがサハリンまでも届いたので、子供たちにポーランド語で教育を受けさせていた。

小沼にはさらにチェハンスキ家のマリアンナ[三女マリア]も住んでいた。彼女は日本人の古川(フルカワ)[七治郎]の許へ嫁ぎ、彼との間に数人の子供がいた。子供たちはもうすっかり日本人だということであった[16]。

駅では吹雪がいっそう激しくなっていた。それは雪嵐だった。雪の中に埋まった駅への道の途中で、歌を歌う行列に出会った。その行列は遠くから見ると、疎らな百姓屋の彼方の荒野で、吹雪と黄昏の中で姿の霞む亡霊のように見えた。それは村の少年たちの一人が軍隊へ行くのだと分かった。彼はすでに新兵の制服を着用し、ここの習慣に倣って村全体が彼を見送っていた。見送りの人々は手に旗や楽器や、あるいは縦に文字を書いた細い紙束や絹の布を結びつけた棒を持っていた。男の子の旅行のために郡全体が出てくるだけでは十分ではなく、出発の日には盛大な祝日となるとのことだった。

雪に埋まった駅のホームに立ち止った。彼らは旗を手に、とてもカラフルな着物や上着を身にまとうから、白い雪を背景とする雪の上では、ウォヴィチ[ポーランドのウッチ県の都市]の人々や昔話の登場人物らのように、赤が中心な

---

[13] 当時の記録によると、樺太ではポーランド人はロシア人のような凶悪犯ではなく、政治犯と位置づけられていた(寒川光太郎『露囚物語』ぷらや新書刊行会、1968)。

[14] 常食でなかっただけで、彼らのパンは各駅で大変人気があった(樺太庁編『樺太写真帖』1936 他)。

[15] 小沼の残留ロシア人ニコライ・ムリン(Сергей Федорчук, *Римско-Каторическая Церковь на Сахалине*, 1998)

[16] 古川家には春子、年子、幸子の三人の娘がいた。幸子は豊原高等女学校を卒業している。

がらさまざまな色調の明るい斑点となって見えた。列車がやって来ると彼らは叫び始めた。「万歳」という言葉が百回くらい響いた。これは「一万歳」という意味である。この伝統的な儀式全体は、日本人の生活における軍隊、軍隊の精神、および戦争全体を理解し知るためのほんの一部分でしかない。

私たちは列車の中で、ジェヴスキの長男ヴィクトル[17]に出会った。彼は北の白浦からの帰りだった。そこにいる義理の兄アダム・ムロチコフスキ[18]の許で数日を過ごしたのだった。豊原に着いた私たちは彼と一緒に、一夜を過ごすべくジェヴスキ家に赴いた。そこにはあらゆる種類の食べ物がすでに用意されていた。

それはソーセージ、ビゴス、さまざまな種類のたくさんの肉であった。つまり大宴会だった。ボルコフスキは妻[マルツィアンナ]とやって来た。

隣人のロシア人でポーランド人女性と結婚したレコンツェフ[19]もやって来た。ジェヴスキの子供たちもみんなそこにいた。つまり長男のヴィクトル、十代の娘のカタジナ、年下の息子のフラヌシ、そして六歳から九歳までの三人の幼い子供[カーチャ、マリア、マーゴ]がいた。

ウォッカまで振舞われたが、それは男性に対してだけであった。隣に座っているジェヴスキと私は、なみなみと注がれたグラスをすでに何度か合わせた。

晩さん会ではヴィクトルが蓄音機をかけた。日本製の二、三枚のレコードがあり、その中には米で出来た日本のアルコール「サケ」にまつわるジャズの歌もあった。それは日本では今でも一番人気のある曲で、どこでも耳にする言葉で始まる。

「サケ・ハ・ナミダカ！ タメイキ・カ！ ココロ・ノ・ウサ……」

その後、突然、ポーランドからの客人である私に対して、嬉しいもてなしがなされた。ポーランドの歌である。これは私が樺太遠征中に出会ったものの中で、もっとも予想していなかったことであった。そのレコードそのものに歴史があった。これはアダム・ムロチコフスキ宛に、ポーランドの親戚が郵送した最新のレコードだった。道中何枚か割れたが、六枚が安着したとのことだった。どれほど嬉しく、どれほど盛り上がったことか。三日間、誰も蓄音機から離れようとしなかった。今では、使いこまれて古くなり、擦り切れている。しかし、いまだにそれを喜んで聴いている。

私は、マズルカとポルカを聴いた。オベレック[ポーランドのフォークダンス]、ヘン・ドマンスキの歌うクヤビャク[同]、最後には「海の瞳」からの一曲が入っていた。これは婚礼歌で、会話と音楽と歌が入っていて、そこではヴァルテルが主役を務めていた。このレコードは他のものを押しのけてかけられた。一度聴いただけでは十分でなかったので、よく覚えられるように二度、三度聴く必要があった。

私は突然、リトアニア、トルキスタン、ロシアなどでの経験が記憶に蘇ってくるのを意識した。そこではポーランドのラジオ局の電波が届かなかったが、ポーランドのいいレコードがその土地や職場を支配していた。

ここでは、世界の最果ての雪に埋没する家の中で、その価値と影響を突然理解したのである。家での会話もポーランド語ではなく日本語で、生活もポーランドとは異なり、ポーランドを遠く離れてからかなり時間が経っていて、彼らにとってポーランドはもう存在していないにも等しく、外国か非現実の国になっているにもかかわらず、レコードの歌の歌詞を暗記して、歌い、内容を理解し、何度も喜んでそれを繰り返しているのだ。これらのレコードはそういった役割を果たした。

ここでヴィクトルはアコーディオンを取り出し、オベレック、マズルカ、クヤビャクを演奏し、ボルコフスキはあたかもジェヴスキ夫人

---

[17] ジェヴスキ家には十五人の子供が生まれたが、年長男子はすべて死去していた。
[18] 北サハリンからの亡命ポーランド人。ジェヴスキ家の長女スターシャの夫。
[19] セルゲイ。1920 年代に北サハリンから亡命したロシア人陸軍将校。豊原駅前商店街で洋服・洋品店を経営し、樺太全域に販路を広げて財を成した。

をさらうかのように、彼女の帯をつかみ、オベレックに合わせて足を強く踏み鳴らし、反対回りや交代しながらひざまずいて踊ったりした。その後でポルカ、シュタエル[ポーランドのフォークダンス]を踊り、この百姓屋が揺れ、心臓が膨れるほどであった。踊ったのは彼一人ではなかった。ロシア人のレコンツェフは彼から、自分のゾフィア[チェハンスキ家の五女ソフィア]をどのように振り回せばよいかを習った。ヴィクトルは踊れなかった。レコードを耳で聞いて演奏し、足で拍子を取っていたからである。しかし私も、ジェヴスキ夫人の娘と踊った。彼女は少し恥ずかしがり屋だったが、何度かボルコフスキ、そして自分の兄弟と踊っていた。ボルコフスキは後日、彼女とクラコヴィアク[ポーランドのフォークダンス]をデモンストレーションで華麗に踊ったほどである。

この見世物[ダンス]に日本人を招待すると、彼らは驚いていた。ボルコフスキのダンスの動きや、ファンタジーのスピードと活気が大変気に入った様子だった。これまで生きてきて、こんなことなど見たことがなかったのである。このようなリズムも、このようなメロディも聞いたことがなく、頭を振りながら驚いた。そしてついには、彼らはどんな楽器でも一度も習わずにダンスに足を合わせながら演奏しているヴィクトルに嫉妬するくらいだった。ポーランド語では理解し合えなくても、音楽でなら相手のことが分かるかのようであった。

新たな出会い

新場のルボヴィエツキと大泊のマジェンダ老人を訪ねた。ピョトルフスキ神父が案内してくれた。駅の上手の丘に建つ二階建ての大きな家で、ミハウとユゼフのルボヴィエツキ兄弟が一年前に建てたばかりで、この集落全体で一番大きかった。農場がすぐ隣にあった。収入はパンの販売からだけではなかった。遠くには雪の上に、銀狐の飼育場と、針金の網を張り巡らした檻が列をなしているのが見えた。ユゼフは毎年、海に出かけ、サハリンのコケモモも販売していた。

「最近は千二百樽売れましたよ」

私はピョトルフスキ神父と出かけた。彼はここでのポーランド人の生活について、とても熱心に紹介してくれた。珈琲が用意された大きな部屋にはチェンストホーヴァの聖母の隣に、モシチツキ大統領とピウスツキ元帥の肖像画が架かっていた。この家ではロシア語が話されていたが、兄弟の一人はハルビン出身のポーランド人女性、ゼナイダ・ヤンキェヴィチ[20]を妻に迎えていた。初めからポーランド語をきちんと守ってこなかった。ヤンキェヴィチはハルビンでは自分のポーランド人的なものを大切にしてきたが、ここ樺太では疎遠になり、ポーランド語で話をするのが難しくなり、最後にはロシア語になってしまった。

他の人のように、日本語だけで話すようにはならなかった。ルボヴィエツキは零落しても、やがて子供たちが自分たちを支えてくれるように、自分の娘を日本人の嫁に出そうとしていた。娘は日本人の夫の前でひざまずくだろうか。そうは思えない。ここの子供たちは、ザハリャシュ修道士の最も熱心な生徒であり、やがてポーランド語を話すようになるだろう。

彼らは私が持ってきた新聞に喜んだ。ニュースに皆が喜んだ。難しいにもかかわらず、私と全く同じようにポーランド語を話すことを自分に強いていた。二人のルボヴィエツキ兄弟の母親である、ルボヴィエツカ老夫人はポーランドの村出身の貧しいが気高い女性であり、サハリンに来てようやく流刑者であった夫のもとに嫁ぎ、ひとつのことにこだわり固執していた。それは自分が生きている限りは、子供たちが、神が命じたように自分の言葉であるポーランド語を話さねばならないということである。他の言葉では子供たちとは決して話そうとしなかった。

昨年、彼女はここ樺太、つまり祖国からはるかに離れた土地に葬られた。最後まで彼女は祖国に帰れると思い違いをしていた。しかし彼女の言葉と願いが、孫にとっては遺言、命令とな

[20] ハルピンの教会施設から来たジナイダ・ルボヴィエツカ。

った。つまり孫たちは、これからもポーランド語を話していくだろう。話すのだろうが、いかに上達するかが問題である。

ルボヴィエツキ家には第三のポーランド人、イグナツィ・キチマフ・ヴェル・キチマンが住んでいた。彼はピョートルクフで生まれ、幼年時代からサハリンに住み、狐の世話をして農場を手伝っていた。彼も子供たちとポーランド語で話をしていた。彼はソヴィエトの占領から逃れて、島の北部からここにやって来たのだった。

北樺太にはポーランド人が少なからずいるということだった。とりわけアンドレイ・イワノフスクとアレクサンドロフスクには多くいるとのことである。彼らに何が起こったかは誰にも分からず、恐らく流刑されたということだった。唯一分かっているのは、現在まで残っているのは、ヴワディスワフ・スカウチンスキだけだということである。

ルボヴィエツキ家の玄関では、樺太に残っているロシア人流刑者二人のうちの一人に会った。その人物は何とか足をひきずって歩いており非常に疲れていた。この老人はルプキンといい、殺人のために終身刑を受けてここに流刑されてきたのだった。日本人がやって来てから、すでに彼は自由の身になったが、まるで自分の刑期に忠実であるかのように、樺太を見捨てずにここで自分の生涯をまっとうしようとしていた。

ルボヴィエツキによると、彼は数年前からひとつの妄想を抱えているということだった。つまり豊原から大泊まで徒歩で歩いて、道中のよく知っている人の家に泊まり、そこでは階段の下の玄関で一晩過ごすというのだ。翌日の朝には彼は出て行く。

「どうして、どこへそんなに急いでいるんだい、ルプキン」と聞かれる。

そうしなければならないからと彼は答える。それには説明がない。そうしなければならないから。

「一カ月に二度そういうことがあり、わが家にはすでに一度道中にやって来ました。ちょうどそれが今日でした。明日の明け方には、もう出て行くのです」

大泊で立ち寄ったマジェンダは、1903 年の最後の流刑囚の一団とともに、サハリンへやって来たのだった。

「何のために来たのですか」という質問には彼は答えなかった。ただ次のようにぶつぶつ何か言っただけだった。

「何かいいことのためさ。悪い事なんかのために来たりするもんか」

彼は私の訪問をとても喜んでいるようだった。会話の中で何度も、これは驚きですな、嬉しいですな、ポーランドの人にもう会えるとは思ってもいませんでしたと言った。

人から離れて暮らし、少し変人であったが、日本人の女性と暮らしていた。神父たちもこの状況を正常化したり、合法化したりすることはできなかった。老人は頑固で、何の話もできなかった。彼にとってそれは困難だった。ポーランドの古風な口髭を生やし、彼の顔は干からび、細かな皺で覆われ、苦悩に溢れ、血の滲んだ目をしていた。

「目は最悪なんです。老いにやられてしまいました」

ポーランド語を使うことはめったになかったし、使う機会など一度もなかったと言っていいくらいだったが、申し分なく覚えていた。ルブリンで暮らす子供たちの話をした。孫もいるとのことである。彼らは文通をしていた。婿と機械技師の息子がいた。

「そこに行きたいという考えと闘っています。でも出発することはできないでしょう。ただそう望んでいるだけなのです。子供たちは、私がパスポートを手に入れるなら、少なくとも後一年は私の健康は持つと書いています。そうすればルブリンに私は……」と彼は言った。

彼は言葉を詰まらせた。彼の願いは非現実的で、彼がすでに数年暮らしているこの家では不可能に思えたのだろう。というのもここからルブリンへは数千マイルもあるからだ。

私が差し出した手をつかみ、彼は長い間笑いながらその手を握っていた。

彼の目はじっと私に突き刺さり、それはまるで、光が足りないために病んでひどく赤い目を大きく開けているようだった。病気のためなのか、それとも老齢のためなのかは分からないが、私たちが別れる前、落ち込んでくたびれた彼の頬の上を大粒の涙がこぼれおちた。

(十三)北へ

列車は朝とても早く出発した。しかし駅にはすでに菱沼氏と警察官と地元新聞『樺太日日新聞』のカメラマンが来ていた。

現地の新聞は初めから私の旅行に、バランスを欠くほど大きな関心を寄せていた。すべての私の動きと詳細について定期的に新聞に掲載し、記事についても、驚きに値する協力の精神から電話で私のホテルに知らせてくるのだった。その報道によると、私は、初めは一人で大使と領事を兼任するとされ、その後には秘密任務を帯びる人物となっていた。最終的には、私は特別に派遣された新聞の論説委員という謙虚な役割に落ち着いた。

ジェヴスキの子供たちは、日本の新聞に載る私の記事をすべて読んでいた。私もそれを通してようやく、自分自身に関してこれまで知らなかった、多くの奇妙な真実を知ることとなった。ただひとつだけ問題があった。つまりそこで書かれている謎の使命である。極東への一回の旅の中で二度もスパイであると吹き込まれたり、立証されようとしたりした者にとって、そして、このような非難と疑いのもとで、この地域で働く私のような者にとって、それらは冗談ごとではなく、だれかの疑いを軽視することがいかに危険であるかがよく分かるのである。したがって、私は地方新聞の特派員に対して、すべての秘密、そして自分の顔さえも、不平を言ったり条件をつけたりせずに明らかにしたのである。それらの秘密は警察にも言及しなかったが、北方の島の秘密に通じている数少ない経験豊かな人であり、私を案内してくれた菱沼氏に関しては何も話さなかった。

遠方の丘の尾根に沿って伸びるすべての土地は雪に覆われていた。島の南方には、かつてサハリンを有名にした森林がまったく残っていなかった。すべて伐採されたのである。樺太には八つの製紙工場があって、数ヘクタールの樹木を伐採した。しかしすべての樹木を台無しにしたわけではなかった。すべてを呑み込んだのは山火事である。毎年夏になると広大な範囲で森林が燃えると聞いた。ようやく最近になって、荒廃した空間や空き地に対する植林が始まったという。それはおそらく、日本の農林省の飛行機が島に飛来して、測量を行い、写真撮影を行って地図を作製して以降のことである。

ここで日本人の間に広がる貧困は深刻だと聞いた。例えば、大泊の製紙工場は一年半前から閉鎖されていて、労働者が解雇されたものの、その全員が、森林が開発され仕事が豊富で稼ぎも悪くない北部で仕事を見つけたわけではないということだ。

しかし、樺太は、村や仕事に関する限り、例えば北海道よりは良好といえる。北海道からは人が豊富な仕事を求め、群れをなして北方へと移住している。貧困についてはあまり語られないし、表面的には見えない。私が受けた説明によると、当地では信用貸しのシステムが広まっているとのことである。その結果、みな、返済するには人生一つでは足りないほど借金にはまっているとのことである。今では職に関する問題がますます深刻となって、村には経済危機が広がり、村の家族、日本人家族の目の中にも飢餓が見え隠れするのである。しかし今のところ彼らは何とか生きているようである。問題は、期間がはっきりしないにもかかわらず、金を貸したがる者がいるかどうかということである。

窓からは、雪に覆われたツンドラの空間がよりはっきりと見えた。とりわけ今日は氷に覆われた白鳥の湖の周りが見えた。そこは春になると白鳥が舞い降り、そこを巣にして滞在するとのことである。ツンドラの幻想的な風景は、果てしなく広がる開墾地と、ひろびろとした荒野を見せてくれる。そこには、枝をもぎ取られて弱々しく細々とした矮小な木の切り株がいたるところで突き出ているだけだった。雪に覆われた丘に風が吹き付け、どこかの駅で孤独に停車していた列車の窓を叩き、荒野の中にいるの

だという感覚をいっそう強くし、その感覚はまるで厳しい寒さのように私たちの心の中に忍び込むのだ。雪煙が舞い上がる中で、私たちは列車の車両内で、全員が鉄製のストーブの周りに集まっていた。列車は島の東岸にますます近づき、遠方の開かれた水域が、地平線全体をくっきりと浮かび上がらせながら、蒼い筋となって煌めいていた。オホーツク海である。

私たちの目的駅である、アイヌ人の村がある白浜まではまだいくつかの停留所があった。菱沼氏は私に、日本人がブロニスワフ・ピウスツキをどのように知り、どのように語っているかについて紹介し始めた。自分の義弟の著作でブロニスワフのサハリン滞在に捧げた一章について物語る。

ブロニスワフ・ピウスツキの氏名は日本人が発音すると、プロニスラフ・プリツキのようになるという。彼は毎回そのように発音していた。

この妙な発音に耳がだんだん馴れてくると、今度は彼にまつわるエピソードのみに耳を傾けた。ブロニスワフ・ピウスツキはモスクワ大学の人類学と民族学の教授だったと、菱沼氏は日本語で熱く、そして隈なく説明する[21]。彼は革命運動に参加したため政治犯としてサハリン南部に流刑され、そこで長年アイヌの原住民の間で生活し、シンキンチョという名のバフンケ村長[22]の美しい(ピリカ)娘であった十八歳の女性(アイヌ語ではメノコ)と結婚した。

この愛の物語には多くの紙幅が費やされた。著者はこの話の全体を広く理解し、日本人に対しエキゾティックな後味を持たせる短編小説の形式に仕上げた、と菱沼氏は語る。そのことすべてに、日本人はとても大きな興味を寄せたという。とてもロマンティックな物語である、と彼は付け加えた。

日露戦争後の政治状況により、ブロニスワフ・ピウスツキはサハリンを後にせざるを得なくなり、もう二度と帰って来ることはなかった[23]。彼の死に関するニュースが数年遅れてパリからサハリンに届いた。

しかしサハリンでは、人々の間で彼に関する最良の思い出が生きていた。彼の娘はアイヌ人の許に嫁に行き、今では四人の子供の母親になっているという。しかし、菱沼氏が言うには、子供たちの顔はアイヌ風ではないとのことである。前回サハリンを回ったときに、彼は子供たちに会ったらしい。子供たちが誰に似ているかは明らかである。

> 「私のアイヌ人の親友の助けを借りて子供たちを探し当てましょう。シンキンチョ[24]もまだ生きていますが、ただ目が見えなくなっています」と彼は告げる。

列車が近づきつつあった白浜は、現在ではサハリンの東岸にだけわずかに残っている純粋なアイヌの村の一つであり、そこでは日本政府が残りの原住民のために住宅を建設し、それ以前は島全体に広がっていたすべての原住民をそこに送り込んでいるという。原住民らを人為的に集住させたことから、彼らの習慣と言語は消滅しつつあり、みんな急速なスピードで日本人化している。それに最も大きな影響を与えているのが日本の学校であり、子供たちが学校では日本語だけで教育を受けることを強いられている。日本社会への同化過程は一世代で完了しつつある。アイヌ人は、モンゴル人、マレー人と並んで日本民族の第三の構成要素であった。彼らは太平洋の底深く、つまり大昔に沈んだ「東のアトランティス」大陸の住民、即ち、絶滅した祖先民族の生き残りなのである。

これはヴァツワフ・シェロシェフスキの考えであり、シェロシェフスキはブロニスワフ・ピ

---

[21] 情報源は能仲文夫『北蝦夷秘聞』(注7参照)であり、不正確な情報が少なくない。ブロニスワフは、実際はサンクトペテルブルグ大学法学部に入って半年で流刑になっている(「年譜」参照)。

[22] 東海岸白濱コタンの村長(日本語文献では「酋長」「東海岸の酋長総代」とも記された)。バフンケアイヌとも伝えられる。日本名は木村愛吉。シンキンチョは、実際は彼の姪であり、養女に当たる。

[23] ブロニスワフは1903年9月に樺太アイヌのシンキンチョウ/チュフサンマと結婚したが、日露のポーツマス講和条約締結直後の1905年9月にサハリンを離れ、妻子と「永久に訣別」した。

[24] ブロニスワフの妻の名を、ヤンタ・ポウチンスキは後出のように「キムラ」「シラカワ」「ジュサウンマ」とも記すが、また「シンキ」「チュフサンマ」という名も伝えられている。

ウスツキとともに、1903 年と 1904 年にアイヌ人の居住地[北海道]を学術踏査したのだった[25]。シェロシェフスキはアイヌ人のことを周囲の黄色人種で毛のない民族とは異なる「毛深い人々」と呼んでいた。当時の学術踏査は、日露戦争が勃発したため北海道の一部にとどまった。彼らは当時すでに、アイヌ人の人類学的特質が、異質な要素、とりわけ日本人の要素が混じることによって、ゆっくりと消滅し、日本人と人種的に融合される危険性があることを指摘している。アイヌ人の特徴である多毛性は、黒い髭となって多くの日本人の顔を飾っている。これらの日本人にそれ以外のアイヌ的要素はまったく見られないという。

アイヌ人が数千年前から住んでいるここサハリンでは、蝦夷つまり北海道よりも、自分たちの行事、習慣、踊り、特に、有名な熊祭りの消滅がよりいっそう顕著である。熊祭りに関して言うと、アイヌ人は熊を神と見なしており、熊を幼時から飼育した後に、荘厳かつ複雑な儀式を執行して、その中で熊を痛めつけ、殺害するのだ。それはシャマン祭祀や秘儀のようなもので、多くの血とアルコールを伴う。

この太古より伝承された慣習は、風変わりな異教的儀礼によって特徴づけられるが、その消滅の第一因は、クマが南樺太では完全駆除されたことにある。

アイヌ人の言葉と慣習の謎を完璧に理解していた数少ない白人の一人が、ユゼフ・ピウスツキ元帥の兄、ブロニスワフ・ピウスツキだった。彼はアイヌの王とも称された。

彼はこの善良で穏やかな人々と心で結ばれ、彼らのために働いた。彼は今でもアイヌ人の記憶の中で愛情に包まれて生きている。

(十四) 白浜

「ここでは彼のことをよく覚えていますよ。わしらと本当に長い間一緒でしたから。わしらにとってはよき友人であり、善良で気高い人でした。わしとわしの親戚に数年間、教育を施してくれました。可能な限り、すべての人を助けていました」

この親切で愛想のあるアイヌ人は、白川仁太郎(シラカワ ニタロウ)[栄浜の消防団組頭]という。濃くて黒い剛毛を生やした顔の持主であるが、私たちは、[白浜]駅から村への道中で、雪に埋まりながら出会った。菱沼氏は以前の滞在の際に彼を知り、すぐに知り合いになったという。両人は日本語で会話するが、アイヌ人とのおしゃべりの中ではピウスツキという名前が何度も、純粋で正確な発音で繰り返された。菱沼氏は何のために私がやって来たのかをはっきりと説明した。

オホーツク海沿岸に立地する[白浜]村は、海岸沿いに一本の道が貫いていた。村外れに住むシンキンチョとその娘を訪ねる前に、白川は日本人が店主を勤める海辺の一軒目の家に寄って食事をしようと私を誘った。彼はお茶をご馳走してくれ、二つのお椀に入った昼食(ヒルゴハン)を持ってきてくれた。

ようやく舌が回り始めた。このアイヌ人はロシア語を少し話す。したがって私たちは通訳なしに直接理解し合うことができた。彼は、ピウスツキの生徒だったアイヌの友人を呼ぶことに決めた。顔に包帯を巻いた男がやって来た。歯が痛いとのことだった。この出会いを喜んだ。木村愛助(キムラ アイスケ)というこの男は「有名なピウスツキ」の生徒であることがすぐに判明した。ピウスツキが出発間際に残した写真をまだ所持していたからだ。

少し黄変するも素晴らしいその写真は、北海道の函館で撮影されたものだった。

「この写真を私に残したくないようでした」

多分コピーを作るためだけに、置いて行ったのだろうとのことだった。

彼らは二人とも手当たり次第に語った。

「母親が彼に送ってきたものを、ピウスツキはすべてわしらと分け合った」
「自分のことはいちばん最後だった」

[25] 1903 年 7~9 月にかけて実施された北海道アイヌ調査に関しては、シェロシェフスキの旅行記「毛深い人たちの間で」(本書に収録)を参照されたい。

「いつも他人のことを考えていた」

彼らは私と知り合ったことを喜んでいた。というのも私がポーランド人だったからである。私が思わず確信したのは、彼らが固い友情の絆で結ばれ、まったくよその、遥か彼方の国とも愛情で結ばれているということである。国そのものよりも「ポーランド」という名称と結ばれているのだ。

この人物の個性、善良さ、心の驚くべき影響があったに違いない。そして現在まで生き続ける当地の人々の記憶は、決して消し去られることがなかった。彼らの記憶は三十年間何も変わらず、懐かしさを込めて彼を語り、まるでそれが昨日であるかのように思い出している。

「わしらには兄弟のようないい人でした」と白川は言い、その言葉の中には、自分たちすべてとまったく異なる白人との友情の価値がすべて含まれているかのようだった。それは流刑、懲役、拷問などサハリンにとって破滅的な時期であり、それまでは平穏だった国が絶望と恐怖の淵に立たされた時期だった。

私たちはアイヌ人だけが住んでいる村を通った。私は自分の同伴者にいろいろと聞いてみた。

「家はすべてが日本風の木造に見えるね。ここでの暮らしはどうだい。うまく行っているかい」

「あまりよくないですよ。以前は自由でした。今はそうではありません。何かにつけ《罰金》です。森で木を切っても、動物を殺しても罰金です。魚だけは自分の好きな場所で好きなだけ捕ることができます。魚に関しては悪くはありません。魚で生きているのです。ニシン漁は四年前からうまく行っていません。去年は本当にひどかったです。アイヌ人の生活はよくありません」

家の隣で作業をしている彼らにはすでに数回会った。彼らの中には顎鬚をはやした人が数人いた。写真をとることには同意しなかったが、白川が彼らにアイヌ語で少し話をすると、すべて解決した。一言だけ理解できた。それは「ピウスツキ」だった。

その後で、彼らはどうやって勉強したかを思い出してくれた。小田寒で一年、内淵で二年学びました。しかしもっと情報を得たかったので、質問攻めにしたが、それ以上は何もなかった。

鉱山で鉱石の塊を少しずつ削りとるかのように、思い出をひとかけら、そしてまたひとかけらと手に入れた。突然奮起して、すぐに二つ三つの事柄を話したかと思うと、また再び長い沈黙が続いた。それはまるで記憶の最も深い層に潜り、そこに沈む詳細や印象を探しているかのようだった。

シンキンチョに会いに行った。彼女はすでに私たちの到着を知っており、私たちに会いたいとじりじりと待っていた。アイヌ人の誰かが彼女の手を取って連れてきた。彼女は盲目だった。彼女は目の上に黒い目隠しをしていて、その目隠しの下にはショールを巻いていた。彼女は悲しみに満ち、誇りに溢れ、素晴らしい黒い髪をしていた。

結婚したアイヌの女性の習慣として、唇の上に入れ墨をしていた。盲目の人に特徴的な歩調で何歩か進んだが、しかし、しっかりと立っていた。まだ老いておらず、五十七歳だった。彼女は何も言わなかったが、彼女の後ろにいた私の同伴者のアイヌ人が話した。

名前は、キムラ、シラカワ、ジュサウンマと言った。どれが一番正確な名前で、どれが現在の名前なのか決定するのは難しかった。彼女の息子は、苗字が木村(キムラ)、名前が助造(スケイゾウ)と言った。娘はキオ[キヨのこと]といった。

息子は村にいなかったが、娘は隣の家の敷居を跨いで出てきた。少しびっくりしたようで、取り乱していた。彼女の夫はアイヌ人で名前を大谷熊吉(Otani Kumaksci)(オオタニ クマクスチ)と言った。三人の娘と一人の息子がいた。

父親は、キオと同じように黒い肌の持ち主だった。私の前で長女を見せたがり、家の奥から手で彼女を連れて来た。顔が丸く、大きな黒い目をした、しかし髪の毛は完全にブロンドの四歳の女の子だった。

(十五)パン、ギュウニュウ

白浜からさらに北へ向かった。この先、つまり白浦までの間には、すべてのポーランド人か

らもっとも離れて暮らしているアダム・ムロチコフスキが住んでいた。白浦の向こうには鉄道網はあまり延びていなかった。

私はひとりだった。菱沼氏(注5参照)は豊原に帰ったからである。もう道中で彼に会うことはない。列車の中は人でいっぱいだった。もちろん日本人だけであった。私たちは目的地に近付いていた。雪の中の海岸を通って白浦にゆっくりと向かっていた。彼らは和服の中から財布を取り出し、丁寧に小銭を数えながらお金を用意していた。和服は日本人にとってポケットの役割を果たしているのだ。彼らは、まるで一つの言葉を確かめ、約束するように、会話の中でそれを繰り返した。その言葉はポーランド人と会った際にすでに覚えていたので理解できた。それは「PAN」、つまりパンのことであった。

私たちは[白浦に]到着した。私は列車から降りた。誰かが響きのよい大声で「パン、ギュウニュウ、パン、ギュウニュウ」と叫んでいた。「ギュウニュウ」とは牛乳のことである。乗客は、窓からお金を持った手を出し、清潔な紙切れに包まれた大きなロールパンを手にしていた。背中に帯を巻いて背負った大きな箱を抱えて、愛想のいい見た目のいい男性が駅の中を練り歩いていた。彼は襟を立て、耳まで帽子をしっかりと深く被っていた。この人物については以前にたくさん聞いていた。これがアダム・ムロチコフスキだった。人里離れた駅で彼は見たところ成功しているようだった。手に持っていたものがあっという間になくなると、自分の小さな店、つまり空のお盆を持ったまま、私の方に振り向いた。サハリンに私がいることを知っていて、私の到着を待っていたのである。

列車は出発した。私たちは雪の中を進んだ。彼は駅からすぐ近くに住んでいた。家は自分で建てたとのことだった。家は見たところこの集落で一番しっかりとしていた。自分が焼くパンのために評判がよくなり、お金も少し貯めていた。家の中には何もなかった。何度も新たに始めなければならなかったという。何とかやっていた。

しばらくの間、いろいろと話をした。しばらくすると、彼はできる限り私を受け入れ、もてなそうとした。彼の妻は数日前から病を患っていた。妻は豊原[旧市街]の出身で、ジェヴスキ家の長女[スタニスワワ、愛称スターシャ]だった。

私は彼に、私が滞在したときには村にいなかったシンキンチョの息子・助造を、明日、白浜のアイヌ人が連れてくると約束したことを伝えた。ムロチコフスキはすべて知っていて、サハリンに滞在して以来、この問題に関心があった。手元に残ったブロニスワフ・ピウスツキの写真のコレクションを私に見せてくれたほどであった。それは、彼がアイヌ人から手に入れたのだが、彼によると、日本人はこの幸せな所有者からこの記念の品を買い取り、手に入れようとしたそうだ。

それはブロニスワフが日本人と一緒に写っている数枚の写真、そして両親の写真二枚である。そこには「私の最も大切な、そして最も不幸な息子へ」という感動的な献辞が添えられていた。彼はこれらの品を何よりも一番大切にしていた。私にも何も渡したくないようだった。ここサハリンで何よりも明らかなのは、信頼というものが崩壊しているということである。彼は言った。

「今のような不確かな時代、信頼できる人なんて誰もいませんよ」

彼は恐らく、ポーランドに帰ったら個人的に一番信頼できる人の手に渡すのだろう。

突然、ドアを誰かがノックした。すぐに靴を脱ぎながら、黒いフロックコートを着た日本人が不自然な愛想を浮かべて入って来た。その人物についてムロチコフスキが言った。

「地区の警察署長だ」

警察はもちろん私の邪魔をしに来たのだ。十分ほど私と話をしに来たと彼は告げた。彼は「ゴメンナサイ」と言った。「すいません」という意味である。わたしは「ドウイタシマシテ」と言った。「問題ありませんよ」という意味である。私たちはお互いに対応し合ったのである。望むところである。会話が始まった。

それは多かれ少なかれ、会話というマスクをかぶった尋問であった。ムロチコフスキは私の肩代わりをしてくれた。彼はよりおしゃべりになり、彼の古い知人であるこの新参者に日本語

で片をつけてくれた。最終的に私たちは数分で彼から逃れることができた。そして白浜からアイヌ人たちがやって来たときは、どんな犠牲を払ってでもこの出会いに臨席しようとしていると知った。来たいのなら来させるがいい。私たちは署長に「それではまた明日」と言った。

彼は「アリガトウゴザイマス」と言って、礼儀正しくそして卑屈に引き下がった。

ムロチコフスキは、今度は夕食の準備をした。台所で忙しく立ち回り、どこかの老人が彼の手助けをした。これはルプキン的人物の第二の例である。つまり流刑されてきて、島の南部に今でも生きているロシア人の「将軍」で、すでに記憶にないくらい昔からここに住んでいて、なぜか分からないが、どこにも行く所がないので、ムロチコフスキの好意でここに住んでいるのだ。彼の助けはわずかで慰めにもならなかったが、酒には目がなく、いったん酒瓶を手に取ると、どうしようもなかった。脅しても頼んでも無駄で、そのままだった。したがって、ムロチコフスキは、アルコールは純粋なものも傷んだものも、一滴として家の中に置かなかった。「将軍」はいつも何とかして手に入れる方法を見つけるのだった。

アダムとは夜遅くまで一緒に座っていた。彼の家は雪で覆われ、屋根の上の雪で押しつぶされそうになっていて、世界から切り離されたかのようで、彼は外国人の中でひとりぼっちのようだった。彼は自分の家のそばに所有するわずかな土地と、非常に苦労して手に入れた、列車でパンを販売する権利に関して語った。

しかし、現在ではすでに樺太全体で、アダムのパンを超えるものがないことは明らかだった。ただ問題は日本人が彼に庇のついた緑の帽子を被るようにと命じることだった。この帽子は鉄道職員の印で案内係であることを示しているので、列車や、時間などについて誰もが質問してきた。

しかし、彼は日本語が上手だったので、まったく問題ないとのことだった。彼は帽子に日本語の文字で次のように書いていた。「ポーランドのパン」。こうやって彼は帽子を被らなければならないという不愉快なことを埋め合わせていたのである。

彼はとてもおしゃべりだった。パテク公使と十年前の彼のサハリン旅行の話になると、彼は言葉に詰まり始めるのだった。

> 「彼は私には父親のようでした。困難な時代に私を支援しようとしてくれました。誰も私を信用しなかった時代です。私が仕事のための手以外には何も持たなかった時代です。仕事も非合法、その中でも最も非合法な仕事しかあてがわれませんでした」

というのもムロチコフスキはその頃、北樺太からやって来たばかりだったからだ。

> 「借りてきたお金で借りてきたズボンを穿いて、私は公使のための晩餐会を準備しました。大変でしたよ。新参者として、サハリンではまだ知られていない人物として、このような事柄に携わることになろうとは。しかし誰かがやらねばなりませんでした。みんな私のことを疑いの目で見ましたが、結局うまく行きました」

それから長い年月が流れた。サハリンの共同体の中で、ムロチコフスキは権威を手に入れた。自分に何ができるか、自分は何者であるかを示した。彼はポーランド人の中で、もっとも忠実で最も自覚的なポーランド人であった。しかし姑は言うに及ばず、舅であるジェヴスキも統率力があって、かなり頑固な人物なので、現在のアダムの立場がどのようなものかは分からない。しかし彼がここで成し遂げたことは決して小さくないのである。

(十六)大したことのない物語

「アダムさん、首元にある傷は何ですか」

私はこの頭を一周する深い傷跡に初めから気付いていた。それは首の上の切り傷であるが、耳の片側から耳の反対側まであり、それは後ろ側、つまり笑顔の裏側にあった。

> 「大したことないですよ。アムール川沿岸のニコラエフスクで、革命時代に切りつけられたのです。話すと長くなりますよ」
> 「それなら初めから教えてください」

彼は、ウッヂ県ブルス郡のスタレ・ロツキェ村で 1895 年 4 月 6 日に生まれた。まだ若い少年だった彼を戦争が襲い、彼は戦争に赴いた。1914 年と 1915 年にジャウドフとモドリンで負傷した。モドリンの後、しばらくの間ペテルブルクの病院で過ごした。健康が回復したが、今度は前線には背を向け、初めは事務官として勤め、次には下士官学校に通った。彼の告白によれば、生まれた時から冒険的な気質を持っていて、世界のどこか遠いところに行く機会があったので、すぐにそれを利用したのだった。

1917 年には既にハバロフスクにいた。

そこの税務署で五等官だか九等官だかであった。しかし、再び冒険心が彼を捉え、長い間辛抱することはできなかった。その一年後にはニコラエフスクに住み、オホーツク海で魚を捕え、漁船のオーナーとしてかなりの金を稼いだ。時代は変わり、日本が支配することになり、漁船はもう漁に出ることはなくなり、河や海には日本人の貨物を積んだ船が往来することになった。それと同時に冬期には、テムトンやアルダン地方などの北部で金を堀り、ゼヤに住んでいた。

それは 1921 年のコルチャク時代であった。ちょうどムロチコフスキが再び砂金を求めて山に入ろうとしていたとき、数日間妻と子供と一緒にゆっくりとしていた。ちょうどそのときにトリャピーツィンがニコラエフスクを占領したのだった。彼は夜に逮捕され、縛られ、レンガ工場の地下に連れていかれた。そのとき彼は二十代だった。自分がどうなろうとしているか分かった。裁判もなかった。地下の隅で殴られた。大きなサーベルを持ったコサックが二人いた。一人ずつ前に出された。最初に首が飛び、それから胴が飛んだ。血が噴水のように吹き出した。

そしてアダムの番になった。

「私は首を切りつけられました。もしかしたら少し前にすでに走りだしていたのかもしれません。頭を前方にかがめ、首すじにカミソリの刃を感じました。私の頭は切り離されませんでした。一インチか二インチ、私のことが分かるように傷をつけただけでした。神の奇跡で誰かが助けてくれたのでしょうか。さらに五人の首のない体が私の方に倒れ掛かって来ました。

夜がやって来ました。私は自分の血と他人の血を全身に浴び、羊のように立っていました。首輪がはめられました。私はひとりではありませんでした。墓穴と人肉の塊の中から三人が起き上がって来ました。彼らは私と同じように切りつけられていましたが、殺されはしなかったのです。

深夜に私は家に戻りました。妻と子供たちは、みんな殺されていました。逃げねばなりませんでした。犬橇に乗ってサハリンまで逃げました。海の大部分が結氷していたので四マイルほどそこを進みました。しかし氷はすでに流れ出していたので、はっきりとは覚えていないのですが、板の助けによって他の数人と一緒に渡らなければなりませんでした。上げ潮があるとは予想していませんでした。不幸なことに私たちは日本海へと流されました。しかし幸い日本の戦艦に助けられました。

日本人がアムールに帰って来た後で、トリャピーツィンたちにより殺された遺体が集められました。水の中に長い間浸かっていたので、誰が誰かは判別するのは困難でした。捕えられた日本人たちは真冬にもかかわらず、氷の穴に飛び込むようにと命じられていたからです。今はもう春でした。しかし、後でどのように判別するかを覚えました。釘が二本か三本ずつ打ち込まれていました。肩に肩章の星の代わりにレコード針が付けられていました」

最終的に彼はアンドレイ湾(コッピ川)の利権を得た。しかし、ボリシェヴィキが戻って来た。再び、すべてがダメになった。そのとき以来サハリンに留まり、日本の占領時代にはサハリン北部に行った。生きるためには何でもやった。医者の助手をやった後には、彫刻家になり、その後では、アレクサンドロフスクで、ポーランド人の子供のための小さな学校でポーランド語を教えた。

日本人が出て行く前に北部を捨て、徒歩で南

樺太に来た。そのときには日本語もよくできるようになっていた。ポーランド人がわずかにいたが、誰も彼を助けてくれなかった。したがって、斧と鋸を手に森で深夜の二時から夜まで働くこともあった。塹壕も掘った。血を売ったこともあるという。

しかし、彼は頑強なポーランド人である。すべてを乗り越え、死から一歩ずつ遠ざかり、数年間持ちこたえた。血を売ったが、儲けにはならなかった。苦労してお金を手に入れ、パンの製造を始めた。それがうまく行った。現在では金持の一人として数え上げられている。ここに残ることは望んでいないとのことである。戻るために十分に稼ごうとしている。ポーランドへ戻るためである。

「去年、母親がサハリンの私の所を訪れたんですよ」
「お母様がですか」
「私の母はもう高齢で、ウッヂの大聖堂のそばで暮しています。十七年間会っていませんでした。随分前から息子は殺されたと思っていたらしいです。私が生きていると知るとすぐに会いたくなり、樺太にやって来たのです」

この旅行に関する話だけでも旅行本の一章が必要となるほどである。年老いた女性が、旅の困難や言葉の問題にもかかわらず、ロシアという国も恐れずやって来たのである。日本にいる息子に会いにウッヂからやって来たのである。ウラジオストックでは不誠実な人に騙され、ドルをルーブルに交換したが、日本への切符はルーブルでは売ってもらえなかった。

その後、日本人は、敦賀に苦労のすえに辿り着いた彼女を、ポーランド公使館に尋ねることなしに、ウラジオストックまで送り返した。彼女が自分のことを説明できなかったからである。後に警察を通して彼女の事情が判明したが、ときすでに遅く、ウラジオストック行きの軍艦はすでに出発していた。一番早い戦艦で彼女を連れ戻すようにと船に電報が打たれた。

その翌週に彼女は戻って来た。息子がすでに支払いを済ませていた。息子も母に会いに敦賀にやって来ていた。ジャケットとシルクハットという自分が持っている中で一番いい服装をしていた。日本人たちは彼に謝罪し、彼は許した。停留所で彼はさらに半日待った。息子は敦賀の港で、ウッヂからサハリンまで辿り着くかどうかも分からないままやって来た母と十七年ぶりに再会した。

彼女は白浦に四カ月滞在した。しかし、彼女はそこに残ることは望まなかった。彼女は息子に告げた。

「お前はここにどっぷりと浸かり、根を降ろしている。ここで生き、そしてここで死ぬことになるのでしょう。私にはそれはできません。私の土地がある場所に戻らなければなりません」
「彼女は戻り、またウッヂの大聖堂の近くに住んでいます」

このように、彼が回想する間、私はムロチコフスキと二人きりで夜遅くまで一緒にいた。あらゆる考えをもう捨て去ってしまった人でも、心の底には祖国の思い出や記憶が激しく息づいているのを、私は何度となく目にしてきた。しかし、その感情を抑え込んでいる人もいる。多くのことを忘れ、考えることもなくなり、心配もしなくなっているにもかかわらず、ある日突然「ポーランド」という言葉が現れる。

この言葉は、多くの人にとっては毎日使っているのでもう擦り切れているが、ここに住んでいる人にとっては非現実的な次元から成長し、この名前と結びついた考えはもはや非現実的でもなく、超現実的となり、もっとも高尚なものとなる。しだいに力と、言葉では表現できない何か悲痛で大きな内容を持つようになる。その言葉に本質までが揺り動かされる。そうなると口でなく、手が何かを言おうとする。身振りは不器用になり、何も表現しなくなる。まるで祈るかのように手を重ねる。厚い手、労働で疲れた手は、堅く握られ、閉じられ震え始める。向こうでは誰も待っておらず、こちらには誰もやって来ず、忘れるときもあるが、打ち克ちがたい叫び声のように、ノスタルジーが震え、感覚と思考の奥深くを蝕むのである。

日に焼け、皺だらけで、不屈さと厳しさを表現した顔、最も困難な環境で貧困に耐え、希望

もなく、疎外と孤独のなかで生活のために厳しい戦いを続けてきた厳しい、断固たる力強い顔の中にある血に溢れた目は、突然、柔らかく、潤いを帯び、子供のように純粋に光り輝くが、とても悲しそうな雰囲気を帯びるのだった。

(十七)客人

白浜のアイヌ人が約束通りやって来た。私は列車の中でアダムと一緒だった。彼はパンをすべて売り尽くし、アイヌ人たちにご馳走し、思う存分おしゃべりをするためにやって来たのだ。白川成人(シラカワ ナリト)、木村愛助がいた。先ごろ話題になっていた助造少年を連れて来ていた。昨夜遅くに白浜に戻って来たとのことで、私がここにいることを知って、とても会いたがったのだという。言った通りだった。彼の顔立ちはアイヌ人風ではなかった。顔立ちは鋭く、力強くはっきりとしていて、とても威厳に溢れていた。とてもどぎまぎしており、日本語以外は何も話さず何も理解しなかった。

天気は例外的によくなり、太陽の中で雪が煌めき、その辺り一帯でも今日は銀色の海岸線が続き、そこには欧州トウヒの木が生い茂って、半円状に白浦を取り囲み、沿岸の谷間の底に立地して、大気中では光に満ち、青くそして白く輝いている。

この訪問について、白浜から警察への届け出はなかった。昨日の招かざれる客である警察署長がこのことを知ったのは、私たちがかろうじて外套と靴を脱ぎ、お茶の湯の準備をしているときだった。中庭で犬が吠え、雪の上を誰かの足音がし、その後、扉をノックした。どうしようもなかった。私は質問を一つもする間がなく、すべてにおいて今来たばかりの人物が私の代役を務め、すぐに自らインタビューを始めた。私は第二のプランへと移った。この人物が満足するまでノートを取り、くたくたになった犠牲者を私に委ねるのを待った。

取り調べは日本語で行われた。したがって私にはまったく利益がなかった。しかし、このアイヌ人の友人に対する質問の多くが私に関するものであることは容易に想像がついた。

これは、私の意図の純粋さを疑っているわけではなく、これがこの国の習慣であり、社会秩序を守るための義務なのであった。彼らの好奇心はいつも同じようにナイーヴで、ときにはこちらの心を和らげるようなものであり、絶えず同じ証言、告白、宣言を何度も求め、それを書くのが難しそうな絹のように薄い紙に書きつけるのである。白人がこの日のいずる帝国の国境を越えた瞬間に、自動的に容疑者のカテゴリーに入れられるとしたなら、思想もなく、ただ言葉と目的と行動が書き連ねられているこのような長い報告は、いったい誰が読みたがるのであろうか。

保安機関[樺太の治安機関・特高警察]の私に対する関心は頂点に達し、私は完全に調べられ、まるで腹に穴を開けられたかのようだった。私は自分の身を守ろうとはしなかった。その代わりに、私がまる二日かけてここを訪問し、己のテーマに関して多くの情報を入手したことは、すべての人を喜ばしているかのようであった。彼らは私に深々と頭を下げたが、彼らの永遠の友情と感謝に満ちた思い出を私が手に入れたことも間違いがなかった。

警察署長は一時間におよぶ取り調べで疲れていた。というのも容疑者はお茶を飲んでいるだけで、会話の間何もしゃべらないからである。

助造を連れて来た二人のアイヌ人は、ずっとブロニスワフを覚えていた。彼らが別れて以来、一度ならず思い出していた。例えば、彼が住んでいたアイ村のバフンケ村長のもとで暮らしていた様子、村長の姪がやがて彼の恋人になる様子などである。彼らの結婚式が、古い伝統に則り、厳かに盛大に行われた様子である。

話題は助造に移った。彼は三十二歳だがかなり若く見える。職業は漁師で、アイヌ人はすべて漁業に携わっている。しかし、その後で犬[橇]に乗り始めた。東京の博覧会までも三十頭の犬をつけた犬橇でやって来た。天皇の娘を犬橇に乗せ、彼の犬と橇はみんな気に入ったそうである。

しかし、今の暮らし向きは悪い。漁業はうまく行かなくなり、犬も売らねばならなくなった。手元には何も残らなかった。

貧困の中で生きているにもかかわらず、金銭や施しを中々受け入れなかった。特にシンキン

チョは半ば諦めながら、しかし強情に、ブロニスワフから何か生きている印や思い出の品が届くという考えを捨てていなかった。子供たちはそうではなかった。どこから情報を得て、どうして覚えていることができるというのだろうか。今となってはただ古い親友である。[白川]仁太郎と[木村]愛助はこの子供たちを違った風に見ていた。子供たちを眺めながら言った。子供たちに話しながら、彼らの考えや感覚の中に、思い出や、聖なる偉大な記憶を植え付けようとしていた。彼が現在生きていて、そして、これからもずっと生きて行くであろうサハリンには、決して戻ることのないこの人物に関する記憶をである。彼らは、その人物がここにいたということの証人なのである。

列車に乗る時間になった。明後日には豊原から東京への帰路に就く。白浜までアイヌ人たちと一緒に帰った。私にアイヌのサーベルをくれた。私はそれをポーランドへ持ち帰って、ピウスツキ元帥に贈り物として渡した。

彼らは車窓の向こうでずっと立っていた。いつもより早く舞い降りた夜の闇の中で、駅のホームに降り、車窓の向こうで立ったまま私に手を振った。私はプラットフォームに降りた。列車が動きはじめたが、私は彼らを見ていた。彼らは誰もいなくなった駅の線路に長い間立っていた。夜の中に沈んだ三つの黒い影が、雪を背景にしてとてもはっきりと見えた。カーブを描く列車が私の向こうにあるものをすべて隠すまで、彼らはずっと佇んでいた。

(十八)エピローグ

サハリンに住むポーランド人をめぐる私の旅と滞在をめぐる名声は、日本人がほとんど忘れていた植民地とその歴史に対して、突然注意を傾けた日本の新聞のおかげである。

多くの雑誌や新聞に、サハリンの追放者[流刑者]と島の北部で生きるその子孫をテーマにした記事がたくさん現れた。その中でも最も多くの関心を集めたのが、現在の日本の北方全域で暮らすアイヌ民族の生き残りの研究者であり、彼らを愛していたブロニスワフ・ピウスツキである。

東京へ戻る途中で、地方新聞の記者がすぐに私を取り上げた。私が差し出さざるを得なかった情報にセンセーションの味付けをして、アメリカ映画風の必ずしも美味しいとは限らない感傷主義、つまりあまり優れているとは言えないスタイルへと仕上げていた。東京の公使館通訳は数日間たっぷりと仕事ができた。

私の記事はロシアの新聞や東方で出ているイギリスの新聞にも掲載された。そこにはコメントや補足などが溢れていた。コメントはあまり的を射ておらず、たいていの場合とんちんかんだったが、補足は興味深いものもあり、注意する価値があった。例えばロシアの新聞『ルポル(メガホン)』を通してハルビンから、サハリン時代のブロニスワフを知っているというティシェンコ某の手紙が私の許に届いた。

1901 年にウラジオストックでピウスツキに知り合い、それはすでに政治犯としての刑期を終えた後だったと彼は書いていた。新聞で現在書かれているのとは異なり、彼は大学教授などではなく、大学の自然科学の学生であったとのことである。

ウラジオストックのロシアのリベラルなインテリのグループが、追放者であったピウスツキの運命に関与して、「彼をアムール地方研究会博物館の資料管理者の地位に就けた」という。このポストは悪くなかったが、「ウスリスクのコサック軍用地の営林署長」であり、博物館の館長だったパルチェフスキー[26] が彼のことを疑いの目で見ていた。

パルチェフスキーは断固とした君主主義者であり、革命家ピウスツキが気に入らなかったが、加えて両者の性格も上司と部下の間柄では余りにも違い過ぎたという。ティシェンコは当時、彼らの共通の友人であった地質学者の J.S.エデルシュテイン(Edelsztejn)の許でピウスツキに会った。エデルシュテインはピウスツキにとても好意的だったそうである。

ティシェンコは、ピウスツキがとても内に籠り物静かだったと言う。意見と行動において彼

[26] N.A.パリチェフスキーは、アムール地方研究会副議長だった。

はいつも独立を保っていて、職業上の主従関係にはまったくなじまなかったとのことである。

しばらくすると彼は自ら望んでサハリンに戻ることを決断して、友人や庇護者を驚かせた。以前に彼を罰したロシア政府が、今度はささやかではあるが政府の仕事を彼に提供したわけである。その仕事はアイヌ人に天然痘の予防接種をすることであった[27]。したがって、ティシェンコを驚かせたのは、このような慎ましい地位のために大都会と別れを告げ、彼に好意的なロシアのインテリの文化的環境を放擲したことだ。この若い学者の好意は、彼がアイヌの生活や習慣に興味を抱き、恐ろしいほど不衛生な生活条件と恒常的な貧困に生きるこの愛想のよい未開人を愛したことに由来する、とエデルシュテインは説明した。後に語られたところによると、ピウスツキはその地方の民族学の研究に興味を覚えたので、自分の運命には満足していたという。

樺太にいたポーランド人流刑者は、日露戦争が終結するや、日本の将校たちと心の交流を持った[28]。現在の南樺太が日本の領土になると、ポーランド人流刑者は全員が自由の身となり、西ヨーロッパへと向かった。ピウスツキもそこに含まれていた。

彼はサハリンの家族から遠く離れた所で亡くなった、とティシェンコは手紙を結んでいる。

私が東京を出発する二日前、ある日本人が、非常に重要な用件で私に会いたい、と公使館に問い合わせて来た。翌日会う約束をする。彼がやって来る。私の旅行だけでなく、日本の新聞が伝えるすべての情報も、とりわけサハリン関連の記事は三十年前のものからすべて目を通しているそうだ。自分はピウスツキの友人なので、とりわけ関心があるとも告げた。

ポケットから写真を取り出した。

「これは 1906 年、離京直前の彼から貰った写真です。この写真はあなたに差し上げます。ポーランドの方には大きな思い出になるでしょう。私にとっては友情の思い出だけで充分です。もしできるなら、その代わりにピウスツキ元帥の写真をいただけないでしょうか」

この写真には、私が樺太のアイヌ人の許で見たものよりも年老いたブロニスワフが写っていた。写真は、まさに彼が日本から発つ直前に撮影されたものだった。写真の裏面には、もう色褪せていたが、次のような献辞がロシア語で記されていた。

日本の友人アキラ・カジマさんへ
ヨーロッパで再会することを願いつつ
善きそして長き思い出に。
B.ピウスツキ

日付は「1906 年 6 月 24 日、東京」とあった。

その下には、同じ手で書かれた追伸が残っている。現在ではやや命令調に響くかもしれないが、この言葉はやはりブロニスワフの思い出とともに残るであろう。

これまでは敵対していた民族や人種との統一と友情という大義に仕えよ。

---

[27] 主要な業務は、樺太アイヌとウイルタの民族資料収集であった。

[28] 日露講和のときの様子はコルサコフの鈴木陽之助領事の記録に詳しい(鈴木陽之助『残留露人取調書』駐コルサコフ日本領事館、1905)。

＊ 樺太に在住したポーランド人の名前等については、寒川光太郎『露囚物語』(注 11 参照)のほか、「樺太庁管下居住外国人名簿」樺太庁(1923)、「南樺太外国人ノ状況」樺太庁(1927)、「樺太波蘭人会発会に関する件」樺太警察署(1937)その他を参照したほか、当時の豊原在住者への調査等により補足した――尾形。

＊ 本稿は、科学研究費補助金による研究《北海道多文化共生におけるサハリンからの移住者の役割》(研究課題番号:23310172、代表者:パイチャゼ・スヴェトラナ)の成果の一部に基づいている。

＊ Author & title: A.Janta-Połczyński, “Poles in Sakhalin.” Japanese translation from the Polish by S.Samitsu and commentary by K.Inoue & Y.Ogata.



除幕式：(左から)井上紘一北大名誉教授、J.ロドヴィッチ前駐日大使、野本勝信アイヌ民族博物館代表理事、戸田安彦白老町長、M.ウーチュコ・ポーランド広報文化センター長、B.ズドロイェフスキ・ポーランド文化・国家遺産大臣、(記念碑)、C.コザチェフスキ駐日ポーランド大使、中曽根弘文参議院議員、加藤忠北海道アイヌ協会理事長、山谷吉宏北海道副知事
動画(Video by W.Czechowski) http://www.youtube.com/watch?v=apYUmJI2EfU&feature=youtu.be

The Achievements of Bronisław Piłsudski─a Polish Ainu Researcher:
On the Occasion of Unveiling His Monument in Shiraoi, Hokkaido
Edited by Koichi Inoue

ポーランドのアイヌ研究者
ピウスツキの仕事
～白老における記念碑の除幕に寄せて～

2013 年 10 月 20 日発行(誤植修正 2013 年 11 月 5 日)
編集責任者　井上紘一
編集協力　安藤厚　佐光伸一
装丁　氏間多伊子
発行　北海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター
連絡先　〒001-0032 札幌市北区北 32 条西 5 丁目 2-32-902 佐光方
北海道ポーランド文化協会事務局　http://hokkaido-poland.com

・本書の出版はポーランド広報文化センターの助成により可能になりました。

主催　北海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター
共催　グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」
協力　駐日ポーランド大使館、ポーランド広報文化センター